

貞操逆転世界で普通に生きられると思い込んでる奴（男女比 1 : 5
の世界でも普通に生きられると思った？）

こーたろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貞操逆転世界だけど現代だし別に普通に生きられるっしょ。と思っている主人公が徐々にわからされる話。

尚、ヒロイン全員愛が重い。

★電撃文庫様より書籍化決定しました。1巻は2024年2月発売。

カクヨム、小説家になろうにもマルチ投稿中です。

目次

幼馴染系JDはたまに怖い	1
バスケット部JCはたまに変	10
ツンデレ系OLは優しい人	17
幼馴染系JDは自覚する	27
バスケット部JCは意識する	40
ツンデレ系OLは壊される	52
ツンデレ系OLは止まらない	63
バスケット部JCは変になる	77
幼馴染系JDは嫉妬する	87
文学少女JKはお淑やか	97
文学少女JKは夢を見る	107
文学少女JKは清楚を目指す	118
幼馴染系JDは心配する	130
ツンデレ系OLが泣いている	140
元気っ娘JDは運命と出会う	149
ツンデレ系OLは目撃する	163
バスケット部JCは襲いかける	175
文学少女JKは不思議な子	188
幼馴染系JDは紹介する	196
元気っ娘JDは紹介される	204
元気っ娘JDは我慢する	212
番外編 とある休日のやりとり	224
バスケット部JCは見せつける	234
バスケット部JCは努力の子	256

ツンデレ系OLは知る	266
文学少女JKは助けたい	278
幼馴染系JDは打ち返す	288
元気っ娘JDは情報を得る	298
バスケット部JCは良い笑顔	307
バスケット部JCは本気です	315
ツンデレ系OLは歪む	324
元気っ娘JDは踏み入れる	337
文学少女JKは写真を撮りたい	349
幼馴染系JDは気付く	357
バスケット部JCは試合に出る	368
バスケット部JCは覚悟を決める	380
バスケット部JCの、想いは	394
ツンデレ系OLは誘う	407
ツンデレ系OLは、笑う	415
ツンデレ系OLは決意する	430
幼馴染系JDは背負われる	442
元気っ娘JDは運命を知る	451
2人のJDは話し合う	465
文学少女JKはバレる	474
文学少女JKは目覚める	483
番外編 それぞれの日常	497
バスケット部JCはお盛ん	506
文学少女JKは覗き見る	517
ツンデレ系OLは密かにアピール	528

元気っ娘JDは自己嫌悪する	537
文学少女JKはリークする	547
バスケット部JCは発見する	557
ツンデレ系OLは乾杯する	567
番外編 敏腕経営者は繰り返さない	575
バスケット部JCは教える	585
幼馴染系JDは思い出す	593
元気っ娘JDは遊園地デートする	604
元気っ娘JDの気持ちは、嘘じゃない	613
元気っ娘JDは走り去る	628
幼馴染JDは告白する	635

幼馴染系JDはたまに怖い

貞操観念逆転世界。

名前だけは聞いたことがあった。それはきつと自分が創作物にそこそこ興味があつて、一部の層から人気を得ているという事実を知っていたからだと思う。

女性が男性よりも性欲が強くなり、異性をより求めるようになる。強姦は男ではなく女がする物。みたいな感じだ。

結局のところ、それも男がそうなってほしいという願望から生まれているだけであつて、男の方が浅ましいということを実に表してしまっていると思うのだが、きつとそんなド正論をネットでぶちかませば俺は袋叩きにあうこと間違いなしだろう。

「はあ……」

——さて、なんで俺がそんなどうでも良いことを考えているのかと
言えば。

『昨日、〇〇区の高校教諭が男子生徒に対してわいせつな行為を働いたという容疑で……』

どうやら俺は、その貞操観念逆転世界とやらの転生してしまったらしいということがわかったからだだった。

「将人！もう朝よろ！」

「はいはいもう出ますよ」

それからなんやかんやあつて（驚くほど省略）。

貞操逆転世界だからハーレムできるぜひゃっほい！——とか。
ちよつとセクハラまがいのことしても許されるよね?!——とか。
そういうムフフな展開は残念ながら特にこなかった。

いや別にいいんだけどね？

普通に生活できるのが一番よ。

つてか普通に生活させてもらってるだけありがたいよ。死ぬかと思つたからね最初。

しばらく経つてからわかつたのだが、ここはどうやら異世界というより、パラレルワールドみたいなものに近いらしい。

何故か戸籍があつて、『片里将人』という存在は、最初からこの世界にいたことになっている。

もといた高校を卒業したことになっていて、ちようど春から行くはずだった大学の入学手続きも終わっていた。

つまりは、『前いた世界と酷似しているけれど、貞操観念だけが逆転している世界』に転生したつて感じ。

この世界は男女比のバランスがちよつとだけ壊れちゃつて今は1：5くらいらしい。これからもっと男が少なくなるんじゃないかって言われてる。

よかつた。前の世界で見た創作物とかの1：1000とかだったら

正気を保てなかった。

毎日襲われるのを覚悟で生活するとか俺には無理よ。

「将人あんた今日シフトだかんねー！18時にはお店きいてよ！」

「はーい了解です」

さつきから家の外から俺に声をかけてくれているのは、形式上俺の保護者となってくれた附田藍香さん。既婚者だけど、夫とはもう会って無いらしい。闇が深い。

藍香さんは俺が転生してきた直後、路地裏でぶっ倒れてるところを見つけて保護してくれた。

それで、条件つきではあるけれど、俺の保護者になってくれた人でもある。

なんなら大学に通うことも許してくれた。もちろん、奨学金を使つてであるから、自分で働いて返すけど。

とにかく俺はこの人に頭が上がらない。

今生活できているのは間違いなく藍香さんのおかげだった。

玄関のドアを開けて、藍香さんに挨拶する。

ゆるくウエーブがかかった茶髪を片方だけお下げにまとめている。

もうすぐ30になるっていうのに綺麗な人だ。

職業柄もあつて、身なりには気を使っているのかもしれない。

俺が住んでいるこのアパートは、藍香さんが借りてくれている。

藍香さんがやっている店のすぐ近くということもあつて、朝はこうしてたまに声をかけにきてくれるのだ。

「どうなの？大学では友達できた？」

「あゝ……そうっすね、一応……？」

「怪しいわねえ。変な女に騙されちゃだめよ。外泊するときは私にちゃんと連絡すること！あと敬語もやめる！」

「ういーっす行つてきまーすー！」

気恥ずかしくなった俺は会話を切り上げてそそくさと退散する。

敬語をやめろと言われてもまだ出会って数か月の、それも恩人であ

る人に敬語を外すことは難しい。

堅い人間なんです、俺。

それにしてもここで「変な女に騙されるな」というワードが出てくるあたり、やはり元の世界とは違うんだなあと痛感させられる。

藍香さんから見た俺は、元の世界風に言くと危なっかしい女の子に見えるのだろうか。

藍香さんと別れて、大学へ。

時刻は11時。お日様が容赦なく地面を照り付けている。

季節はもう夏を迎えようとしていることもあり、この時間帯は気温がアホみたいに高い。

「あつっ……」

額に流れる汗を拭いながら、お気に入り腕時計をちらりと見る。

「やべ、2限間に合わね……」

2限目の開始時刻は11時10分。

このまま歩いていたら、開始時刻には間に合わなさそうだ。

「走るかー」

と思ったその時、スマートフォンが振動する。

ポケットに手をつっ込んでスマホを出してみれば、SNSの通知が一つ。

《恋海》『将人今日2限104教室だよね？席取っておいたよ♪』

「助かる〜〜持つべきものは友だな！」

走り出そうとしていたのを中断し、早歩きに変更。

ありがとうと感謝の意を伝えるスタンプだけ送信して、スマホを再びポケットに突っ込んだ。

席を取ってくれているなら多少遅れても問題ない。

一番地獄なのは席をとれてないのに遅刻してきて教授の目の前で授業受け始めることだからな!!

俺は心の中で同級生の恋海……五十嵐恋海（いがらし こうみ）に感謝して、大学への道を進むのだった。

「〜〜〜であるからして、ここの文章の意味は〜〜」

教室に入ると、既に授業は始まっていた。

10分ほどの遅刻だけど、大教室だから問題ない。うちの大学は、そのへんが緩いのだ。

（将人……こっちこっち……!）

出席を示すためにカードリーダーに生徒証をかざした後、きよろきよろと教室を見回してみれば一番後ろの一番奥の席から手招きをしている恋海を発見。

きよろと後ろを通って、恋海がバッグを使ってとってきておいた席を無事確保した。

「マジサンキューな恋海助かったわ」

「にしし……将人のためならこれくらいちよろいもんだよ♪」

無邪気な笑顔をこちらに向けるショートボブの女の子……五十嵐恋海は、この大学で俺の唯一の友達と言って差し支えない。

転生でのごたごたして大学入学が遅れてしまった俺は、普通の新入生よりも1ヶ月ほど遅れて授業に参加することとなった。

そして、大学1年生の入学最初の1ヶ月は、あまりにも大きい。皆それぞれ友達のグループは完成し、所属サークル等も既に決まった後。

俺は学生生活ぼつちを覚悟していたのだが……そこで現れたのが恋海だった。

恋海自身は明るい性格もあってかいくつかのグループに所属しているはずなのに、何故かぼつちの俺に特別優しくしてくれる。

奇跡の存在。

でもやっぱりそんな都合の良い展開が起こるのも、貞操逆転世界だから、なのだろうか。……はっ、ひよつとして、こ、この子もしかして俺に一目惚れ?!

……危ない危ない。勘違い童貞がログインするところだったわ。耐え。

なんてことを思っていたら、Tシャツの袖をぐい、と恋海に引っ張られる。

「……ね、せっかく席とつてたんだから、今日こそ一緒にご飯行つてよ」

……なんだこの可愛い生き物。

にへらと無邪気な笑みを浮かべてデートのお誘いをしてくるこの少女の破壊力たるや。

ショートボブに揃えられた亜麻色の髪からそつとのぞく小ぶりなピアスが彼女の無邪気さとギャップを作り出して可愛らしい。

彼女の着ている白いシャツがオフショルダーなこともあって、身体を寄せてきた際に否応なしに肌が見えてドキリとしてしまう。

冷静冷静。

こういう時こそクールにいかねば。

俺はクールな男なんだ。

「あくま〜じでごめん、今日はバイトなんよね」

「え〜もしかして将人金曜日は確定でバイト系?」

「そーね。ほとんどそうかな」

「そつかくじやあ来週の月曜日とか!」

「おーそれならいいよ全然」

「やった」

小さくガッツポーズをしてから、身体の位置を元に戻す恋海。

いや可愛すぎんか???

狙ってやってるだろ!いい加減にしろ!!でも可愛いから許す!

……ふう、と一息をついて、授業に集中。

実は恋海とは、授業がほとんど被っている。

というのも、遅れて履修登録(大学における授業登録みたいなもの)をする際に恋海が手伝ってくれたからなのだが。

学部も一緒だったこともあり、親切にとらなきやいけない授業を教えてくださいた上で、一緒に取れるものは一緒に取ってくれたのである。女神か???

……でも冷静に考えて申し訳なくなってきたな。

こんな可愛い子なんだし、友達のグループと一緒に授業とりたかつたろうに……。

「……なあ、本当によかったのか?俺と授業とるより、友達と授業とりたかつたろ……?」

「……んー?全然そんなことないよ。友達とは、サークルとかで会えるしね」

ヒソヒソと小声で話しているから俺たちの声は教室に響いたりはない。

「もしあれだったら、たまには友達と受けてくれてもいいからな。俺は一人でもいいからさ」

これだけ人望のある子なんだ。きつとこの授業を受けている中で

も友達の一人や二人いるだろう。
俺はそう思ったのだが。

「なんで?」

瞬間、気温が10度くらい下がった気がした。

恋海は変わらず笑顔だが、なんか目が笑ってない。

——え?なんか俺地雷踏んだ???

「え、いや、恋海がほら、他の子と受けたいかな〜って」

「将人は私と授業受けるの、嫌?もしかして、他の女の子と授業受けたい?」

「いやいやいや!そんなことない。マジでありがたいし、恋海みたいな美少女と授業受けれるならそんなに嬉しいことはないようん!つてか恋海以外に友達いないし!」

よくわからないがヤバイ気がしたので音速で弁明してみる。

え、女の子わからん。なにが悪かったの??怖いんだけど???

しかし俺の「恋海みたいなく」あたりから次第に恋海の表情が明るくなっていった。

「び、美少女?そう?かな?将人からみて、可愛い?」

なんか急に恥じらいだした。

「お、おう。そら可愛いだろ。自信持っていいると思うよ?」

「そっかーえへへ……可愛いなあ……」

ほっ……どうやら難を逃れたらしい。

最近の女の子はわからんなあ……最近、というかこの世界の、と
いった方がいいか。

いったいなにがいけなかったのか。

溶けたようににまにまと笑う可愛い恋海を見て、俺はとりあえず胸
をなでおろすのだった。

バスケット部JCはたまに変

大学の授業を終えて。

今日は2、3限だけだったので時刻は15時過ぎ。

まだバイトには時間があるし、俺は金曜日のルーティンを行うべくいったん帰宅してから近所の公園へと足を運んでいた。

暑さのピーク時刻を過ぎたとはいえ、まだまだ暑い。

黒地に青色のラインがあしらわれたリュックから俺はタオルを取り出すと、軽く汗を拭いた。

目的地まで、あと少し。

「うっし。着いた着いた」

草木が生い茂り、空気の美味しい公園の一角。

ポツンと置いてあるのはバスケットボールのゴールリング。

「この世界、あんまり気軽にスポーツできないのが難点なんだよなあ……」

転生前から俺はスポーツがそこそこ好きだった。

身体を動かすのが好きだし、中でもバスケットと野球は割と本腰を入れてやっていった節もある。

だからこっちに来てからもたまにやりたくなるのだが……。

「地域開放は女の人だらけでちよつと入りにくいし……サークルもちゃんとスポーツやってんのか怪しいし……」

以前恋海が入っているバドミントンサークルに見学させてもらおうかと思ったのだが、何故か恋海からやめておいた方がいいと強く言われてしまった。

大学で彼女以上に仲の良い友人はいないし、彼女にやめたほうがいいと言われたら従うほかない。

「まあこっでなら気にせずできるし、なにより人が少ないのがいいな」

休日は先客がいることも多いこの公園だが、平日であれば人は少ない。

リュックをベンチに置いて、バスケットボールを取り出す。

2回、3回ほど地面に落として、空気が抜けていないかを確認。

「……よう」

しつかり家で空気を入れてきたから、問題なさそうだ。

リングに向けて、今日1本目のシュートを打とうとした……その時。

「お、お兄さん!!」

「んあ?」

今まさに「左手は、添えるだけ」のフォームをとっていたのだが、後ろからかけられた可愛らしい声に反応して、そちらを見やる。

そこには、いかにもバスケットをやりにきましたという恰好の少女がボールを脇に抱えて仁王立ちしていた。

黒髪ショート。青い綺麗な花のヘアピンが、黒髪にアクセントとしてとても効いている。

黒を基調とした動きやすそうなシャツに、ピンクのラインが可愛らしさと女の子らしさを演出している。

俺の胸のあたりくらいいしかなない身長なのに、頑張ってこちらを見下そうとしているかのような、可愛らしい立ち方。

「きよ、今日こそは勝ちます!そして、この場所を……渡してもらいます!!」

「来たなくちびっこ」

「ちびっこじゃありません!由佳は中学生になりました!!」

このちびっこ……前田由佳との付き合いは、俺が転生してきた直後くらいまでさかのぼる。

どうしてもバスケットがしたくなった俺が、ボールを購入し近所でバス

ケができるところを探していて、ここを見つけた。

それから頻繁にここに来るようになったのだが、どうやら由佳はだいぶ前からここで夕方からバスケットをしていたらしく、俺と時間がバッティングすることが増えたのだ。

最初は、「良かったら使って、もう帰るから〜」といった俺からの一方的なコミュニケーションだったのだが、ある時「一緒にバスケットしませんか？」と声をかけてきてから、距離がだいぶ縮まったように思う。そしていつからか、何故か「勝負に勝ったらこの場所の所有権を得る」という話になってしまったのだ。

いやここ公共施設なんだが。

「きよ、今日こそはこの場所を返してもらいます……!」

けれどこの少女とのこのやりとりが、俺は嫌いではなかった。

「はっはっは、俺に一度でも勝ったことがあったかな少女よ〜」

「きよ、今日は秘策があります!」

初めて会った時は小学6年生で、今は中学1年生。

流星に大学1年の俺が負ける理由はない。

そもそもバスケットボールは『身長』という絶対的な壁がある以上、由佳が俺に勝つことは基本的に難しいだろう。

だが。

(この子マジでめっちゃくちゃ上手いんだよな……)

この世界の基準はよくわからないが、由佳はとにかくバスケットが上手い。

プロスポーツも女子の方が盛り上がっているような世界だから、女子の方が上手いという認識がもしかしたらあるのかもしれないが、この子はそれを抜きにしてもうますぎる。

今は身長というんでもないズル要素を使って勝ちを拾っているが、成長期を終えて身長が平均位まで由佳が伸びたらもうわからないだろう。

ってか負ける多分。

「な、なにをボーっとしてるんですか！lonelyや、やります、よね？」

由佳はよく強気なんだか弱気なんだかわからない姿勢になる。おそらく、年上の異性との距離感を掴みかねているのだろう。まあそこが可愛いんだけど。

「いいぞくけどちゃん準備運動しろよ？ケガするぞ？」

「あ、当たり前です。それくらい、もう終わってます」

「え？君今来たよね……？」

いったい彼女はどこで準備運動をしてきたと言うのだろうか。

「いいから、や、やりますよ!!」

彼女が持つてきたボールを手に取り、こちらにバウンドパス。

と同時に、彼女はディフェンスの姿勢を取ってきた。どうやら先攻はこちららしい。

ボールのサイズは流石に由佳のものに合わせている。

大人用だと、ちよつと中学生女子には大きすぎるからね。

「急だなあ……んじやいくぞ」

俺はボールを受け取り、ドリブルで由佳との距離を詰める。多少ボールが小さくなったところで、ハンドリングに問題はない。

すぐさま俺は、由佳の左側にカットイン。

「行かせません……！」

彼女の驚くべきところは、そのアジリティ。

左に進路をとった俺の目の前へ、素早く移動。進路を塞いでくる。

「ここまで大丈夫ですっ！」

「あっ！」

しかし俺は彼女がこの程度ならついてくることをわかっていた。それなりにlonelyしてるしね。

俺が選択したのは急加速からの急ストップ。そしてそこからのシュートだ。俺は即座にシュートモーションに入り、ミドルレンジか

らシュートを決めた。

「よーしこれで先制なく……ん？由佳？」

無事ゴールに入ったボールを拾って由佳に返そうとすると、由佳がその場で固まっていた。

そういえば目の前でジャンプシュートを打ったのだから、止められないにせよジャンプしてブロックに来るかなと思ったのだが、そういった動きもなかったように思う。

「……どした？」

「はえ……」

心做しか顔が赤い。ん？もしかして体調悪いのか？

「おい、顔赤いぞ？熱中症なんじゃないか？ベンチで休むか？」

「あ、あああ?!違います違います!大丈夫です!は、はやくボールをください!すぐ同点にしますから!」

パタパタと急ぎ足でスタート地点まで戻る由佳。いったいなんだというのか。

ボールをバウンドパスで由佳に渡し、今度は俺がディフェンス。

油断しているとマジで簡単に抜かれかねないので、姿勢を低くして由佳のドライブに備えた。

「いきますよ……っ!」

由佳がそう言うが早いか、由佳は俺の左側に鋭角に切れ込んできた。

由佳の得意とする、利き手側のドライブ。

「それは知ってるよっ」と

迷いなく俺はその進路を塞ぐ。由華が得意なパターンなどで、何度もやられて頭に入っているからだ。

しかし。

由佳はその右手側のドライブから、一気にクロスオーバー……左手側に重心を動かした。

(やっば、はええ……けどそれもまだ知ってる!)

由佳が一度で抜けなかった場合のテクニツクの一つ。それがこのクロスオーバーだった。

いきなり逆側への重心になるのだから、初見での対応はかなり難しい。

けれど、これも俺は見たことがあった。

「それでこそお兄さんです……！」

しかし今日の由佳には、その先があった。

「なっ……！」

クロスオーバーで切り返した後、由佳は俺に既に背を向けていた。

(……ロールか！)

相手を背にして、回転を利用して抜き去る技術……ロール。

由華は見事にそのクイツクネスで俺を瞬時に抜き去る——はずだった。

「あっ……！」

やっぱり、準備運動不足だったのだろうか。

由佳がロールした際に足がもつれ、由佳の体勢が崩れる。

「……よつとー！」

我ながら良い反射神経だったと思う。

倒れそうになる由佳を横から飛び込むように支えて、彼女が地面に激突する前に、俺がクツションになることで彼女を衝撃から守る。

視界が反転して、ぐっ、と目を閉じる。

背中に感じた重い衝撃に思わず顔が歪むが、それも一瞬。

「つてて……大丈夫か？由佳」

「……」

てんでん……とゴールの方に転がっていくボールが弾む音だけが響いた。

「由佳……？」

今の体勢は、非常によろしくない。

完全に俺の上に由佳が乗っかってしまっている。

……こいつ良い匂いすんな。

はっ！まずい！これでは俺がロリコンの性犯罪者みたいじゃないか!!

「はわ……」

「……はわ？」

彼女は軽いので全然苦ではなかったものの、そろそろどいてくれな
いとまずいのだが……と思っていたら、ようやく由佳が反応を示す。

「はわわわわわ」

「おいどうした!!」

由佳の顔が真っ赤になったかと思うと、なんかショートした電気機
器みたいになってしまった。

俺に乗っかったまま。

「なんだってんだ……」

仕方なく由華をそのまま背負い、木陰のベンチへと運ぶ。

仰向けに彼女を寝かせて、枕代わりにタオルをたたんで置いてあげ
た。

こうしてみると、本当に顔立ちが整っている。まつ毛は長く、きめ
細やかな肌が瑞々しい。

今はまだ幼さが先に出るが、将来とんでもない美人になるんじゃない
かと思わせるくらいだ。

(つて、何冷静に分析してんだ……)

彼女のことを俺はまだあまり知らない。

もしかしたら彼氏がいたっておかしくない年齢なんだ。最近の中
学生、ませてるからな。(確信)

「……シユーツィングするか」

しばらくはリュックに入っていた下敷きを使って彼女を扇いでい
たものの、そのうち顔の赤いのも治ってきたので、俺は一人シユ
ーティングに向かうことにするのだった。

ツンデレ系OLは優しい人

バスケをした後、今の時刻は18時ちよつと前。ちよつと辺りも暗くなってきた頃合いだ。

あの後起きて高速で謝ってきた由佳に「これ使つていいから」と枕代わりにさせていたタオルを押し付けて帰宅した後。

シャワーで汗を流してから俺はバイト先へと向かう。

バイト先へは、家から歩いて10分ほど。

比較的過ごしやすい気温になったこともあつてか、10分ほど歩くのはむしろ風が気持ち良いくらいの感覚だった。

「さて……働きますか……」

到着した俺のバイト先。看板にはネオンで『F e s t a』の文字。やたらときらびやかな店の装飾が未だに俺は苦手だった。

「お疲れ様で〜す……」

裏口から入り、休憩室に顔を出す。

「おお〜将人待つてたぞ!」

「まさちんよつす〜元気元気〜?」

気さくに声をかけてくれるのは、この世界では珍しいとされている、男だ。

たまにしか話せない(別に大学にしていることはいろのだが)同性とのコミュニケーション……ではあるのだが。

見渡す限り、金髪、茶髪、銀髪。

眩しいネックレスやら装飾品の数々。

指輪それ何個つけてるん?と言いたくなる手。

とにかく眩しい。着飾るにしても度合がすぎてるだろと言いたくなるほどに。

しかしそれには理由があった。

その男性の先輩達には、胸にネームプレートのようなものをつけていて。

そこには「ゆうせー」だの「かずと」だの「しよーご」だの。

平仮名で書かれた『偽名』。

「あはは……まあなんとか、元氣つす」

そう、ここが俺のバイト先……。

ガールズバーならぬ、ボーイズバー『F e s t a』だった。

何故こんなことになったのかといえば、理由は簡単。

ここが藍香さんの経営しているバーだからだった。

藍香さんは俺の生活の面倒を見る代わりの条件として、ここでバイトとして働くことを提示してきたのだ。

転生前も接客業でバイトしてたし、まあいいかと思ってOKを出したのだが、これが結構キツイ。

なにかキツイって、周りと温度が違いすぎるのが。

更に俺は未成年だから、お酒を飲むことができない。

お酒の提供こそすれ、俺は飲めないのだから雰囲気で酔うしかない。

(さすがにこのうえいな空気にはついていけないのよ……)

悪い人達では、無いと思う。

せつかくよくしてくれる、数少ない男の人なので仲良くしたいのはやまやまなのだが、いかんせん空気がキツイ。

それと、これみよがしにお客様にぶりっ子……?をしているのを見るのもつらい。

いや、仕事だからね?仕方ないんだろうけど……。

ということ、俺もここでバイトをさせてもらい始めたが、指名は少ない。

そりゃそうだ。俺ができることなんて所詮愛想笑いと話を聞くこ

とぐらい。

一緒に酒が飲めないのだから。
見てくれも、他に比べて圧倒的に地味だしね。

先輩の方がよっぽどサービスできているので、俺を指名するよう
な変わり者は、まあ、少ない。

少ない方が助かるけど。

「はいはい、じゃあもう開店だから！将人は最初は受付とホール！」
俺より年が4つくらい上のゆうせいさん（多分偽名）が指示を出す。
俺もそれにならって、仕事着に着替えた後、受付へと向かうのだっ
た。

20時過ぎ。

お客さんも増えてきて、店内は賑わっている。

華の金曜日ということもあって、お客さんの羽振りも普段より良
い。

そんな大賑わいの店内から聞こえてくるのは、数々の会話。

「ええ〜お姉さんすごい！」

「流石お姉さん！かつこ良い〜!!」

……。

いやね？仕方ないよ？

こういう世界だからね？

けどやっぱこう、ね？キツくない？

もちろん男らしく（？）なスタンスで、クールな人もいるんだけど
……。

明らかに媚を売るタイプのスタンスの人は、見ててこう、キツイと
言いますか……。

ボデイタッチあからさまだし……。良いんだろうか、あーゆーのは

……。
と、そんなことを考えながら裏から氷を持ってきて砕いていた俺の元に、ゆうせいさんが。

「おい将人、指名入ったから3番テーブルよろしく」

「えっ？マジですか？」

「マジもマジだ。っーかいつもの人だ。お前も常連がついてよかつたじゃないか。よろしくなく」

「あー——了解、です」
いつもの人。

そう言われてピンとくるくらいには、良く俺を指名する人は、一人しかない。

というか、毎週では？初めて接客をしてから毎週指名されてるような……。な

砕いた氷をいくつかグラスに放り込み、自分用のグラスも持って、俺は3番テーブルへと向かう。

3番テーブルに行けば、既に何人かが他のお客さんの相手をしていて、一人ポツンと無駄に良い姿勢で俺のことを待っている人がいた。いつも緊張してるなこの人……。

「こんばんは。また来てくれたんですね」

グラスをテーブルに置き、その人のグラスへハイボールを注ぐ。

黒髪をポニーテールにまとめている。艶のある髪は美しく、スーツなのもあって仕事できる女感がすごい。

この世界からすれば仕事できる女感なんて言葉がそもそも場違いではあるのだが、俺の感覚からすればそれでしか表現ができない。

身長もそれなりに高くすらっとした印象を受けるが、きちんと出るところは出ているのが大人の色気を感じさせる。

なんか初めて会った時よりも随分色っぽくなってないか？と俺は思うのだが。

「た、たまたま時間が空いたのよ……」

嘘だろうなあ。目が泳いでいる。

ってか毎週金曜日のめっちゃ混む時間帯に毎回時間が空くわけない。彼女の仕事仲間であろう人達が、にやにやしなからこっちを見ている。

「まさどくん！星良(せいら)ったらまさどくんにぞっこんだからさww相手してあげてよwwww」

「ちよつとみきさん……！」

ケラケラと笑う仕事仲間であろうみきさんと呼ばれた人は、もう酔っぱらっているのか顔が真っ赤だった。

「コホン……え、えつとね、ほんと、たまたまだから。先輩達に誘われて、仕方なく。それで、私はあなたと話すのが一番マシだから、呼んだの。わかる？」

「ははは……ありがとうございます。聞くことくらいしかできない奴ですが、僕も星良さんの話聞くのは結構好きなので」

「……ッー」

お酒を飲む手が一瞬止まって顔を赤らめる星良さん。

え？なんかまずいこと言った？？

「あ、あなたね……誰にでもそういうこと言ってるんでしょ？」

「え？……いえ……僕のこと指名する変わった人なんて、星良さんくらいですよ……？」

「そ、そう。それならいいわ。そうよね。あなたはいつまでもそういてほしいもの」

「……？」

つん、と明後日の方向を見てちびちびとハイボールを飲む星良さん。

(印象変わったなあ……)

最初に会った時は頬もやつれていて、目には隈がひどくて体調を心配したものだから、最近は大いぶ元気になったようで安心した。

美人さんには元気でいてほしいものよ。

「本当あのクソ上司は滅びるべきなのよーなーにが『そんなんだからフられるのよ』だバーカ!!ぶつ殺すぞ!!」

「あはは……」

「星良さんはお酒を飲むとヒートアップする。

いや本当に。もう完全にフルスロットルだ。

もう顔がだいぶ赤くなって、お酒はかなり回っている。

「だいたい私が担当した案件でもないのになんで私にぐちぐち言ってくるのよ???あのババアは本当に!!」

「星良さんはなんも悪いことしてないっすからね……」

聞き役に徹しているというのもあるが、話を聞く限り本当にクソ上司らしい。

やはりこの世界でもクソ上司は蔓延っているのか……。

2時間ほどだろうか。星良さんに対応し始めてから随分と時間が経っている。

他のお客様はだいたい30分ほどしたら他のメンバーとチェンジして、ボーイを変えるのだが、星良さんは無駄にお金を払って俺をキープしていた。2時間も。なんで???

まあ、別に俺が他から指名がかかることもないし、店的にも嬉しいんだろうけども。

それでももって俺としても星良さんは綺麗だし、なんか酒飲んで顔赤くなってくるとエロいし、眼福だから全然良いんだけども。

「星良~~~~!帰るよ~!!いつまでまさどくんといちやいちやしてんのーほら!!」

「は、はー!?!?!いちやいちやしてないし!全然そんなじゃないし!こんな、ひよろひよろの……ひよろひよろの……」

「はいはい。僕はひよろひよろですよ。また来てくださいね」

どうやらひよろひよろ以外の罵倒が見つからなかったらしい。あんなに上司には罵詈雑言ぶつけてたのに、変な人だ。ふらつく星良さんの手をとって、入口まで案内する。会計はまとめて仲間さんが払ってくれているようだ。だいぶ星良さんの足取りが怪しいので、腕を掴んで支えてあげる。するとふと、星良さんが僕の方に体重を預けていた。顔は下を向いているので、表情は見えない。

「……星良さん？」

「……」

俺の袖を掴む手が、心做し強く握られている気がする。

「……ダメだから」

「……え？」

「私以外の指名、受けちゃダメだから……」

それは、ひどく自分勝手なお願い。

けれど、そんな無茶なお願いをしてくる星良さんを、俺は可愛いと
思ってしまった。

「大丈夫ですよ。俺、金曜しか入ってないですし」

「……そう」

「その金曜は、こうして星良さんがちゃんと指名してくれますし」

「……そう」

表情は相変わらず見えない。

けれど、星良さんが少しだけ笑っていたような気がする。

その後は、酔いつぶれた星良さんをお仲間が肩を貸す形で、星良さんは帰っていった。

……本当にあれちゃんど帰れるのか？心配だ。
けどそつか。元の世界風に言うとなサラリーマンが飲み会で酔っぱらって駅付近でぶっ倒れてるのと変わんないのか。
すげえ世の中だな……。

「……将人」

「……う？あれ、藍香さん、お疲れ様です」

見送った後、店に戻ると神妙な顔つきの藍香さんがいた。

「敬語はやめてって言ったでしょ……ねえ将人、気をつけなさいよ」

「え？」

その顔がいつもより真剣だったからか、俺は若干気圧されてしま
う。

「あーゆるー人がね、ストーカーとか、ひどい場合は……レイプとかに
走りかねないからね」

「え、ええ？流石にそれは言い過ぎじゃないですか？多分僕のこと
なんてせいぜいバーのお気に入りの子くらいのもんじゃないです
……？」

確かに、気に入られているのはなんとなく感じていた。

そもそも俺を指名するような人は星良さんだけだし、毎週来てる
し。2時間固定だし。

けれど、そんな行為に走るほど入れ込まれているようには感じな
かった。

「バカね。あなたはちよつと色々緩すぎよ。警戒しとくに越したこ
とは無いの。なんか変なことあったら、すぐに私に言いなさい。絶対
だからね？」

「は、はあ……」

そんなもんなんだろうか？

星良さんは元々他に彼氏がいたという話も聞いたし、そんなタイプ
には見えない。

(藍香さんも過保護なんだからもう……)
藍香さんには感謝しかないし、親愛の情も湧いてきている。
けれど、ちよつと過保護すぎるのでは?と思うこともしばしばだ。

深夜1時頃。

「ふわあく……」

ボーイズバーでの仕事を終えて、俺は家へと帰ることにした。
外には、酔いつぶれて倒れている人が何人か見受けられる。

(金曜日って感じだなあ……)

そんな人たちの合間を縫って、俺は帰路につく。

俺の家は、バーのある駅からほど近い公園をつつきれば、割とすぐ
つくところにあった。

藍香さんが店から近いところを用意してくれたからね。

「明日は……休みか。昼過ぎまで寝ようつと……」

今日は色々あった。だいぶ疲れたし、よく眠れそう。

スマホで明日に予定がなにも無いことを確認し、俺はそつと画面を
閉じる。

ほどなくして、自宅のアパートについた。

キーケースを取り出して、家の鍵を取り出そうと……。

(……?)

その時、視線を感じた。

慌てて後ろを振り向くが、人の気配はない。

「気のせい、か」

やっぱり疲れているのかもしれない。早く寝よう。

扉を開けて、鍵をかける。

念のため、チェーンロックもかけておいた。

シャワーだけ浴びて、布団へダイブ。

シャワーを浴びている最中もなんか視線を感じて気持ち悪かったが、それも布団に入ってしまったえばすぐに忘れることができた。

俺はこの時感じた違和感を、もつと早く警戒すべきだったとも知らずに眠りについたのだった。

幼馴染系JDは自覚する

一目惚れの定義ってなんだろうか。

その人を文字通り一目みて、顔が、雰囲気、スタイルが好みで惚れる？

もしそれこそが一目惚れだと言われたら、きっと私は一目惚れ“は”していない。

——けれど、初めて会って、会話をして、少しだけ行動を共にして。その日の別れ際にバイバイと言った時。

その瞬間に胸の高鳴りが抑えられずに自覚したこの恋は、もはや一目惚れの範囲に入っても良いのではないかな、なんて思う。

生まれてから今日まで、そこそこな数の男の人と会ってきたし、好きになることはなかったけれど知り合った男子は何人かいた。

数は少ないものの、クラスには3〜4人くらい男子がいたし、趣味でやっていたオンラインゲームにも、男性のプレイヤーがいたりもした。

けれどその内面に触れるたびに、「自分が選ぶ立場」みたいな空気を出している男連中に嫌気が差した。

自分の容姿に投資もできない。特別秀でた何かがあるわけでもない。内面がとも良いわけでもない。

なのに、「選ぶのはこっちなんだ」と言わんばかりのねめつけるよう

な視線。

「付き合つてあげてもいいよ」なんて言われた日には寒気がした。

「友達でいてやるよ」と言われた日にはムカついた。

どうしてそんな譲歩なぞされなければいけないのかが、私には全然わからなかった。

「はあ……」

大学の1限目の授業が終わって。

机の上突つ伏した私——五十嵐恋海は、思わずため息をついた。

「どしたの恋海？朝からため息なんかついてたら、今日の5限までもたないよっ」

「保つ気がしないよ……」

一緒に授業を受けていたみずほ……戸ノ崎みずほが顔を覗き込んでくるけれど、今はそれに応える気にもならない。

「せっかくそんな可愛いのにそれじゃモテないよ恋海！私達の夢見たキャンパスライフのためにも、頑張つていかないと!!」

「朝からテンション高いねみずほ……」

「そりゃそーよ！この入学したてがチャンス……！イケメン捕まえるぞ〜！」

私の友人であるみずほは、いわゆる面食いだ。

イケメンが好きで、イケメンを見つけるとすぐにコンタクトをとりにいくタイプ。それで良く玉砕もしている。同性として仲良くしている分には本当に良い子なんだけど……。

だいぶ教室内も人が減ってきたので、そろそろ立って教室を出ようかと重い腰を上げたその時。

一瞬だけスマホを見ていたみずほがちよいちよいと手招きしてきた。

「そういえば恋海はバドサーだと誰狙い？」

「え……？」

「え？つて。いやほら狙いくらいいるでしょ？」

みずほと私は同じバドミントンサークルに所属している。

確かに素敵な人がいれば良いなど思ってサークルには入ったから、下心がまつたくなかったかと言われれば否定はできない。

けれど。

「あー……今んとこ、いない、かなあ」

「えー!?マジ?けいとさんと結構イケメンじゃない?!」

「そう、だねえ……」

「恋海めちやくちや可愛いのに意外とがつつかないよねえ?もつとがつついていかないと!余っちゃやうぞ〜!」

余る、か。

みずほの言う事はたぶん間違っていないのだと思う。

男の方が少ないわけで、国は一夫多妻制を導入するとか言っているけれど、世の中の人たちがはいそうですかと自分の価値観をすぐに変えられるとも思えない。

であれば、私みたいな人間は文字通り余るのだろう。

「選んでもらおうと努力しない女」は。

またなんとなく、ため息がついて出た。

「げっ」

2限の教室に向かうべく、校舎内を歩いていると、スマートフォンに大学からメールが来ていることに気付く。

『2限の104教室の授業は本日教授が体調不良のため休講となります』

随分と急な連絡だった。

「休講かあ……誰か今空きコマの友達いたかな……」

さつきまで一緒だったみずほは違う授業に行ってしまった。

他の仲の良い友達も、まだ大学に来ていなかったり、授業であるのがほとんど。

お昼にするには、まだ少し早いし……どうやら一人で時間を潰すしかないようだ。

「あつつ……ん？」

外からの日差しが眩しい。まだ春とはいえこうも太陽が出ていると暑さを感じずにはいられない。

今日はショートパンツにして正解だったな、と思い、ついでに被ってきたお気に入りの黒いキャップもリュックから取り出そうかと思ったその時。

「やべー……マジでどの授業とつたらいいかわからん……大学生活もう終わりや……」

ふと、校舎の廊下に設置されたベンチでノートパソコンを開きながら頭を抱えている青年が一人。

気付いたらその青年の方に、足が向かっていた。
声を——かけてしまっていた。

「あのー……もしかして履修登録、ですか？」

「え?!……あ、そうなんです。ちよつとワケあって入学手続きが遅れちゃって……」

ドキつとした。この男性は、無防備にもこちらに笑顔を向けてきた

から。

こんな純粹な男性の笑みを見たのは、いつぶりだろう。身長は高すぎるほどではないが、平均以上くらいにはありそうですらつとしていて。

髪型は黒髪の緩いパーマ。半袖の白いシャツの上から、小麦色のベストを着ているのがとても清潔感がある。

それにこの、人の良さそうな笑み。

自然と心臓の鼓動が少し早くなった。

「も、もしよかったら、お手伝い、しますよ?」

「ヤバイ!ちよつとどもつちやった!

キモがられても全然おかしくない。私の顔からサツと血の気が引く。

急に話しかけられて手伝いしましょうか? って冷静に考えたらナンパ以外のなにものでもなくないか……?

「えー!いいんですか?あれ?けどもう2限始まつちやう……」

……引かれて、ない?

というかもしかして、承諾された?

慌てて私は会話を続けた。

「あ、いえ!私、2限休講になったんで、ちやうど暇だったんですよー」

「マジですか!めちやくちや助かります!ありがたい〜」

その瞬間。

彼が座っていた長椅子の位置から、ひよいと横に移動した。

……え?隣座って良いってこと???

え??

「俺学部学科ここなんですけど〜」

え、なんか普通に話始まつてるんだけど???

え、座って良いってことだよな?私なんか致命的な勘違いとかしてないよね??

いざ隣に座ったらえ?みたいな顔されないよね?

「……あれ？どうしました？」

「あ、あああ！なんでもないです！いま、今座りますねあはは」
き、緊張する。

こんな近くに男の人がいるなんて、何年振りだろう。

心を落ち着けるために深呼吸してから隣に座り……そして、パソコンの画面を見て気付く。

「あ……学部学科一緒です」

「えーそうなんですか？直接の先輩に助けてもらえるとかありがたいすぎるー」

ん？先輩……？

あ、そっか、私声をかけたから、上級生だと思われてるのか。

あれ？じゃあタメ語の方がいい？

けど初めましてでタメ語とか使ったら馴れ馴れしすぎるかな……。

「あ、ごめん、私も、1年なんだ、けど……」

ってか1年のくせして履修登録手伝うよとか生意気すぎた？

下心で声かけたって思われるかな……。

ダメだ、頭がぐるぐるしてきた……。

「な——」

ぽかん、とした彼の表情。

あ、終わったかも——。

「なんだ1年だったのか!!いや同級生の知り合いいなくてさ！めちゃくちゃ助かるよ！俺片里将人！君は？」

彼は、心の底から嬉しそうだった。

わからない。彼がとんでもない演技の天才とかであればわからないけれど、少なくとも私にはそう見えた。

彼に見えないように、太ももをつねる。

これ以上醜態は見せられない。早鐘を打つ心臓を無理やり抑えつける。ここからは、印象上げていかなきゃ……………!

「私は五十嵐恋海!よろしくね!」

笑みも忘れない。他の皆にするよりもより一層良い自分を作り上げるんだ……………!

「五十嵐さんね。おっけー!早速なんだけどさ、マジでどの授業とれば良いかちんぷんかんぷんで……………」

彼……………片里将人君は本当に困っているようで、パソコンの画面をスクロールしている。

時間割は確かに真っ白のままだった。

(……………え、ちよつと待ってこれめつつちやチャンスなんじゃない?)

将人君と私は、学部も学科も一緒。

つまりは、とるべき授業は一緒であるということだ。

じゃあもう、私と同じ授業を全部とれば、毎日、彼と同じ授業を受けることができる……………?

「……………五十嵐さん?」

「ツ……………」

横に座る彼を見たら、あまりの距離の近さに目が眩んだ。

胸は焼けるように痛いし、さつきつから汗が止まらない。

けど今は我慢だ。

これから先の輝かしいキャンパスライフのためにも……………!

「あ……………片里君がもし、もしよければんだけど、私と授業一緒でも、いいかなーって」

え?でもこれヤバくない?

普通に考えたら固定で一人の女と毎日会わなきゃいけないのってもしかして地獄?

まずい、言い訳を、言い訳を考えないと……………!

下心ないですアピールをしないと……………!

「あついや、ほら！私さ、他の授業とかあんま詳しくないけど、自分のとってるのはだいたいわかるから？それにもう授業2回くらいやってるやつもあるし、前回の配られた資料とかそのへんも見せれるかもしれないし色々お得かなって思ってる」

お得かなってなんだよ!!!

私は自分の早口の気持ち悪さに若干引いた。

そしておそろおそろ、彼の表情を伺う。

「五十嵐さんもしかして——」

あ、終わった。今度こそ終わった。

俺のこと狙ってるの？とか言われて終わりだ。対戦ありがとうございませう。

終戦。しゅうまい。まいまい。短い間だけど夢が見れてわたし幸せでした。

「もしかして——天才か？」

ええ？

「え、ほんつとたすかる。でもいいの？五十嵐さんにメリット無さ

過ぎない?」

「いやーいやいやいや!めちやくちやある!めちやくちやあるから大丈夫!」

あなたと過ごせる大学生活!!もうそれだけでメリツト通り超えてラックスだから。は?意味わからないんだが?

多分私の目は今漫画化できるならぐるぐるおめめになっているはず。自分で何言ってるのかわからなくなってきちゃったよ!!

「そ、そう?それならいいんだけど……え、じゃあ時間割見せてもらってもいいかな?」

「うん!もちろん!」

すぐさまスマホを開いて、時間割を出す。

「えーっと、月曜日1限がこれで、2限がこれ、3限が……」

目の前で、授業がどんどんと埋まっていく。

私と同じ時間割。

え?もう実質これおそろっちゃってこと?パールツク始まった?ダメだ本当に頭おかしくなる……。

「いやー助かったよ!ありがとう!」

「いえいえ!助けになれたならよかったです!」

30分ほどだっただろうか。

私にしてみれば一瞬だった。

それだけ彼……将人との会話は楽しかった。途中自分でも何言ってるのかわからないくらい緊張したけど。

「じゃあ俺は一旦帰るわ！まだ学生証届いてないから、授業出ても意味ないしね」

「そっかーじゃあまた授業出れるようになったら、教室で会おうね」
そっかーこれから毎日会えるのか……ヤバイ、自然とにやついてしまふ。

火照る身体を自覚しながら、彼に手を振って別れを告げたのだが。

こちらに背を向けて歩き出したはずの彼が、何故かこっちに戻ってくる。

どうしたんだろう。忘れ物……？

「どうしたの？」

「あ、いやーそのーなんと言いますか……五十嵐さんに、お願い、というかそのー……」

頬をかきながら、何かを言いくそうにしている。

お願い？

私にできることならなんでも聞きますよ？

そう思っていた。

しかし彼は次の瞬間、意を決したように、私の目を真っすぐに見たのだ。

そして私は多分、この時言われた言葉を一言一句、生涯忘れないと思う。

「よかったらさ、俺と友達になってくれないかな」

『付き合い合ってやってもいいぞ』

『友達でいてやるよ』

『友達になってやろうか?』

『話してやってるんだから感謝しろよ』

過去自分が男から投げられた言葉が頭の中をリフレインする。

そしてそれら全てが、はじけて、飛んだ。

自分の中が何か一色に塗り替えられていくような、そんな感覚。
周りの景色も。音も。

なにもかも聞こえなくなつて。

今日の前にいる彼から、目が離せない。

「もちろん、だよ」

やっとのことで絞り出した、声。

すると目の前の彼は、またあの人の好い笑顔で。

「やった！ありがとう！友達一人もいなくてさー！！じゃ、行くね！五十嵐さんのおかげで、大学ちよつと楽しみになってきたわ！」

楽しそうに去っていくその背中を目で追って。

見えなくなつて。

私はその場にうずくまつた。

ぎゆう、と強く胸の当たりを押さえる。

けれど、抑え込めたりなんかしない。

溢れ出したこの感情の波を抑えることなんてできない。

(無理。なにこれ。王子様じゃん、こんなの)

理想そのものだった。

内面も、外見も、雰囲気も。要素全て。

私の中の優先順位が、ものすごい勢いで変わっていくのがわかる。鼓動が、鳴りやまない。

「はーっ……！はーっ……！」

絶対に欲しい。

もう彼以外考えられない。

彼の全てが欲しい。

「将人……君」

運命の人の名前を、私は何度も何度も頭の中で繰り返した。

バスケット部JCは意識する

私はバスケットボールが好き。

元々身体を動かすのが好きだったし、ボールがゴールに入った時のスパツっていう音が気持ちよくなって、すぐに私はこのスポーツに夢中になった。

——けど、少し夢中になりすぎちゃったのかもしれない。

「由佳っちお疲れ〜私帰るね〜」

「あ、うん！ばいばい！」

小学校の体育館。

春休みなこともある卒業生である私達に自由に使っていていいよと言われたので友達とバスケットをしていたけど……。

皆昼過ぎには帰る感じに。

(仕方ないよね)

本当はもう少し練習したかったけど、皆に合わせるのも大事だから。

私もしぶしぶ帰り支度を整える。

「えっ！りか、しょうや君と付き合うことになったの?!」

「卒業式に告白したらOKもらえちゃって〜！」

帰り道、皆は男子との恋愛話で大盛り上がりだった。

「え？でもしょうや君ってすずかとか付き合ってたっけ？」

「別れたんじゃない？まー最悪別れてなくてもいっかなーって感じだけどー！」

付き合う、恋人同士になる。

その事自体に憧れはあれど、私にはそうなりたいと思う相手がいな

い。

クラスにもバスケット部にも男子はいるけれど、全然魅力を感じない。

「……うなにボケつとしてるのよ由佳。あなたは誰にも告白しなかったの?」

「え?私?うーん、好きな人も、いないから……」
本当のこと。

同級生の男子は、皆子供だし、なのになんか上から目線が多くて、なんか苦手……。

「由佳ったら本当にバスケット部なんだから〜」

「すごいよね、私もちろんバスケットしたかったからバスケット部入ったけど、正直言うとなんか狙いだっただけのところもあるし」

「それ言っちゃおう?まあ私も多少は期待してたけど!」
そうなんだよね。

バスケットは、男子もやる人が一定数いるスポーツ。

他クラスの男子との交流を狙って、バスケット部に入る人がいる……と
いうのを聞いてとても驚いた。

でも、私はシンプルにバスケットがしたかったし、皆には言わなかったけど試合にももつと勝ちたかった。

そんな性格なのを知られてるから、どうせ私にこの手の話題は振られない……そう思っていると。

「でもねー由佳はバスケット部に見せかけて、実はむっつりだから」
爆弾が投下された。

「なっ……ち、違うよ?!」

「隠さなくていいよ〜由佳がむっつりなの皆知ってるから」

「そ、そんなことないよ!普通!普通だつてば!」
周りを見渡せば、うんうんと頷く友人達……。

え?!なんでそんな皆知ってるよみたいなの皆知出してるの?!

「え〜?だつて由佳授業中えっちな本読んでニヤニヤしてるじゃ

ん」

「?!?!」

「ねーそういえば由佳の家遊びに行った時、ベッドの下になんか怪しいものが」

「わーわー!!やめて!!本当に!!」

頭が沸騰しそう!

私だって女の子だし、男の子に興味くらいはそりやあるよ!!

「ごりやむつつりですわ」

「むつつり由佳っちなね」

「やめてよもー……!!」

人並みだよ人並み!

「じゃあねー!」

「また中学校でねー!」

友達に別れを告げる。

だいたい友達と同じ地元の中学校に行くから、卒業しても離れ離れにはならない。

「うーん……」

手を振った後、その右手を開いたり閉じたり。

正直まだ、動き足りないんだよね。

「公園、行こうかな」

私はそのまま、良く行く近所のバスケットゴールがある公園に向かうことにした。

ダム、ダム、ダム。

バスケットボールが地面を跳ねた時に鳴る音は、割と好きだった。けど、まだ私が目的地についていないのにこの音が聞こえてきたという事は……先客がいるということ。

(この時間に人がいるの珍しいな……)

先客がいるとわかったからって、おずおずと帰るわけにもいかない。

2人くらいであれば、問題なく代わる代わるシュートも打てるし、何も問題はない。

そう思って、足を進めると。

バスケをしている人の様子が見えてくる。

「……男の、人？」

バスケをしていたのは、男の人だった。

おそらく、高校生か大学生くらい。

存在自体は、そこまで珍しくない。けど男の人が一人で練習している、という状況は、珍しいかも……？

コート近くまできて、顔が見えるくらいの距離まできた。

そして……私は人生で1番の衝撃を受けた。

「ふっ……！」

ドリブルが速い。手に吸い付くかのようなハンドリング。

クロスオーバー、ビハインドバック。私が習得したい技術の数々。

そしてその後、ゴールに風のように向かって行き……。

「よっ、と」

レイアップシュート。それも前からじゃなく、ディフェンスがいた想定で裏からの、バックレイアップ。

「……………」

目を奪われた。

上手いプレーは動画とかで見てきた。

けれど、全然違う。男の人が、ここまで華麗にプレーするのを目の前で見るのが、初めてだったから。

カッコ良い、と素直にそう思った。

「ん……………」

目が合った。

顔立ちも整ってて、綺麗なお兄さんだった。

急に、胸がどきどきする。

「あ、僕もう帰るんで、どーぞ使ってください！」

「……………え？あっ、はい、ありがとうございます……………」

もう帰っちゃうの?!

はっ、私が来たからか。こんなボール小脇に抱えて突っ立ってたら、そりゃバスケットにきたってわかるよね。

そうしている間にも、お兄さんは自分のボールをリュックにしまつて、帰り支度を整えている。

なにか、なにか声かけたい。

今を逃したら、二度とチャンスなんてこないかもしれない！

話してみたい……………!

「あ、あのー！」

「……………」

お兄さんがこちらを向いた。

なんて声をかけたら？

カツコ良かったです？いやそんなこと言ったら引かれるに決まってる！

連絡先教えてください？下心丸出しだよそんなの！

私と一緒にバスケットしてください？いやいや初対面でそれは無理があるよ……！

「な、なんでもないです……」

「？そう？じゃあ俺、帰りますね！」

ああ……やっちゃった。

ちよっとお話したかったのに……。

お兄さんはどんどんと離れていって、やがて見えなくなった。

コートに残されたのは私一人。

急激に火照った身体が、冷めていくのがわかる。

とくん、とくん、と自分の心臓が鳴っている。

カツコ良かった。

けど、それだけじゃない。あの人のもつ雰囲気、声が、全て自分に突き刺さったような感覚。

「なんで……声かけられなかったんだろ……私のバカ」

自分の無力さを呪いながら、ぽつりと私は呟いた。

でも私は当然のように諦めなかった。

諦められるわけないよね！私は由佳、諦めの悪い女なんだから！
今日こそあのカツコ良いお兄さんに会うんだ！

「じゃ、私帰るね！」

「え?!由佳ちよつと今日部活説明会があるって！」

「どうせバスケット部だからいいや！」

あれから私は、時間の許す限りあの公園に行っていた。

会えたのは午後3時過ぎくらい。既に結構練習していたようだったし、もう少し早めに行けば会える可能性が高い！

あれから毎日行っているけどなかなか会えてはいない。

けど今日はあの会った日と同じ金曜日だから、確率としては高いはず！

「由佳どうしちゃったの最近？」

「アイドルのおっかけでもはじめた？」

クラスメイトからあらぬ疑いをかけられているけど関係ない。

なにせ今私は忙しいから！

「いた……い！」

時刻は14時半。

ついに……ついにあのお兄さんと再会することができた！

あの時が遠くから来ててたまたま寄っただけとかだっただらどうしようかと思っただけ……。

もう会えない可能性だって十分あった。

あの時と変わらないフットワーク。

シユートフォームも、とても綺麗。

やっぱり格好良いなあ……。

私は意を決して、コート近くのベンチへと向かう。

すると、お兄さんがこちらに気付いた。

「あれ、たしかこの前の……」

どくん、と心臓が跳ねたのがわかる。

嘘、覚えてくれてる？あんな一瞬だったんだよ？

そんなはずはないと思いつつも、覚えてくれていた嬉しさでもう既に顔が焼けるように熱い。

今日こそは！今日こそはせめて連絡先を、聞かないと……！

もう会えないかもしれないという恐怖を、もう感じたくない！

「あ、あの……！」

声を絞り出す。

なにか、なにか言わないと。

「私、元々よく、ここで練習、してて」

「へえー！そうだったんだ」

あ、あれ？なんか全然違う事言ってる？

一緒にバスケットがしてみたい。だから連絡先を……あーでもこれやっぱナンパになっちゃうのかな？

通報されちゃうのかな？

どうしよう、なんて言えば……。

「だから、私もここで、練習、したくて」

「そっかそっかー！ごめんね、そしたら俺もう帰るからさー！」

「えっ、そうじゃ、なくて！」

いけない、大きな声が出ちゃった。でも前と同じ過ちは繰り返した

くない……！

お兄さんもびつくりしてる……。早く誤解を、解かないと。

「あ、あの、私と……」

言わなきゃ。ちゃんと伝えなきゃ……！

お兄さんは少しだけかかんで私の話を聞いてくれている……。

一緒に、バスケットをって言わなきゃ、言わなきゃ……！

一気に、息を吸い込んだ。

「私と！勝負してください！」

「ええ?!」

1時間ほど経って。

「いやあ由佳ちゃん上手いな?!びつくりしたよ」

「ありがとうございます……」

お兄さんに、まったく敵わなかった。

プレーを見てたときからわかってはいたけれど、お兄さんはバスケットが上手い。

同級生の男の子には負けたことなかったけれど、お兄さんにはまるで歯が立たなかった。

でもそれが、それで良い。

勝負はとても楽しかったし、勝負の合間に名前を聞いた。片里将人。それがこのお兄さんの名前。

それにもう一つ。

「はっはっはーでもまだ俺には勝てなかったなあ〜約束通り、ここで俺はまだ練習しても良いってことかな?」

私が全力で挑んで、そして負ける限り、お兄さんはまたここに来てくれると約束できたから。

ちよつと歪だけど、私とお兄さんだけの約束。

そう思うと自然と胸がきゅつとする。

「次、次こそは、負けません」

「はっはー息上がってるぞー? 由佳ちゃん水分補給しな?」

確かに、まだここに着いてから水分補給をしていない。

促されるまま私はベンチへと向かい、腰掛ける。

そしてリュックから水筒を……。

「あれ……?」

水筒が、無い。

学校に忘れたか、それとも家か……。

「どしたの?」

「あ、いえ、水筒、忘れちゃったみたいで」

「あら」

「でも大丈夫ですーお小遣いあるんで、買ってきますー!」

幸い、財布の中には小銭が何枚がある。

自動販売機が近くにあるし、これでスポーツドリンクを買うことにしよう。

「え、もったいないやん。俺のでよければ、あげるよ。はい」
「……えっ?」

立とうとしたその時、お兄さんから手渡されるペットボトル。

受け取ってみると、その中身は、*「減っていた」*。

それが意味するところは、もう既に開封済みということ。

つまりは、お兄さんが飲んだ後。

え????
これって間接キスでは????いやそうだよね????
うそうそうそむりむりむりけどダメだ!気にしてるのがバレたら引かれる!!
飲みたい!ものすごく飲みたい!色んな意味で!!けど意識してるのバレたら二度と会ってもらえないかもしれない!!
すぐに!迅速に!飲まなきゃ!自然に!
できれば自然に!!
落ち着け私っ!!

「ああああああありがとうございます!」

「どうした?!顔真っ赤だけど?!」

余裕で無理だった。

手が震える。

キャップを外して、これを、早く、飲まなきゃ。

唇に徐々に近付ける。心臓の鼓動がうるさい。

熱い。熱い。心臓が熱い。

あれ、視界、が……。

「うにゃあ……」

「由佳ちゃん?!ええ?!」

意識が遠のく……ああ……私の間接キスが……。

慌てた様子のお兄さん……将人さんの様子を見て、私は思った。

人を好きになるって、しあわせだなあ。って。

きっと初めて会った時から既に。

私の心はもうどうしようもなくこのお兄さんに掴まれてしまったのだ。

ツンデレ系OLは壊される

生きてる意味なんてあるのだろうか。

私——望月星良は最近そんなことばかりを考える。
大学を卒業して就職。

大学はまあそこそこな所だったから就職活動も割とスムーズだった。

大学では女友達とはしゃいだりするのが楽しくて、割と楽しめた方だと思う。

彼氏も……一応は、いた、と思っているし。

考えれば考えるほど地獄な彼氏だったが。

「はあ……死にた」

「ちよつと星良、課長に聞こえたらどうすんの……!」

「すみません……」

今日も今日とてパソコンと向き合う。

パソコンと向き合って作業するだけならいい。

問題は、上司だ。

それも、一日中同じ部屋にいる上司。

「ちよつと望月さくらん? さつきももらった書類、ここここに会社名入れてって言ったよね? 入ってないんだけど?」

「え……いや、さつき確認したら課長がいらなくて……」

「は? 私そんなこと言ってないけど? あんたが聞き間違えたんでしょ?」

「……」

毎日毎日。

この脂っこい課長にどやされて生きるのに、なんの意味があるのか。

「やだやだ。そういう聞き間違いばかりするから、男に逃げられたんじゃないの?」

「……ッ！」

殺意が喉から出かかって、鋼の意志でそれを制する。課長が大きな声で言ったこともあり、まわりからヒソヒソと声が聞こえてきた。

「えっ、望月さんって男に逃げられたの……？」

「もう去年の話だよ。就職して1ヶ月くらい。なんかそもそも向こうは付き合ってたつもりもなかったらしいよ」

「えっ！ひっど。なにそれ」

本当に、嫌になる。

私は無言で席に着いて、言われた書類のやり直し作業にとりかかった。

大学時代、私には彼氏がいた……はずだった。

私のグループがいわゆる上位グループだったこともあり、周りだからこそ彼氏を作っている中で私だけ作れなかったから、卒業間際に彼氏ができた時は本当に嬉しかった。

人生初めての彼氏だったのだ。

そしてそんな浮かれていた私を……あいつはどん底に叩き落した。

『え……？本気にしてたの？wwごめん無理だわ。ってか実は俺彼女2人いるしww』

怒りよりも憎しみよりも先に、自分の愚かさを呪った。

なんでこんな奴と付き合えて喜んでいたのだろうか。

男なら、誰でも良いと思っていたのだろうか。

そんな自分に、反吐が出る。

結局2ヶ月も経たずに別れて、もう一切連絡をとるのをやめた。

SNSもブロックした。

それからずっと、一人だ。

一人暮らしだから、家に帰っても一人。

何の気も無しに、SNSを開いてみる。

大学時代の友人達が、彼氏とテーマパークに行っただの、デートでどこどこに行っただの、その類の投稿が立て続けに並んでいる。羨ましいとか、そういう感情もとうに無くなった。

生きてる意味なんて、あるのだろうか。

「え？ボーイズバー？」

「そう！星良ちゃんもどうかなって思ってた！」

今日は会社がノー残業デー。

明日が休日ということもあって、早く帰ろうと思っていた私を引き留めたのは、先輩のみきさん。

この人には何度も助けてもらっているし、頭が上がらないのだが……。

そんな先輩に、ボーイズバーに行かないかと誘われている。

「私達たまにね、こうして次の日休みの時に、行ってるお店があるの！イケメンもいるし、良いよ〜！目と健康に良い！」

「はあ……」

本音を言えば、帰って寝たい。

朝からクソ課長の嫌がらせを受けて疲れているし、心身ともに疲労困憊だった。

「最近星良ちゃん元気ないから……ちよつとでも元気になればなあって……」

「……」

みきさんが、自分を気にかけてくれているのはわかる。それを無下にするのも、悪いかな……。

「良いですよ、行きます」

「え、ほんとー?!嬉しいー!きつと星良ちゃんも気に入ってくれと思うー!」

手を握られてぶんぶんと上下に振られる。

うーん、正直そういう系のお店は行ったことないし、あんまり楽しめる気がしない。

自分自身がつまらない女だっていう自覚はあるし、むしろ他の皆の楽しみに水を差さないか心配だった。

「星良ちゃんに誰ついてもらおつかー!」

「えーあの人がいんじゃない?」

「え、でもあの人指名料高いよ。最初にするにはちよつとじゃない?」

「あんまりぐいぐい来てくれる人じゃないほうがむしろいいんじゃないかな?」

なんか私のいない所で盛り上がってる。

……まあ、適当に軽くお話して、帰ろう。

ボーイズバー『F e s t a』そう書かれた看板は、ネオンが眩しいくらいに輝いていた。

駅前から歩いて少し、割と立地の良い場所が、どうやら今日の目的地らしい。

みきさんが先導して、お店のドアを開けた。

「いらっしやいますー!……あ、みきさん!また来てくれたんだね

！」

「ゆうせいくんまた来ちゃった♡」

……え？

正直一発目からドン引いた。

なーにがまた来ちゃった（はーと）だ。

……会話から察するに、きつとみきさんはここに良く来ているのだから。

奥へと通される。

「お嬢様5人3番テーブルブルゴ案内です！いらっしやいませ〜！」

「二二いらっしやいませ、お嬢様」

うわ、すごい。

受付してくれた人が声をかけると、店内のスタッフ全員から歓迎される。

その誰もが、美形揃い。

……確かにちよつとだけ気分が上がる。

席につくと、全員が広いソファにそれぞれ等間隔でけっこう位置を離されて座らされた。

え？なんで？なんでこんな間空くん？

疑問に思った私はみきさんにちよつとだけ身体を寄せて聞くことにした。

「え？どうしてこんな間あけるんですか？」

「この間に、ボーイが来てくれるのよ！」

「あ、間?!」

どうやら、女子勢の間に男が挟まる形式らしい。

なるほど、集団で来たとはいえ、基本は1対1で話すことになるのか。

え、緊張してきたんだけど……。適当に皆と話合わせてれば良いと思ってたのに……。

「いらっしやいみき。今日は皆普通にボーイつけちゃっていい？」

「あ、ゆうせいくん。ちょっと相談があつて……」
みきさんがお店側に何かを頼んでいる。
察するに、ついてくれるボーイの相談、かな？
「そっかそっか、了解。で、みきは？」
「ええ？聞くの？私は、ゆうせいくん一筋で♡」
え、きつっ……
尊敬する先輩のこんなところ見たくなかったな……

「お邪魔します、お嬢様方」
ぞくぞくとボーイが来て、それぞれについていく。
私の隣はまだ来ていない。

それにしても来る人来る人イケメンな上に、きらぎらと眩しい装飾
をしているものだから、どうしても気圧されてしまう。

(こんな商売やっている人だし……きつと内面では私達のことあざ
笑ってるんでしょ)
なんて思ってしまったって、なんて嫌な奴なんだって自分に嫌気が差し
た。

どうしてもネガティブな方に最近は思考してしまう。
隣ではみきさんがゆうせい(?)さんといちやいちやだしている
し、周りの皆もお気に入りのボーイが来たのか既に目がハートマーク
になつてる気がする。

おい、私を楽しませるとかなんとか言わなかったかい。
……正直、楽しめる気はあんまりしていない。
この手の男の人と、話が合う気がそもそもしないのだ。
つくづく私は、つまらない女だと思う。

「お邪魔します、お嬢様」

いよいよ声がかかって、視線を上げる。

「……………」

その日、私は天使に出会った。

「よろしくお願ひします、まさとです。お姉さんのお名前は……………」

「あ、えつと、星良、です」

「星良さん！よろしくお願ひしますね」

正直、イケメン度合で言えば、さつきから来ていたボーイの人達の方がイケメンだったかもしれない。

けれど、私の所にきてくれた彼は……とても落ち着いていて、純朴そうな印象だった。

服装も良い。

下手に着飾り過ぎてなく、スーツが深めの紺で、まとまっている。童顔なのも良い。ちよつと背伸びしてスーツを着ていますという感が、庇護欲をそえられる。

「今日は、お仕事後ですか？」

「え、ええ……明日、休みだから」

彼が私のグラスに氷とお酒を注いでくれている。

その間も、につこりと笑顔を絶やさない。

「そうですね〜！明日休み楽しみだなあ。なんで金曜日の夜ってこんなにテンション上がるんですかね？」

「ふふ、そうね」

え、今私笑った、のかな？

この私の相手をしてくれる彼が、想像と全然違う、年下の子だったからだろうか。

どこか拍子抜けして、さつきまでの緊張がいつの間にかほぐれていた。

「星良さんは休日なにされて過ごす予定ですか？」

「そ、そうね……最近ゲームにハマってて……」

と、そこまで言っただけで気が付いた。

流石に一発目趣味ゲームはオタクが過ぎないか？と。

無難に読書とか言えばよかったかもしれない。

「えーいいですね！どんなゲームやられるんですか？」

しかし心配は一瞬で杞憂だとわかった。

そもそもここは私が楽しむために来ているのだし、そんなことを気にするのは野暮かもしれない。

彼は一瞬たりとも怪訝そうな表情を浮かべることなく、私の話に食いついてくる。

「ええ、そうね、RPGとか、町育成するタイプのやつ、とか……」

「僕もめっちゃRPG好きです！楽しいですよね！」

満面の笑み。

彼からは、裏表が一切感じられない。

本当に演技が上手くて実はめちゃくちゃ引いてるとかあるかもしれないが、少なくともそんな素振りは私からは一切感じられないし、心なしかむこうも楽しそうに思えてしまう。

だからだろうか。

つい嬉しくて私は注いでもらったお酒が進んでしまうのだった。

「だからあのクソ上司!! わざわざ全員に聞こえるように私が男から逃げられたって……!」

「本当にひどいっすねそれ……」

あれ、いつからこんな話になったんだろう。

つついとお酒が進んで、良い気分になって。

まさと君の距離が近くて、くらくらしてきて。

もうなんでもいいやと思って、気付けば私は最近の鬱憤をぶちまけていた。

ヒートアップしすぎたかもしれない。

一つ、息を吐く。

「……でもね、バカなのは私。本気で付き合ってくれとか思い込んで、浮かれてた私が悪いの」

「え? でもその男の人から交際を申し込まれたんですよね?」

「そう、なんだけどね……」

そうなのだ。

にやにやと笑いながら、あいつがこっちに付き合つてと言ってきたはずだったのだ。

舞い上がってしまったが、あの時点で気付くべきだった。

「そんなのひどいですよ！星良さんなんも悪くなくないですか？悪いのはどう考えたってむこうじゃないですか！」

目の前の彼が、自分のことのように怒ってくれている。それがなんだか、無性に嬉しくて。

「でもそういうもんなのよ。女なんて。所詮私達に選択権なんかないのよ」

だから自嘲気味に、言葉を重ねた。

すると。

「俺……それ全然納得いかないんすよね」

「えっ？」

ずい、とこちらに乗り出してくる彼。

距離が近くて、ドキつとする。

「確かに、男は少ないかもしれませんが。けど、それだからって男が偉い理由になりますか？俺はそうやって慢心してる男が嫌いです」

初めて聞くタイプの話だった。

男の人とそれなりに話してきたけれど、こんなことを言う人は、彼が初めて。

私が驚いていると、それに、と彼はちよつと気恥ずかしそうに続けた。

「俺がその立場だったら……俺は星良さんみたいな容姿も内面も綺麗な人と付き合いたいけどなあ」

私の中で、何かのストッパーが壊れた気がした。

ツンデレ系OLは止まれない

私が『Festa』に初めて行ってから、1ヶ月が経った。
今日は金曜日。

最近新しく買ったお気に入りの腕時計で時間を確認する。あと少し。あと少しで終業。

胸が高鳴るのを抑えられない。

少し前まで、死んだように働いて、帰って寝るだけだった生活が、もう嘘のようだ。

もう一度腕時計を見やる。

ぴったり、秒針が12の数字と重なった。

「お疲れ様ですお先に失礼しますー！」

私は終業時刻ピツタリに迷わず打刻し、会社を後にする。

今の私なら世界を狙えるかもしれない。

そんな風になった私の後ろで、帰り際、オフィスの方の話し声が聞こえた。

「望月さん最近帰るの鬼早くない？しかも金曜日だけ」

「もしかして男でできた？」

「え、マジ？」

ま、まあ？半分できたようなもんよね（）

別に噂でなにを言われようとかまわらない。
すぐに外に出る。

まさと君が、私を待ってるから。

最近はそのだけで生きる活力が芽生えた。

ただただ怠惰だった休日は自身の女磨きの時間になり、仕事の時間も、まさと君に会うお金のためだと思えば苦でもなんでもなかった。

むしろもっとお金欲しい。

今まさになるん気分为例のお店へ向かおうとした、その時。

「星良ちゃん！」
後ろから、呼び止められる。

「……みきさん」

それは私の先輩の、みきさんだった。

みきさんももう鞆を持って帰る支度をして、私を追ってきた様子。
私が世界最速を目指したせいか、みきさんも大慌てだ。

ようやく私が止まったからか、ホッと胸をなでおろしたみきさんは
無言で私に近づいてくる。

え、なんか私仕事でやらかしたかな……。

みきさんはそのまま無言で私の隣まで来て……ガツ、と肩を組まれ
た。

「行くんでしょ、『宴』に」

「うっ……」

宴、とはあのお店、『F e s t a』のことだった。

仲間内だけで意味が通り、そして上司他にボーイズバーに行っている
ことをバレないように生まれた隠語。

どこの文化だ。

けれど、みきさんの指摘が凶星なことも事実。

私はもちろん行こうとしてるからね。

内緒で行こうとしていたことがバレて、怒られるかも……と思った
その時。

みきさんがそつと耳打ちする。

「私も連れてって♡」

……そういうのはお気に入りなのボーイズさんにやって欲しい(切実)。

軽いスキップで進むみきさん。F e s t aでのみきさんのうかれようを見るに、みきさんも相当あのボーイに入れ込んでいるのだろう。お金は大丈夫なんだろうか。

(まあ私も全然人のこと言えないんだけど……)

ハッキリ言えば、私だってバリバリスキップしたい。

彼に今から会えると思ったら、正直テンションは上がりまくりだ。初めて彼に会ったあの日から、私は欠かさず毎週あの場所に足を運んでいる。

当たり前だ。彼は私の天使なんだから。

無邪気な笑顔、表情豊かで、そのどんな表情も似合う彼。

彼以上の男なんて、多分この世に存在しない。

元カレが本当にゴミ以下に見えてしまっても、仕方がない。

まあ比べるのもおこがましい話なんだけどね。

そんなこんな考えていたら、いつの間にかお店の前まで着いていた。

今日も看板の主張が激しい。

前を進むみきさんは、もう目がらんらんと輝いている。

「さあ行くよ？夢の世界に……！」

「そ、そうですね……」

もうかれこれ来るのも5回目だが、未だに入る前は緊張する。

雰囲気慣れないのだ。
まあそれも、彼と話し始めたら全てを忘れられるのだが。

「いらっしやいませ、お嬢様……つてみきじゃん！また来てくれたんだねえ〜」

「ふふ……そんなよそよそしいこと言わないでよゆうせー。昨日行くからって、言っただじゃん」

あー始まったわー。

既に距離感ゼロでみきさんが推しのボーイにアタックしている。こういうところはもはや尊敬する。私にはとてもじゃないができない。

嫌われるリスクの方が圧倒的に怖いから。

いちやいちやしていた2人を虚無の瞳で見つめていると、ボーイさんがひよい、とこちらを向いた。

「そっちのお嬢様は……まさとでいいのかな？」

「……ッー」

は、把握されてる……！

めちやくちや恥ずかしい。もう私はこの店でまさと君を指名する女として定着してしまったのだろうか……。

……ん？なんかそれはそれで良い気がしてきた。つまりは公認つてことですよ？（）

お願いします、と伝えると、ボーイさんは笑顔で答えてくれた。みきさんがこれだけハマる人だから、きっと良い人なんだろう。

まあ、私はまさと君一筋だけど。

ソファの席に通されて、私とみきさんが少し離れて座る。

「みきさん……昨日仕事ですよね？仕事帰り来たんですか？」

「え？来てないよ？流石の私でも翌日仕事の日にはなかなかなー……」

「え？でもさっき昨日言ったでしょって……」

みきさんは推しのボーイに確かに、『昨日言ったじゃん』と言っていた。

その意味することはつまり、みきさんは昨日もこの店にきていたのだと思い込んでいたのだけど……。

「ちつつちち……あー、これあんまり大きな声でいつちやだめなやつかなあ？うーん、困っちゃうなあどうしよっかなあ〜でも愛する後輩だしなあ〜」

……あれこの先輩こんなうざかったっけ???

めちやくちや言いたいけど聞かれるのを待つてくるくねくねとした動きが、妙に私を苛立たせた。いや基本良い人だし好きだけど!!

みきさんは私に耳打ちするために、身体を私の方へと寄せる。

「実は……連絡先、もらっちゃった♡」

「……?!?!」

れ、連絡先……?!

てへぺろ！と舌を出すみきさんに、私は驚愕する。

だって、ズルい。

そんなのズルすぎるじゃないか。

もうそれはお店ではなく、プライベート。

仕事の時間ではないのに、推しと話せるということに他ならない。

私だって、まさと君と……!!

「こんばんは、また来てくれたんですね」

ビシッ、と身体が固まる。

この心を溶かすような声。間違えるはずが無い。

視線をおそろおそろ上げれば、そこには天使のような笑みを浮かべたまさと君。

……あつ、今日はノータイなんだ、それもそれで良い……。

じゃ、なかった!

「た、たまたま時間が空いたのよ……」

全然たまたまじゃないけど、バリバリ終業ダツシユぶちかましてきたけど、こう言うしかない。

だって、毎日君のことを考えて、君に会うために今日も終業RTAして来ましたとか言ったらキモすぎる。

だから私は、たまたま、偶然を装う。

そうじゃないと、私の心の壁が決壊しそうだから。

と、その時。

「まさどくくん！星良ったらまさどくんにぞつこんだからさWWW
相手してあげてねw」

とんでもないことを言う先輩のせいで全てを台無しにされかける。

「ちよつとみきさん!!」

みきさんの方を見れば、もう既に顔が赤い。

お酒回るの早すぎるでしょ!!

ここは軌道修正しないと……!

「コホン……え、えつとね、ほんと、たまたまだから。先輩に誘われて、仕方なく。それで、私はあなたと話すのが一番マシだから、呼んだの。わかる?」

よし、悪くない。今日はみきさんがいるし、理由も通ってる。

完璧だ。

「ははは……ありがとうございます。聞くことくらいしかできない奴ですが、僕も星良さんの話聞くのは結構好きなので」

「……ッー」

こ、この……!

あまりの可愛さに、脳が焼かれそうになる。

正直その笑顔で瞬殺されるところだった。

「あ、あなたね……誰にでもそういうこと言ってるんでしょ?」

「え?……いえ……僕のこと指名する変わった人なんて、星良さんくらいですよ……?」

私くらい……そうか、私くらいなのか。

それはとつても都合が良いことなただけけれど、世の女は本当に見る

目が無い。

どう考えたってまさと君はこの世で一番良い男なのに。

「そ、そう。それならいいわ。そうよね。あなたはいつまでもそういてほしいもの」

けど逆に、その良さに気付いてほしくない私もいる。

浅ましくも、この笑顔を独占したいと思ってしまうている。

付き合ってもない。ただ店で接客してもらってるだけの女なのに。

……あれ、なんか自分で言っていて泣きたくなってきたな……。

そして、さっきのみきさんの言葉を思い出す。

『連絡先……もらっちゃった♡』

……もし。もし私もまさと君の連絡先をもらえたなら。

もう天にも昇るような気持ちになれることは間違いないだろう。

けど、それと同時に、もし断られたら来週一週間を生き抜ける自信が無い。

というか多分無理。

それから2時間ほど。

いつものようにまさと君は天使で、会話が最高に楽しい。至福の時間だった。

途中店員さんが4回くらい「チェンジなさいますか？」って聞いてきたけど全部延長を選んだ。

だってまさと君以外に興味が無いから。

しかし、楽しい時間というのは悲しいことにあつという間で。

「星良く〜！帰るよ〜!!いつまでまさとくんといちやいちゃしてんの！ほら!!」

どうやらもう時間になってしまったらしい。

……つていちやいちゃ?!いちやいちゃはしてないから!!
したいけど!!!

「は、はー?!?!いちやいちゃしてないし!全然そんなじゃないし!
!こんな、ひよろひよろの……ひよろひよろの……」

ヤバイ。悪口を言おうと思ったのに、なにも浮かんでこない。

とっさにすらっとしたスタイルをひよろひよろというちよつとバカにした言い方に変換できた私を褒めて欲しい。

これで精いっぱいだ。

「はいはい。僕はひよろひよろですよ。また来てくださいね」
彼に、手を取られる。

あー無理好きだ。大好き。

手を取られただけで、こんなにもドキドキする。

お酒も相まって、身体が熱い。

カウンターまで行って、みきさんが支払いをしている間も、ずっと
まさと君は手を握ってくれていた。

……今なら。

今ならお酒のせいにして、ちよつと甘えても、いいかな。

思い切つて、まさと君に体重を預けてみた。

心臓の鼓動がうるさい。

鼻腔をくすぐる、まさと君の甘い香り。

身体全てが、まさと君に染められるような、そんな感覚。

「……星良さん?」

名前を呼ばれた。

心地よい声音。

けれど、今は顔を見せることができない。
こんなだらしのない顔を、彼になんて見せられない。
だから、下を向いたまま。

「……ダメだから」

「……え？」

「私以外の指名、受けちゃダメだから……」
わがままだって、わかってる。

お店で働いている以上、指名されたら接客する。

けど、私以外の女にまさと君が接客しているところを想像するだけで、胸が苦しくなる。

「大丈夫ですよ。俺、金曜しか入ってないですし」

「……そう」

「その金曜は、こうして星良さんがちゃんと指名してくれますし」

「……そう」

ズルい。

そんなこと言われたら、金曜日は毎週来なくちゃいけない。

まあ……頼まれなくても、行く、けど。

めちやくちやまだいたかったけど、渋々お店を出て。

お店が見えなくなるくらいのところまで来てから、私とみきさんは一旦ベンチに腰を下ろした。

ああ、本当に今日も今日とてまさと君は天使……いや神だった。

「こおら星良！なーに人がお金払ってる後ろでいちやいちやしとるんじやああああ!!」

「え、えええ?!み、みみてたんですか?!」

「……ダメだから(うるうる)」

「ああああああああああ!!!忘れろ!!!今すぐ!!!」

恥ずかしすぎる!!!

正直初めてこの店来た時みきさんの言動に引いてたのに、もう全く持って人のことを笑えない。

けらけらと笑うみきさん。

「いやあ最高だったね……さて、帰るか……って言いたいんだけど、ちよっとお腹すいたし、ご飯食べてから帰らない?」

「良い、ですよ。そうしましょうか」

最近、ようやく人生が少し楽しい。

それはもちろんまさと君の存在が大きいかいけれど。

こうして気にかけてくれる先輩のおかげも大きかった。

「じゃ、お疲れ〜!また月曜日ね!」

「はい、お疲れ様でした!」

みきさんと私は別方向。

少しだけご飯を食べて帰るつもりが、だいぶ遅くなってしまった。もうとつくに日付が変わっている。

「さて……」

私の家はここから電車で2駅ほど。

そう遠い距離じゃない。

今日の余韻を楽しみながら、駅のホームに向かおうとした。

その時だった。

「……え」

思わず、絶句する。

視線の先。

酔いつぶれた人達をかきわけて、一人歩く少年。

どう見たって間違いなく……まさと君だった。

私が見間違えるはずがない。

私服姿の、まさと君。

急に心拍数が上がる。

もうすぐ終電の時間。これを逃したら、私はタクシーで帰るほかに
い。

だというのに。

私の足は自然と彼を追いかけていた。

追いかけて、しまっていた。

どうしようどうしようどうしよう。

気付けば駅近くの公園を過ぎて、住宅街に入っている。

視線の先には、まさと君。

やっていることはほとんど犯罪だ。

(ダメなのに……ダメなのに……っ！)

わかってる。これが悪い事だって。

絶対にやっちゃいけないことだってわかっているのに。

うるさく鳴り出した心臓と、熱を訴えてくる頭が止まってくれない。

まさと君が、公園から出て少し歩いたところのアパートで止まった。

おそらくは、あれが――。

「……ッ!!」

まさと君の方を覗き込もうとしたその瞬間。

まさと君が一瞬こちらを振り返った。

(見られた？見られた？)

もしまさと君がこちらに来て、警察を呼ばれたら私は社会的に終わる。

なんの弁解の余地もない。

ストーカーだ、これは。

バクン、バクン、と鳴り続ける心臓を抑えつけて、恐る恐る、本当に恐る恐るもう一度様子を見る。

すると、どうやらまさと君は家に入ったようだった。

「はーっ……っ……」

ずるずると、その場にしゃがみ込む。

前々から汚い女だとは自覚していたが、ここまでとは思わなかつ

た。

罪悪感を身体全体に感じながらも、足は止まらない。ゆっくりとアパートに近づいて行って……その部屋の前まで来てしまう。

(片里……片里って言うんだ、まさと君)

震える手で、スマホのメモ帳を開く。

涙が出てきた。

自分の信じられないほどのクズ人間さに涙が止まらなかった。けれど。

身体は勝手に、住所をメモしてしまう。

(なんにも使わない！物とか送りつけない！なんにも、なんにもしない！)

じゃあなんでメモしているのか。

わからない。

こんなの、一発でアウトだ。

その時……まさと君の部屋から物音が聞こえてきた。

その物音は……シャワーの音だとすぐにわかった。

「はは……ははははは……」

またずるずると、身体が崩れる。

力無く、私はその場に崩れ落ちた。

メモし終えたスマホをスーツのポケットに突っ込んで。

私は涙を流した。

こんな状況なのに。

まさと君が一枚壁を挟んだところでシャワーを浴びている。

それだけで私は……どうしようもなく興奮していた。
本当に、救いようのない変態。

それが分かって私は、ようやく自覚した。
いや、ともすれば、もうあの瞬間からわかっていたのかもしれない。

「ねえ、私壊れちゃったよ、まさど君」

もうこの想いは、止まらない。

バスケット部JCは変になる

私がお兄さんとバスケットをするようになって1ヶ月が過ぎた。

最近はお兄さんとするバスケットが楽しくて仕方ない。

今日は金曜日。この今やっている5時間目の授業を終えれば、お兄さんと会うことができる。

入部したバスケット部は本当に運よくたまたま金曜日がオフだったため、なんの迷いもなくお兄さんの所へ行けるのが、とつても嬉しい。教室の中は、お昼の後の国語の授業ということもあつてか、周りにはうたた寝している子もちらほら。

私はこの後が楽しみすぎて、全然眠くなかった。

うきうきしていたら、授業終了を知らせるチャイムが鳴った。

やった！公園に行ける！

「はいいじゃあ日直号令〜」

日直の子が号令をかけて、先生が出ていく。

あとは担任の先生が来るのを待って、早く帰ろう！

私が鞆に教科書やらなにやらを詰め込んで早くも帰り支度を整えていると、同じバスケット部のりかちゃんやんが声をかけてきた。

「由佳〜今日ゆうすけ君が自主練しよつて言つて何人かでコミュニケーションセンターの体育館行こうつて話になつてるんだけど、由佳も行こうよ！」

「あ〜……えつと……」

ゆうすけ君、というのはバスケット部の男子だ。

バスケットは上手くないけれど、よく女子とも話す子で、クラス部活間はず女子人気が高い。

私も別に嫌いではなかったけれど、わざわざ話したりとかするようにな仲でもないし……。

それよりもなによりも、今日はお兄さんとバスケットをするつて決める。

「ごめん！私今日用事あるんだ！」

「え〜！先週もそう言って帰っちゃったじゃん〜なにがあるの？」

「それは〜えつと〜えつと……」

ヤバイ、なんて言えればいいんだろ？

イケメンでバスケットが超絶上手いお兄さんと二人つきりでバスケットにいきます、なんて言ったら妄想乙って言われるか、紹介しろって言われるかの二択しかない気が……。

「あの……バスケットを……」

「え〜？じゃあ別に皆でやったってよくない？」

「えつと、約束してる人がいるの！だから、ごめん！」

パン、と両手を合わせて謝る。

付き合いが悪いのは自覚してる。けど、このお兄さんとバスケットをする時間だけは、絶対に譲れないんだ……！

「ふうん、わかった。でも誰かがゆうすけ君といい感じになっちゃっても、後からじゃ間に合わないからね〜！」

「あ、それは大丈夫」

良い人だとは思うけどタイプじゃないしね……。

無事私はクラスメイトの制止を振り切って、学校を後にする。

お兄さんと出会ってから……正確には、お兄さんのことを好きになっただけから、毎日が彩られて見える。

きつとお兄さんは今私のことを恋愛対象としてなんか見てないと思う。

けど、それでも良い。

今はたくさんアピールして、私が高校生くらいになった時に、意識してくれたら……嬉しいな。

「最近由佳ちよつと変じゃない？」

「わかる！なんか休み時間鼻歌歌ってるし、授業終わったらすぐ帰るし……」

「ねー私思ってたんだけど……由佳もしかして、他校の男と会ったりとかしてるんじゃない……？」

「えーうっそお!？」

「いやでもあり得るかも……最近授業中に本読みながらニヤニヤしてる時のニヤニヤ度が増してる気がするし」

「それ関係ある……？」

「ね、今度由佳に聞いただそうよ。早く帰ってなにしてるのか!」

まずいまずい！家の鏡で変じゃないかチェックしてたら、ちよつと時間かかり過ぎちゃった！

多分もう、いつも通りならお兄さんは公園にいるはずの時間。

私は大急ぎで公園まで走る。

結局こんなに走ったら髪乱れちゃうしチェックした意味ないよ〜。
すっかり春になって、日差しも少し強くなってきた。
走っていると、汗が額を伝うのがわかる。

汗臭いとか思われたら最悪だな……制汗剤は、一応持ってきたけど……！
走っていると、いつものボールを地面につく音が聞こえてきた。
間違いない。お兄さんはもうそこにいる！

私は木陰で一旦止まると、リュックから制汗スプレーを出して服にかける。

小さめのポーチに入れてきた手鏡を出して、髪の状態もチェック。
変じやない、よね。よし。

走ってきて乱れた息遣いを深呼吸で整えて、私はコートへと向かった。

お兄さんが、ドリブルをついている。

相変わらず、とても綺麗なハンドリング。

あ、今日の恰好もカッコ良いな……。

同年代の男子では決してできない、ゆったり目の着こなし。

運動することを考えてか、ズボンも緩めの七分丈。上は半袖のT
シャツで簡素に見えるけど、ベンチにかかっているベストを今までは着
ていたんだろうなあ。本当にカッコ良い……。

つていけないいけない。ずっと見てられるけど、今日は一緒にバス
ケしにきたんだから……！

声、かけなきや。

「お、お兄さんー！」

「んあ？」

シュートフォームに入っていたお兄さんが、声に反応してこちらを見る。

横顔もカッコ良かったけど、正面ももつとカッコ良い。

……じゃなかった、えっと、一緒にバスケしましょうって、言わなきゃ……。

もう何回も会っているのに、いざお兄さんと会うと、言いたいことがなかなか言えない……。

うー家で何回も練習したのに……。

すーっと息を吸い込む。

「きよ、今日こそは勝ちます！そして、この場所を……渡してもらいます!!」

あーもうなんでこーなるの?!

もつと素直になりたいのに!

「来たなくちびっ子」

「ちびっ子じゃありません!由佳は中学生になりました!!」

最近お兄さんはふざけて私のことをちびっ子、と呼ぶ。

砕けた感じで接してくれるし、仲良くなれた、とも思う。

けど、このちびっ子だけは訂正していかないと……!いつか意識してもらうためにも、絶対。

「きよ、今日こそはこの場所を返してもらいます……!」

返してもらおう気なんてさらさらない。

むしろ、ずっとこの時間が、続けば良いと思ってる。

「はっはっは、俺に一度でも勝ったことがあったかな少女よ」

あつ、少女にレベルアップした。ちよつと嬉しいかも。

「きよ、今日は秘策があります!」

これは嘘じゃない。

私は部活動の中で、練習してきたスキルがある。今日はそれを使って、お兄さんから必ず1本とる!

もちろん、お兄さんに勝ったらお兄さんはこの場所に来ないという約束をしているけれど、お兄さんに勝つ、というのは正直かなり厳しい。でもだからこそ、私は全力でお兄さんに挑むことができる。

へえくと楽しそうに笑うお兄さん。うう……いちいち行動が絵に

なりすぎるよ……！

「な、なにをボーつとしてるんですか！lonelyや、やります、よね？」

ちよ、ちよつと生意気だったかな？

途中で生意気だったかもと思つて口調が尻すぼみになってしまった。

「いいぞ〜けどちゃんと準備運動しろよ？ケガするぞ〜」

お兄さんが心配してくれている……。その事実が、私の心にじんわりと沁みわたる。

「あ、当たり前です。それくらい、もう終わってます」

「え？君今来たよね……？」

お兄さんに会いたくて走ってきたからアップはほぼ完了してるし、準備運動も、さつき自分の姿を確認した時に手早く済ませた。

だからもう、大丈夫！

私はリュックからボールを取り出すと、お兄さんにバウンドパス。デフエンスの姿勢をとつた。

お兄さんは私のボールのサイズに合わせてバスケットをしてくれる。とつても優しい人。

「急だなあ……んじゃいくぞ〜」

来る……！私の頭は、瞬時にバスケットの頭に切り替わつた。

お兄さんはオールラウンダー。ハンドリングも、シュートも。しまいはゴール下の技術もある。

全てを頭に入れなきやいけないのは、デフエンス側としては守るのが本当に難しい。

お兄さんが軽くクロスオーバーを入れて、横に鋭くカットイン。

速い……！でも、それくらい速いのは知ってるから……！

「行かせません……！」

素早く回り込んだ。

これくらいはできなきや、お兄さんの相手は務まらない。

「ここまでで大丈夫ですつと！」

「あつ！」

お兄さんの判断は速かった。

私が追いついた瞬間、まだ移動してきたせいで重心が安定していないのを見抜き、即座にミドルレンジのジャンパー。

シュートモーションまでが速すぎて、私はブロックに行くのが間に合わな……。

「……！」

お兄さんが飛んだ瞬間。

緩めのTシャツを着ていたお兄さん。

そのTシャツが、飛んだ拍子にめくれ上がる。

あらわになる、お兄さんの腹部。

普段から鍛えていることがわかる、しなやかな腹筋。

「よーしこれで先制なく……ん？由佳？」

バスケットの頭になっていたはずなのに、私はその一瞬で全て脳の容量をもつていかれてしまった。

え、えっちすぎるよ……こんなの……！

ドキドキと鳴り続ける心臓がやけにうるさくて。

「……どした？」

「はえ……」

気付けば目の前にお兄さん。

(……ッ！)

ま、まずい。お兄さんのおなか見えましたとかバレたら二度とバスケットしてもらえない！

い、今は落ち着かなきゃ。

け、けど今の光景が頭から離れない……。

「おい、顔赤いぞ？熱中症なんじゃないか？ベンチで休むか？」

「あ、あああ?!違います違います！大丈夫です！は、はやくボールをください！すぐ同点にしますから！」

あ、危なかった!!

本当に眼福……じゃなかった、目に毒なんだから……!

こんな素敵なお兄さんとバスケットをしているという事実を突きつけられて動揺しちゃう。

深呼吸。大きく息を吸って、吐く。

今は集中しなきゃ。今週練習してきた成果をお兄さんに見せるんだから……!!

バスケットボールがリングに弾かれる音で、目を覚ました。

あれ……確か私は……。

お兄さんとバスケットをして、それで……。

(……ッ!)

思い出した。私の足がもつれて、お兄さんの上に乗っちゃって……。

お兄さんに抱きしめられたような状態になって気絶しちゃったんだ……。

は、恥ずかしい!!

変な奴だって絶対思われたよね……!

慌てて起き上がると、自分の頭があつた場所に、タオルがたたんで

置かれていた。

きつとお兄さんが私を寝かせる時に、おいてくれたのだろう。

こんな状況なのに、嬉しさがこみあげてきた。

ふと、視線を戻す。

お兄さんが、シューティング練習をしていた。

「ふっ……！」

3pライン付近からの、シュート。

綺麗な縦回転で、ボールは放物線を描いていき……。スパツとゴールに吸い込まれた。

(カッコ良いなあ……)

もちろん、お兄さんという人を好きになったのもあるけれど、お兄さんがバスケットをしているところは特別かつこよかった。

ボールを取って戻ってきたお兄さんが、私に気付く。

「お、起きたか。体調は平気？由佳」

心臓が跳ねる。

い、今呼び捨てされた、よね？初めて呼び捨てされた……！嬉しい……！

「だ、大丈夫です。ごめんなさい、迷惑かけちゃって……」

「全然大丈夫よ！今日はもうこんな時間だし、俺も帰るから帰ろうか」

え……と思つて公園の時計を見れば、時計の針は4時半を示している。

かなり長いこと気絶してしまっていたらしい……。

もう最悪……もつとお兄さんとバスケットしたかったのに……。

その気持ちは、どうやら表情に出ってしまったらしい。

「ほら、また来週も来るからさ。取り返すんだろ？この場所」

私が落ち込んでいるのがバレたのか、お兄さんがポン、と肩を叩いてくれる。

励ましてくれるのも、来週約束してくれるのもめっちゃ嬉しいけど、距離が、距離が近くてドキドキするよ……。

「あ、そのタオル貸したげる。汗かいてると思うし、それで拭いて帰りな？俺はもう一枚持つてるから！」

「え……」

ベンチの上に丁寧にたたまれたタオルを見る。

これを、貸してくれる……？

「そいじゃね……あ、今回は失敗しちゃったけど、ロールは良いと思うよ！あの速さでロールされたら、デイフェンス1人だったらほとんど止められないんじゃないかな？だから、自信もってね！」

じゃ！と言つて、お兄さんは立ち去っていく。

……言つて欲しいこと、全部言つてくれて。

お兄さんは帰っていった。

そして、手に残された、お兄さんの、タオル。

高鳴りだした心臓をおさえつけて……まずは、手に取つてみた。

なんの変哲もない、スポーツタオル。

なのに。

「はーっ……はーっ……はーっ……」

息が、荒くなってしまふ。

ごめんなさいお兄さん、私は、いけない子みたいです……。

顔を、うずめてみた。

顔を拭くふりをして。

お兄さんの香りが、顔いっぱいに広がった。

幼馴染系JDは嫉妬する

人生の夏休み。

入ることは難しいけれど、卒業をすることが簡単なことから、日本の大学生活はそんな風に呼ばれたりする。

専門学校とか、理系の大学とかはその限りではないけれど、文系は確かにそんな感じの所が多い。

私に通っているこの大学は大別するならいわゆる夏休み寄りの方だと思う。

普通に生活してれば卒業できる……と思う。入るのが難しかっただけに、授業の課題とかで苦しむ学生も少なそう。

そしてそんな人生の夏休み、と言われるくらいだから、学生は皆この大学生活を楽しみたいと思っただけ。

「男が!!捕まらん!!」

……私の隣に座るみずほ……戸ノ崎みずほは、どうやら恋愛方面で振り切って楽しみたいタイプのよう。

「もう入学して2ヶ月だよ?!男の一人や二人、捕まってもいいはずでしょ?!」

「いや高望みしすぎでしょ……」

みずほはそのトレードマークのツイントールをぶんぶんと振り回して感情を露わにしている。

一人や二人って……一人も彼氏ができずに大学生活を終える女の子がいったい何人いると思ってるの……。

「いやそんなことない!せっかくの大学生活だよ?!彼氏とたくさんデートしてやることやってキャツキャウフフしなきや話にならないよー!」

「大声でそんな話しないでもらえますかねえ……」

「さしあたっては、必ず合コンを開催する。その時は是非恋海殿も参加してください」

「誰ですかあんだ」

私の友人は暑さでちよつとおかしくなってしまうたらしい。

まあ、元からこういうテンションの子ではあるんだけど。

やれやれと思っていると、急にぐるんと首とツインテールを振り回してみずほがこつちを見る。やたらとぱつちりした可愛い目だから、威圧感がすごい。

「ねえ、恋海。私に隠してることあるよね」

「え？な、ないと思うけど……」

「いやあるね！じゃあ……」

みずほはビシツと私の顔に指をさして。

「一緒に授業受けてるイケメンは誰!!!」

「ギク……」

思いつきり隠していることあつたわ。

「なーーんか最近おかしいと思ったんだよね。私と一緒に受けてたはずの授業一緒に受けられないとか言いだし。他の友達に聞いても、『最近急に恋海と一緒に授業受けてくれなくなった』って言つたし」

……いつかバレるとは思つた。

と、というか今までは各授業のほとんどで一緒に受けてた友達が

いる。
それがほぼ全て一緒に受けられないかも、と断ってしまったものだから、そりゃ速攻でバレるんだけどさ……。

「それで教室の隅っこ見てみたら??なんかイケメンいるし??隣でデレデレしてる恋海いるし??」

「で、デレデレはしてないでしょ!」

「いやデレデレしてたね。あれは女の顔だったわ」

そ、そんなあからさまだったかな……なんか恥ずかしくなってきた

た。

「まあ、いいけどさあ……紹介はしてくれるんだよね??？」

「あー……えつとー……」

こうなるかも、という予感があった。

基本的に男の子はやっぱり少なくて、私の……今は“まだ”私のじゃないけど、将人は普通にかっこ良いし中身も完璧だし完全に優良物件だ。いや優良物件どころの騒ぎじゃない。きっと将人の人となりを知れば、売約済みの札を持った女たちがこぞって集まるだろう。全部蹴散らすけど。

だからこそ本当にあの時会えたのは奇跡だった。奇跡というより……運命、みたいな。

だってそうだよ。あんな運命的な出会い、漫画でもそうそうない。

「あのー恋海さん??？」

「あ、ああごめんごめん」

トリップしてる場合じゃなかった。

まあ紹介してとか言われるよね……ここでどうするかなんだけど。正直、とうに私の心は決まっていた。

「ごめん。本当にそれだけは無理」

「えー！なんでよ！男の情報は共有しようって言ってたのに」

「ごめんー！」

「……っ」

みずほの言葉を遮るように、手を合わせる。

確かにみずほの言ったように、その約束は、した。

正直当時はこんなに一人の人に入れ込むとも思ってたし、誰かと付き合ってみたいな〜くらいの軽い気持ちだったのだ。今はもう、全てが違う。

「本気なんだ、私。ごめんだけど……あの人は……将人は誰にも譲れない」

初めて自覚した恋。

これだけは、誰にも譲れなかった。

頭を下げていると、みずほのため息が。

「はあ……しんゆうにそんな頭下げられたら、もうなんも言えな
いって」

「ごめん……ありがとう」

「でも！そしたらもう他の男は全部情報もらうからね！あのイケメン
独り占めする気なら、他の男紹介してよね！」

「あはは……善処します……」

やっぱり、みずほは良い子だ。

もし、もし将人以外に男子と話す機会があったら、必ずみずほを紹
介しよう。

みずほと別れて、私は2限の教室にきていた。

「あれ……将人まだいないのかな？」

だいたいいつも、授業の始まる15分前には来ていて合流するのだが、まだ連絡が無い。

「しよーがない。席取っておこっかな」

まだ人の少ない教室に入り、奥の一番後ろまで突き進む。

自分の座る席と、その隣に鞆を置いて席を確保。

ここに、将人が来る。

それだけで、自然と口角が上がってしまう。

「連絡しとこっつと」

席に座って、スマホを開く。

連絡先はすぐに交換した。授業の資料の写メとか送りたいって

言ったら一発だった。

ちよつとでも緊張した私がかみたい。

ハートとか使ったらキモがられるかな……いやでも将人だし。そんなこと絶対思わなさそう。

約1ヶ月ちよつと将人と学校生活を送って感じたのは、彼の性格が良すぎる。これは最初からわかっていた感もあるけど、本当に良すぎる。良すぎて心配になる。

なにが心配って、彼は性格が良いのも相まって、女子へのガードが緩い。ありえないほどに。

私もそのおかげで仲良くなれた節はあるけれど、もう仲良くなつて、思いつき狙っている身としては、かなり心配だ。

とんでもないビッチに騙されたらと思うと寒気が止まらない。

(私が、守ってあげなきゃ……)

だから、大学生活中は私が守る。
なるべく一緒にいる。

そしていつかは……大学の外でも、私が守りたい、なーんて。
ピロン、と通知が鳴ったのでスマホを取り出す。

将人から、デフォルメの猫がありがとう！と言っているスタンプが送られてきた。

こんなところまで、可愛いんだから……。

大丈夫、絶対私を守るからね。

授業が始まって10分ほどで、将人は教室にやってきた。

後ろのドアから入ってきて、きよろきよろしている。可愛い。

私は将人に気付いてもらえるように、手を振った。

すると将人もこちらに気付いたようで、こちらへと歩いてくる。

ふむ。今日の私服もカッコ良い。

将人はファッションセンスもめっちゃくちゃ良いのだ。

「マジサンキューな恋海助かったわ」

「にしし……将人のためならこれくらいちよろいもんだよ♪」

こうして名前で呼び合って、二人で授業を受ける。

私にとっては、毎日が夢のような時間だった。

けれど、この生活が始まってから1ヶ月。

そろそろ……そろそろ次の段階に行ってもいいんじゃないだろう

か。私はそう思っていた。

(ん……そしたら今のこの状況……使えるのでは?)

汗を拭きながら、文房具を出している将人の横顔を眺める。

私は、将人が好き。

だけどそれを今すぐに伝えても、勝率は薄い。

私は絶対に将人を彼氏にしたいから、失敗は許されない。

これなら断られないという確信が持てなければ、告白なんてできない。

何事にも段階は必要で、今必要なのは、もっと親密になること。

親密になるために手っ取り早いのは……デートだ。

私は、勝負に出る。

ようやく落ち着いて授業を聞く体勢になった将人のTシャツの袖を、引っ張ってみた。

「……ね、せっかく席とつてたんだから、今日こそ一緒にご飯行つてよ」

……ちよつとあざとすぎたかな。

けど、これくらいいしないとどうせ意識なんてしてもらえない。

「あくま〜じでごめん、今日はバイトなんだよね」

ぐっ……でも想定はしてた。何故なら先週も金曜日は断られたから。

それならそれで、まだ手はある。

「え〜もしかして将人金曜日は確定でバイト系?」

「そーね、ほとんどそうかなあ」

「そっか、じゃあ来週の月曜日とか!」

「おーそれならいいよ全然」

「やった」

きた!!!デートの約束ゲット!!!

感情が溢れて、思わずガッツポーズしてしまった。けど仕方ないよね。嬉しいんだもん!

さっそく私の中でデートプランの構築が始まる。

月曜は5限までだから、大学が終わるのは恐らく17時とかになるはず。

夕飯はもちろん予約するとして、それまでどこにいこうか?

ちよつと駅前でショッピング?

映画……を見るには少し時間がないか。

カラオケとか行くのも悪くない。

最寄り駅の施設を思い浮かべながら、一番将人に楽しんでもらえる方法を探る。

授業の内容なんて、1ミリも頭に入っていなかった。

「……なあ」

「……?」

そんなタイミングで、小声で将人が話しかけてきた。

あ、ヤバ。全然授業聞いてないけど授業関係のこと聞かれたらどうしよう。

と、思ったら。

「本当によかったのか？俺と授業取るより、友達と授業とりたかったろ……？」

「……んー？全然そんなことないよ。友達とは、サークルとかで会えるしね」

……どういう、ことだろう。

そんなことない。私は将人と授業を受けたい。将人と過ごしたい。もやもやとした気持ちが、胸に巣くう。

そんな私に、追い打ちがかかる。

「もしあれだったら、たまには友達とうけてくれてもいいからな。俺は一人でもいいからさ」

……なんで、そんなこと言うの？

一瞬で、黒い感情が、胸に渦巻いた。

「なんで？」

自分でも驚くほど冷たい声が出た。

「え、いや、恋海がほら、他の子と受けたいかな〜って」

「将人は私と授業受けるの、嫌？もしかして、他の女の子と授業受けたい？」

こんなこと言いたいわけじゃないのに。

黒い感情の波が、押し寄せて止まらない。

「いやいやいや！そんなことない。マジでありがたいし、恋海みたいな美少女と授業受けれるならそんなに嬉しいことは無いようん！ってか恋海以外に友達いないし！」

……び、美少女？

今私、美少女って言われた？

「び、美少女？そう？かな？将人からみて、可愛い？」

「お、おう。そら可愛いだろ。自信もっていいと思うよ？」

え、めっちゃくちゃ嬉しい。

急にぽかぽかと心が温かくなった。

「そっかーえへへ……可愛いなあ……」

好きな人から言われる可愛いが、こんなに嬉しいだなんて知らなかった。

たくさん自分磨きをしてきて良かったと心から思う。

そして朝、みずほから言われたことを思い出す。

——確かに私、デレデレしてるかもしれない。

3限が終わって、将人は帰っていった。

大学の出口までそれを見送って、私は4限へと向かう。

その道中。

さっきの2限での出来事を思い出していた。

(あんなこと、言いたくなかったのに……)

自分でもわからなかった。

将人が、他の女の子と会いたいと思っていると考ただけで、心中の黒い感情が暴れ出した。

醜い、嫉妬の感情。

将人も、慌てていたように思う。

そもそも将人は他の女の子と授業を受けたいなんて一言も言っていないのに。

(将人はあんなに良い人なのに……私は……)

思わず自己嫌悪してしまう。

けど、今でもやっぱり、もし将人が他の女の子と遊びたいとか言いだしたら、同じことを言ってしまう気がする。

私でいいじゃんって思ってしまう。

初めて人を心から好きになった。

毎日がとても楽しい。

——けれど、初めてのこの特大の感情を、制御できていない気がする。

気をつけなきゃ……嫌われたら、多分私二度と立ち直れない。

ああそっか。

私は——嫉妬深い女だったんだ。

文学少女JKはお淑やか

この世界に来てから、2ヶ月が経った。
いきなり来た時はどうなるかと思っただけど、意外とどうにかなるもんだな。

まあ、そもそも貞操観念がちよつとおかしいってだけで、他はなんにも変わらないわけだし、当然っちゃ当然か。

これが異世界フツ飛ばされて、あなたは勇者ですとか言われたらキツかったけど、一般人の俺でなんにも問題ないくらいには優しい世界である。

「ふわあく……ねつむ……」

今日は土曜日で授業はない。

土曜にとれる講義もあるにはあったらしいが、恋海も入れてないって言ってたし、俺も休日は休みたい派の人間だ。

壁にかけてある時計を見る。時刻は10時半。

昨日夜中まで働いたことを考えれば、よく起きた方だろう。

「今日は確か……15時からか……うーん、とりあえず昼飯でも作るかな……」

今日は15時から予定がある。

寝ぼけまなこをこすって、のそのそと俺はベッドから出た。

その際に枕元のスマートフォンを拾い上げると、何やら通知が。

《恋海》『なにそれめっちゃ面白いじゃんw』

《恋海》『んで結局将人はなんのバイトしてんのさ』

「……なんの話してたっけ……」

恋海は連絡先を交換してから、こうしてメッセージを日に2、3回送ってくる。

まあ、それくらいは前の世界でもよくあったコミュニケーションだし、俺も楽しいしで応じているのだが。

「流石にバーの方は言えないよなあ……」

恋海の誘いを断ってしまった手前、金曜日の夜にバイトをしていることはバレている。

しかしここでバカ正直に『ボーイズバーで働いてるんすわww』なんて言った日には、『え……キモ……』とか『その地味な感じで……?』とか言われるのがオチだ。俺もそこまでバカじゃない。

しかし、俺には次なる手を思い付いた。

「そうだな……こっちなら大丈夫やろ」

素早くスマホ画面をフリックする。

《片里将人》『いやーそれがさ、実は家庭教師やってんだよね』

ヨシ。これなら問題ないな。

そう、俺は家庭教師もやっているのだ。

土曜日の15時から。

こつちの方を言っておけば、なにも問題はないだろう。普通のバイトだ。

スマホを閉じて、キッチンへと向かう。

確かまだ卵が2個と、ベーコンがあつたはず……テキトーにチャーハンでも作るかあ。

チャーハンは男の一人暮らしの最強料理やからな。

ピロン。

ピロン。

……?

炊飯器の残りのご飯を確認していたら、スマホが鳴っている。

おかしいな、恋海はメッセージ送ってからだいたい3、4時間は返事が返ってこないはずだし、他に連絡くれるような友達なんていたっけ?

スマホを取りに行くと、そこには再び《恋海》の文字。

……返信早過ぎね？

《恋海》『か、家庭教師？』

《恋海》『まさかとは思うけど、女の子に教えてたり、とか？』

……？なにか問題があるんだろうか。

確かに恋海の懸念通り、相手は女の子だけけれど。

《将人》『そうだよ？高校生』

簡潔に返して、また作業に戻る。

そんなに驚くようなことだろうか？大学生で家庭教師とか塾講師やる奴くらいけっこういそうなもんだけだな……。

炊飯器からしゃもじをつかって米をよそいだした、その時。

ブーツ、ブーツ、ブーツ。

机の上のマナーモード設定のスマホが、振動している。

あれはメッセージの通知ではない。

電話だ。

ここからでも分かる。画面には、《恋海》の文字。

……え？怖いマヨ。

14時過ぎ。

俺は家を出て、家庭教師先へと向かっていった。

「いやはやマージで恋海のスイッチはどこで起動するかわからんなあ……」

あの後、電話に出た俺は、恋海の声の抑揚のなさに震えていた。

基本恋海は小悪魔可愛い感じで一緒に講義とか受けてるとただただ眼福なんだけど、急にスイッチ入ると怖くなるんよね。

気を付けようと思おうにもどこがスイッチなのかわからんから気を付けようがない。

結局、今日の電話は、俺が事情を説明する形でなんとか機嫌を戻してくれた。

ちやんと月曜日出かける時説明するからくっつけて言ったらしぶしぶ納得してくれたらしい。良かった。

自転車を駐輪場に止めて、駅から電車に乗る。

家庭教師先は、電車で5駅ほどだ。

家庭教師を始めた発端は、1ヶ月ほど前まで遡る。

まだ俺の収入源がバーだけで、そのバーもまだ当時は星良さんが固定客って決まったわけじゃなかったし、(なんか今はすごい星良さんが払ってくれてるみたいでちよつとだけ贅沢できるようになったが)少し稼ぎが足りないかな〜と思っていった。

最初バーの仕事を覚えるために働いていた時は金曜日以外もバリバリシフト入っていたから、それでもいいかなと思ったのだけど、藍香さんに、『こういう仕事をやりすぎるのは良くない』と言われたこともあつて俺は金曜日だけ固定になった。

生活費は藍香さんが相当負担してくれているのだが、それも申し訳ないし藍香さんに相談したところ、藍香さんがすげえ楽しそうな顔で「あ、じゃあ将人頭良いんだし、ちよつと頼まれて欲しいんだけど」と

言われて振られたのが、この家庭教師だったのだ。

なにやら藍香さんの仕事の一つで？で知り合った女性の娘さんが俺の大学を目指しているらしく。

その勉強の手助けをして欲しいとのことだった。

そんなこんなで、1ヶ月ほど前からとある女子高生の家庭教師をしている。

ちなみにこの前「家庭教師代口座入れといたから〜」と藍香さんに言われて確認したら、信じられない額が入っていた。なんで？

学生の家庭教師代でこの金額はおかしくない？と思ったのだが、藍香さんはにやにやと笑うだけ。

まあ……さしずめ藍香さんが上乘せしてくれて俺が生活しやすいようにしてくれてるのかもしれないが……。

やっぱり藍香さんには頭が上がらない。

「ヤッ」

電車を降りて、駅から歩いてしばらく。

家庭教師先の家へついた。

立派な門がついていて、庭を少し歩いた先に、玄関。

見るからに、良いところの家って感じだ。

10分前だけど、まあ良いだろう。

インターホンを押す。

「すみません、片里です。汐里さんの家庭教師で来ました〜」

『は〜い！』

元気そうな声が聞こえてきて、ガチャン、と門のロックが解除された音。

前も思っただけど、設備えぐう〜。

玄関を開けると、そこには家庭教師をしている篠宮汐里ちゃんのお母さんが。

「将人くんこんにちは！ありがとうございます〜！汐里ならもう2階の部屋にいますから、よろしくね！」

「はい。精一杯務めさせていただきますね」

靴を脱いで、家にながらせてもらう。
靴を揃えるのも忘れないようにしないとな。

階段を上がって、汐里ちゃんの部屋へ。

トントン、と2回ほどノックした。

「汐里ちゃん？片里です。入っていいかな？」

「は、はい。大丈夫です」

透き通ったソプラノボイス。汐里ちゃんは本当に透き通った綺麗な声をしている。

ドアを開ければ、そこには長い艶やかな黒髪を、水色のリボンでハーファップにまとめたスレンダーな少女が椅子に腰かけていた。

うーん本当にお淑やかかって言葉が似合う素敵な子だ。

「こんにちは、汐里ちゃん」

「はい、こんにちは」

……そういえば、今日は制服姿じゃないな。

今までは制服姿で授業をしたのだが、なにか理由があるのだろうか。

「あれ、今日は制服じゃないんだね」

「そ、そうなんですよね。考えてみれば、せつかくのお休みに制服というのも変な話だなあって思いました……」

椅子を少しだけ回転させて、こちら側を向いてくれる汐里ちゃん。

うんうん。黒の半袖の上からベージュのダブリエ……いわゆるワンピースのようにそのままスカートまでつながっているタイプのオーバーオールが、彼女のお淑やかな内面とマッチしてとても似合っている。

「へえ〜いいね、とっても似合ってるよ。制服姿しか見たこと無かったから、新鮮かも」

「……ふふふ……ありがとうございます。将人さんの私服も、カッコ良いです」

「お世辞言っても宿題は減らんぞ〜？」

俺も鞆を置いて、教材を出す。

今では想像もつかないが、汐里ちゃんと初めて会った時は、眼鏡で、三つ編みだった。

それがどういった心境の変化かはわからないが、次来た時にはもうこの髪型で、コンタクトに変えていた。

まあ、最初来た時どうやらお母さんが家庭教師が男であるというのを伏せていたっぽいので、焦ったのだろう。

人の悪いお母さんだ……。

「さて……始めようか、と思ったけど、まだ5分前だね」

「そう、ですね。どういたしましょうか」

「せっかくだし、ちよつと雑談してから勉強しよつか」

あんまりガチガチにやるのは趣味じゃない。

もう4回目だけど緊張はやっぱりしているようだし、どうせなら緊張をほぐしてほしいしね。

この世界に来てから会った女の子の中ではかなり落ち着いているタイプだと思う。

由佳とか、しよつちゅう緊張しすぎて噛んでるし。そんな緊張せんでもええのにねえ……。

ふと汐里ちゃんの机の上を見ると、単行本が置いてあった。

そう、彼女は文学少女なのだ。

「あ、本今日は何読んでたの？」

「あ、えつと……田坂さんの、これを……」

「あくそれ面白いよね！『二階から、夏が降ってきた』……どんな生き方してたらそんな冒頭思い浮かぶだろうねえ……」

正直趣味読書と言えるほど本は読んでいないけど、有名どころならちよつとだけ読んでいる。

前の世界とそのへんも共通で良かった。

共通の本を読んでいるというのは、会話を盛り上げるために役だったりするしね。

どうやらかなり本を読んでいるらしい汐里ちゃんに、俺程度のにわかでは釣り合わなさそうだけど。

「あ、あははそうですよね本当に……」

あれ、意外と食いつきよくない……かな？ やっぱニワカだとバレるのか……。難しい。

1時間ほどが経って。

「ここはね、もう一個、読み方変わるんだよね。ここの記号がここにとぶから、正しくは」

俺の大学は文系ということもあって、汐里ちゃんに教えてる科目は国語、社会、英語の3科目。

だいたいそれを1時間ずつ計3時間やって、俺の家庭教師業務は終了。休憩も挟むから終わるのはだいたい19時前とか。

今は英語を終えて、国語の勉強にとりかかったところ。

「えっと……うーん？」

どうやらてこずっている。

そっか、ここわかりづらいよなあ……あ、そうだ。

良い事を思い付いた俺は、立ち上がったって汐里ちゃんの後ろに回り込む。

そして、後ろから教材をのぞきこんだ。

「良い？汐里ちゃん、今から俺が指でなぞっていくわ。一緒に読む順番を……」

よし、これならわかりやすいだろ。

と思っていたのだが、汐里ちゃんの手が止まる。
ん？

「……おっふ」

え？

なんかすごい声聞こえたけど。

汐里ちゃんか？今の。

ガタン、と席を立つ汐里ちゃん。

「すみません、ちよつとお花を摘みに……」

「あ、ああ。OKごめんごめん」

表情が見えないまま、汐里ちゃんはトイレへ。やべ、怒らせちゃったかな。

……あ、ちよつと近すぎたか。

そんなに仲良くもない男にこんな近づかれたら嫌だよな。貞操観念が逆転してるから油断してたけど、これは良くなかったか。

申し訳ない。

しばらくして帰ってきた汐里ちゃん。

心無し顔が赤いけど大丈夫だろうか。

「失礼しました。続きをしましょう」

「う、うんそうだね」

よかった。そこまで怒ってはないらしい。

機嫌を損ねたらどうしようかと思った。

もう同じ失態はしまいと、俺は隣に座って勉強を再開しようとする。

「え？」

きよとんとした表情で、俺のことを見る汐里ちゃん。

え？

「あ、いや。どうぞ、思い切り背中からきてください。思いっきり覆いかぶさるようお願いしますね」

え？

文学少女JKは夢を見る

地味。芋っぽい。

私が周りから言われる印象は、大方そんな感じ。

別にそれに関して悔しいとか、嫌だなとか、大して思わなかった。なんならそれで良いかも、とすら思っていた。

高校2年生になった。

高校に入る前は、もしかしたら私も彼氏とかできるかも……？と思っていたけれど、幻想は簡単に打ち砕かれた。

ウチの高校は共学で、それなりに男子もいる。

クラス全体で6人しかいない彼らは、大体3人ずつくらいに別れて2グループ。

そして、そのそれぞれと仲良く話せるのも、だいたい2グループ。いわゆる上位カーストの女子にしか、そんな機会は回ってこない。

と、いうより、その上位カースト女子が男子を独占しているみたいな感じだ。そんなもんだ。共学の実態なんて。

私みたいな芋におこぼれは回ってこない。

(ま……正直別にいらなかなって感じだけどね)

周りを見て思う。

クラスの男子なんて、ちよつとカッコ良ければ高圧的か偉そうにしている、逆に他は清潔感がなかったり、過剰に太ったりしていて、異性として魅力を感じないやつばかり。

それでもある程度は女子が寄ってくるからあいづらはニヤニヤしている。

(これなら別にいなくてもいいや)

強がりでもなんでもなく。

自然とそう思った。

それに。

(私には……これがあからね……)

こつそりと、机の中から取り出すのは一冊の単行本。ブックカバーをかけているから、周りからはなんの本かはわからない。

これは、いわゆる女性向けの本。

私はファンタジーが昔から好きだった。

物語に出てくる登場人物たちは、皆心が綺麗で、澄んでいる。

ヒーローは皆カッコ良く……ヒロインにだって好かれる理由がある。

お話の中の彼女らは、本当に美しい。

はぁ、と物語の登場人物たちに想いを馳せてから、再び教室で話す集団を見る。

(はぁ……やっぱ現実はずれですわあ……)

これさえあれば良い。

盛り上がる教室内をよそに、私は教室の端っこで一人うつとりと物語に耽るのだった。

「ただいま」

部活にも幽霊部員状態の私は、学校が終われば大抵はすぐ家に帰ってくる。

「あらお帰り汐里」

お母さんにただいまだけ言つて、私は部屋へ。

今日は本を読む他に、ゲームもやりたいんだよね。いわゆるノベルゲー。カッコ良いキャラクターたちに囲まれている間は、私は幸せなんだ。

「ちよつと汐里。待ちなさい」

「……なに？」

お母さんに呼び止められる。

早くゲームやりたいんだけど……。

「あんた……友達とか、彼氏とかできた？」

「なに？急に。できてないけど」

「あんた学生の内に恋愛とかしないと。少なくとも男の子と交流く
らいは持とうとしなさいよ」

まあこの話だ。

今は男が少なくなつていつてるからとか。

聞き飽きたんだよね。正直。

「はいはい。善処します」

「まったく……あ、そうだ。あんた大学国公立のあの大学行き
たいつて言つてたわよね」

「……？そうだけど？」

大学受験。

まだ2年生だしなんとなくしか決めていないが、狙っている大学は
ある。

その大学は施設も良くて……図書館も大きい。

偏差値も国公立ということもあって高いが、頑張れば無理な所では
ない。

「私の知り合いのつてで、その大学行つてるっていう人がいたか
らさ、家庭教師に呼ぼうかと思うの！」

「え……いらないよ……」

家庭教師？そんなのごめんだ。

勉強は別に一人でもできるし……自分で言ってる悲しいけれど、友達もそんないなければ部活もやっていないから時間はある。

人とコミュニケーションをとるのも億劫だし……。

「いいからいいから！とにかく一回会ってみなさいよ！土曜日呼ぶから、家にいるのよ〜！」

「ええ〜嫌なんだけど……普通に断るよ？私」

「まあ、もし気に入らなかつたら断っていいわよ」

「え、なにニヤニヤしてんの気持ち悪いんだけど……」

まあ、断っていいなら。

特に私はなにも考えずに、部屋へと引きこもった。

土曜日。

私はいつも通り部屋で本を読んでいた。

ちよつと過激な表現もある恋愛モノ。く〜っ！このヒーローたまんないなあ……！

カッコ良くて、頭も良くて、強くて、おまけに超優しい。神。

ま、フィクションだから当たり前なんだけど。

こんな男の人がいればなあ……。

私が男と言われて出てくるのは、クラスの男子か、きやぴきやぴしてるテレビに出てくる芸能人くらいのものだ。

現実なんぞもう十分知っている。

「汐里！家庭教師の人連れてきたから！入るわよ？」

「……はい」

まったく……家庭教師の人には申し訳ないけれど、早々に帰つてもらおう。

私は本棚に読んでいた単行本を押し込んだ。

今日は午前中学校があつたから、制服のまま。まあいいでしょ。

ゲームとか着替えとかも若干放置気味だが、それくらいは許して欲しい。

そんな人に見せられないようなひどい状態ではないし。

がちやり、とドアが開かれる。

ため息をついてからドアの方に目をやって……。

——私は、目を見開いた。

「あ、どうもこんにちは、汐里さん」

思考が、フリーズした。

なんかイケメンが、立っている。

「え？」

思わず持っていたスマートフォンを落とした。

え？は？

なんで男の人がいんの？

え？

「この人が、家庭教師をお願いした片里将人君。カツコ良いよね〜
ほら、挨拶しなさい汐里」

……。

私の脳が理解するまでに、数秒を要した。

そして、今やるべきことを、理解する。

「ちよ」

「ちよ？」

「ちよっただけお待ちいただけますでしょうかああああああ
!!!!!!」

お母さんを無理やり奥に押し込んで、その後ろにいた家庭教師の人
にも部屋から出て行ってもらおう。

まてまてまてまて!!!!

聞いてない聞いてない聞いてない聞いてないいいいい!!!!
!!!!!!
家庭教師の人って、男の人だったの?!?!
?!?!

「なにすんのお汐里〜」

「お母さん……!後で許さないから本当に……ッ!」
ニヤニヤしているのがわかる。

あえて黙ってたんだあの性悪め……!ボーイズバー入り浸ってる
のお父さんに言いつけてやる……!!

まず私は本棚を隠すために白地のバスタオルで覆い隠した。
見られたらヤバイ類の本が多すぎる!!!

ゲームも隠す。
着替えも、洗濯物も。

とてつもないスピードで片づけを終えて、最後に私は鏡の前に立つた。

気付けば息も上がっていて、心臓がうるさいくらいに鳴っている。
なによりもさっきの人。

(かつこよすぎでは???)

柔らかな笑みを浮かべてくれた彼を思い出す。

身長はきつと175くらい。緩いパーマの黒髪がとっても素敵
だった。

まるで。

(物語のヒーローみたいなの……!)

顔が熱い。

こんなの、聞いてない。

即座に自分の状態だけ整えて、大きく深呼吸。

「お待ちせ、しました……」

しばらくして、ドアを開ける。

そこにはやっぱり、男の人。ドキリとした。

「あ、ごめんね?なんかうまく連絡いつてなかったみたいで……」

「いえ、いえいえいえ!悪いのはうちの母です……」

部屋へと通す。

どうしようどうしよう。

イケメンが私の部屋にいる。

「ど、どうぞ」

とりあえず私がいつも使っている勉強机とセットになっている椅子を、差し出した。

私はベッドに腰掛ける。

「ごめんね、ありがとう」

「いえ……」

冷静になれ、私。

確かにかっこ良いが、それだけで騙されてはいけない。

あのお母さんが連れてきた人なんだ。

性格が高圧的とか、腹黒とか十分にありえる。

私は騙されないよ。現実とフィクションの差を分かっている女なんだ私は。

「えっと、俺もあんまり状況を飲み込めてないんだけど……とにかく今日ちよっとお話してみても、それで家庭教師として雇ってもらえるかどうかを決める……って感じでいいんだよね」

「あ、多分、そうだと思います」

我ながら、蚊の鳴くような声で話していると思う。

普段の声なんか出せるわけがない。

「正直、急な話だったし、全然断ってくれていいからね。それで、多分俺に直接っていうのは難しいと思うから、俺が帰った後、お母さんにそつと言ってくれればいいよ。その方が、汐里さんも楽だよな？」

「……」

……は……???

優しすぎるんだが???

これがきつとクラスのイケイケ系の男子だったら『ありがたく思えよ』くらい言われててなんらおかしくない状況なんだが???

いや、まだよ。汐里。まだ騙されちゃだめ。

今日だけ優しくして、雇ってもらおうって魂胆かもしれないわ。

え、でもさつき断つてくれて良いって言った……?ダメだ、よくわからない。

「汐里さん、どうして俺の大学行きたいの?」

「え、えっと、施設が綺麗だな……っていうのとか、図書館が大きい

から、とか……」

「へえ〜汐里さん、本好きなんだね！」

や、やめて!!そのキラキラした笑顔を向けないで!!

なに?この人イケメン度レベル100くらいあるんだけど?!

少しの動作だけなのに、ドキドキしてしまう。

「まあ、少しだけ……」

「へえ〜、確かにウチの図書館大きいからなあ……どんな本読むの?」

「……」

ヤバイ。どうしよう。

何にも考えてなかった。ここでファンタジーで、恋愛ものがく!とか言ったら、180%引かれる。

無難な……無難な回答は……。

「純文学、とか」

「へえ〜!すごいな。俺どうしても固い文章苦手でさ……有名どころは読んだりもするんだけど、なかなか純文学は手が出ないんだよね!」

嘘ですごめんなさい全然読まないです。

まずいまずい。このままじゃボロが見えないじゃない!どこか確実に、ボロがあるはず……。

そうだ!こんな芋女に、なんか失礼なことされたら、流石のこの人も本性が見えるはず……!

ちよつと申し訳ないけど、これは今後のため!今後のためだから……!

私は意を決して、わざと嫌なことを言うことにした。

「……片里さんこそ、家庭教師断つていいですよ」

「……?どうして?」

「こんな芋っぽい女子に勉強教えるの嫌ですよね?どうせならもつと可愛い子が良かったとか、思いますよね。片里さんなんか、引く手

数多なんじゃないですか」

……我ながら、めちやくちや嫌な女だ。

けど!!これも今後のため……!

罪悪感を胸に抱えながら、様子をうかがう。

すると。

片里さんは笑みを崩さないまま、首を横に振った。

「んーん。関係ないよ。そんなこと。汐里さんは俺の大学に來たいと頑張ってる。そこに優劣なんか1ミリだってない。どんな子であろうと、俺はやると決めてくれたなら、全力で手助けするよ。それに

――」

「汐里さん、とっても素敵じゃん。さつき初めて会った時、綺麗な子だなんて思ったよ」

……えーっと。

大好きな物語のヒーローが、どうやら次元を飛び越えて私に会いに来てくれたみたいです。

簡潔に言おう。とても好きです。

文学少女JKは清楚を目指す

家庭教師を雇ってから、私の生活は変わった。

「ただいま!!」

土曜授業を終えて、一目散に家のドアを開ける。

洗面台で手早く手だけ洗って、バタバタと階段を上がり、自分の部屋へ。

「ちよつと汐里く！手ちゃんと洗ってるのそれ！」

「洗ったー！」

現在時刻は13時半。

彼——将人さんが来るまで残りおよそ1時間半。

（今日は……私服って決めてたんだ♪）

将人さんが来るまで、私はろくに私服も持ってなかった。

そりやそう。制服で事足りてたし、休日だって一緒にでかけるような友達もいなかったし。

私服にお金を使う必要すらないと思ってた。

私は、運命の日……初めて将人さんに会った日の夜のことを思い出していた。

お母さんに散々罵詈雑言を浴びせて、お父さんに言いつけるからとまで言い放った後。

私は自分の部屋で冷静に状況を整理することにした。

(た、大変なことになった……まさかあんなヒーローみたいな人が毎週私の部屋に来てくれるなんて……!)

おとぎ話からそのまま出てきたのかと思った。

風体は純朴そうなイケメンって感じだったが、後半私にはカッコ良い騎士服を着た王子様にしか見えなかった。

思わず降ってわいた自分の幸運に感謝する。

あんな素敵な人と呼んだという点だけは、お母さんを評価してやらんでもない。

(それに……綺麗って、言われたよね?)

どうせ性格は悪いんだろうと思って嫌味なことを言ってみたがしかし、返ってきたのはとんでもない言葉で。

褒められたということはつまり。

もしかして、お近づきになれるんだろうか。

だって、これから毎週会うんだよ?!勉強を教えてもらおうとはいえ……間違いが、その、あっちゃったりとか……。

気分が高揚してしまう。どうしようもなく顔が熱くなる。

落ち着くために、ふと、自分の本棚に入った、お気に入りの小説の表紙を見た。

(ほんと……あの人がこの小説のヒーローみたいな……)

……と、そこまで思って、そこで動きが止まる。

表紙に写ったヒーローの隣には、可憐なヒロインが描かれていた。ついで、クローゼットの前にある鏡を見る。

自分の、姿を見た。

そこで気付く、衝撃の事実。

(……こんなんじや、全然相応しくくない……?)

当たり前だった。浮かれてはいたものの、私は芋。いや、芋なんて言葉を使ったら芋に失礼まである。さつまいも美味しいし。

私は美味しくすらないもの。

火照っていた身体が、急激に冷えていくのがわかった。

こんなクソださ眼鏡女子高生が、あんなおとぎ話のヒーローとくつつく話が仮にあつたとして、私はそれを読んでどう思うだろうか？

『wwwwww妄想クソ茶番乙wwwwwwお前みたいなクソ陰キャ処女に超絶イケメンが振り向くわけねーだろwwwwww現実みろwwww』

……まあ、こんなところだろう。

将人さんがもしかしたら超絶ブス専でこのままの私でも好きになつてくれる可能性がミジンコ以下の確率であるかもしれないが、それに随るほど私はまだ女として死んでない。

じゃあ、どうするか。

もう一度、小説の表紙に目を向けた。

そこに立つ、可憐なヒロインを見た。

(なるしか、ない……!)

私が、あのヒロインのように。

(でも、どう足掻いたところで、私に天真爛漫なヒロインは無理だ……じゃあ目指すべきは……清楚なお淑やかタイプ!)

鏡の前に立つ。

三つ編みを、ほどいた。

眼鏡を外した。

(こんなんじや、駄目……)

勢いよく、扉を開ける。

何だつて隠し通して見せる。ハリボテでも良い。あの人に好きになつてもらえる自分になるためなら。

「お母さんメイク教えて!!」

私のお淑やか清楚キャラ大作戦はここから始まったのだ!

私服を選ぶためにクローゼットを開く。

「先週選んでもらったやつでいいか……」

驚くべきことに、三つ編みをやめて、眼鏡をコンタクトにして学校に行くようになったら、クラスに友達ができた。

そんな簡単なもん?と聞かれたら違うかもしれないが、今までは私から交流を絶つてたような気もする。気持ちの問題かもしれない。

イメチェンしたの?みたいなのが良い話題になつてくれた。

それで話してみれば、意外と話せて。

だから、リア充の先駆者たちに服を選んでもらうことにした。

まあ人類は日進月歩。そうして進んできたわけだし?先人の力を借りるのは当然だよな。

「よし……これで行く」

私は清楚路線で勝負する。私服も大人っぽいものの方が良いだろう。

気に入っているオーバーオールのタイプのスカートを引っ張り出した。

髪型はハーフアップで、雑貨屋で買った水色のリボンでまとめる。

うん、悪くない。

メイクは濃くはしない。ナチュラルを徹底する。

目をキレイに見せるためのアイラインと肌をきれいに見せるファンデーション。どちらも控えめな主張すぎないタイプ。

鏡の前に立つ。

うん。及第点だ。

これならまあ、ヒーローの相手になったとしても

『まっくらこれくらいならちよつと身分違いの恋くらいしちやっても許したるか』

くらいにはなつたはずだ。

「汐里ちゃん？片里です。入っていいかな？」

へ……？

……やっぱあばばばばばばば!!!

まだ時間余裕あると思ってバチコリエロ小説読んでたんだが?!
まずいんだが?!

もう15時5分前やん！私のバカ！

音速で私は用意していたブックカバーを本に被せる。

なんか学校の図書館で借りたランキング上位の純文学の本の表紙。
これで乗り切る！

「は、はい大丈夫です」

扉が開いて入ってきた将人さんが、ニコリと笑う。

ああ……眩しい……。

「こんにちは、汐里ちゃん」

おっふ。

危ない。負けるな私。清楚になるんだろ!!

「はい、こんにちは」

よ、よーしいいぞ。いい調子だ。

今の挨拶はなかなか優雅だったんじゃない？知らんけど。

胸をなでおろしていると、将人さんが何かに気付いたように目を丸くした。

「あれ、今日は制服じゃないんだね」

あ~~~~うれっ~~~~こんな些細なことを言及してくれる男
現実におったんか~~~~。

「そ、そうなんですよね。考えてみれば、せつかくのお休みに制服と
いうのも変な話だなあって思いました」

ちよ、ちよつとアピールしとくか。

椅子を回転させて、今日の恰好を見せる。

ありがとう友よ。見よこの輝きを。この鎧は友からの餞別である。
「へえ〜いいね、とつても似合ってるよ。制服姿しか見たこと無かったから、新鮮かも」

おおうふww

じゃない！危ない危ない……え〜マジで嬉しすぎるんだが……無理……。よかった頑張つて……。

私もやられてばかりじゃない。今日のために清楚という名の刃を研いできた私の攻撃を食らえっ！

「ふふふ、ありがとうございます。将人さんの私服も、カッコ良いです」

「お世辞言つても宿題は減らんぞ〜？」

え？なにその繰り返し。

お前カッコ良いだらいい加減にしろ！！

「さて……始めようか、と思つたけど、まだ5分前だね」

「そう、ですね。どういたしましょうか」

「せっかくだし、ちよつと雑談してから勉強しよつか」

気遣いできるイケメンis神。

もう4回目になるのだけど、本当に将人さんはイケメン力が高すぎる。

フィクションでもここまでしたら妄想乙って言われるレベル。

「あ、本今日は何読んでたの？」

……っべー。っべーよこれ。

いや待て。ブックカバー（偽表紙）は装着済み。

これの中身がエロ小説であることは、バレちゃいない。

これを見せれば納得してもらえるはず！なんか人気らしいし！

心の中の誰かが問いかけてくる。

そんな装備（ブックカバー）で大丈夫か？と。

私は笑顔でサムズアップ。
大丈夫だ。問題ない。

「あ、えつと……田坂さんの、これを……」

「あくそれ面白いよね! 『二階から、夏が降ってきた』……どんな生き方してたらそんな冒頭思い浮かぶんだろうねえ……」

……。

えへ☆偽表紙の本、1ミリも読んでない☆

夏が降ってきたってなに?? 夏って降ってくるものなの??

私のこのエロ小説、冒頭一発目からパンツ一丁の美少年が空から降ってきてラッキースケベから始まるけど大丈夫そ? ☆

なんだよこれ! 何の役にも立たねえじゃねえか! (憤慨)

「あ、あははそうですよね本当に……」

よ、読もう。流石に今度から偽表紙を用意するときには必ず読もう……。

あく幸せなんじゃ〜。

勉強は大して好きじゃないけれど、将人さんに教えてもらっている時間は大好きだ。

教え方も上手く、理解しやすい。正直最初はどんなに授業下手でもいいよって思ってたのだが、ちゃんと上手い。

これが教えるのは初だつて言つてたけど、信じられない。ハイスペック、ここに極まれり。

「ここはね、もう一個読み方変わるんだよね。ここの記号がここにとぶから正しくは〜」

う〜ん……？

今は真面目に勉強しているのだが、国語が苦手。漢文つてなんやねん。せめて日本の言語にしてクレメンス。

将人さんの教え方はとても良いので、私の脳が悪い。そんな風に思つて必死にテキストを読み込んでいると。

背中に、感触。

え？

「良い？ 汐里ちゃん、今から俺が指でなぞっていくわ。一緒に読む順番を——」

——突如全身を駆け巡る甘い衝撃。

耳元で囁かれた言葉は、私の脳を直撃する。

な、なに、これ？

私だけのASMR配信始まってる？

指でなぞるって一体どこをなぞるんですか???

沸騰する身体。

私の中のゲージが、振り切れて爆発した。

「おっふ」

あ、ヤバイ。

とっさに口元を覆う。

これ限界。

勢いよく、立ち上がった。

清楚には程遠い感情を、私は思いつきり吐き出した。

幼馴染系JDは心配する

大学の学食というのは、基本にお昼休みに入ってから行く席がとれないことが多い。

生徒数よりも圧倒的に席が少ないのが主な理由で、席が取れないとわかっているからか、授業が終わると大学の外に出ていく学生も少ない。

しかしやっぱり学食は安いし、ウチの学食は味も悪くないので、できることなら学食でお昼を済ませたいのが学生の本音。

「恋海〜！やはやは〜！」

だからこうして、先に学食の席を取っておいてくれるのは大学生活においてとてもありがたいことだ。

腕を元気にブンブンと振り回すみずほの元に、私はランチセットのトレーを持ちながら慎重に人の合間を縫ってたどり着いた。

「みずほありがとう！今日も元気ね〜」

「んふふ。ま〜ね！食べよ食べよ〜！」

「つてかみずほ昼からカツ丼って……重くないの？」

みずほは、私知ってる友達の中で一番の元気印。

高校の時からいっつも明るいし、はしゃいでるしで、何度この無邪気な明るさに救われたかわからない。

男を捕まえようとして玉砕するのが日常と化してるが……なんでこんなに可愛いのに彼氏できないんだろ。

トレードマークのツインテールと、ぱっちりとしたスカイブルーの瞳。

線が細く、身長も私より小さくて、いわゆる可愛い系。

オーバーサイズのTシャツに、薄いデニムジャケット。

黒のショートパンツからは彼女の細く綺麗な脚がすらっと伸びている。

その人懐っこい笑みは、女の私でもちよつとドキつとすることがあるほどのなのに。

「へっへ〜ん！今日は超大事な日だからカツ丼！勝つためにね！」

「なんの勝負……？」

「それはもちろん……恋の勝負なのだ!!」

恋に恋してる感じがあるのが……マイナスなのかな？

私は思わず苦笑い。

「告白でもするの？」

「そうです!!いやー今回は勝率高目だと思うんだよね！結構お話ししてるし!!」

「あ、もしかしてバドサーのけいとさん？」

「そーそー！なんかサークルの時良く目合う気がするし、これは間違いない！と思ってねー！」

「いやハードル低くない……？」

それアイドルのライブ行つて最前列付近にいた人が良く言うセリフだけど……。

「あ〜！恋海最近自分が絶好調だからってバカにしたな?!」

「ぜっ……絶好調なんかじゃ、ないよ〜」

「あ〜！ニヤけてる！ずるいずるい！」

みずほには悪いケド、確かに私は将人とだいぶ調子が良い。この前もデートいったしね……♪

ちよつと家庭教師やつてるとか寝耳に水すぎて焦つたけど、家庭教師以外では会ったこと無いって言つてたし、大丈夫なはず……。

そんなことを考えていると、ポン、と肩に手が置かれた。

「ま〜待っていたまえよ……私がGETした暁には、ダブルデートと洒落こもうぜ……」

「いやあんたそれ死亡フラグだからやめなつて……」

本当に、みずほは高校の時から性格が全然変わつてない。

陽気で、クラスを中心にいて、皆を盛り上げて。

そんなみずほだからこそ、私も幸せになつて欲しいなつて心から思

う。

カツ丼を食べ終えたみずほが、両手を合わせた。

「ごちそうさまでした……それでは！私は部室に行つてまいりますので、吉報を待たれよ！」

「ええ?!今から?!だいぶ急じゃない?」

「善は急げ!いつだって運命は待つてくれるわけじゃないのよ、お嬢ちゃん……」

ちつつちと。

可愛らしい動作で細い人差し指を振つたみずほが、席を立つ。

るんるん気分が出ていった彼女の姿が見えなくなるまで、目で追つて。

「大丈夫かなあ……」

パスタを一口頬張りながら、みずほの告白の成功確率をなんとなく考える。

けいとさん。バドサークルの先輩で、確かに人当たりは良い。けどなんか裏がありそうで、私はちよつと嫌だなと思つていた。

あからさまに一部の先輩女子としか一緒にいないし……。

腕時計を見る。

3限開始まではもう少し時間があつた。

「部室棟の方寄つてから行こつかな……」

3限は将人と同じ授業。席をとつておいてあげたいのはやまやまだが、みずほの告白も気になる。

成功したらしたで、お祝いしてあげないとね。

食べ終わった私は手早く将人に連絡だけ入れて、部室棟の方へと向かうのだつた。

部室棟。

3限が終わったあたりからは賑わうこの辺りは、今はまだ人が少ない。

講義が行われる棟と若干離れていることもあり、授業の合間にこっちに来るのはそれこそ空きコマがある人くらいだ。

「……いない、か」

とりあえずバドサーの部室を見に行ったが、みずほの姿はない。

もしかしたら、もう終わったのかもしれないし、そもそも告白が中止になった可能性もある。

「教室行くかあ」

特にみずほから連絡はないし……てももし仮に成功していたら、とんでもない勢いで連絡が来そうなものだが。

「は？、付き合ってくださいって本気で言ってる？、w」

声が、聞こえた。

嫌な予感がして、私は声の方へと向かう。

(……！)

物陰に、身を隠した。

部室棟の最奥。非常階段の前に、2人の男女。

こちらから表情の見えない後ろ姿は、トレードマークの低い位置のツインテール。

(みずほだ……)

見間違えるはずもない。親友の姿。

「付き合ってください？……え？マジで言ってるの？ww俺はさつきから1年にもたまには声かけてあげてって言われたから仕方なく声かけてただけだよ？wwそんなんで勘違いしちゃったの？……流石にキモイんだけど」

「……ごめん、なさい」

……は？

私は急激に自分の体温が下がっていくのがわかった。

「まあそういうワケだからサ……2度とこういうことしてくんのやめてね？wマジでキモいし時間の無駄。あとこれ他の女子に言っても許さないから。どっちがどういう立場かくらいは、わきまえてね？じゃ」

許せない。

許せない許せない許せない許せない許せない許せない。

あんなゴミが、みずほの心を傷つけたという事実が許せない。

——しまった。録音でもしておけばよかった。

そうすれば、あいつの本性を暴いて、晒し上げることができたというのに——。

「盗み聞きとはおぬしも悪よのう？」

「……みずほ……ごめん」

気付けば、みずほが私の隠れていた物陰まで戻ってきていた。

「いーのいーの！心配して来てくれたんでしょ？恋海殿のやさしさに、拙者涙涙でござるよう！」

「みずほ……」

わかっている。長い付き合いだから知っているし、長い付き合いじゃなくなつて、こんなの、誰だつてわかる。

今のみずほは、空元気だ。

「いや〜！イケると思つただけどなあ！ものの見事に、バツサリ！ぐわあああ私のHPはもうゼロよ〜ヨヨヨ」

「……」

刀で切られた物まねをして、みずほはペロ、と舌を出した。

「なかなかうまく行きませんかあ！恋海殿、ダブルデートは、もうちよい待つて☆」

「うん……みずほなら、あんな奴より絶対良い人見つかるから」
わかっている。こんな空虚な言葉じゃ、みずほの心を癒すことはできないって。

安い励ましだつて、分かっている。

みずほだつて、分かっているはずなのに。

「うおおおお！やる気出てきたあ!!やつたるぞ〜!……だから恋海は、今の彼大事にするんだヨ?」

「うん……」

なんでだろう。私の方が泣きたくなってきた。

どうしてみずほがこんな目に遭わなきゃいけないの？

こんなに可愛くて、健気で、誰にだって優しいみずほが……。

「ね。3限彼と一緒にでしょ?もう行つた行つた!」

「え……でもみずほは……」

「拙者、少々夜風に当たりたいでござる〜!彼待たせちゃダメだよ!早く行つた行つた!」

「……みずほ」

しっしつと。

軽く手でジエスチャーするみずほ。

いくつもの言葉が喉から出かかって……私は全部飲み込んだ。

今どんな声をかけたって、逆効果になるかもしれないと思ったから。

今は、一人にしてあげた方が良い。

私は、教室棟へ向かった。みずほの方へは振り向かない。

背中を感じるみずほの気配が、いつもの何倍も弱弱しかったから。

だ。
講義開始のチャイムが鳴って、その瞬間に私は教室へと滑り込んだ。

(あぶなく！)

出席のカードリーダーをかざして、教室を見渡す。

奥の方の後ろで、一人の男子がこちらに手を振っている。

(あ、好き)

溢れ出した衝動を感じて……そして先ほどまでのみずほの一件を
思い出して心が痛んだ。

あいつ絶対に許さない。

「ごめんありがとう席取ってくれて……！」

「いいよいいよ。こういうのは助け合いっしょ？ いつつも席取ってもらってるしなあ」

あーカーッコよ可愛すぎる。

この世の全ての良い要素を詰め込んだ人。神。

だからこそ、さっきのゴミを思い出して、反吐が出た。黒い感情が再び私の中で渦巻く。

みずほを……よくも……許せない。

「……なんかあつたん？ 暗い顔だけど」

「……実はね」

細かい表情を見抜いて気遣ってくれる。本当に将人は良い人だ。

私は事の顛末を話した。

私に親友がいることは知っているから、その親友がどんな目に遭ったのか。

どれだけ私とその先輩を、許せないか。

思わず声が大きくなりそうになるのを、必死で堪えながら。

「……ひつでえな……なんだそれ」

「……だよね」

いくらなんでも、ひどすぎる。

男は確かに不遜で傲慢な人も多いが、今回は特別酷い。

あそこまで酷い言い草を聞いたのは、初めてだ。

将人もかなり暗い表情になっている。

「許せねえな……どんなことされたか他の先輩とかに言っちゃってもよさそう……つてのは、俺が甘い考えなのかもだけど」

「……みずほがね、優しすぎる性格だから、多分良く思わないと思う。個人的にはめっちゃくちや言いつけてやりたいよ私だって」

あの先輩は、女子人気が高い。

みんな本性を知らないのだ。

だからもし仮にこれを言いつけたとしても、旗色が悪いのは明らかにこつち。

それがわかっていているから、私も悔しい。

「……なんだろう、そいつが許せないのは確かだけどさ……もうこうなったらさ」

しばらく思い詰めていた将人が明るく振り向いた。

「そいつより幸せになるしかないよね。ざまあみろって。お前なんかよりも良い相手見つけて、私は幸せですって見せつけてやるのが、一番の仕返しになるんじゃないかな」

……ほんと、私の好きな人は性格が良すぎる。

「そう……だね。みずほには、幸せになっほしい」

私は心の底からそう思うのだった。

5限が終わって。

今日は水曜日。あわよくば私は今日も将人とデートできないかななんて思っていたのだが。

「ごめん！なんか急に呼び出されて、帰らなくちゃいけなくなつた!! すまん!!」

と言つて勢いよく大学を飛び出していく将人を止めることはできなかった。

呼び出されたって誰に?! って聞いたら、「親みたいな人！」って言わ

れたから仕方ない。明日も会えるしね。

将人を見送って、スマホを開く。

みずほから連絡は、あれ以降返ってきていない。

電話もかけたが、繋がらない。

「……大丈夫かな……」

いくら玉砕がいつものことと化した親友であっても、今回のことはこたえたと思う。

隣で見ているいつも思うのだが、みずほはきつと、恋に恋してるだけであって『相手』には恋していないようにみえる。

そんなみずほが、いつか心の底から恋ができる相手が見つければな……。

それこそ、私にとっての将人のような。

「明日、パフェでも奢ってあげようかな」

大の甘党であるみずほのことを思っ、私も帰路についた。

ツンデレ系OLが泣いている

恋海と受けた授業が終わって。

今日はバーのバイトの曜日である金曜日ではない。

普段なら帰る前にちよつとバスケしたり、どこかで時間を潰してから帰るのだが、藍香さんから『ごめん今日一人欠員出ちやっつて緊急で入れない?』と連絡を受けて、バイト先へ。

バイト入れるならそれに越したことはないからね! お金欲しい。奨学金も返さなあかんし。

今日は水曜日なのできつと常連の星良さんも来ないだろうし、おそらくは受付とかお酒作ったりとか裏方の仕事だろう。

接客をしないのであれば服も裏方用の制服で良いだろうし、それであればなんの問題もない。

「お疲れ様です〜」

時刻は18時過ぎ。

既にバーは開店しており、休憩室には1人しかいない。鏡と向き合ってヘアセットしている先輩が、俺に気付いた。

「お〜! まさと久しぶりやん! 今日はあるがとな。そーいやなんか常連できたって聞いたぞ〜? やるじゃん」

「ゆーすけさんお疲れ様です。あはは……たまたまつすよマジで……」

「お前は俺らとはタイプ違うけど絶対人気出ると思うんだけどなく藍香さんが金曜日固定って言っちゃったから仕方ねえけど!」

ゆーすけ先輩は俺が入りたての時に色々手伝ってくれた先輩で……このお店の中で、一番考え方が前の世界に近い気がする。チャライけど。

女性に対しての考え方も全然傲慢じゃないし、性格良いし……とでも尊敬している先輩だ。

何故か右腕に、軽く包帯を巻いている。

「……あれ、その怪我どうしたんすか？」

「あゝ、これ？いやこの前これ彼女にやられちまってさ……お前も気をつけろよH A H A」

女性好き過ぎてこの仕事やっててさらに恋愛方面でとんでもない武勇伝をいくつも持つこと以外は、だが……。

「そーいや思ってたんだけどさ、ちよつとまさどこつち来いよ」

「え？なんすか？」

ゆーすけさんに手招きされて、俺は椅子に座らされる。

先ほどまで使っていたワックスを、ゆーすけさんが手に取った。

「まさと絶対オールバック似合うと思うんだよね。今日だけちよつと騙されたと思って俺にヘアセットされてみない？」

「え〜……」

「いいじゃんいいじゃん！美容師の学校行ってる俺が言うんだぜ？任せろって」

まあ、今日は星良さん来る日じゃないしいつか。

毎週会ってる星良さんが俺の似合わないオールバックなんて見たら『え……まさとくん流石にそれはないわ〜』とか言われてもおかしくない。

流石にせっかく指名までしてくれてるお客さんにそれを言われるのはダメージがでかい。

「今日だけつすよ？」

「よっしや任せな〜？」

鞆からジェルタイプのワックスとヘアアイロンを取り出すゆーすけさん。

あんま似合わないと思うけどなあ……。

「まさどー3番テーブルさんジンハイ2」

「はいー!」

わかつてはいたけれど、水曜日でも、そこそこ忙しい。
毎日来る猛者のお客さんもいるくらいだ。

注文通りにお酒を作って、テーブルへ。

「お待たせしました……」

「私の男になって!」

「えーもう冗談やめてよー」

……うん。まあ俺のことなんか見えてないみたいだな。

その方が助かる。

グラスを下げて、俺はひっこむ。

このくらいのことは日常茶飯事だ。

洗い場でグラスを洗っていると。

「まさどー!悪いんだけどさ、駅前のドラッグストアでトイレット
ペーパー買ってきてくんね?!なんか無くなっちゃったっぽくて!」

忙しいようで顔だけ洗い場に出したゆーすけさんが、焦った様子で
俺に買い物を頼む。

トイレットペーパーが無くなるのはまずいな。昨日は閉めの時ト
イレのチェックちゃんとしなかったのだろうか。

「承知しました!行ってきます!」

「悪いな!今みんな接客入っちゃってよ……カードそこにあるか
ら!領収書もらってきて!」

「はいー!」

手を拭いて、俺は店を出る。

このヘアスタイルと恰好で外出るのちよつと恥ずかしいけど、まあええやろ。

あたりはもう暗い。

仕事帰りのOLや学生でごった返す駅前。

そんなに大きな都会の駅ほどではないにせよ、人とぶつからずに歩くに気をつけなきゃいけない程度には人が多かった。

「早いところ買って戻らんと……」

そんな大混雑の中でこんな格好で好きで歩くほど俺は狂ってない。

早い事買い物を終えて店に戻ることにしよう。

そう思っていたのだが。

「すみません……！コンタクト落としちゃったんです……！ごめんなさい……！」

泣きながらしゃがんで、右往左往する女の子。

コンタクトを落とした……彼女が泣いていたからコンタクトが取れてしまったのか、それとも他の要因かはわからないが……。

それでも全く意に介することなく過ぎ去っていく周りの人達を見

て……。

俺は無視するという選択肢を取れなかった。

「大丈夫ですか？コンタクトですよ。一緒に探します」

「え……っ……すみません、ありがとうございます」

コンタクトの片目が取れている状態で、彼女の視力が元々いくつあるのかはわからないけれど、そんな状況で探すのは困難を極めるはずだ。

俺は幸い視力は良い方なので……彼女よりも早く、コンタクトを探し出せるはず。

「すみません！ちよつとコンタクト探してますので！」

俺も一声周りにかけて、地面を這いつくばる。

この程度なんてことない。今日は幸いお店の制服だし、洗えばなんとかなる。

探し始めて1分ほど。

割と早めに、俺は地面に光る小さなコンタクトレンズを発見。

「あつた……！……ありましたよ！」

「……！」

俺はそれを丁寧に拾うと、ポケットからハンカチを出して、その上にコンタクトを乗せる。

彼女の元へと歩み寄った。

「はい。気を付けてね」

「ありがとうございます」

「あ、このハンカチは別に返さなくていいから。じゃ！」

「……え、あ、あのちよつと待ってください!!」

……えっこのまま颯爽と立ち去ったら俺珍しく結構カッコ良くなかった？

女の子の方に、もう一度振り向く。

……。

間。

……??あれ、俺呼び止められたよね？

「…………えっと…………ごめん、俺急いでるから！」

「…………あ」

心苦しいが、ここはミツシヨン優先。

まあ、彼女ももう目も見えるようだし、大丈夫だろう！うんうん！
良い事した後は気持ちが良いね！

さくつとトイレトペーパーを購入し、店へと戻る。

「戻りました〜」

「お〜！遅かったやん、混んでた？」

「そつすねえ…………ちよつと混んでました！」

さつそくトイレに向かい、トイレトペーパーを補充。

ついでにトイレの清掃を済ませてチェック欄に自分の名前を書き
込もうとして…………。

「あれ？俺ボールペンどこいった？」

先週まであったはずなのだが、胸ポケットに差しておいたボールペ
ンが無い。

ま、いつか。ボールペンくらい新しいのあるやろ。

俺は大して考えもせず…………裏から新しいボールペンを借りること
に。

すると。

「おいまさと！お前すぐ着替えてこい！」

「……え？」

「指名だよ指名！なんかお前の常連の子？来てて、お前指名してるんだって」

……俺金曜日しか基本いないって言ったのに？あ。あれか。一応俺指名して、いないってわかったら他のボーイ頼むつもりだったのかな？

「わ、わかりました〜！」

「俺が席案内しとくから！2番テーブルな！」

「はい〜！」

ロッカーに制服をぶち込んで、俺は接客用のスーツへと着替えるのだった。

某アイドルグループもびっくりの早着替えをすませて……俺はグラスを持って2番テーブルへと向かっていた。

そこには、相も変わらずガツチガチに固まったスーツ姿の女性が一人。

「星良さん、こんばんは。また来てくれたんですね」

「……ええ」

あれ？元気ない？心無しかポニーテールも力なく垂れ下がっているようにみえるし、頬もやつれているように見える……それでも美人だけ。

仕事で疲れたのかな。となると、俺の役目はそういう時に元気づけ

ることやと思うし、今日は頑張らなきゃな……。

「でも驚きました。星良さん金曜日しか来てないって言ったので」

「……外で、このお店に入っていくあなたが見えたから……」

「あ、なるほど！ちよつと買い物してたんです！今日は接客予定なかったので制服で！恥ずかしいんすよね意外と……」

いつもなら俺が話している時はこつちを見たり目を逸らしたりで忙しい人なのだが、今日は俯いたまま。

ありやりや、こりや相当元気ない。

「……いいんですよ。ここでは何も隠さず、言いたいこと言ってくれて。俺は星良さんに何があったのかわからないですけど……いつもみたいに、星良さんの話聞くのは……結構好きなんです」

「……ッー」

星良さんが、膝の上に置いた手をグツと握った。

相当悲しいことがあったのかな……。

「ごめん……なさい……」

「……え？」

その手の甲に、ぼたぼたと何かが落ちていることに気付く。

星良さんは、泣いていた。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……！私……！」

その様子が、なんか見ている俺も辛くて……。

気付いたら、その背中に手を伸ばしていた。

ゆつくりと、背中をさする。

「大丈夫です。なにがあったのか……俺にはわからないですけど

……星良さんはきつと悪くないです。良い人つすもん。星良さん」
我ながら空虚な言葉だなあと思う。

まだ知り合ってたった1ヶ月ちよつとで。会えるのは週に1回程度で。

大半がお酒に酔って会社や元カレへの悪口を言って鬱憤を晴らす

ようなことを言っている彼女。

それでも。一緒にここで過ごした時間のそんなありのままの彼女の姿も、俺は嫌いにはなれなかった。

口をついて出る言葉は攻撃的でも、芯は優しい人なのだ。

だから空虚な言葉でも、もしそれが彼女の助けになるのなら。

俺は力を貸してあげたいな、と強く思ってしまったのだ。

そのままにしていると、星良さんが俺の方に身体を寄せてくる。肩と肩が、くつついた。

おうふ。これは見つかったらちよつとまずいか……？まあ、これくらいなら言い訳きくだろ。きつと。

そもそも、こんな状況で俺は今の星良さんを無下にはできない。

「大丈夫です。星良さん。星良さんが優しい人なの、俺は知ってるんですから」

「……………めん……………ね……………！私……………最低な女だ……………！」

星良さんの背中をさすりながら、俺は少しだけ疑問に思った。

俺が優しくするたび。こうして距離が近づいた。

何故か星良さんは、更に涙を流しているような気がしたから。

元気っ娘JDは運命と出会う

恋はとても素敵なもので、楽しいもの。

だから大学に入ったら、素敵な恋をして、勉強もまあ、そこそこ頑張って、幸せな大学生活を送るんだって意気込んでいた。

友達もたくさん作って、たくさんの場所に遊びに行って、たくさんオシヤレして、たくさんのおい出を作って……。

キラキラした日々を送るんだって！

大学に入学して2ヶ月。

今の所、友達はたくさんできたし、サークルでも上手くやれてると思う！

ただ……恋はなかなかどうして上手く行かない。

カッコ良いな、と思う人はけっこういる。先輩でも、同級生でも。

けど、なんだろう。彼氏は欲しいけど、彼氏にしたいと思う人に出会うことは未だに無い。

『付き合ってみたら意外と悪くなかったりするよ！』

『とりあえず付き合っちゃえばいいじゃん』

『大学卒業して年齢〓彼氏いない歴は嫌じゃない？』

友達同士の会話で起こる、恋愛観の論争。

確かに今の時代、付き合ってもらえるだけありがたいので、とにかくアタックしまくって、付き合ってもらえるように頑張るのはありだと思う。

彼氏がいるっていう状況、確かに経験してみたい気もする。

自分から動かなきゃ、チャンスなんて回ってこないしね！

——けど、私は最近考える。

(そもそも恋って……好きってなんだっけ?)

カッコ良いな、と思うことと、好きだな、と思うことは違う。

それはそうだ。テレビのアイドルはカッコ良いなと思うけど、それは別に好きには繋がらない。

じゃあ好きって？

多分、私が憧れた恋愛って、その人の動作とか、内面とか、言葉とかに触れた時に、どうしようもないほどドキドキして。

この人と、ずっと一緒にいたいって、強く思うことだと思ってた。けど、そんなこと、人生で1度だってありはしなかった。

まあ、現実なんて、そんなもんだよね。

だから皆妥協して、折り合いをつけて、我慢して。

ちようど良い人を見つけてる。

だから私もそうしなきゃいけないんだって思ってた。

——それで。

「は？付き合ってくださいって本気で言ってる？w」

なんで、こんな思いしなきゃいけないんだっけ。

あく久しぶりに効いたなあ……ここまでひどい事言われたのは、流石に初めてかも。

フラれること自体には慣れっこんなだけどなあ。

けいとさんがいなくなった方向を眺める。

怒りは自然と湧いてこない。

怒りが湧いてこないのは、私の中で腑に落ちる部分もあるからで。

きつと、そこまで付き合ってほしくもなかったのかもしれない。

こんなこと言ったら失礼だけど、私の方だって熱なんて持つてなかった。

だから、私も悪い。お互い様なんだね。

ふー、と深く息を吐いて、来た道に戻る——と、物陰に、見覚えのある黒いキャップが見えた。

……テンション、戻さなきゃだ。

「……頑張れ、わたし」

小さく声を出してから。

ちよこん、と隣に躍り出た。

「盗み聞きとはおぬしも悪よのう?」

「……!みずほ……ごめん」

ちよつと人様には見せられないくらいの表情をしていた私の親友……五十嵐恋海は、私に気付いて申し訳なさそうに頭を下げた。

んーん。いいんだよ。恋海が優しいのは、知ってるぜ。だからそんな顔、しないで。

「いーのいーの!心配して来てくれたんでしょ?恋海殿のやさしさに、拙者涙涙でござるよ〜!」

「みずほ……」

そんな悲しそうな顔をしないで欲しいでござるな〜!

大丈夫大丈夫、私は元気。

この程度でへこたれるみずほちゃんではないのだ!

「いや〜イケると思ったんだけどなあ!ものの見事に、バツサリ!ぐわああああ私のHPはもうゼロよ〜ヨヨヨ」

「……」

うんうん！このくらいのお気楽さが私にはちょうどいい！

恋海にも、笑ってて欲しいしね！

「なかなかうまく行きませんかあ！恋海殿、ダブルデートは、もうちよい待ってて☆」

「うん……みずほなら、あんな奴より絶対良い人見つかるから」

……恋海殿は優しいでござるなあ。

高校の時から付き合っただけど、恋海と喧嘩したことは一度だつてない。

「うおおおお！やる気出てきたああ!!やったるぞく!……だから

恋海は、今の彼、大事にするんだヨ?」

「うん……」

恋海は、今いい感じの男の子がいるらしい。

くうく！うらやましいでござるなあ！ちよつと遠目からしか見たことがないから分からないけれど、身長も程よく高くて、カッコ良い感じだった気がする。今度お話を聞いてはしてみたいものだね！茶々入れたいし！

でも、今は。

「ね。3限彼と一緒にでしょ?もう行った行った!」

「え……でもみずほは……」

「拙者、少々夜風に当たりたいでござるく！彼待たせちゃダメだよ！早く行った行った!」

「……みずほ」

申し訳なさそうな顔をして、恋海が私に背を向ける。

もくなんでそんな複雑な顔するのか!

恋海が今幸せなら、私も幸せでござるよ?!

恋海もだいたい幼い頃の恋を引っ張って、苦労したの知ってるんだから。

恋海は、一度もこちらを振り返らなかつた。
そのままこつちから見えなくなるまで見送って、私は一息。

「はう。ま、こんなもんだよね！」

大きく伸びをする。

ここら辺は講義を行っている教室棟から少し遠く、もう3限が始まろうとしているこの時間帯は人が少ない。

ゆつくりと、歩き出した。

「さうて！恋海のためにも切り替えて新しい、おと、こを」

『そんなんで勘違いしちゃったの?? w w w』

なんでだろう、ちよつと声が、出にくいな。

「さが、す………ことに、しま、すか」

『……流石にキモイんだけど』

——頬を伝って流れるこれは。

——地面に落ちてしみを作るこれは。

お願いだから、止まって。

内容が全然頭に入らないまま、午後の授業を終えた。

正直ほとんど上の空だったと思う。

一緒に受けている友達が今日は休みで助かった。

今私は学内の空きスペースにある椅子で休憩中。

「玉砕だった、よ、っと……」

同級生の仲良しメンバーに、SNSで告白の報告をする。

もちろん、言われた事とか、けいとさんの性格とかは伏せて。

恋海からも心配の連絡が来ていたけれど、今は返す気にならなかった。

きつと、私の心配をするよりも、彼と楽しい時間を過ごしたほうが、

恋海的にはいいはずだしね。

スマホを閉じて、背もたれによりかかった。

窓から、夕日が差し込んでいる。

もう、日も沈みそうだった。

「かえろうかな」

いつもより、足が重い。

まいったな……明日までに、メンタル回復できるだろうか。

それにしても失敗した。サークルの先輩となるとこれから顔を合わせなきゃいけないのが一段と辛い。

考えただけで、憂鬱な気分になった。

大学の最寄りの駅から電車に乗ってしばらく……。

私は今、乗り換えの駅のトイレでうずくまっていた。
どうやら、電車で酔ったらしい。

「ははは……電車で酔うってなに？ 私こんなによわっちゃったっけな〜」

情けない。本当に情けない。

トイレの手洗い場の鏡を見て、自分の顔の酷さに驚く。
泣きすぎたせいで目の周りにはひどく赤く、化粧も崩れ。
顔は不自然なほど青白い。

(ひつど……こんな知り合いに見られたら……)

私は髪をツインテールにしばっていたゴムを外す。

(今は、これでいいや)

髪型をただのロングにして、なるべくこんな顔誰にも見られたくないから、マスクをした。

今は、いつでも元気な戸ノ崎みずほはいない。でも、明日からまた頑張るから許して欲しい。

「近くにドラッグストアがあったはずだよね……」

酔ってからでも効く酔い止めが欲しい。

私は重い足と、倦怠感を訴える身体を引きずって駅のトイレを後にした。

本当に、なにをしているんだろう。

たかだか男にフラれたくらいでこんなに傷ついて。

たまたま相手の口調がちよつとキツかったくらいでこれでは、私のメンタルもまだまだだ。

『キモイんだけど』

「……ッ！」

頭の中をリフレインする。

記憶は強い感情を伴ったものほど強く刷り込まれるというが、こんなにあんまりじゃないか。

また、涙が出る。性懲りもなく。

もうやめてほしい。もう十分泣いただろう。思わず私は無理やり目をこする。

また思い出して泣くなんてバカみたいで――。

――ドンっ！

肩に、衝撃。

通行人と、ぶつかった。

「チツ……！前見て歩きなさいよブス……！」

……あれ。

前が、よく見えない。

視界が、気持ち悪い。

コンタクト、落としました？

最悪だ。

私は裸眼の視力が0.1しかない。

「すみません……！コンタクト落としちゃったんです……！ごめんなさい……！」

ああもう……本当に今日は、最悪の日だ。

——そんな、時だった。

「大丈夫ですか？コンタクトですよね。一緒に探します」

「え……？」

声が、かかった。

男の人の声。

顔を上げる。

視界が涙と視力のせいでぐちゃぐちゃなのでしつかりとは見えな
いが。

カマーベストに、黒の蝶ネクタイ。

髪はかっちりオールバックにまとめた、紳士が立っていて。

こんな状況なのに。

カッコ良い、と素直に思ってしまった。

「すみません、ありがとうございます、ごございます」

そして私はとつさに、頭を下げた。

こんな酷い顔を、見られたく無くて。

「すみません！ちよつとコンタクト探してますので！」
びっくりする。

こんな女のために、みるからに仕事であろう男の人が……？

頭が混乱する。

思考がまとまらない。

不思議な感覚だった。

この雑踏の中。他の雑音がかき消えて。

世界に私と、このお兄さんしかいないような気すらして。

やけにうるさく鳴り出した、心臓の音がうるさかった。

「あつた……！ありがとうございましたよー！」

何分くらい経っただろうか。

あつという間だった気もするし、とても長かった気もする。

お兄さんが嬉しそうな声音で私に報告してくると、私の元へと届けにきてくれた。

「はい、気を付けてね」

「ありがとうございます」

丁寧ハンカチの上にコンタクトレンズを乗せて。

その渡し方が、あまりにも丁寧で。

今日あんなことがあったからかな。

このお兄さんの優しさが、胸に溶け出して……溢れていく。私という容器は小さすぎて、溢れ出した感情が、涙となって流れ出した。

でも、これはさつきまでと同じ、悲しみの涙じゃない。

私は今、笑っている。

暖かな気持ちになる。

喜びの涙。

ふとそこで、私は自覚する。

——なんでこんなに胸がドキドキするんだろう？

「あ、このハンカチは別に返さなくていいから。じゃー！」

「……え」

お兄さんが、立ち去ろうとする。

え、待つて。ダメだよ。

まだなにも、なにも聞いてないのに。

——ダメ!!!

「あ、あのー！ちよつと待つててください!!」

お兄さんの、動きが止まる。

こちらを、振り向く。

その姿が、やっぱりとでも、とても素敵に見えて。

自分の今のみすぼらしい姿を思い出してしまつてちよつと嫌になつた。

今は、いつも元気な戸ノ崎みずほじゃない。

「……ッー！」

名前だけでも聞かなきゃ、とか。

お礼をもつとちゃんと伝えなきゃとか。
なんで助けてくれたんですか、とか。
たくさんの言葉が私の頭をぐるぐると回り出す。
そしてその間も、ずっと。ずーっと。

心臓が、バクン、バクン、バクン。

うるさい、うるさいうるさい！

やめて！話させて！

もう2度と会えないかもしれないのに！！

私に勇気をください！神様！！

「えっと……ごめん、俺急いでるから！」

「……あ」

手を伸ばす。

みつともなく。

けど、届かない。

再び世界に音が戻り、日常が帰ってくる。

今の一瞬が嘘だったかのように思えるけれど、私の身体にこもる熱
と、右手に残ったハンカチがそれを否定する。

（バカ……バカバカバカ！私のバカ……！）

名前くらい聞くべきだった。

せめて名前さえわかれば、ハンカチを返せたかもしれないのに！

それに……！

(どろろしやう、どろろしやう……！)
再びその場に、うずくまった。
まだうるさく鳴り続ける鼓動。
『どろろしやうもないドキドキ』。

——ああ、もしかして、これが

「……あれ」

……地面に何かが落ちている。
拾い上げてみた。

「ボール、ペン？」

それは一見、なんの変哲もないボールペン。
自分のではない。ということはあれだけ必死に探してくれた彼の
物……？

どこかで見たことがある気がして、私はそのボールペンをくるくる
回してみても——

「……え」

ボールペン。

その手に持つ部分。

そこに、ロゴが入っている。

私・の・通・つ・て・い・る・大・学・の・ロ・ゴ・が。

これは、私の大学で新入生全員に配られるボールペンだ。

「嘘……え……！……じゃあさっきの人は……！」

私の運命が、動き出した。

ツンデレ系OLは目撃する

「……はあ……」

最近は、ため息ばかりが出る。

今日は水曜日。週の真ん中、折り返し。木曜日や金曜日はあと少しだし頑張ろうと思えるのだが、やっぱりこの水曜日あたりが社会人は憂鬱になりがち。

共感してくれる人も多いんじゃないかなと思う。

「星良どしたのー？最近はやる気に満ち溢れてたのに」

「みきさん……」

最近呼び捨てで呼んでくれるようにまで仲良くなった先輩のみきさん。

職場ではできる先輩として同期の皆からも信頼されている。……まあ職場ではね……私もそう思うよ……。

彼女の知りたくなかった一面を知ってしまったからか、変な目で見てしまうけど、やっぱりみきさんは良い人だ。

「まあでも上司もうるさいし、週の真ん中ってやる気でないよね〜」
「そう、ですね……」

私がここまで落ち込んでいる理由はそこではないのだが……。もちろん言えるはずもない。

「ま、ほら、週末はまた『宴』、行く？」

「……はい」

ズキリ、と胸が痛む。

優しさでそう声をかけてくれたのはわかっているが、今私にその単語はキツかった。

笑顔で他の社員に声をかけにいくみきさんを見送って、私はスマホを開く。

周りに誰もいないのを確認して……アプリのメモ帳を開いた。

そこには、『片里』という名字と……住所。

(最低だ……犯罪だってわかってるのに……)

——あの日。

まさと君を見つけて、家までストーカーをしてしまったあの日。あの日から私の心の中にずっしりと重い何かが巣くっている。

住所を特定して、何がしたかったのだろうか。

結局あの子の土日は上の空で……スマホに書いた住所を見ながら特になにもしなかった。

消そうとももちろん思った。

こんな犯罪行為で得た情報なんかすぐさま消し去って、また明るい顔でまさと君に会えばいい。

そう思った。

あんなにいい子なんだ。ちよつと「実はこの前帰るとき公園の方に行くまさと君っぽい人見えたんだけど家そっちのほうなの？」とか聞けば答えてくれそうだし。

けれど……できなかった。

私の中の醜い部分がこの情報を放したくないとしがみついた。

初めて知った個人情報。

今まではただの店員と常連客で、それ以上でも以下でもない。というより、それ以上にはなれない存在。

実名すら知らず、好きなんですなんて周りに言った日には可哀想な目で見られるのがオチ。

……その現状を、変えてくれるかもしれないと思ってしまった。

偶然を装って。

どこかのタイミングで、彼のプライベートで会えたら。

そう思ったら、胸が高揚してしまった。

どうしようもないクズ。

けど、すぎるしかなかった。

この今の関係を、細く細く、歯牙にもかかけられないようなこの状況を打開して、天使のような彼に近づくためには。

禁忌に触れるしかない。そう思ってしまったのだ。

「……はあ」

またため息が出た。

結局、何にも使えていない。今のところは。

消せもしないくせに、何かを実行に移すこともない。

どうしようもないクズなのに、その上臆病。

本当に、救いようがない。

「まくたため息ついてる！」

「ひゃい?!」

「ど、どうしたのそんな慌てて」

いつの間にかこっちに帰ってきていたみきさん。

今スマホの画面を見られたら、私の人生が終わる！

とつさに画面を隠した。

「流石の私でもスマホ勝手に見たりしないよ。なになに、男？」

「ち、違います……」

「え、じゃあなにまさと君の写真集でも買ったの?!」

「どういうことですかそれ……」

なんだバーのボーイの写真集で。

そんなものがあるのだろうか。

……とりあえずメモ帳の中身はバレなかったから良しとする。

この様子だと、みきさんは金曜日またあのバーに行く予定なのだろう。

当然私も誘われる……と思う。

どんな顔して、まさと君に会えば良いのだろうか。

変に顔に出したら怪しまれそうだし……。かといって今いつも通り彼と会えるかと言われたら自信が無い。

そんな風にもやもやしていると、みきさんが私を不思議そうな顔で見た後、自分のデスクに戻ろうとしたので、とりあえず気になったことだけ聞いておく。いや一応確認ね。

社会人の基本は連絡確認相談だから。

「ちなみにまさと君の写真集っていくらで売ってるんですか？」
「いや知らんわ」

「つたくなんで私だけ残業なのよあの上司……」

結局、なんやかんや理由をつけさせられて部署で唯一私だけ残業を命じられ、帰路につく。

ささつと終わらせたからそこまで遅い時間にこそならなかったが、無駄な労力を要してしまった。

「今日は早く帰ってゲームして寝よ……」

腕時計を見る。時刻は19時を指していた。

夏が近づいてきた季節とはいえ、19時となればもうだいぶ暗い。だというのに駅前には街灯と施設の明かりで光源にはまったく困っていないかった。

(そーいえば化粧水と乳液買おうと思ってたんだ……)

駅の近くまで来て、化粧品の類がそろそろ切れそうになっていることを思い出す。

幸い、駅前に大きなドラッグストアがあるので、そこで買おう。そう思い、進路を少しだけ変えて、ドラッグストアに向かう。

スマホを閉じて、顔を上げた。

——その時だった。

「…………え」

ドラッグストアの、目の前。

多くの人が駅に向かうその雑踏の中。

一人の男の子が、マスクをした女の子に、ハンカチを手渡していた。それだけ見れば、カップルか何かかと思うだけなのだが。

男の子は見慣れた制服姿で。

髪型こそいつもと違うが、想いを寄せる私の目はごまかせない。

「まさど、くん…………？」

声が出た。

もちろん届くはずのない声量。駅前の喧騒に、容易にかき消されるほどの声量。

それでも、私は開いた口がそのままふさがらなかった。

女の子にももちろん見覚えはない。

その女の子は、泣いているように見えた。

物語の一部に出会ったような気分になった。

周りの音も人も世界から消えて、2人だけが鮮明に頭に残る。

まるで、そう。

王子様と、お姫様が出会ったシーン。王子様のやさしさに触れて、

お姫様の心が溶かされるシーン。

え、私は？

黒い感情が、暴れ出した。
この出会いを、場外で見ているだけの私は、誰？

メインヒロインとの出会いを見て、ただ嫉妬するだけの、モブ？
ヒーローの男の子に一方的に惚れて、読者から、邪魔なだけと言われる、脇役？

——嫌。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

私が。私が私が私が私が
!!!!
私さまさと君と——!!!

「……おえ」

気持ち悪くなつて、膝に手をついた。

最近こんな汚い感情に振り回されてばかり。

だけど、だけど譲りたくない。

暴れ出した心臓の付近をぎゅつと握って、そのまま呆けている女の子を見る。

マスクをしていた。

顔は涙でボロボロで……髪も荒れていて、服も這いつくばっていたのかとところどころ汚れている。

正直、可愛いとは到底思えない状態。

(こんな子なら私でも——！)

「……おえ、ケホツケホツ……！」

私でもいいじゃない!!そう思ったと同時に、自分のゴミさ加減に吐き気がした。

醜い。本当に醜い。

ヒロインに嫉妬するモブ。

その立ち位置が相応しいクズっぷり。

よろよろと震える足に鞭打って、私はまさか君の後を追った。

明日が仕事とか、買い物のこととか、もう私にはどうでも良かった。

私がお店について、受付に入ると、初めて見る店員さんが応対してくれた。

「ようこそ、お嬢様。初めてのお嬢様ですか？」

「いえ……」

「そうでしたか！ご指名等は、ありますか？」

「……まさと君を」

「……ああ！もしかして、まさとをよく指名してくださいさるお嬢様ですネ！」

ああ。こんなことで。

こんなことで私の心は癒される。

この店では、私だけがまさと君の専用なんだと思うだけで、歓喜に心が打ち震えた。

「はい。そうです」

「お嬢様運が良いですね！まさと今日は本当は入らないはずだったんですけど、たまたま入ってるんです。ちよつと時間かかりますので、お待ち下さい。私が案内させていただきますね」

たまたまじゃないけれど。

それを言ったら引かれるのは間違いないので、黙ってついていく。席に通されて、お酒用のグラスが置かれた。

勢いで来てしまったが、何を言えればいいんだろう。

さつき会った女の子は誰？

いや、そんな聞き方をしたら見ていたのがバレてしまう。

彼女はいるの？

……基本的にお店の性質上いるとしてもいないと言われそうではあるが、万が一にいると言われてしまったら、私が何をするかかわからない。やめよう。

結局考えがまとまらないまま座っていると、彼が来た。

オールバックにした髪型も似合っている。

純朴な彼と強気なイメージのオールバックがギャップを演出していてドキッとする。

「星良さん、こんばんは。また来てくれたんですね」

「……ええ」

やっぱり、さっきのは彼だった。億が一の確率で私の見間違えかも
しれないと思っただが、やはりそんなことはなかった。

私がまさか君を見間違えるはずがないもの。

「でも驚きました。星良さん金曜日しか来てないって言ってたの
で」

「……外で、このお店に入っていくあなたが見えたから……」

半分嘘。外で見てたのは、もつと前だ。

あなたが、女の子に優しくしていた時から……。

黒い感情が、再び顔を出した。

「あ、なるほど！ちよつと買い物してたんです！今日は接客予定な
かったので制服で！恥ずかしいんですよね意外と……」

買い物しただけ？違うよね？女の子と、何かしてたよね？あの女の
子は誰？

なんで教えてくれないの？

ぐつぐつと煮えるように感情が沸き上がる。

醜い自分が、抑えられない。

「……いいんですよ。ここでは何も隠さず、言いたいこと言ってく
れて。俺は星良さんに何があったのかわからないですけど……いつも
みたいに、星良さんの話聞くのは……結構好きなんです」

「……ッー」

煮えたぎっていた感情が、彼のやさしきによって冷まされていく。
それと同時に——自分がストーカーをしたという事実が私の感情
を狂わせた。

こんな優しい彼に、醜く嫉妬して、ストーカーまでして。

本当に最低な奴だと、再認識してしまつて。

「ごめん……なさい……」

私、こんな情緒不安定だつたっけ。

涙を、堪えられなかった。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……！私……！」
あなたを、ストーカーしたんです。
今日のこと、見ちゃったんです。
言えない。
嫌いになられたら死んでしまうから。
言えない。

背中を、さすられる。

「大丈夫です。なにがあつたのか……俺にはわかりませんが……星良さんはきつと悪くないです。良い人つすもん。星良さん」

ぶわっと。

自分の中で感情が加速する。

やってはいけないことをやってしまったという後悔と。
どうしようもないほど好きなんだという好意が、混ざり合って爆発する。

私は、彼に体重を預けた。
今だけは、甘えさせて。

「大丈夫です。星良さん。星良さんが優しい人なの、俺は知ってるんですから」

「……ごめん……ね……！私……最低な女だ……！」

ああ。最低だ。
本当に最低。

だって今。

脳内に一つの答えが出てしまったから。

救いようのない、身勝手な答え。

まさと君が悪いんだ……。

私をこんなにごめんなせて狂わせたあなたが。

ああ、嫌になる。

どうしようもないほど自分勝手な責任転嫁でまさと君のせいにして。

彼の背中側に、腕を回して。

引き寄せて、繋ぎ止める。

脳が甘美に震えた。

今私にあるのは、まさと君を自分のものにしてぐちやぐちやにした
いという征服欲だけ。

ぐつと、力をこめて彼を抱き締める。

そうだ、先に謝っておかなくちやね。

ごめんね、まさと君。

絶対に、
放してなんかあげないから。

バスケット部JCは襲いかける

今日は金曜日。

最近の私にとって一週間で1番楽しみな日。

中学校生活が始まって2ヶ月が経ったけど、学校よりも楽しみにしちゃってることがある。

(今日はお兄さんとたくさんバスケットできるといいな♪)

そう。公園でのお兄さんとのバスケットの時間。

先週はちよつと色々あってあんまりバスケットできなかったし……今日こそはたくさんバスケットをしよう。

今はお昼休み中。バスケット部の皆と、部活で使うバスケットボールを雑巾で磨いていた。

今日は部活がオフだけど、先輩から指示があつて、こうして私達1年生はボールを磨くことになった。

全然これくらいは苦じゃないんだけど、同級生の子達は不満を言ってる子も多い。

でも私にとつてみれば後は、このあとの5時間目を終えれば、私は公園に行くことができるからね！

へっちやらかな！

「ねえ由佳」

「んー？」

隣で一緒にボールを磨いていたりかちちゃんは、つまらなさそうに私に話しかけてきた。

「最近金曜日どこ行ってるの？」

「……あくえつとく……」

なんか最近すごく聞かれる。昨日も聞かれたし。

なんでだろう？ やっぱうきうきしてるのバレてるのかな……？

「ねえ、はつきり言つてほしいんだけどさ……男でしょ」

「ち、ちちがうよ?!」

「あく動揺してる〜！やっぱり男なんだ〜」

「え?!なになに由佳彼氏できたの?!」

「皆由佳に彼氏できたらしいよ!」

「違うってば!!!」

もー急にやめてほしい!

顔が熱くなる。お兄さんとは別にそういう関係じゃないし……。

健全に、そう健全にバスケ教えてもらってるだけで。

「最近やっぱりおかしいと思ったのよね!由佳金曜日は一目散に帰っていくし!」

「あの由佳が彼氏できたなら納得だわ〜むつつりだもんね由佳」

「ねーやめてよそんなんじゃないって!」

彼氏、彼氏か……。

もし、もしお兄さんと付き合えたら……どんなに嬉しくて、素敵なことなんだろう。

考えただけで、胸がドキドキする。

「あくニヤけてる!やっぱり男なんだ!もー許せない皆で今日由佳についていこ!」

「いいねいいね!どんな男なのか気になるし!」

「や、やめて!それだけはダメ!絶対ダメ!!!」

お兄さんはカッコ良い。いや、カッコ良すぎる。

多分皆ついてきたらカッコ良いと思っちゃうし、これからも来る子がいて全くおかしくない。

それにお兄さんは優しいから増えても教えてくれちゃいそうだし……。

「なに?その楽しそうな話。私達も混ぜてよ」

空気が、凍った。

恐る恐る後ろを見ると、体育倉庫の入り口に、2年生の先輩2人が立っている。

よく見ると、その後ろには2年生でカツコ良いと言われているバスケ部の男の先輩もいた。

「「お、お疲れ様です」」

「はいはいお疲れ。で？なに？由佳彼氏できたの？」

「……………いえ、誤解、です」

この2人は、1年生の指導係になっている先輩で、正直、あんまり好きじゃない。

怖いし、威圧的な人達だ。

「ふくん……………ま、だろうね。その男もどうせ不細工だろうし」

「……………ッー」

お兄さんは不細工なんかじゃない——!!お兄さんをバカにされるのだけは許せない。

言い返そうと思ったけど……………後ろでりかちゃんが見えないように私の制服の袖を引っ張っていた。

落ち着いて、ということなんだろう。

「ボール磨き、終わったの？」

「もう、終わります」

「あつそ。明日部活始まるときチェックするから。汚れあつたら許さないからね？あと由佳」

名指しされ、先輩と目が合う。

先輩はすたすたと近づいてきて、威圧的に私を見下ろした。

私の耳もとで、静かに言い放つ。

「——スタメンとったからってあんま調子乗らないでね」

「……………」

「じゃ、私ら帰るから。——ごめんねけんじ時間とらせて。ほら、行っか？」

先輩2人は男子の先輩を連れて帰っていく。

私は怒りをなんとか飲み込んで……………息を吐いた。

「由佳大丈夫？」

「ほんつときいってーだよねめる先輩」

「なにあれ。わざわざ見せつけるように彼氏つれてきて。マジでキモいんだけど……」

私がスタメン……試合に出られるようになってから、異様につつかかってくるようになったため先輩。

きつと自分がスタメンじゃなくて、1年生の私がスタメンになったからつまらないのだと思う。

それにしても。

(お兄さんを……バカにしたな……!)

私はどう言われたって良い。

けれど、お兄さんをバカにされたことだけは許せなかった。

学校が終わって。

昼休みにちよつと嫌なことはあつたけど、その程度でお兄さんとの時間への楽しみは薄れない。

さつそく家に帰ってきて公園に行く準備をする。

お兄さんに借りたタオルも……返さなきや。

タオルをバッグに詰める。

もう私の家で洗濯してしまったからお兄さんの良い匂いはしない……と思いきや、微かに香りが残っていた。

お兄さん、恐るべし。

最後にちよつとだけ。ちよつとだけタオルを顔に押し当てて……。

(ふわあ……)

だ、ダメだ。溶けるこれ。

洗濯後でこれなのだから、洗濯前にあんなことやこんなことをしてしまった私は誰も責められない。うん。絶対そう。

「なにしてんの?」

「うわあ?!お母さん急に入ってこないでよ!!」

「いやあんたが水筒作ってって言ったから……」

お兄さんの香りに包まれてたら、お母さんが部屋に入ってきていた。

あ、危ない危ない。トンでる所を見られたら流石に恥ずかしすぎる。

「じゃあ行ってくるから!!」

「あ、ちよつと由佳くー!」

お母さんの声も聞かず、私は勢いよく出ていった。

お兄さんが待ってるんだ!ほんつとーに楽しみ!

「あのコ、天気予報ちゃんを見たのかしら……」

「お、お兄さん今日こそはこの場所を譲ってもらいます!!」

「お、来たなく由佳ちゃん」

15時過ぎ。

やっぱりもうお兄さんは先についていて、準備運動をしていた。

今日のお兄さんの恰好も素晴らしい。白のTシャツに黒の半袖シャツ。

今日はちよつと涼しい方だから、これくらいの清涼感が見ている気が良くて。

すっかり動きやすい緩めのズボンも、お兄さんの身長にマッチしていてカッコ良い。

……そういえば、由佳、ちゃんか。呼び捨ての方が、親密な感じが嬉しかったけど……。

ワガママ、かな。

私は、ちよつとだけ勇気を出してみた。

「あ、あのー！私達は敵同士ですので、な、情けは不要です。由佳と、どうぞ呼び捨てにしてくだ、さい」

ど、どうかな。なんか武士みたいになっちゃったけど、ギリ自然じゃない？

恐る恐るお兄さんの表情を伺うと。

「ふふふ……あはははは！確かに、確かにそうだね！よーし由佳。今日もこの場所は俺のものにさせてもらおうぞ？」

——ッ！やった！嬉しい!!それに、笑顔のお兄さんも眩しい!かっこ良い!!好き!!

思わず小躍りしてしまいそうになる。

「で、では早速……」

「こーらダメだ」

「え？」

私がボールを鞆から出して、さっそくバスケットをしようとすると、お兄さんが立ち塞がった。

「先週のこと、もう忘れたの？準備運動！今日はちゃんとしないと勝負はしませーん」

「……は、はいそうでした！」

手でバツテンを作るお兄さんも素敵……可愛い……。

じゃない。確かにちゃんと準備運動しないと。

屈伸運動、ストレッツチ。入念に私は準備運動を開始する。

その間もお兄さんはゴールに向かってシューティングをしていた。

本当に、柔らかなボールタッチ。

綺麗なシュートフォーム……。思わず見惚れちゃう。

カッコ良い横顔を見て……昼休みに先輩にバカにされたのを思い出してイラつとしてしまった。

でもいいんだ。あの先輩は私がこんな素敵なお兄さんとバスケットをしているなんて思いもよらないだろうから。

私は、勝手に優越感に浸るのだった。

「——ふっ！」

「おっ……マジか」

ゴール下までなんとか持って行って、シュートフェイクからピポットでターン。なんとかお兄さんのブロックをかわした私が放ったシュートは、ゴールに吸い込まれた。

「……よしっ！」

「いやマジか……本気で止める気だったんだけどなあ……」

お兄さんのバスケットは本当に楽しい。もちろんお兄さんのカッコよさにドキリとしちゃうこともあるけど、純粹に私はこのバスケットが好きだった。

お兄さんも、もちろん身長が私より高いのもあるし手加減はしてくれていると思うけど、私がギリギリ点をとれるかどうかの力加減で相手をしてくれる。

「本当に由佳どんどん上手くなるね……そのうち本当にこの場所取り返されちゃうかもな？」

「はい！絶対に取り返します！」

正直、取り返すつもりなんか全然ない。

いつまでもこの時間が続けば良いと思う。

「じゃあ、次は俺のオフエンスだな」

「はい。来てください！」

ボールを渡して、私がディフェンスの姿勢を取る。

——と、その時。

ポツ、ポツ。

私の頭に、冷たい何か。

あれ？

「おろろ？」

「お兄さんも頭を上げた。

バスケに集中しすぎて全然気にしてなかったけど。

あたりが急激に暗くなっている。

雫程度だったその感覚は、次の瞬間。

バケツをひっくり返したような量の雨が降ってきた。

「おわあ?!」

「きゃー?!」

お兄さんと私は、すぐに避難する。

まずはボールを鞆につっこんで、鞆を頭の上に持ってきて一時的に傘代わりに。

もー！雨降るなら折り畳み傘もってきたのに！

「由佳！あそこ行こー！」

「はいー！」

お兄さんが指さした先……そこには屋根がついている休憩所みたいなところがあった。

走ってお兄さんと私は避難する。

「ふー……まさかこんなに降ってくるなんてね」

「はあ……はあ……そう、ですね」

なんとか避難こそできたものの、一瞬で全身びちょびちょ。

靴下もずぶ濡れで、靴の中が気持ち悪い。

「タオルタオル……ふー由佳は大丈夫？タオル持ってる？」

「はい、持ってま」

思わず、言葉が止まった。

今日はお兄さんに借りたタオルの他に、ちゃんと自分のタオルを

持ってきた。

それはいい。

それよりも――

(お、おとおおお兄さんちよ、ちよちよちよちよちよとシャツの下透けすけ、すけけけ)

お兄さんも私と同じようにずぶ濡れで……白いTシャツの下……肌が微妙に透けている。

え、えっちすぎる……ちよつとまって。髪もいい感じに濡れてて、色気が、色気がすごい！え、もしかして、これっていわゆる、事が起きる前???

「はくどうすつか流石にこれじゃ無理よなあ」

「……」

「由佳？」

あ、頭に入らない。

なにも頭に入らないよ!!

待って、呼吸が荒くなってしまう。

まずい。こんなことでお兄さんを性的に見ていることがバレてしまったら……! !

『え……キモ。二度と俺の前に来ないで』

(し、死んでしまうよそんなこと言われたら……! !)

人生終わりだ。そんなこと言われてしまった日には。

絶対に、絶対に見てはいけない。

誘惑はある。けどこの程度の誘惑……ッ!

「……? 本当にどした? 由佳。体調悪いのか?」

「……っ!!」

て、て、おてて、おてておてておてて。

お兄さんの柔らかくて大きなおててが、私の額に当てられているっ

!!

距離が近い!! 雨に濡れた色っぽいお兄さんが近い!!!
やめて!! 心臓が!! 心臓が爆発する!!!

「熱は無さそうだけど……そうか、だいぶ冷えたもんな……あ、そう
だ」

お兄さんはなにかを思い出したように自分の鞆を引っ張り出した。

「これ、着てて。半袖だからあんまりかもだけど。マシでしょ多分」
「え……」

肩にぱさつと。

お兄さんの、半袖の上着。

来るのときに見た、お兄さんが着ていた服だ。バスケット始めてから確
かにしまっていたけれど……。

「ごめんな。これくらいしかないわ……ちよつと雨マシになるまで
待とうか」

「……はい……」

心臓が鳴りやまない。隣にはすけすけのお兄さんで、自分の身体は
お兄さんの服に包まれていて。

私の全てが、お兄さんにどんどん染められていくような気
がして。

「あ、由佳ごめん、ちよつと向こう見てて?」

「え……?」

「流石にこれはヤバイのか……? まあでも見られなきや問題ない
よね? 多分。ええやろ」

な、なんだろう。

と、とりあえず言う通りお兄さんがいない方向を向いた。
やっぱりまだドキドキするけど。

すると。

ばさつと、衣擦れの音がして。
ぎゅつという何かを絞る音。
続いて、水が滴る音。

え？

「うつわこんなに水吸ってたかあ……一回絞るだけでこれとかヤバいな……んく替えのTシャツ持ってた気が……」

え？

も、もしかして、お、お兄さん。

服、脱いでませんか？

「えくつと確かこの辺に……」

ドクンドクンドクン。

私の心臓が過去最大に鳴っている。

ちよつとまって。今振り返ったら、は、裸の、お兄さん???
え、え、え。

見ていい？見ていいよね？

だって、ほら。不可抗力！これは不可抗力だから。

見ない女なんていないから！

お、お兄さんの肌。生の、肌。

おそるおそる、振り返る。

鞆の方に向いていて、こっちは向いていない。

背中が、視界に映る。

綺麗な、肌色の、引き締まった背中……。

お兄さんの匂い。

お兄さんの肌。

「はあ……はあ……!」

お兄さんの匂い。

あたまがくらくらする。

いいよね。もう、ごーるしてもいいよね？

このうしろからがばってだきついてほっぺすりすりしてもだれも

もんくいわないよね???

ぺろぺろしちやつてもだれももんくいわないよね???

だっていまだれもみてないもんね???さいごまでしちやつてもいい

んだよね??

「お、あつたあつた。よかつた替え用意してて……つて由佳?!」

あ……意識が……。

へたれでごめんなさい。最後にお兄さんの肌堪能したかったな
……。

新しいシャツに身を通して私の肩をゆするお兄さんの姿を最後に、
私の意識はまた途切れたのです。

文学少女JKは不思議な子

「ふわぁ……」

気持ちの良い日の光と、鳥のさえずりで目が覚める。

大きく伸びをしてから時計を見れば、時刻は午前10時をさしていた。

早起き……とは到底言い難いものの、前日午前1時近くまでバイトして、そこから帰って寝たのは深夜2時過ぎとかなので許して欲しい。

今日は土曜日。

大学の授業は無く、午後から家庭教師の予定が入っているだけだ。

「昨日は色々あって疲れたしな……」

由佳とバスケットしてたら大雨が降ってきて、一時的に避難したと思ったら由佳が何故か気絶してしまつて。

起きるまで大変だった。とはいえ雨でやることもないし、タオルもなかったので申し訳ないけど俺の膝でも使ってもらおうかと思つて膝枕してたら起きた瞬間にまた意識失うし。

うくん、最近の女子中学生は難しいな。やっぱ膝は良くないか……今度からはやめてあげよう。

「今日はなにすつかあ……」

お腹がすいたので冷蔵庫を開けてみる。

ああ、藍香さんが余つたからつて持つてきてくれた煮物がまだあるわ。んじや煮物と……ベーコンと卵があるからこれでいいや。

味噌汁はインスタントでええやろ。

フライパンにオリーブオイルを少量引いてから、ベーコンをぶち込む。

そのタイミングで、そういえばまだ見てなかったな、とスマホを開いた。

「んあ……?」

あれ、どうやら通知が来ている。

《望月星良》『今日はありがとう』

《望月星良》『また必ず行くから』

《将人》『は〜い！待ってますね！』

《望月星良》『そういえば、まさしくんって本名だったのね。まさかそんなひよろひよろの名前が本名だと思わなかったわ笑』

《望月星良》『ごめんなさい。ちよつと失礼だったわね』

《望月星良》『あの、怒ってる……？ごめんなさい』

……。

いや寝ただけけども。

昨日星良さんとその先輩が来て、先輩がゆうせーさんと連絡先交換してるってのをずっと羨ましがってたから俺も連絡先交換してあげただけど。

俺は昨日この『は〜い！待ってますね！』を送って寝た。

その後のメッセージが30分後で……その次が1時間後で、更にその次が1時間後。

え？いや寝てよ。

全然怒ってないしそれくらいいつも言ってるじゃないスカ。

と、とりあえず返信するか。

《将人》『ごめんなさい！すぐ寝ちゃいました！』

《将人》『全然気にしてないっすよ！笑 そうっす名前も身体もひよろひよろなもんで！笑』

ま、こんなところやろ。

最近辛そうな表情ばっか見てたから、連絡先教えてあげてすげー嬉しそうにしてくれたのは良かった。

『え……いいいの？』

『嬉しい……お店行く時は連絡するね』

昨日の星良さんのその時の笑みといたら。

やっぱ美人には笑っててもらわないとね。

……なんか若干目が怖かったような気もするけど気のせいやろ。

フライパンに卵を投下。

これで目玉焼きとベーコンは完成。

あ、お湯沸かしとくか。インスタント味噌汁用に。

——ピロン。

ん？通知か。

星良さんだったら早いな。土曜日くらいゆっくり休んでればいいのに。

あ、恋海かもな。恋海ともやりとりが続いてた気がする。

もう一度スマホを開いてみた。

《望月星良》『良かった』

《望月星良》『それじゃあ私寝るわね、おやすみなさい』

……???

え、今から寝るの？

え？つてかずつと起きてたの？

なんで???

あ、そうか。あの後2件目とか行ったのかな？はしごかな？

んで朝帰りして、家帰ってきて……。

いやでも10時になる、か……？

まさかと思うけど俺の返信待ってたとかないよな？……無い、よな？

……怖いマヨ。

ベーコンは焦げた。

「こんにちははく片里です」

「はいいらっしやい！もう汐里は上にいると思うから、上がったちゃって！」

「ありがとうございます」

午後3時。

土曜日は毎週汐里ちゃんの家教師だ。

まだ日は浅いものの、幸い汐里ちゃんの成績も少しずつ伸びてきて安心している。

全く成績伸びなかったらすぐクビになりそうやしね……。

階段を上がって、汐里ちゃんの部屋の前。

トントン、と2回ノックした。

「汐里ちゃんこんにちは。片里です」

「……どうぞ」

扉を開けると、いつも通り優雅な姿勢で椅子に腰かけている汐里ちゃん。

今日は小さな花柄を随所にあしらったロングスカートに、トップスは白の引き締まったブラウス。

彼女のお淑やかな感じと相まってとても似合っている。

「こんにちはは！元気してた？」

「ふふふ。はい。とつても元気ですよ。将人さんもお変わりないよ
うで」

「そだねーでも昨日なんか急な大雨に打たれちゃってさ、大変だっ
たよ」

鞆を降ろして、教材を引っ張り出す。

「昨日はすごい雨でしたね……外にいらつしやったんですか？」

「そーそー。外でバスケットしててさ。もうびしょびしょだったよ！」

「本当に洗濯が大変だったくらいにはね！」

「びしょびしょ……」

「ん？」

汐里ちゃんが顎に手を当ててなにか考えている。

どうしたんだろう？

「……すみません、もう一度言っていただけですか？」

「え、え？えつと……びしょびしょだったよ？」

「……ありがとうございます」

え？何が??

汐里ちゃんはたまによくわからないんだよなあ……不思議ちゃん
というかなんというか……。

授業を始めて1時間ほどが経った。

1つ目の科目である英語が終わり、休憩中。

「よし。いい感じだね汐里ちゃん！この調子なら中間もいい感じになるんじゃないかな？」

「ありがとうございます。将人さんの、おかげです」

汐里ちゃんのお母さんが持ってきてくれた麦茶を飲みながら、俺は汐里ちゃんのテキストの結果を見る。

うんうん。悪くない。初めて来たときよりだいぶ成績が上向いている。

ってかやれば元々できるタイプの子だったんじゃないかなあ。俺の授業が特別上手いとはとても思えんし。やる気の問題な気はする。

「ところで将人さん」

「ん？」

コホン、と一つ咳払いの汐里ちゃん。

「最近、うちの学校でカップルなるものが誕生しましてね」

「お、おう。言い方どした？」

高校生なんだし、変な話ではないだろう。最近は中学生でも付き合うのなんか当たり前だと聞くし。

「私はもちろん、もちろん彼氏はいないんですが」

「あ、そうなんだ。いてもおかしくなさそうだけどね」

「……それはどういう？」

「え？いや普通に汐里ちゃん綺麗だし」

普通に綺麗じゃない？最近は容姿に力入れてる感じするし、もともと顔立ちが整ってるのもあって魅力が増してきたような気がする。

「……ちゅぷ」

「え？」

「コホン。いえ、すみません」

なんか今すごい音聞こえたけど……気のせいかな？

汐里ちゃんが改まって、俺と視線を合わせる。

「そうおっしゃられるのでしたら、将人さんこそ彼女さんいらっしやるのでは？」

「え〜いいいよ？普通に」

「……本当ですか？」

「え？うん。本当だよ？」

何故か汐里ちゃんが後ろを向いた。

「っし!!」

「え？」

なんかすごいガツツポーズ見えたけど。

なに???俺が彼女いないのそんなに嬉しい???

ざまあ!的なの?!

「失礼いたしました。てっきりいらっしやると思ってまして」

「そんな簡単な話でもないさ」

彼女とかいたら楽しそうだなとは思っけどね。

今はどっちかっていうとちゃんとお金稼いで藍香さんに恩返しせんと。

「……では将人さんは、どのような女性が好みなのでして？」

「んーそうだなあ……」

いざ言われてみると難しい。

容姿に特にこだわりはないし……もちろん清潔感が無かったり、容姿に努力をしていないのは若干嫌だけど。

あ、でもそうだな。色んな場所に行ったりとか色んな趣味を共有できる人がいいかも。

「まあでも、明るく話せて、色んなことを一緒にできる人がいいな」

「色んな事?!」

「お、おう。どうしたのそんなに声荒げて」

「それはつまり、あんなことやこんなことの色んな事……ですか?」

???あんなことやこんなことってどんなこと???

……アウトドアな趣味もインドアな趣味も、つてことかな?

「よくわかんないけど、そう、かな?」

「……!・そんなんですね……!」

なんか顔を赤くして後ろ向いてしまった。
いったいどうしたというのだろうか。

なんか答えまじったかな。

「落ち着け。びーくーる。私は今クールな女。ハイになっちゃいけない。鎮まれ……鎮まれ内なるリビドー……!!」

……なんかぶつぶつ言ってるけどあんまり聞こえない。
なんか気分を害しただろうか?

しばらくすると汐里ちゃんがこちらに振り返った。

ゆっくりと深呼吸して、真剣な瞳でこちらを見ている。

え?・なんかそんな真剣に話すようなことだった??

「将人さん」

「ど、どうした?」

「私、こう見えてそっちの体力には自信があります」

「……え?」

そっちってどっち?

幼馴染系JDは紹介する

みずほがこっぴどくつられた翌日のこと。

私はみずほが落ち込んでるかなと思いついて、今日は帰りにアイスでも奢ってやるかという意気込みで大学に来た。

でも私のその気遣いは、朝イチで必要なかつたことをわからされる。

「だからこれは運命の出会いってわけ!!」

「みずほそれも今日5回目」

「全員に同じ話してない??」

サークルの友達数人と一緒に、今日何度目かわからないみずほの惚気(?)話。

朝から違う友達来るたびに話すもんだから、最初から一緒にいる私はどう何度聞いたかわからない。

「いやゝあるんだねえ運命ってやつは! 人生わからないもんだよ!」

「はいはい。でもその人と会えるとは限らないわけでしょ?」

「いや探すね! もー彼を求めて三千里! どこまででも探しちゃう! 地球の裏側まで行っちゃうね!」

「みずほ一里って何mか知ってるの?」

「……え? ……100mくらい?」

ペろりんつと舌を出すみずほが愛らしい。

みずほはけらけらと笑い、周りもそのみずほの笑みにつられて笑っている。

まあ元気になってくれたなら良かったかな。

正直、あの告白の直後は見ていられないほどつらかったから。 ……なんて、覗きに行った私が悪いんだけど……。

「じゃー私ら次こっちだから! じゃあね〜!」

「じゃああ〜! あ、私の運命の人見つけたら情報求む!!」

「そんな薄っぺらな情報じゃ見つけようがないよ……」

ビシツと敬礼するみずほに、苦笑いの友人達。

次の授業は私とみずほが同じ教室だ。

渡り廊下を歩く。窓からの陽光が気持ち良い。

そんな中隣を歩くみずほは、鼻歌混じりで上機嫌。

「でもよかつたよ。なんだかんだみずほが本気になれそうな相手を見つけたのって初めてじゃない?」

「いや〜そうでござるなあ〜。人を好きになるって、こういうことなんだね、なんちやっつ〜!」

「まったくもう……」

事の顛末は朝一番に嫌というほど聞いた。

みずほがコンタクトレンズを落としちゃったのを探すの手伝ってくれた上、見つけたコンタクトをハンカチの上に乗せて返してくれたらしい。

指輪かな?

正直そんな優しい人ならとくに彼女の一人や二人いそうなものだけど……。

今の状態のみずほにそんなこと言うのは流石に野暮だよね。

「と、いうことでワトソン君」

「誰がワトソン君よ」

「いいからいいから!ワトソン君にも私の運命の相手探しを手伝ってほしいのじゃ!」

「いいけど……仮にうちの大学の新生だったとして、候補2000人くらいいるんだよ?」

みずほ曰く、その彼が落としたボールペンが、うちの大学で今年の新入生に配られるボールペンだったらしく、1年生の可能性が高いとのこと。

確か新生生の数は1万人ちよつとで……うちの大学は男の子がちよつと多めだった気がするから多分2000人くらい。

そこから絞るとなると、かなり難しい。

しかもみずほはコンタクトが外れてた上に泣いてたから相手の顔をほとんど覚えていないと来た。

私達の交友関係だけでは限界がある気がする。

「ちつちつち……諦めたらそこで試合終了だよ?」

「なんで私が咎められてるのかなあ……?」

余裕そうなみずほの表情。

なにか秘策でもあるのだろうか?

「会えばきつと思ひ出す!!オールバックだったし!」

「髪型かあ……」

みずほの話によると、その男の子は髪型がジェルで固めるタイプのオールバックだったらしい。

確かに珍しいっちゃ珍しいかも?

けど毎日そうとも限らないし……。

「このハンカチを返して……私は伝えるのだ!あの時助けてもらった鶴です!恩返しにきましたってね!」

「昔話始まつとるぞ〜」

大事そうに握りしめているハンカチは、その彼からの借り物らしい。返さなくていいって言われたみたいだけど、みずほは会って返すと意気込んでいる。

と、その時。

ピロン、と。

私のスマホに通知。

《将人》『それはたしかにそう笑』

《将人》『恋海今日の3限一緒に受けられそう?』

あ……そつか、次の3限は最近是将人と一緒に受けている授業。

今までは、みずほには申し訳ないけど将人と受けていた……けど。(今までは、将人がカツコ良すぎて惚れられちゃうとちよつと困るからなるべく友達は遠ざけてたけど……みずほはもう大丈夫ってことか)

言うまでもなく、隣で上機嫌に歩くみずほはその例の運命の相手とやらの夢中だ。

将人は私以外に大学の友達がいなさそうで可哀想だなとは思っていたし……これはいいチャンスなのでは?

「ねえ、みずほ。良かったらさ……次の授業、将人と3人で受けない？」

「え？いいの?!いやー会って話してみたかったんだよねー!恋海のびっぴー!」

「だから彼氏じゃないって……!会っても変なこと言わないでよ?」

「言わないでござるよう!ちゃんと恋海の良いところ宣伝大使になるからさ。任せてよ!」

ドン、と胸を叩くみずほ。

全然胸がないのも相まって可愛らしい。

「でもなんで?どんな心変わりでござるか?」

「いや、だってみずほ今その運命の人とやらにお熱でしょ?それくらい恋する相手いないと危険だよ将人の相手は。もう会って30分話したら好きになりかねないよあの超絶イケメン」

「……恋は盲目、か」

「あ、バカにしたでしょ」

微笑ましいものを見る目で見てくるみずほ。

いや本当に将人は破壊力抜群なんだって。あそこまで完璧な男の子他に知らないもの。それこそ昔私が好きだった——ってそんなのはどうでもよくって。

「安心してほしいでござる。私は今、あの運命の人を探すのに必死!その将人君にはちゃんと恋海売り込んどくからさ。さっさと告白しちやいなよ」

「もー余計なお世話だつて!!」

本当に余計なことを言いかねない。大丈夫かなあ。

とりあえず私は将人に返信。

《恋海》『おはよ!』

《恋海》『一緒に受けられるよ!それで私の親友も一緒に授業だからさ、将人がよければ3人で受けない?』

学内にいることもあつてか、私がスマホを閉じるより先に、すぐに返信が返ってきた。

恋海と一緒に、教室後方の席を確保。

大学の席確保は弱肉強食……！すまんまだお昼ごはん中の皆……。現実は無情なんだよ。ヨヨヨ……。

「将人もうちよつとでつくらしいから私教室前に迎えに行くね」

「ほいさー！いつてらっしやいませー！」

恋海が教室の外に行くのを見送って、今度はボールペンの方を取り出した。

「1年生……じゃないってこともあるのかな？」

このボールペンのデザインになってから配られたのは今年が初めてのはず。

だから基本的には1年生が持っていることが多いけど、教職員の人達がいる棟に行けば、手に入らないことも無さそう。

ってことは、1個か2個……または3個上つてこともあるのかな？
年上っぽかったし。

まあでも正直、年齢もどうでもいい。

あの時のことを、思い出す。

『すみません！ちよつとコンタクト探してますので！』

『はい。気をつけてね』

『あ、このハンカチは別に返さなくていいから。じゃー！』

あの眩しい笑みを、思い出す。

(カツコよかったなあ……)

あんなことされたら、誰だつて好きになる。

顔は確かによく見えなかったけど、もう顔なんて気にならない。

あのやさしさと、笑顔に触れたら、顔なんて関係ない。

(願わくば目に焼き付けたかった……ヨヨヨ……)

机に突っ伏す。

泣いてなければ……いやでも泣いてなかったらコンタクト取れないか……。なんて。

思い出すだけで、胸がきゅんとする。

(うん。やっぱり絶対にもう一度ちゃんと会いたい。お礼を言っ

て、それで……)

会えたら、どうしよう。

すぐに好きですなんて言っても不審がられるだろうし……。

まずはお友達から？なんか下心ありそうに見えるよね。

とにかくお礼を伝えたくて。

あなたのおかげで、私はどん底から救われましたって。

……ちよつぱり重いかな？

でもそれくらい感謝してるし……憧れちゃってる。

だからちよつとだけ重くても、許して欲しいな。

「にへへ……」

まずい。だらしのない顔をしているかもしれない。

恋海の『お気に』と会うのに、変な人扱いされたら悲しすぎる！

もしかしたら男子ネットワークで、私の運命の人探しに協力してく

れるかもしれないし……初対面の印象は大事！

授業開始10分ほど前。

恋海が教室に入ってくる。後ろには、男の子の姿があった。

あー恋海の顔完全に恋する女の子ですね。ってかやっぱカッコ良
いっほい……？身長もそこそこあるし。

入ってきただけで教室の周りの女の子達がちよつと振り向いてる。

そりゃ恋海も心配になるわけだ。

そうしている内に、恋海とその男子が、私のところまでたどりつ
いた。

「はいーってことでこれが私の親友の戸ノ崎みずほ！んで、こっち
がえつと……と、友達の片里将人！」

恋海の後ろから。

ひよいつと顔を出すイケメン君。

「こんにちは！恋海からちよいちよいい話は聞いてたよ！よろしくね

!

……あれ？

元気っ娘JDは紹介される

いよいよ季節は夏を迎えるということもあり、朝は暑さのせいで起こされることも多くなってきた。

俺はいつものように寝ぼけまなこをこすりながら、だらだらと遅い朝食兼昼食を頬張り、大学へ行く準備を整える。

今日の3限は恋海と一緒の授業だから、早めに行かないとな。

いつも席取ってもらうの悪いし。

そう思つて鞆に荷物を詰めこんでいると、唐突に家のインターホンが鳴り響いた。

「おーい将人いるー?」

「あら、藍香さんや」

今や俺の保護者代わりとなつて久しい藍香さん。

たまに夕飯提供してくれるし、相変わらず頭は上がらない。

「はいはい！おはようございます」

「おーおはよー。多分将人が前暮らしてた施設からなんか荷物届いたよ。ほい。この段ボールに入つてんの全部そうだから」

「おお、ありがとうございます」

正直、この世界の俺が今までどんな人生を送つてきたのかはわかつていない。

多分、前の世界の俺とこの世界の俺が、入れ替わつた……みたいな状況なんだろうけど……。SFは苦手なんや。よくわからん。

前の世界でも今の世界でも、両親はいないっぽい。そこは変わらないうよう。

一人っ子で親戚もろくにいなかったから身寄りがなく、養護施設的な場所で暮らしてた。んで、高校卒業を期に施設も卒業だったんだけど、奨学金で大学行こうと思つた矢先に転移。

この世界の俺も、前の世界で藍香さんみたいな人に会えてるといいけど。流石にそんな上手くはいかないか。

藍香さんが啞えていた電子タバコを口から離し、空に息を吐く。

「……ま、私は将人がどんな過去抱えてようが、面倒見るって決めたけど。もし施設戻りたいとかあったら言っただけね」

「いえー！そんなわけないっすよ。ほんと、藍香さんには感謝しかないんで。大学も卒業したら、必ず恩返しします」

「ふふ。楽しみにしてる。とりあえず今は大学生活楽しみなうその後のことは、またその時考えればいいさ」

「はいー」

ひらひらと手を振って、藍香さんは帰っていく。

本当にありがたい話だよなあ……マジで恩返ししないと。

……でも恩返ししてもしかして『Festa』でナンバーワンになることなのか……？それは俺にはちよつとハードル高いぞ……？

段ボールを抱えて、俺は家に戻る。

「よいしょ、と」

カッターを使って、段ボールのフタを開いた。

中にはごちゃごちゃと色々な物が詰まっている。

「懐かしい、と思うものもあるし、見たことねーってのものもあるな……」

そこは転移したからの違いなんだろう。

使っていたボロボロのバスケットシューズとかは同じでなつかしきがあるが、もらった手紙？みたいなやつは見覚えがないものも多い。こんな手紙ももらったっけ？

施設暮らしたったとはいえ、学校は行っていた。友達とか、元気してるんだらうか。

「ん……？」

ほとんどが見覚えのない手紙類や参考書。

それらをかきわけていると、見覚えのあるものが目に入った。

野球の小さいグローブと柔らかいゴムボール。

「うわあくなっつかしくよくキャッチボールしてたんだよなあ……」

——ふと、そこで考える。

確かに、幼少期に頻繁に公園でキャッチボールをしていた記憶はある。

けれど、そもそも誰とキャッチボールをしていたんだっけ？

「んー……う？つてやべー！時間が！」

なつかしさに浸っていたい気持ちもあるが、このままでは大学に遅れてしまう。

段ボールはまた丁寧に蓋をして、押し入れにしまっておいた。

「将人く！おはよっ！」

「恋海おはようごめんねいつも席とってもらっちゃって」

「んーん！全然！私2限から来てるから大丈夫！」

大学に着くと、恋海が俺を出迎えてくれた。

今日はスクエアネックタイプのTシャツに、薄いレース生地の上着を羽織って、下は白のショートパンツ姿の恋海。

恋海と結構な頻度で会っているけれど、毎日様々なコーディネート

をしてくるあたり、オシヤレにはかなり気を使っているんだろう。

なにやら今日は、恋海の友達を紹介してくれるらしい。

確かに最近は俺と一緒に講義を受けてくれるものだから、恋海自身の交友関係がおろそかになっていないか心配だった。

なら、俺が恋海の友達と仲良くなつて、両立できるのが一番良いと思うし、俺としては大歓迎。

「でもよかった。恋海が最近友達とちゃんと楽しくやれてるか心配だったからさ」

「もーなにそれ！お母さんみたいな言い方やめてよー！」

「いやいやそうじゃないけどさ！でも俺も恋海の友達と仲良くなれるように頑張るよ」

これで俺が嫌われたら元も子もないからな……気を付けていかな
いと。

くるりと、恋海が俺に背を向ける。

「……あんまり仲良くなりすぎても、困っちゃうんだけどね……」

「ん？なんか言った？」

「んーん！なんでも！」

なにか小声で呟いていた気がするが、よく聞こえなかった。

とりあえず先行する恋海についていく形で、教室に入る。

すると後方奥の方に、一人の女の子の姿が見えた。

お友達はあれ、かな？

その少女の元まで、俺と恋海がたどりついた。

「はいーってことでこれが私の親友の戸ノ崎みずほ！んで、こつち
がえつと……と、友達の片里将人！」

椅子に座ったままの少女——みずほちゃんは、きよとんとした顔で
こつちを見ていた。

目はぱっちり大きく、低い位置で結んだツインテールが、彼女の
幼い顔立ちと相性がとても良い。

あどけなさも若干残るタイプの可愛い子だな、と思った。

「こんにちは！恋海からちよいちよい話は聞いてたよ〜よろしくね！」

「……」

「……あ、あれ？ファーストコンタクト失敗??」

挨拶なんかまですったかな？

「みずほ?」

不思議に思ったのか、恋海もみずほに声をかける。

「おおお!!これは失敬！あなたが将人さん！恋海殿から話は聞いてますぞ〜！」

「あ、え、そうなの?」

「もちろんもちろん！いや〜！それにしてもびっくりしました！確かになかなかのイケメンでござるなあ……」

「みずほさつき言ったこと本当にわかってるよね……」

「おお怖い！悪かったってば〜！」

おお、よかった。かなり明るいタイプの子だね。

みずほちゃんほうんうんと頷きながら俺の方へ手を伸ばしてきた。

「今ご紹介に預かりました、戸ノ崎みずほと申します……以後、お見知りおきを」

「ははは。面白いんだね。俺は片里将人。将人って呼んでくれていいよ」

差し出された手を取って、握手。

華奢な手だ。身体つきも恋海より一回りか二回りくらい小さいからそう思うのかもしれないが。

「将人、みずほのテンションに合わせてたら一日もたないから、テキトーにあしらっちゃっていいからね」

「ガーン！恋海私のことそんな風に思ってたの?!心外でござるな〜」

恋海もこんなことを言いながらも、表情は明るい。

前前から話も聞いていたし、本当に仲が良いんだろう。
うんうん。良いことである。
講義開始を告げる本鈴が鳴ったので、俺たちは席についた。
これからは、3人で授業を受けることも増えるのかな？

5限が終わった。

みずほちゃんと会ってからその後の授業が3人一緒だったこともあり、ずっとそのまま3人で行動している。

「いや〜疲れった〜!!最後の講義、いきなり小テストとかびっくりだったねえ」

「恋海に写真撮ってもらった資料がなかったら危なかったわ……」
教室を出て、帰路につく。もうだいぶ日も傾いている時間だ。
周りも、わらわらと帰っていく学生の喧騒で溢れている。

「あ、やば」

「?どしたの恋海」

スマホを開いていた恋海が立ち止まったので、俺とみずほちゃんも立ち止まる。

「いや教室に忘れ物しちゃったっぽい……取ってくるから、二人は先帰ってていいよ!」

なるほど。けれどまだ教室棟から出たばかりだし、5限の教室は2階なので比較的すぐ戻れる距離。

「急いでるわけじゃないし、全然待ってるよ。ほら、荷物貸して。

持つておくから。みずほちゃんはどうする?」

「拙者ももーまんたい!でござる!待つよ!」

元気よくピースするみずほちゃん。

いちいち動作が激しくて、それが絵になる少女だ。

「ごめん!ありがとう!じゃあちよつと行つてくる〜!」

俺にトートバックを預け、学生が歩いてくる流れに逆らつて、恋海は教室棟へと戻つていった。

「んじゃあ、俺らもそこらへんのベンチで待つてよつか」

「そうでござるね!いや〜それにしても将人殿は優しいでござるなあ〜」

「いやいや、待つくらい全然当たり前じゃない?」

「いやー今拙者は垣間見ましたぞ。将人殿の奥底に眠るやさしさを……」

「大げさだなあ〜」

ベンチに腰掛けて、恋海を待つ。

夕焼けが眩しいけれど、すぐに日は沈んでしまいそう。

授業終わりの学生たちの波もひと段落して、今大学前は比較的閑散としている。

一瞬の沈黙が降りた、その時だった。

「時に将人殿」

「ん?」

一度座つたはずのみずほちゃんが、勢いをつけて立ち上がる。

そのまま俺の正面に立つて、手に持っていた紺のマリンキャップを深く被り直した。

「将人殿に、言っておかなければならないことがあるのです!」

「……うん?」

口調は、相変わらず茶化しているけれど。

深いオレンジ色の瞳は、真つすぐにこちらを見ていたから。

夕日をバックに立つ彼女の姿がとても映えていて、幻想的な空間を
生み出している。

蠱惑的に微笑んだ彼女に、思わずドキツとしてしまった。

「実はですね——」

元氣っ娘JDは我慢する

「こんにちは！恋海からちよいちよい話は聞いてたよ！よろしくね！」

……あれ？

なんかこの声聞いたことあるような……。

恋海から元々聞いてはいたけれど、目の前に立った青年はとてもカッコ良かった。

175cmほどの身長。筋肉質なわけではないけれど、過剰に細かったりするわけでもなく。

白のダボつと着たTシャツに、ワンポイントで首からかけた革製のタイプのネックレスが主張しすぎず良いアクセントになっており。

柔らかな笑みは、こちらに悪感情が一切ないのが伝わってきた。

「……みずほ？」

(……つと、ダメダメ。恋海が好きになった相手なんだし、私には心に決めた運命の人が……！)

これは恋海が惚れるのもわかるなあ、と思っていたら恋海が心配そうに声をかけてきた。

私としたことが！ちゃんと挨拶返さないよ。

「おおお!!これは失敬！あなたが将人さん！恋海殿から話は聞いてますぞ〜！」

「あ、え、そうなの？」

それはもうたっぷりと、ね。

もう最近恋海の惚気話は友人間で恒例行事となりつつある。

きつと大いに色眼鏡が通してあるんだろうと思っていたが、案外そうでもなかったのかもしれない。

言葉を交わす中で、ずっと目の前の青年は笑っている。それにつられて、恋海も笑っている。

ほんとに、眩しいくらい。

(いいな、恋海は。私も、運命の人見つけれたら、こんな風に、なれるかな……?)

今はまだ、会えてすらいないけれど。

あれだけ優しかった人なのだから、それくらい夢は見ても、いいよね？

恋海が教室に忘れ物を取りに行っている間。

そういえばまだお願いをしていなかったと思って、私は将人君に向き直る。

これを伝えておかねば！どこにどんなヒントが転がっているかわかりませんからね！

「実はですね……将人君には、私の運命の相手を探すのを手伝ってほしいのですよ!!」

「ええ?!」

将人君が目を見開いて驚いている。表情が豊かな人だなあ。

「実はですね、事情を深く話すわけにはいかないのですが……私には運命の人がいます。そしてその人はおそらく……この大学の1年生なのです!!」

「ほ、ほうほう……?」

「だから男子である将人君には、よろしければ、その人を探してもらいたく!!」

やっぱ男子間のネットワークとかもあるかもしれないしね……。

「い、いいけどその人はなんて名前なの？」

「知りません！」

「知らないんかーい！」

私が大きく腕でばってんのジエスチャーをすると、将人君もおおげさにのけぞった。反応が楽しいな！

「え、じゃあせめて学部とか、特徴とか……」

「学部もしりません！なんならこの大学の1年生であるとは思いますが、確実ではありません！」

「条件がキツすぎるよ?!」

自分で言っておかしなお願いだな、とは思う。

それでもあきらめるわけにはいかないのです！

「でもその人はオールバックで、身長は……将人君くらいだったかなあ……?」

「ほんほん……オールバックは確かに珍しいね」

そう、普段からもしあの彼がオールバックのだとしたら、比較的早く見つかる気がする！

大学内でオールバックの人あんま見たことないし！

「将人君の男子ねつとわーくを使って是非……見つけたら教えてくださいっ！」

「そりやお役に立てればとは思うけど……」

将人君が難しそうな顔。

やっぱいいきなりこんなことをお願いするのは凶々しかったかな……?」

そう思い、将人君の表情を窺うと。

「俺……友達いないんだよね」

飛び出してきたのは意外な言葉で。

「なんと!!!」

恥ずかしそうに苦笑する将人君。このイケメン、そんな仕草も絵になるのズルいなあ！

「だから、一応そんな感じの人見つけたら教える……くらいでもいい

いかな？」

「真面目っ!!ありがとうございます!ご協力感謝感謝です!」

そういえば恋海が将人君は遅れて入学したから友達が少ないみたいなこと言ってたな……これは申し訳ないことを……。

そんな話をしていると、向こうから小走りで恋海が戻ってきた。

「ごめんありがとう!じゃあ行こうか!」

「ほいお帰り」

「恋海!将人君にも私の運命の人探し手伝ってもらうことにした!!」

「おおく良かったじゃん!将人、なんか思い当たる人いたの?」

「いや、それは全然わかんないや」

恋海と将人を連れたって、駅への道を歩いていく。

なんだかとても、これからは楽しい大学生活になるような気がする!

大学から最寄りの駅までは歩いて10分ほど。

10分なんていう短い時間は、3人で話しながら歩いていけばすぐだった。

「それじゃ私、こっちの電車だから〜！またね！」

「は〜い！また明日！」

「またね〜！」

偶然私と将人君は同じ電車で、恋海だけ別方向。

恋海をホームまで送って、私と将人君は違うホームへと向かう。

そうだ、せっかく将人君と2人になつちやつたし、気になる事聞いちやおう〜と。

「実際、恋海とはどんな関係なんです〜？」

「え？ん〜そんな疑うようなことじゃないよ。友達だよ友達」

「え〜本当かな〜？」

うりうり、と肘で将人君の脇をつつく。

ちよつとでも動揺してくれば、恋海にもチャンスあると思うんだけど……。

「なんだろう、恋海って本当優しくてさ。誰も友達がいなかった俺にこっだけ優しくしてくれて……正直感謝してる。だからなんだろう、裏切りたくないって気持ちの方が強いかな」

「……」

真面目。将人君は大真面目である。

う〜ん、これだと今の所好意に気付いてはもらえてなさそう……？
頑張れ恋海……。

「そんな恋海からずっとみずほちゃんはいいい子だって聞いてたからね。仲、良いんだね」

「なんと！恋海もたまにはいい仕事するなあ！そうです！私は良い子なんです！」

「あはは。自分で言うんかい！」

将人君との会話が心地よくて、楽しくて。

だからだろうか。

油断していた、のかもしれない。

目の前から歩いてくる2人組を見て……私は背筋が一気に凍り付

く。

「……？みずほちゃん？」

とつさに将人君の影に隠れるように後ろに回り込む……けど、もう遅かったように。

「……ん？」

目の前の2人組……それは、私の所属するバドサーの先輩で、私が告白した相手けいとさんと、そのけいとさんと仲が良い、3年生のさつき先輩だった。

気付かれませんように……そう思っていたけれど、通り過ぎる時、けいとさんと目が合ってしまう。

「やっぱりそうじゃん。なんだっけ、戸ノ崎……？みずほとか言っ
たっけ」

「……」

最悪だ。

よりにもよってこんなタイミングで……。

「ああ、けいとに告白してきたっていう1年生？」

「そうそうー！さつきおめーが1年に構えとかいうから勘違い女が生
まれちまったんだよ」

「え、私のせいなの？」

……早く、立ち去りたい。

将人君の背中を押して、行こう、と小さく呟いた。

「おいちよつと待てよ」

けど、それを許してくれないけいとさん。

「なに？告白したクセにもう乗り換えたの？いいねえく変わり身早

くて。ブスは男に媚びてないと生きていけないの?」

「けいと流石に……」

顔は見えていないけど、声音だけでわかる。

明らかにこっちを嘲笑った口調。きつとニヤニヤしながらこっちを見ているに違いない。

見たくも、無かった。

「ほら、好きな男が声かけてやってんだからこっち見ろよ。おもんねえだろ」

最悪だ。

こんなところ、将人君に見られているという事実も。せつかく仲良くなれたと思っていたのに、幻滅されてしまう……。

思い出したくもない告白の日。

言われた言葉がフラッシュバックする。

またみつともなく泣きたくなんて――。

「俺は部外者で、何があったのかとかは、よくわかんないスけど」

いつの間にか、私と先輩達の間には、将人君が立っている。

「二つだけ、わかっていることがあるんで撤回してもらっていいスカ?」

「……あ？誰だよお前」

「俺はそつすね。みずほの友達です」

「あーね。やっぱそうだと思ってたけどまさか彼氏なわけねーよなあ。こんなブスと付き合って」

「それだよ」

表情は見えない。

けど、語気が荒立っているのは、見なくたってわかる。

「ブスじゃねえ。可愛いだろみずほちゃんは」

「……はあ？そこ？」

「俺は、細かいことはよくわかんないス。話も人伝いにしか聞いてないし。けど、あんたが言ったことで、一つだけはつきりと間違っていると言えることがあるなら、この子はブスじゃねえ。内面も、容姿も。心優しい、素敵な女の子だ」

……。

「は、はあ？お前わかってんのか？ほんの数日前にこいつは俺に告白してきて、いわば俺の方が上の立場にいるわけ。それを——」

「上ってなんすか？告白された側は、告白した側より上なんすか？」

「そりや当たり前だろ、どう考えたって好きになられた奴の方が」

「それこそ勘違いも甚だしいですね。虫唾が走ります。好意をもって想いを伝えてくれた子に対してその態度が気に食わないですね」

「……！てめえ……！」

けいとさんが将人君に近づいていく。

……止めなきや。
なのに。

どうしてこんなに心臓がうるさいのだろう。

どうしてこんなに顔があついんだろう。

将人君の後ろで、彼のシャツをぐっ、と握った。

「んじゃあお前はこいつとでも付き合えるんだな？俺はこんなブスとは付き合えないけど、お前は付き合えると」

「そうやって本人の意思も介さず、ただ自分の価値を確かめるための道具としか思っていないあんたと、同列で彼女を語りたくないですね」

「……お前、バカだな。せつかく顔はそこそこいいのに……もういいわ。興ざめだよ。さつきなにポケっとしてんだ、行くぞ」

……。

けいとさん達が去っていく。

残されたのは、私と、将人君だけ。

「あー……ごめん、みずほちゃん。サークル……行き辛くしちゃったよね……考え無しでこういうことやるもんじゃないな……」

「……」

関係ない。どうせもうバドサーは既に行きにくかった。

そんなことより、将人君を巻き込んでしまった事の方が申し訳なくて。

けれど、それ以上に。

「全然どんなやりとりがあつたかもしらない俺が、首突つ込むのはダメかなと思つたんだけど……我慢できなかつたや。ごめん」

「……」

やめて。やめてよ。

優し、すぎるよ。

だって。私には心に決めた人がいて、目の前のこの人は、恋海が好きになった人で。

「あー、なんか飲む？あそこのカフェの新作、気になってたんだよね。お詫びに奢るよ？」

ぎこちない笑みが、どうしようもなく胸に刺さる。

胸の高鳴りが抑えられない。

ああ、羨ましいなあ。

恋海はこの人を好きだって、声高に言えるんだ。

大きく、深呼吸。

その程度じゃ、この胸の高鳴りは抑えられないけれど、多少はマシになる。

頑張れ、私、と。小さく呟いてから。

「ありがとう将人君！いや〜！恥ずかしい所を見られちゃったな〜

!!そうなんです！私あの人に告白して玉砕しちゃったんだよね〜！そりゃーもうこっぴどくフられてさ、恥ずかしいのなんの！あんな人だって知ってたら、告白なんて——」

瞬間、ぽん、と肩に手を置かれた。

「無理しないでいいんだよ」

「え……っ？」

「無理しなくていい。辛い時は、辛いつて言っつていい。俺は……まだみずほちゃんと会ってほんの数時間しか、一緒にいないけどさ、みずほちゃんが明るく振舞おうとしてるのはわかってるから。でも、辛い時まで無理する必要ないよ。あんなこと言われて、傷つかない人なんて、いないんだから」

「……」

「あそこのカフェで、新作買ってくるね！だからちよつとだけ待ってて。その間に、いろいろ整理するといいさ。いくらでも話は聞くから。だから、無理しないで」

将人君は、そう言っつてカフェの方へと歩いていく。

その後ろ姿が、見えなくなる。

私はしゃがみ込んで胸を押さえることしかできなかった。

「苦しいよ……」

涙がこぼれた。

でもこの涙の理由はきつと、あの時とは違う。

私つてこんなにチョロかったかなあ……？

なんでだろう。あの声が、あの姿が、どうにも胸の内に響いて仕方ない。

この胸に沸き上がる感情の名前を、私は知っている。

けど、それを言葉にってしまったら、ダメ。

——運命の人がいるから。
——恋海の想い人だから。

「我慢……我慢しなきゃ……！」

恋海への申し訳なさと。

将人君への感情と。

運命の人との出来事。

たくさんの私の感情が混ざって、涙になる。

こぼれ落ちていく。

ああ。

恋って、好きって、こんなにも難しい。

番外編 とある休日のやりとり

～望月星良の場合～

《望月星良》

『へえ～それじゃまさとはスポーツが好きなんだ』

『そうそう！だから週末またお店行くね。楽しみにしてるから』16：

17

《片里将人》

『そつすね～割となんでもやりますよ！バスケと野球とテニスと……』

『結構意外がられますけどね笑』

『はい！楽しみです～！あんまお金使い過ぎないでくださいね苦笑』
18：32

《望月星良》

『そうね。意外かも。バスケなんてやってたらまさどふつ飛ばされそう笑』

『私も実はスポーツ結構やるんだよね。昔は結構テニスうまかったのよ？』

『お金のことなら心配しないで。こうみえて結構もってるんだから』
19：10

《片里将人》

『いやもうふつ飛ばされまくります笑最近は僕より小さい子とやってるんであんま無いですけどね～』

『え、星良さんテニス意外です笑』

『いやでもやつぱ貯金とかした方がいいんじゃないですか？僕はよくわかんないですけど笑』21：11

《望月星良》

『小さい子？まさと誰とバスケやってるの？』

『失礼ね!!笑今度やってみる？運動できるところか行けばわかってくれるはずよー』

『いいのよ。私はまさとにお金使つてると思えばなんてことないわ』

21:40

《片里将人》

『最近中学生の子の相手にしてるんですよ。結構楽しいです笑』

『いいですねー僕も運動好きなので』

『それ俺が困りますよ!!笑』23:02

《望月星良》

『へえー。女の子？』

『え、絶対よ？じゃあいつにする？来月とかどう？』

『あなたからたくさんのもをもらったから。たくさん返さなきゃなの』23:34

《片里将人》

『そつすね！これからが楽しみな子ですよ』

『ちよつと確認してみますー！』

『なんもあげてないですけど?!笑』0:16

《望月星良》

『そうなんだ』

【メッセー지의送信を取り消しました】

【メッセー지의送信を取り消しました】

【メッセー지의送信を取り消しました】

『ごめん、気にしないで。また明日ね。お店楽しみにしてるから』3:

12

〜五十嵐恋海の場合〜

《恋海》

『ええ!!みずほそんなこと言ってたの?笑』

『あく月曜4限のやつね。単位とればなんでもいつかなって笑』

『え、どこいくの?』 11:10

《片里将人》

『そうそう。いや本当みずほちゃんは面白い子だね』

『今日は土曜日やから家庭教師だよん。前言ったやつ』 12:15

《恋海》

『みずほは本当いい子だよ。だからその運命の人?とやらも見つけてあげたいんだけどね〜』

『あ、そっか。いつてらっしやい!』

『前も言ったけど女子高生気を付けてよ!将人がちゃんと距離保つんだよ!』 13:22

《片里将人》

『そうだね!俺もできる限り協力するわ〜』

『大丈夫だって笑良い子だし笑』

『あ、でもなんか最近俺の言ったこと聞こえてないのか、もう一回言つてくださいつてよく言われるんだよね』 14:25

《恋海》

『……ちなみにそれどんな事言った時言われてるの?』
『なんか思い出せる?』 14:40

『将人もう家庭教師終わった?』 18:35

『ねえ今なにしてるの?』 19:00

【着信】 19:15

【着信】 19:18

【着信】 19:24

【通話 5分15秒】 19:31

『ごめんごめん汗心配になりすぎちゃった』

『気を付けて帰ってきてね』 19:45

く戸ノ崎みずほの場合く

《mizuhō》

『将人君!!その後何か進捗はありましたでしょうか!!』

『気になり過ぎてみずほは夜しか8時間寝れません!』 18:45

《片里将人》

『いや〜オールバックって全然ないね汗学内ですら見たことない
や』

『バチコリ寝れてて草』 19:43

《mizuhō》

『そうだよね〜しかし恋は障害が多いほど燃え上がるのです!!』

『いやいや。女の子は睡眠大事なんですよ!8時間程度では足りませ

ん！』20:45

《片里将人》

『めちやくちや好きなんやね。会えるとええね！応援してるよ！』

『そうなんだ笑ちなみに明日は何時に起きる予定なの？』 21:33

《mizuhō》

『……応援されるのはちよつと、なんと申しますか、切ないと言いますか……』

『え？明日は1限だから、8時には起きななきゃなあ〜』 22:34

《片里将人》

『??なんで？応援しちやあかんのか!!』

『じゃあ寝る時間は0時ぴつたりだね。おやすみ〜』 23:43

《mizuhō》

『乙女は複雑なんです!!!わかれ!!!』

『いややっぱわかるな!!!』

『あ、ずるい！まだじゃあ……まだ私は寝ない……!』 23:59

『スヤア……』 0:00

《片里将人》

『情緒不安定すぎるやろwww』

『芸が細かいわ笑』

『おやすみ。明日1限頑張つてね!』 0:44

《mizuhō》

【メッセージの送信を取り消しました】 1:45

～篠宮汐里の場合～

《篠宮汐里》

『おはようございます将人さん』

『本日はよろしくお願いしますね』 9：45

《片里将人》

『おはよう！よろしくね！』

『宿題はもう終わってる？今必死にやってたりしないよね？笑』10：
23

《篠宮汐里》

『そんなことはありませんよ』

『ばつちり、課題プリント3枚完了済みです』11：04

《片里将人》

『あれ？最後の日本史のやつ合わせたら4枚じゃなかったっけ？』

『俺が数え間違えてるかも汗』11：16

《篠宮汐里》

『失礼いたしました。4枚でしたね』

『もちろん終わっていますよ。安心してください』14：24

《片里将人》

『……もう着くからいいけど、さては今終わらせたね？』

『お疲れ様。もうすぐつくから待っててね』14：40

《篠宮汐里》

『いえ！全然全くそんなことありませんよ！』
『すみません、その文章後で口頭でもう一度言っていたかどうか
できますか？』 14：45

《篠宮汐里》

『本日はご指導ありがとうございます』
『途中休憩を頂いてしまいすみません』 19：25

《片里将人》

『お疲れ様！いえいえ全然！だいぶ顔真つ赤だったけど大丈夫？』
『熱とかあったら無理しないでね』 20：16

《篠宮汐里》

『いえ。少々動揺してしまっただけですので』
『あとすみません。大変恐縮なのですが、一つお願いをしてもよろし
いですか？』 21：12

《片里将人》

『どうしたの？なんか今日のところでわからない所あった？』 21：3
0

《篠宮汐里》

『いえ！そういうことではないのですが』
『ボイスメツセージを頂くことってできますかね？』 22：02

《片里将人》

『……え？笑』
『どういうこと？笑』 22：34

《篠宮汐里》

『いえ……少々勉強のやる気が出なくてですね……』
『将人さんに激励の言葉を頂けたら、やる気も出るかな、と』
『不躰なお願いで申し訳ありません』 22：36

《片里将人》

『……それでやる気でのの？笑』
『で、なにを言えばいいの？笑恥ずかしいんだけど笑』 22：46

《篠宮汐里》

『はい！間違いなく！』
『そうですね。頑張れ、頑張れ、と言っていただけると幸いです』
『あ、できれば「勉強」とか「課題」とかそういったワードは避けていただけると嬉しいです』
『というかもう頑張れだけでOKです。ええ』 22：51

《片里将人》

『まあそのくらいなら……笑』
『あとで消しといてね笑』
【ボイスメッセージ 18秒】
『はい！じゃ、勉強頑張つてね！』 23：02

《篠宮汐里》

『おはようございます』
『今日はとてもいい天気ですね』 8：24

《片里将人》

『ねえ本当に昨日の夜勉強した???』 10：12

〜前田由佳の場合〜

《ゆか》

『将人さん今度はいつ公園いらつしやいますか?』

『あ!別に一緒にバスケしたいとかではなく!』

『あの場所を渡すわけにはいかないから聞いてます!!』 18:30

《片里将人》

『そうだねえ笑確かにそういう約束だもんね笑』

『とりあえず水曜日と金曜日、あとは気が向けば土日のどっちか行く感じかな』 19:45

《ゆか》

『ではまた金曜日行きます!渡しませんから!』

『……あこの前借りた上着もお返しします……』 20:38

《片里将人》

『ああ、そういえばそうだったね』

『全然急がなくていいからね』

『見ればわかる!ステップバックのやり方! <https://bbb.all.douga/?123987>』

『前教えて欲しいって言ってたステップバック、この動画わかりやすかったから見てみて〜!』 21:15

《ゆか》

『いえ!ちゃんとお返しします!』

『うわあく!すごい!わかりやすいです!』

『ありがとうございます!!』 21:35

《片里将人》

『難しい技術だし、今やる必要あんまないと思うけど』
『知っておくことは悪い事じゃないと思うしね』 21:46

《ゆか》

『あ、私も将人さんに見て欲しい動画があるんです』
『これなんですけど……』

【メッセージの送信を取り消しました】

『間違えました!!!』

『見ないで!!!ちよつと待ってください!!!』

『絶対に開かないでください!!!』

『これ消せてる?消せてますよね??』

【NBADリブルスキル集 <https://NBAbasketball.douga/?23416942>】

『これです!!!』

『え、上のやつ消えてますよね?』 21:58

《片里将人》

『消えてるよ笑』

『これすごいな……チェンジオペースがエグいわ……』

『ところでなんか一瞬すごいURLが見えた気がしたんだけど……気のせい?笑』 22:04

《ゆか》

『気のせいです!!!!』

『私もう寝ます!!!おやすみなさい!!!!』 22:31

バスケット部JCは見せつける

夏場は中の部活はいいよねって外の部活やっている人によく言われるけれど。

体育館の中はとってもむし暑いです。

たしか先生が中の部活の方がマラソンの次に熱中症が多いんだよって言ってた気がする。

私達バスケット部は、そんなむし暑い中での練習を終えて、更衣室にいた。

制汗剤の匂いが室内に充満してる。

今日は午前中で部活終わりなんだけど、私はまだ少し動き足りないかなって思っていた。

「ねえすごいじゃん由佳!」

「由佳は小学校の頃からすごかったんだよ!」

「あはは……ありがとう」

同級生達がとても嬉しそうにお祝いしてくれるその理由は……さっきのミーティング。

練習終わりに監督の先生から、来週の公式戦でスタメンで使うと言ってもらえたことだった。

背番号は1年生の中では1番若い18番。

というか、1年生で背番号をもらっているのは私だけ。

ありがたいけれど、やっぱりプレッシャーも感じる。ベンチメンバーに入れなかった人のためにも、ちゃんと結果残さなきゃ……。

「由佳のことめっちゃ応援するわ〜!」

「由佳多分ガードだよな? 誰の代わりに入るんだろ……」

「え、あれじゃない? 2年生の……」

着替えも終わり、雑談をしながら更衣室から出ようとした、その時。

「1年。モップがけ甘すぎ。やり直してきて」

「え……」

ドアを開けると、そこには2年生の先輩3人。

「え、じゃないわよ。モップ本当にかけての？午後使うバレー部が怪我したら責任とれんの？ほら、早く行ってきて」

「……」

……モップは、ちゃんとかけたと思う。

1年生全員でやったし、最後は足でキュッキュツって音ちゃんとするか確かめた。……けど多分、関係ない。

これは、嫌がらせだ。

しぶしぶ、私達は荷物を置いて体育館に向かう。

これくらいはなんてことない。我慢我慢。

「前田」

「……はい」

皆が体育館に行く中、私だけ呼び止められる。

嫌な、予感。

「……調子に乗るなって、言ったよね？」

「……はい」

「お前監督のお気に入りなだけだから。勘違いするなよ」

「……」

私がスタメンに入ったことで、2年生の人が控えになった。

けれど、その控えに落ちた人は笑顔で「頑張つてね」って言うてくれた。

なのに、そもそもベンチメンバーにも入っていないこの人達に、私は粘着されている。

「失礼します」

「チツ……」

部活って、難しいな。下級生が試合に出るのが、そんなにつまらな

いのかな……。

私なら、下級生に負けたくないと思ったら、もっと練習するけど……。

あの人達は、そもそも練習もそんなに行っている感じはしないし……。

背中に刺さるような視線を感じつつ、私は体育館へと走った。

なんとなくそのまま帰るのが嫌で、気付けばいつもの公園に来ていた。

今日はお兄さんは来ないけど……シンプルにまだ練習したりなかったし、ちょうど良い。

外用のボールも持ってきておいて良かった。

時刻は13時過ぎ。

1時間か2時間程度やったら帰ろう。

もっと人がいるかとも思ったけど、お昼時だからかちようど公園の

バスケットコートは空いていた。

ラッキーだね。

照り付けるような日差しが眩しい。

もう夏も本番を迎えようとしているんだなってわかる。

「ほっ」

フリースローラインから、シュート。

パスツという気持ちの良い音を鳴らして、ボールはリングに吸い込まれた。

「うん、いい感じ」

お兄さんとここで練習をするようになってから、更に上達していると思う。

お兄さんに教えてもらった技術が無かったら、今スタメンに選ばれていなかったかもしれない。

本当それくらいお兄さんは私にたくさんのことを教えてくれた。

(お兄さんの、真似しよっかな)

憧れの人の動きを、脳内に思い浮かべる。

何度も何度も近くで見えてきた動き。それに……好きだから。脳裏に焼き付いた大好きな人の動きくらい、すぐに何度でも思い出せる。

ボールを拾い上げて、軽くドリブルをついて……。

レッグスルーからのクロスオーバー。

右にドライブで切れ込んで……ロールでターン。

そして急停止からのフェイダウェイ。

そう、この動き！

ガンつと音を立てて、ボールはリングに阻まれる。

やっぱりこれは、難しい。なによりも最後のフェイダウェイ。

自分が後ろに飛びながら、前へシュートを放つというのは、実際にやってみると本当に難しい。

(お兄さんは、やっぱりすごいなあ……)

この難しいシュートを、簡単に成功させる。
この距離から練習で外したのはほとんど見たことが無い。

「よし……」

気合を入れ直す。

今度はこれをちゃんと成功させて――。

「あれ〜良い場所あるじゃ〜ん」

聞いたことのある、声がした。

「練習したりなかったんだよね〜」

「わかる〜。あれ、けど誰かいるよ?」

「あつれ〜?うちのジャージじゃないあれ」

わざとらしい声……。

さつき嫌がらせをしてきた、2年生の先輩達だった。よく見れば、後ろには1人の男バスの先輩もいる。

確かあれは、私の代わりにスタメンから外れた、あやこ先輩の彼氏……みたいな話を聞いたことがある。

男バス2年生ではぶつちぎりで人気らしいけど、お兄さんを見慣れている私からすると……。

でもお兄さんと比べてしまうのは流石に可哀想か。

同年代のレベルで言ったら、確かにかっこ良いと思う。

ちよつと居辛そうにしているけれど、付いてくるってことは私のことを邪魔だと思ってるのかもなあ。

「……お疲れ様です」

「あつれ〜!前田じゃん。へえ〜こんなところで練習してたんだ〜」

「私達も練習したいからさ、貸してよ」

……最悪だ。

けれど、仕方ない。ここはおとなしく引き下がった方が良さそう。逃げるが勝ちって、なんかで言ってたし。

「はい。どうぞ。私は帰ります。お疲れ様でした」
ボールを持って、私は逃げるようにコートへの出口へ向かう。
しかし。

腕を強引に掴まれた。

「なに、つれないじゃん。一緒に練習しよーよ」

「……」

少なくとも、一緒に練習しようという声音ではないよね……。嫌な予感がする。

けれど、このまま帰れる雰囲気じゃない……。

「……はい」

覚悟を決めるしか、私には選択肢が無さそうだった。

どれくらい時間が経っただろうか。

30分？1時間？正直時間感覚は、もうあまりない。

「前田もうへばったの???そんなんで試合大丈夫かなあ〜!？」

「はあ……っ!はあ……っ!」

この炎天下で、休憩無しで走りっぱなし。

先輩達は交代交代で、私だけ休憩なし。

これくらいはされるかもと思っていただけ、やっぱりキツイ。

「じゃーそろそろ2on2やろつか。試合形式も経験しとかないとね?期待の1年生」

「はあ……っーはあ……っー!」

せめて水分を補給させてほしい。

身体が空気と水分を求めて悲鳴を上げている。

「ほら前田早くしろよ。お前のオフエンスからだぞ」

ボールを投げられて、辛くもそれを受け取った。

2on2と言うくらいなのだから、仲間がいる。けれど、それは形式上の話であってこの場面では関係ない。

仲間役の先輩は、ボールを受け取るつもりが無いのだから。

仕方なく私は、ドライブで抜くのを試みる。

けど、もう身体はボロボロで、いつものキレなんか出るはずもない。

もう1人が来てダブルチームになって、私の立場はもっと厳しくなった。

「そんなもん?!それじゃ辞退したほうがいいんじゃないの??」

「出れなくなった、あやこの気持ち考えなよねえ!!」

そんなの、わかってる。

だから私は、あやこ先輩の分まで頑張ろうと……!

「ほらどうしたんだよっ!!おら!!」

「……っ!!」

どぐっ、と嫌な音がした。

視界が暗転する。

先輩の振り回した肘が、私の顔にもろに入ったっぽい。

痛い。

呼吸がしんどい。

笑い声だけが響いてる。

なんで、なんでこんな目に遭わなきゃいけないの?

バスケが、好きなのだけに……。

……あれ、さつきまで私の姿を見て笑っていたのに、笑い声が聞こえない。

私、耳聞こえなくなってるのかな……。

「随分楽しそうな練習するんだね」

……え？

そんなはずない。

だって、今日は日曜日で。

約束も、別にしてなくて。

なのに。

この声を、私は狂おしいほど知っている。
上を、向いた。

そこには、私の大好きな――

「由佳、立てる?」

「…おにい、さん…?」

私を支えるように肩を貸してくれる人。

それは間違いなく、私の大好きな人。

将人さんだった。

「だ、誰ですかあなた」

「部活動の練習中なんですけど」

先輩達が明らかに動揺している。

お兄さんのカツコよさに驚いただけかもしれないけど。

「へえ。こんな一人をボロボロになるまで虐めて、自分たちはその姿を見て笑うのが、健全な部活動なんだ?」

「……」

…お兄さんが、怒ってる。

声だけで分かった。

初めて見た。お兄さんが怒っているところを。

お兄さんは冷めた視線を先輩達に向けて、そして私の方に振り返った。

「由佳、とりあえずこれ飲んで。水分も、ろくにとってないでしょ」

「ありが、とうございます」

渡されたペットボトル。

私はそれを受け取って、すぐに飲んだ。乾ききっていた身体が、潤っていくのがわかる。

お兄さんは私に優しい笑顔を向けて、ベンチまでついてきてくれた。

私を、座らせる。

「ごめんね、遅くなって。ちよつと休んでて」

ぽんぽん、と頭を撫でられた。

身体が、別の意味で熱くなる。
こんな時なのに……身体が喜んでしまう。

それでもまだ、頭は混乱していた。

お兄さんは来るはずないと思っていたのに。

「で？由佳を虐めて、なにがしたいの？君たちは」

「い、虐めてなんかありません。私達は、前田がスタメンに相応しいかどうかを確かめていただけです」

「そ、そうです！それなのに邪魔しなくてもらっていいですか？」

「……へえ……」

よくそんな言葉が出てくるなあ、と思った。

本当のところは、私の身体か精神を傷つけて、スタメンを降りてもらおうという魂胆だったんだろう。

「じゃあ由佳が君たちに実力を示せば、君たちは諦めるってそういうことかな？」

「も、元からそのつもりでしたけど？けど前田が下手だからこうなっていたわけで」

普通にやったら勝てないから、私のスタミナを削りに来たんだ！

ついでに怪我もしてくれたらラッキーくらいで……！

ふつふつと、怒りが沸いてくる。

と、お兄さんがこちらに振り返った。

「由佳……もう少ししたら、動ける？」

「え……？」

お兄さんからの提案は、意外なものだった。

けど、次の一言は、私を奮い立たせるには十分すぎる言葉で。

「示してやろうよ。由佳の強さを」

「……はい……！」

今までのどんな時よりも、私の身体に、力がみなぎった。
お兄さんがもう一度、先輩達の方へ振り向く。

「由佳が君たちを倒せばいいんだよね。俺と由佳でチームを組むから、君たちは4人でいいよ」

「は、はあ？4対2ってふざけてるんですか？」

「ふざけてないよ。それに、俺は飛ばない。身長差があるからね」と、飛ばない?!ジャンプしないってこと？

バスケはゴールが上にあるというスポーツだから、試合の中でジャンプは欠かせない。

何度も何度もジャンプするスポーツ。

それなのに、お兄さんはジャンプをしないと言い放った。

「随分舐められてますね……いいですよ」

「それで……これに勝ったら、君たちは素直に由佳のスタメンを認める。いいね？」

「じゃあその代わり、これに負けたら前田はスタメンをオリてもらえますか？」

……！

選んでもらったスタメン。オリたくはない。

けどそれと同時に……私はお兄さんと組んで、負ける気もしない。

お兄さんからの視線を受けて、私は頷いた。

「いいですよ。受けます」

「……よし。じゃあ、やろうか」

お兄さんが、ネックレスをゆっくりと外す。その動作が、カッコ良くて。

胸に、嬉しさがこみ上げた。

こんな状況で叶ってほしくはなかったけれど。

お兄さんと、チームでバスケができるんだ！

「じゃあ、オフエンスはこつちからね」

お兄さんがボールを持つ。

想定通り、お兄さんの方には女バスの先輩2人がダブルチームでついた。

こつちにも、2人。

あの2人は、この中では上手い方。

けれど……はつきり言つて。

「ふっ……い！」

お兄さんの相手ではない。

「えっ？」

「は?!」

驚く2人をよそに、お兄さんはものすごい速度のスピムーブで2人をかわした。

そのまま、ゴールまで一直線。

「なにしてんのー！」

慌てた1人が、私のマークを外してゴール下へディフェンスへ。

お兄さんはきつとあの程度かわしてシュートを決めることなど造作もない。

けど。

お兄さんからの視線に、私は瞬時に反応した。

フリースローラインあたりをめがけて、走り出す。

お兄さんが上手いのはわかってる。

けど、今私がしなきゃいけないのは、お兄さんにおんぶに抱っこされる事じゃない。

私がやってきた練習を、努力を。

示すんだ!!

「あっ……い！」

お兄さんがジャンプしないことをいいことに、シュートブロックしようとした先輩がジャンプした。

その下を、お兄さんがバウンドでボールを通す。

私の胸元に、寸分違わないパス。

一人しかマークのいなくなつた私は、男バスの先輩を前にして……。

「ふっ……い！」

右に切れ込むようにみせてから、得意のクロスオーバー。

何度も何度も、この場所で繰り返し返してきた動き。

ボールを見なくなつてできるようになってきた動き。

男バスの先輩が動きについてこれず、よろめいた。それでも私は容赦なく抜き去る。

そのままバックレイアップ。

これも何百回もやってきた。自信を持ってシュートを撃てる。外すはずがない！

パサツという音と共に、ボールがリングに吸い込まれる。

呆然とする先輩達を尻目に、お兄さんが指を立てた。

「これで、2点先制ね」

どうしよう。

こんな状況なのに。

楽しい……！

先輩達のオフエンスは、私がボールをステイルして失敗。ドリブルが雑すぎる。取ってくださいと言っているようなものだった。

お兄さんと日々やってる1 on 1に比べたら、ぬるすぎる。

そもそもボールを見ながらしかドリブルができない時点で、甘いよね。

もう一度、私達のオフエンス。

「次は止める……！」

「さっきは油断してただけだから」

お兄さんのマーク2人が、今度は気合の入ったディフェンス。

正直、それでもお兄さんは簡単に抜けると思う。

けど、さっきのワンプレーで私は察した。

お兄さんは、私を活かそうとしてくれている。

というか、基本的に私がシュートを決める役なんだ。私が示さなきゃいけない。自分自身がやってきた努力を……！

ドリブルをつくお兄さんが、私に目で合図。

その視線の動かし方で、私は意図に気付いた。

私はすぐさま走り出した。

お兄さんについているディフェンダー2人のうち、私の方にいる側の横にぴったりと張り付く。そこから左に、いけないように。

スクリーン。

「……っー」

それを見てお兄さんが左にドライブ。

私が壁になって、ディフェンスの先輩はお兄さんの動きについてこ

れない。

「スイッチー！」

先輩が叫んだ。

マークの相手を交代する合図。しかし、お兄さんの意図はそこ。

マークの相手がどつちなのかわからなくなった混乱に乗じて、ゴール方向に動いていた私にすかさずパスを通した。

ダイブの動き。

これも、お兄さんと動画で見た動きの一つ。

もうディフェンスは全員後ろだ。私のドリブルの速度に追い付けない。

「なんつで……！」

ドリブルしてる方が、基本足は遅い。

けれど、その私に先輩たちは追いつけない。

私は何本もドリブルで走り込んでいるから。そう簡単に追いつかれるようなドリブルはしていない！

全力のドリブルから、強く足を踏み込んで私はレイアップへ。全速力のままレイアップをすると、勢いが強すぎて外しやすい。

だから私は強く足を踏み込んで、勢いを下に流す。

これも、お兄さんから教わって、何度もやってきたこと。

ボールはパサッと柔らかい音を立ててネットを揺らした。

青褪めた先輩達がたまらず、4人集まって何か話している。

「前田ってこんなに上手かった……？知らないんだけど……！」

「しよーすけちゃんと動いてよ！あやこがスタメンに戻れなくていいの!？」

「でも……」

「あの大学生は止めるの諦めて、前田を止めよう。前田が結局シュートを打ってくるみたいだから」

……お兄さんの動きに気付いたみたい。

お兄さんが、私にシュートを打たせようとしている流れを。

「ないっしゅ、由佳」

「ほえ？あ、はい！ナイスパスです！お兄さん！」

「念には念を入れてやってたけど……これは大丈夫そうだね」

「え？」

お兄さんはちよつと意外そうに向こうのメンバーを見て。

それから、いつもの笑顔で私にこう言った。

「俺いなくても、由佳なら全員抜けるよ。あれ。だから、次は由佳がボール持って、抜いてみて。一応俺もボール受けられる所にいるから、キツそうだったらパスもらおう」

……！

「わかり、ましたー！」

お兄さんが、信頼してくれている。

その事実だけで、私は何万倍も頑張れる！

先輩達のオフエンスはまた失敗して、私達のオフエンス。

5点先取だから、これを決めれば私達の勝ち。

私が、ボールを持った。

今度は、女バスの先輩3人が私についている。

先輩の1人が、恨めしそうに私を睨みつけてきた。

「前田……誰よあの男」

「……私の、大切な人です」

「……むかつく……！ほんとにむかつく!!」

少しだけ、優越感。

お兄さんを少しだけ見た。

私を見ている。その瞳は、私を信頼しきっているのがこれでもかと伝わってくる。

期待に、応えたい！

お兄さんは、私の……私だけの大切な人!!

右に鋭くカッティング。

流石に3人もいれば、一番右にいた先輩がついてくる。

急停止。レッグスルーからのクロスオーバー。私の得意な動き。

右の人がよろめいた。

その隙について真ん中から一気に切れ込む！

「この……!」

ファウルギリギリの動きで、ディフェンスしてきた先輩が私の進路を塞いできた。

それも、いなす。前への推進力を使って、そのままロール。

一人かわして、私はすかさずシュートフォームへ。

「ふざけ……んな……っ!」

意地だろうか。

最後の一人の先輩が、私のシュートをブロックするためにジャンプ。

まずい。

このまま撃てば、ブロックされる……!

——瞬間、私はお兄さんのいつもの動きを思い出した。
クロスオーバーからのロール、からの急停止して……。

私は飛んだ。

後ろ側に。

「なっ……い！」

これならブロックは届かない。

何度も、何度も見てきた動き。

このシュートが決まるのも、何度だつて見てきた。

だから、大丈夫。

私にも、できる！

右手で、ボールを放つ。

綺麗な弧を描いて……ボールは、リングに吸い込まれた。

試合が終わって、先輩達は帰っていった。
案の定というかなんというか、私をつけてここまで辿り着いたらしい。

何やら最後、男バスの先輩が女バスの先輩3人と揉めていた。

聞き間違いでなければ、男バスの先輩が私を虐めるのをやめてと言ったような気がする。

それで女バスの先輩達も謝ってきたし……よくわからない。

けど、これでちよつとでも学校でのいじめがなくなってくれるなら嬉しいな。

「由佳、最後ナイスシュートだったね」

「あ、ありがとうございます！」

お兄さんの動きを見てたから……決まったシュートだった。

お兄さんの、おかげ。

勝利の余韻に浸っていたけど……そういえばそれどころじゃなかった！

ちゃんとお礼！しないと！

「あ、あの、今日は助けてくれて、本当にありがとうございます!!!」

「いやいや、むしろ遅くなっちゃってごめん。それにね、実は途中見てたんだ」

「え……?」

「いや、由佳がチームメイトと楽しくやってんのかなって思ってたさ、見ちゃってたんだよ。そしたらなんか雰囲気ただごとじゃないし、由佳が殴られるし……ヤバイと思ってきたわけ。だからもつと早く気付けてれば、由佳を傷つけることもなかったな、って」

……涙が出そうだった。

本当に、優しすぎるよ……。

お兄さんがいつもの柔らかい笑顔で、続ける。

「こんな形ではあったけどさ、俺は由佳とチームでバスケットができて楽しかった。やっぱ上手いわ。すぐ俺なんかより上手くなりそう」

「え、ええ?! そんなことないですよ! でも、私もお兄さんとバスケットができてうれしかったです!」

そこだけは、本当に感謝している。

こんな機会、もうあるかわからないから。

ベンチに、腰掛ける。

今日はもう帰ろう。色々あつて疲れちゃった。

たくさんの想いを噛み締めながら。

鞆にボールをしまつて、帰り支度を始めたその時。

「由佳、ちよつと待って」

「え……？」

お兄さんはそつと私に近づくと、少しかがんで、視線を合わせてくる。

目と目が、合った。

お兄さんの顔はやつぱり綺麗。

……距離が、近い。

お兄さんの顔が、徐々に近づいて来る。

え……？

ちよちよちよ、ちよつとまつて???

これつて、もしかして、もしかして、き、キス？

キスされる流れ？

確かに今日の流れは、運命的なものを感じたし、シチュエーションとしては理想的かもしれないけど!!!

心臓の鼓動が加速する。

ファーストキスは、まさかの外？しかもまだ、お日様出てるよ?!

え、ちよつと、それは早すぎる。

ど、どうしよう。でも、嬉しいは嬉しいし。目、閉じた方がいいかな。いいよね？

目を閉じた。

お父さんお母さん、私は今日ファーストキスを大好きな人に捧げま

す。

頬に、ペリ、となにかが貼られた。

え??

目を開ける。

「良かった〜この前自転車でコケて怪我してからさ、バッグに絆創膏ストックしておいたんだよね！頬からちよつと血出てたし、これで大丈夫やね。もっと早く気付いてあげればよかったんだけど……ごめんごめん！」

頬を、触る。

絆創膏の表面って、結構すべすべしてるよね。

「……っ!!!」

「うわっ?!?!どうしたの由佳?!」

色々な感情がせめぎあって、爆発した。

キスじゃなかったとか、でも心配してくれて嬉しい、とか。

もうわけがわからなくなつて、勢いのまま、私はお兄さんに抱き着

いてしまっていた。

もう引かれてもいい！今はこの感情を、お兄さんにぶつきたい！！
身体全体が熱い。

大丈夫かな。お兄さんに、嫌がられてないかな。

お兄さんに優しく、頭を撫でられる。

「……よく頑張ったね、由佳。カッコ良かったよ」

——もう、何も考えられない。

お兄さんしか、将人さんしか見えない。

(好き好き好き好き……!!!大好き!!!
!!!)

自分の気持ちを確認できるように。

私はそのままお兄さんを強く、強く抱きしめた。

バスケット部JCは努力の子

スマホの通知で目を覚ます。

最近はそういう朝が増えてきたように思う。

「うぐう……」

昔やったゲームのメインヒロインがよくこんなうめき声みたいなのが可愛い声出してたな、なんて思いながら。

自分から出た声は本当にただのうめき声なことを自覚しつつ。

「何時だ……？」

スマホを見る。

ロック画面には、10時28分の表示。日曜日だからといって、がつつり昼頃まで寝てしまったようだ。

でも仕方ないんだ。昨日は夜まで入ってたゆうすけさん（ボーイの方）に誘われて夜中にラーメンという大罪を犯してしまったが故に、すぐ寝るわけにもいかず、結局眠りについたのは3時頃だったから。ちなみにゆうすけさんは帰り際女の人から電話が来て慌てて帰っていった。闇が深い。

ぽりぽりと頭を搔いて、歯を磨きに洗面所へ。

顔を水で洗った後に歯を磨く。そこでそういえば通知で起きたんだったと思ひ出して、ポケットに突っ込んだままだったスマホを開いた。

《恋海》

『おはよー!!』

『え、じゃあ本当に今度行こうよバッテリーングセンター!』

『私自信あるんだからね!!』

……なんの話してたんだっけ。

ああ、そうだ！恋海がなんかソフトボールやってたとかって話だった。

俺も野球にはバスケ以上に自信があるので、流石に俺の方が上手いかな〜とか調子乗ってたんだった。

この世界ではスポーツも女子の方が上手い人が多いらしい。まあ確かに由佳とか見ていると、こんな上手い女子中学生おるんか??? ってはなるしね。

単純に母数の差だとは思うけど。単純な力の差だったら男の方が強いのは変わってない……と思う。

既読をつけずにとりあえず恋海からのメッセージは保留。

朝ごはん食べ終わったら返そうかな。

星良さんに続き、汐里ちゃんや由佳ともSNSを交換したので、最近はスマホの通知が元気である。

皆ママやね。用ある時だけでいいのに連絡なんて。

冷蔵庫を開けて、朝ごはんになりそうなものを探す。

あんまりないな……。ハムあるからパンにチーズとハム乗つけて焼こう。

朝は本当に食べる気にならない。

かといって昼と夜だけだと健康に悪いかなど思っで一応なにか食べるようにはしてる。

「ん〜今日はなにすっかなあ……」

バイトと大学が無い日は、割と暇ではある。

週2, 3回しかないバイトでそこそこのお金が稼げているのは本当にありがたい。

汐里ちゃんの家教師の方はなにか良くない力が働いてるんじゃないかと思ってしまうほど高額だけど……。

そういえば思っってもう一度スマホを開く。

由佳がそろそろ大会だと言っていた。

今日も朝イチから連絡が来ているし、きつと今頃は部活の練習中なのだろう。

本当に偉い奴だ。

……よし、決めた。

今日は俺もバスケしにいこう。

身体動かさなきゃね。

というかそろそろ本格的にちゃんとやつかないと由佳に負けかねない。

優しい彼女のことだ。勝っても約束通り俺をあのか園から追い出すことはないだろうけど、流石に中学生女子に負けるというのは前世のプライドが許さないし。

程よく焼けたパンを頬張って、俺はバスケットに行く準備を整えるのだった。

公園は休日ということもあってそこそこ賑わっている。

公園と言っても遊具がたくさんあるタイプの公園ではなく、自然を楽しむためにベンチとか池とかがあるタイプの公園なので、子供たちでゴった返す……みたいなことはあまり見ない。

そしてそんな公園の奥にひっそりとバスケットコートがあるが故に、このバスケットコートは穴場なのだと思う。

「おろ……でも流石に先客か」

今日は休日。

そんな穴場のバスケットコートであっても、流石に休日とあれば先客がいるらしい。

バスケットボールが地面を弾む音を聞きながら、俺は歩を進めた。

「あれ……？」

そしてようやくバスケットコートの中が視認できるようになって、気付く。

バスケットをしている4人くらいの中のもの……瑞々しい黒髪のショートヘアにキラリと光る青のヘアピン。

今日はおそらく学校指定のジャージを着ているらしい女の子は……もうすっかり顔馴染みになった前田由佳だ。

そしてその周りの少女達……って一人男の子もおるわ。

彼女たちは全員が由佳と同じジャージ。つまりは、同じ学校の生徒なのだろう。

「由佳が部活仲間とここで練習してるのか……やはり偉いな。今度撫でてやろう」

最近の由佳を見てみると庇護欲が湧く。

可愛らしい見た目と、バスケットをしている時の真剣な表情のギャップが良い。

妹がいたら、こんな気持ちになるのかねえ。

「……ん？」

今日はそれなら他の空いてる場所でドリブルだけして帰ろうかと思っていた時。

なにやら雰囲気がおかしいと思い、よく様子を見る。

由佳の表情が、かなり辛そうだ。

この暑い中で練習をしている……と思えばその表情もわからなくはないが、おかしいのは他のメンバー。

明らかに、由佳を見て笑っている。それも、嘲笑うような表情で。

……いじめ？

嫌な予感が、頭を駆け巡る。

いじめなら、止めなければ。けれど、勘違いで出張って行って、邪魔するのも、でしゃばりみたいで――。

結果的に、その逡巡は無かった方がよかった。

由佳の近くにいた女子が振りぬいた肘が、もろに由佳の顔面に当たった。

由佳が、勢いよく地面に倒れる。

それを見て、周りは笑っている。

ぷつん、と何かが切れた。

由佳が無双してる。どうしてこうなった()

由佳がいじめられてるのを見て、俺は完全にキレてしまった。

今になって思えば、あそこであんなにキレたのは、俺にとつて由佳がいつの間にか大切な存在になってたんだなあと自覚する。

いや、ほんと良い子だし。

妹にももらえないかな。……ってこんなこと言ったら犯罪で捕まるわ。やばいやばい。

まあそれはいいとして、今は由佳が実力を先輩達に見せつけるべ

く、普段の練習の成果を遺憾なく発揮している。

正直最初のワンプレーで大体実力差は分かった。

どう考えても由佳の方が上で、ああ、普通女子中学生ってそんなもんだよなって安心したまでである。

そしてそうなれば、俺が出しやばりすぎるのは非常に良くない。

そりゃ俺が全力でやれば勝ち揺るがないだろうけど、今回の目的はそこではない。

今回の目的は、由佳が自分の力でスタメンを勝ち取ったことを示すこと。

実際に今、由佳が女子の先輩3人を相手に大立ち回りを演じようとしている。

そして。

俺には気になっていたことがもう一つあった。

さつき由佳を全員で虐めていた時。

その遠くから、気まずそうにそれを眺めていた少年。

俺の目の前に佇む、由佳と同じ学校指定のジャージを着たこの少年は、終始気まずそうにしている。

どうしても気になったので、俺は少しかがんで、この少年に聞いてみた。

「……ねえ。君はどうして由佳のいじめに加担してるの？由佳に恨みがあるようには、見えないけど」

「……それは……あやこが……僕の彼女が、悲しんでたから……」
あやこ……そう言われて、思い出す。

由佳が嬉しそうに試合に出れるかもと言っていた時のこと。

先輩から「頑張つて」と言ってもらえたんですと覚悟を決めた目で言っていたこと。

そしてその相手の名前が、たしかあやこだったこと。

……なんとなく、話が見えてきた。

「じゃあこれは、彼女がこうしてくれて頼んだの？」

「ち、違うー！あやこはこんなこと、したかったわけじゃ……」

「じゃあもし仮にこれでさっき由佳が大怪我をしていたとして、それでその彼女に、君はこの行いを胸を張って報告できるの？」

「……でも」

話を聞くに、きつとそのあやちゃんとやは、悪い子じゃないの
だろう。

少なくとも、ここにいる子達よりは。

本心はわからないが、少なくとも由佳に頑張つてと声をかけたこ
と。

悔しかったかもしれない。けれど、そこで素直に応援できる人間性
は、大したものだと思う。

「彼女に誇れる自分にならなきゃ」

「……」

「君がやるべきことは、由佳を虐めて、怪我をさせて、彼女さんが試
合に出れるようにすることじゃない。彼女さんを応援して、支えて。
彼女さんがたくさん練習するのを見守つて、また実力でコートに立つ
手伝いをしてあげることなんじゃないかな」

「……」

……我ながら説教臭かったかな。

まあでも、本心だ。

この少年があの子達に脅されたか、はたまた別の思惑があつたかは
わからない。

この子はこのいじめに加担してしまった。それは紛れもない事実。
けれど、過去は変えられなくとも、未来は変えられる。

後はこの少年が正しい方向に進んでくれることを祈るばかりだ。

コートに目を移した。

由佳のドリブルスキルに、磨きがかかっている。

1人、2人、また抜いた。

その動きを俺は良く知っている。

俺がよくやっっている動きだ。見て、学んだのだろう。

本当に……よく努力する子だ。

最後に3人目を前にして……由佳は跳んだ。後ろ向きに。

ははっ……ついにそれまで真似されちゃったか。

俺それできるようになったの、高校2年とかだったけどなあ……。

綺麗な放物線を描いたボールの行く先は、もう見なくても分かる。

だから、俺は彼女を見た。

体勢を後ろに倒しながらもシュートを打ち切った由佳の横顔は、とても輝いていた。

全てが終わって、俺は由佳と勝利を喜んだ。

例の彼が女子達に強い口調で何かを言っつて、その後、女子達が由佳に謝罪。謝って許される行為かと言われれば、正直そんなことはないだろう。

軽傷で済んだから良いものの、最悪救急車を呼ぶ事態になっつていっただけだから。

けれど終始由佳のリアクションは薄いものだった。

あんまり興味がないんだろう。なんか本人はこれから学校でバスケやりやすくなったらしいなーくらいにしか思ってたなさそうだった。ほんとにバスケバカなんだから！ちよつとは頓着しなさい！

ボールを片付けている由佳を見て……その頬に血がついているのが見えた。

肘を入れられた時、頬がどうやら切れてしまっていたらしい。

あ！そういえばこのまえ自転車でコケた時に絆創膏買つとこー！
と思つてバッグの中にぶち込んだんだつた！

そう思つてバッグに手を入れれば、すぐに絆創膏は見つかったのだ。
で。

仕方ない。今日は由佳たくさん頑張つたからね。

俺が貼つてあげよう。(何様)

「由佳、ちよつと待つて」

「え……？」

えーと……右頬がわずかに切れている。

由佳の可愛いお顔に傷だなんて、やっぱ許せねえな？(過激派)

最近目が悪くなったのか、近くまでいかない、傷口がよく見えな
い。

あれ？つてか先に消毒だった？

まあけど消毒とか持つてないし、しゃーないやろ。

ぎゅつと目を閉じている由佳の頬に、絆創膏をぺたつと貼り付け
た。

……？なんでこんな力入ってるんだ？可愛いけど。

「良かった〜この前自転車でコケて怪我してからさ、バッグに絆創膏ストックしておいたんだよね！頬からちよつと血出てたし、これで大丈夫やね。もっと早く気付いてあげればよかつただけ……ごめんごめん！」

「……」

由佳が素っ頓狂な顔して、頬を触った。そこには俺が今しがた貼った、絆創膏。

そしてみるみるうちに、由佳の顔が真っ赤に染まった。

「……っ!!!」

「うわっ?!どうしたの由佳?!」

かと思うと、今度は思いっきり突っ込んできた。

思わず胸で由佳を抱き留める形になる。

……色々あって、疲れたのかもかもしれない。

学校で、由佳がどんなことを今までされていたのかは分からない。けれど、今日のあの場面を見ただけでも、相当な嫌がらせを受けていたことは容易に想像がつく。

しかしそんなことおくびにも出さず……俺とは常に笑顔でバスケットをしてた。

辛いことも、たくさんあっただろうに。

「……よく頑張ったね、由佳。カッコ良かったよ」

最後は、本心で。

今日の由佳は、最高にカッコよかったぞ。

俺はその後もしばらく、由佳の艶やかな黒髪を撫で続けたのだっ
た。

ツンデレ系OLは知る

どの曜日が一番精神的にキツいかと言われた時、多くの人は月曜日と答えると思う。

今日もいつものようにスーツを着て。適当に化粧をして。変わらない日常に足を踏み入れるこの瞬間が、私は憂鬱でたまらなかつた。

「おはようございます……」

職場のドアを開く。

私は適当に同僚に挨拶をしながら、足早にデスクへと向かった。

最近ハマきとに週末会えるのもあって人生に対するやる気は上がっているものの、それで別に仕事のモチベーションが上がるかわれるとそうでもなく。

お金をもらうためだと割り切っているくらいはある。

デスクにたどり着く少し前。

何の気も無しに、職場の中央に設置された大きなホワイトボードを確認する。

このホワイトボードには今週の予定、そして誰かが休みの場合はその休む日程などが書き込まれているのだが。

「あれ……？」

いつもと変わらないように見えたホワイトボード。

しかし、少し気になる点が。

金曜日の欄。

みき先輩が午後休をとっているのだ。

金曜日といえば私達の「宴」の日。

午後休ということは先輩は今週は行かないのかな……？

「星良おはよう」

「あ、みき先輩おはようございます」

そんなことを思っていたら、みき先輩が。
どうせだし聞いてみよう。

「みき先輩今週金曜午後休なんですか？」

「ふっふっふ……そーなのよ。あ、《宴》にはちゃんと行くから安心して」

「?そんなんですか」

「理由……気になる?」

にやあと笑うみき先輩。

いやこれ絶対聞いて欲しいやつじゃん……。

「き、気になりますね……」

形式上とりあえず気になると言うのと、みき先輩がちよいちよいと私を手招きする。

耳を貸せ、ということだろう。

仕方なくみき先輩に近づいた。

「同伴出勤って、知ってる?」

「え……」

同伴出勤。聞いたことはある。

確か、ボーイと事前に待ち合わせして、お店と一緒に行くシステムだったような……ってまさか!!!

「そ……♪ゆうせー君と、デートしてから一緒にお店行くんだ♪」

「……!!!」

う、羨ましい!!!

羨ましすぎる。え、なにそれずるい。

「いやー。あのお店あんまり同伴のメリットボーイ側に無いらしくて?相当お気に入りだったたりしないと、同伴できないんだって……いや……困っちゃうなあ……気に入られちゃったかあ……!!!」

う、うざすぎる。

けど、それはきつと事実なのだろう。みきさんはあのボーイといい感じなのは知ってたし……。

「そ、それはボーイの方からお願いされたんですか？」

「……」

あ、目逸らした。

流星にね。流星に自分からお願いしたのね。良かった。

私は内心で安堵の息を吐く。

ボーイの方から誘われていたなら万事休すだった。

みき先輩の方から誘ってOKをもらえたのだったら、まだ私にも光がある。

私から誘っても良いということなのだから。

よし、それならすぐ実行だ。

「私も……私も誘ってみます」

「お、いいじゃんいいじゃん。それにさ……これがあるのよ、これ」
「？」

みき先輩が後ろのホワイトボードを指し示す。

そこには。

「そつか……もうボーナスの時期なんですね」

「そー!!ふふふ……財布の準備は万端。同伴もばっちり楽しめちゃうのよ……ープレゼントとかあげちゃおっかなあ……」

確かに、ボーナスが出るということを考えれば、多少奮発しやすい。流星に毎週同伴はできないし、このタイミングで良いところをアピールするには絶好の機会だろう。

胸が昂ってきた。

「まあ、まさと君も星良のこと良く思ってるだろうし、同伴はOKも
らえそうだけどね!」

じゃ頑張つてね!と笑顔で自分のデスクに向かうみき先輩。

これは良いことを聞いた。

早速私はスマホを取り出して、まさとに連絡を取る。

昨日の夜も私からのメッセージで終わっているが、お構い無しだ。

『まさとおはよう』

『もし嫌だったら断ってくれていいのだけど、今度の金曜日、同伴つてできたりしない?』

2, 3回書き直して、この文章に至った。

未だに、お店以外でまさとは会う事はできていない。これは新たな一歩を踏み出すチャンス。

今から金曜日午後休は流石にとれないので、多分みき先輩とは違って、デートと呼べるほどお店の外で2人きりの時間を取れはしないだろう。

けれど、ちよつとご飯を食べてからお店に行くだけでいいのだ。

それだけでも、私にとつては特別な時間になる。

いつまでも客と店員の関係ではいたくないと、誓ったから。

……まさよからの返事はおそらく11時頃だろう。

朝はだいたいそれくらいがまさよから返信が返ってくる時間帯。

それまで、待つほかない。

私は結局午前中ずっとそわそわしながら過ごすことになるのだつた。

待ちに待った金曜日。

柄にもなく、少し良いスーツを着て。

駅の商業施設のトイレで、化粧と身だしなみは確認済み。

そう。私は同伴してもらえることになったのだ。

OKという連絡をもらえた時は、それはもう飛び上がって喜んだ。

大丈夫。今日の私は、自分でできる最大限の努力をしたはず。

大きく、深呼吸。

今いるこの駅の逆側の出口から歩いて5分ほどのところに、『Festa』はある。

同伴をするときは、だいたいがお店から近いところで済ます傾向にあるらしい。

そりやその後お店と一緒に行くことを考えたら当然よね。

腕時計をちらりと見る。

腕時計だって、一番お気に入りのやつをつけてきた。シルバーバングルで、盤は小さくて表面は薄いピンク色があしらってあるやつ。

もうすぐ、まさどが来る時刻だ。

ドキドキしてしまう。外で会えるというだけで、こんなに嬉しいものなのだろうか。

「星良さん！」

ドキっとする。

この声。この雰囲気。間違えるはずもない。

私は声の方向に、静かに振り向いた。

「よかったー！ちよつとお待たせしちゃいました？ごめんなさい」

「……」

そこには、天使……いや……悪魔？がいた。

あまりにも、カッコ良すぎる。カッコよさの暴力。

今のまさどになら、思い切り殴られたって多分嬉しい。

いつも通りゆるいパーマがかかった黒髪。

白の半そでの襟付きのシャツ……は第一ボタンが開いていて、そこ

からキラリと輝くシルバーネックレスの首元。

シックな黒のパンツスタイルが、お店で会う時とは違ったフォーマルさを演出している。

なんというか、こう……！

「エロすぎ……！」

「……？なんか言いました？」

「な、なんでもないわ……全然、待ってないし。行きましょ？」

あ、危ない。思わず言葉に出してしまった。

でもこれはズルすぎる!!こんな格好してきて……！きつと、スーツの私に合わせてフォーマルチックな恰好にしてくれたのかもしれないが。

そのくせいつもの心を溶かす笑顔は健在ときた。

こんなの兵器だ。平気で人を殺せるレベル。

「……？」

可愛く首をかしげるな……！

く、首元に目が吸い寄せられる……！さ、鎖骨が……こんなの見ない女いないわよ!!

誘ってるでしょこれ!!

「い、いいから行くわよ！」

「はい！すいませんお店まで予約してもらっちゃって！楽しみです」

あ……可愛い……無理……。

え、もうこれデートだよ？私この子とデートしてるって認識であってるよね。

ただのダイナーデートだけど……でも……最高。

胸の昂ぶりに気付かれないように気を付けつつ、私は予約してたお店へと向かった。

「18時半から予約してた望月です」

「……あ、はいご案内しますね」

……あの受付の子……まさとに目を奪われてたわね……。まあ気持ちはわからないでもないけど……ごめんね。この子私のなんだ。

ゾクゾクと背筋に甘い快樂が走る。

言いようのない優越感。たまらない。クセになる。

無事お店についた。道中はまさとが隣を歩いているというだけで夢見心地。何を話したかあんまり覚えてないもの。

結果的にこのお店を選んだわけだけど、お店選びも悩みに悩んだ。年上の余裕を見せてあげたくて高いお店にしようかと思っただけど、高級過ぎてもまさとが委縮してしまうかもしれない。

かといって、安すぎるお店でまさとが満足してくれるかわからない。

だから、程よい中間。

テラス席のあるお店を選んだ。大学生にはちよつと高いくらいの、良い感じのお店。

「うわ〜綺麗なとこですね……！」

「ふふ。こんなんじゃ喜んでなさとはまだまだ子供ね」

「え、そ、そんなことないっすよ。ぜんぜん大人です」

「ふふふ……いいのいいの。ほら、座って」

テラスのテーブル席。

もう日は沈みかけていて、外に見える公園の街灯がちらほら点いて

いる。

うん。景色も良いところを選んでよかったわ。

「好きな物頼んでいいよ。ここは私が出すから」

「え、ええ？流石にちよつとくらい出させてくださいよ」

「ダメ。私が無理言って同伴してって頼んだんだから。まさとは一銭も出させません」

「悪いですよ……そんな……」

「本当に良いの。気にしないで。前も言ったけど、お金には別に困ってないのよ」

使う相手も趣味も無い。

だから、今はまさとのために使う。

私にとってはあまりにも自然で、当然のことだった。

「……めっちゃくちゃおいしかったですよこのパスタ……！こんなに美味しいもの食べたのいつ振りだろ……」

「ふふふ……そうね。とてもおいしかったわ」

正直、味はそんなにわかってない。

けど、目の前にまさとがいて……まさとがこんなに嬉しそうに食べてくれた。

それだけで私の幸福度はカンスト。これ以上の喜びなんてきつくない。

良かった。本当に良かった。

食後の紅茶を楽しみながら……私は、前から気になっていたことを切り出してみた。

「ねえ、まさと」

「……はい？」

きよとんとした表情が可愛い。可愛い私のまさと。

「……なんで、この仕事やってるの？」

「……あくつと……」

これは、本来御法度の質問。

そんなことはわかってる。ある意味自分を売る商売。

事情は人それぞれで、ただの客である私が踏み込んで良い領域じゃない。

けど、私は知ってしまった。彼の魅力を。

だから、どうしても気になった。彼は、自分からこういう仕事をするタイプじゃない。

あのお店でも、明らかに浮いている。

だからこそ、惹かれたのかもしれないが。

頬をかいて、まさとが返答に困ってる。

……やつぱり、言いたくないよね。だからSNSでは聞かなかつた。

これを聞く時は、面と向かって話す時にしたかった。

「ごめんなさい。言いにくい、わよね」

「あ、いえ、別に大したことじゃないんですけど……」

慌てたように、彼はマグカップを置いた。

「実は俺……お金、無くて。元々施設暮らしだったんです。それで、あそこのお店の人に良くしてくれる人がいて、働かせてもらえることになって……って感じですかね」

「え……？し、施設……？」

施設って、児童養護施設ってこと？

「あ、そうなんです。変、ですよ。両親、いないんです。俺」

「……っ！ごめんなさい!!」

「え？……あーいやいや！全然気にしてないんで、大丈夫ですよ?!」
バカなことを聞いた……!」

まさとの気も知らないで……！

「本当に、大丈夫です。今は恵まれています。普通に暮らせてますし……幸せですよ」

「……！」

——色々な感情が混ざり合う。

目の前で笑っているまさとが可愛いと思う感情と、バカなことを聞いたという後悔と。

それと。

私が守護りたいというどうしようもなく、それでいてあまりにも強すぎる欲求。

「いや〜本当に美味しかったです！ありがとうございます！」

「いいのよ。いつものお礼」

お店を出て、大きく伸びをするまさと。

そんな仕草一つ一つが、愛らしくて、たまらない。

「でも俺なにも返せてないですけど……」

「そうねえ……じゃあまたこうして私と出かけてくれる？」

「えっ、もちろんお願いします」

ふふふ……やった。自然に次の約束をとりつけることができた。

今度はお店の前じゃなくて……後、とか。

思わずニヤけてしまう。

「じゃあ、お店に行きましようか」

「はい！行きましよう！」

わたしが歩きだして、まさどがついてくる。

気分が高揚していているのに、いつもと違って、緊張していない。

ふわふわしてるのに、意識はハッキリしているような、そんな気持ち。

今なら、普段は言えないような大胆なこと、言えるかもしれない。

「ねえ」

「……っ？」

ねえ、可愛い私の、まさど。

「お店まで……手、繋いでいっちゃだめっ？」

「……っ？いいいですよー！」

指と指を絡めた。

まさどの手が、温かい。

ああ。

最高の気分だ。
甘美に酔いしれる。

ねえ、まさと。

横を歩く愛しい彼を見る。

カッコ良くて、可愛いまさと。それでいて……。
可哀想な、まさと。

私が、守護るから。

もうこんな仕事しなくてもいいように。私が頑張るから。

彼の手を、強く握る。

ずつと一緒にいようね。

文学少女JKは助けたい

土曜日。

私にとって土曜日は、週に一度の勝負の日になっていた。

「早く帰らねば……!」

私は午前の授業を終えて、猛烈ダツシユで帰宅中。

早く帰って、シャワー浴びて、可愛い服を着て。

将人様襲来イベントに備えるのだ。

「……ん?」

そんな時、ポケットに入れていたスマホが振動。

これはSNSの通知。

将人さんからもう連絡きたのかな?

【聖女の集い】

《三秋》

『汐里爆速帰宅しすぎ』

『プリント余裕で忘れてるよ』

《まな》

『wwww』

『汐里あれじゃない?王子様デーだから』

《初美》

『あくそつかそつか画像よろ』

『私まだ信じてないから』

グループチャットだった。

なんか好き放題言われてるんだが???

確かに将人様は王子様だが、画像を撮るのは許可が……。

盗撮?いや流石に気が引ける……。

《篠宮汐里》

『ごめんごwww』

『今夜でいいからプリント写メ撮ってくれと助かる』

そんな急な課題プリントではないだろう。

新しくできた友人達に感謝しつつ……と思っていたら、すぐにまた通知。

無視して家に帰ってから返すか……と思っていたら。

——無限に通知が鳴る。

なんやねん！

流石に煩わしくなった私は仕方なくもう一度スマホを開いた。

《三秋》

『え？wwwちよつと待つて？www』

『汐里そんなアイコンだったっけ??www』

《初美》

『www待つてwwwってか名前フルネームになつとるwww
w』

『おまwwwこの前まで「しおりっち」だっただろうがwww』

《三秋》

『さては王子様と連絡先交換したなwww』

《まな》

『待つてwwwひとつも変わつとるwww』

『BGM設定すなwww』

《三秋》

『ひいwwwお腹痛いwww』

『おい。「推しの顔を部屋に貼りたい」だったろ。戻せ』

《初美》

『アイコンもアニメのアイコンだったよなあ???なにしてんだ。戻せ』

『どこかわからない海辺で後ろから撮ってもらいましたアイコンやめろ』

『ってかそれどーせお前じゃないだろ』

《まな》

『お腹痛い W W W W W W W W』

『本人じゃねえなら誰だよこいつ W W W W W W W W』

《三秋》

『バンドグループの流行りの曲 B G M に設定すな。どうせ聴いたことねーだろ』

『ひとことも「秋が好き」じゃねえよ W W W W W W W W 聞いてねえよ W W W W』

……。

ふう。

私はスマホをそっ閉じ。

よし。

短い間だったけど――

こいつらと友達やめよう。

ふと、読んでいた小説を一旦閉じて、壁にかかっている時計を見た。時刻は15時になろうとしている。

いつもなら10分前から5分前には家のインターホンが鳴るのに、未だに将人様は来ていない。

「……珍しいな？」

将人様は私からすると……いや多分私からしなくても完璧超人で、遅刻なんてめったにしない。

それに、30分前に連絡はちゃんと来ていて、いつものように『もうすぐ駅つくね』と来ていた。

それならば、もう着いていてなんらおかしくない。

部屋を出て、階段を降りる。

もちろん将人さんの姿はない。

「お母さん、将人さんまだ来てないよね？」

「?そうね。珍しいわね。いつもこのくらいには来てるのに」
リビングの時計を見た。

ぴったり15時になっている。スマホには、未だに通知等はない。もし駅についたのがあの時間なら、とつくについていておかしくないが……。

なにか、嫌な予感がした。

「お母さん、ちょっと私駅まで行ってくる」

「ええ？」

「基本的に一本道だし、すれ違うはずだから。じゃ行ってくるね」
胸騒ぎがして、私は急いで靴を履く。

何事もなければそれでいい。

けれど、あれだけカッコ良い男の人だ。

なにかに絡まれていたっておかしくない。

私はすぐさま玄関から飛び出した。

スマホを握りしめて、私は進む。

お母さんにも言ったが、私の家から駅までの道のりは複数あるけれど、わかりやすい道で行くなら一本だ。

きつと将人さんもこの道を通って来てるはず。

そろそろ駅についてしまうくらいのところまで来て……。

遠くに、知っている人の姿が見えた。

今日もいつものような白いTシャツの上に小麦色のベストでさわやかスタイル。

間違えるはずもない。

将人さんだ！

スーツ姿の女性2人に、なにやら囲まれている。

え、ナンパ?!

「是非検討していただけませんか！無理なことはさせませんので！」

「あゝつときつきから言ってますようにそれはできませんし、それに今急いでいて……」

とりあえず近くまで来た。

話を聞くに……ナンパ、ではないようだ。モデルかなんかの勧誘かな……?

確かに将人さんは誰がどう見てもイケメンなのでそれくらいはされるだろうけど……。

耐性なさすぎでは?!話聞かずに突っ切っちゃっていいんだよそういうの?!

きつと人の良い将人さんのことだ。

話をしっかり聞いてあげたのだろう。そして断り辛くなつて困ってる……そんなところだろうか。

待てよ……。

私の脳裏に、一つの可能性がよぎる。

ここで私が助けたら、もしかして好感度爆上げでは?!?!

き、来た……好感度爆上げイベント……これを、颯爽と助けてし

まったら……！

『ふふふ。大丈夫ですか？将人様……』

『し、汐里ちゃん……好きだ（トウungk）』

きたらああああ!!!

大勝利。勝ったわ。

よしでは早速――。

……いやちよつとマテ茶。

どうやって颯爽と助け出す？

『すみません。私の彼氏から離れてもらっていいですか？』

ハードルが高い！

いきなり彼女ムーブは流石に!!他は？

『ごつめくくんお兄ちゃん待った??ほら、はやくおうち帰ろ?（キヤ

ルン』

キヤラがきつい。そんな妹ムーブ私にはできない。

なにか、なにかいい案はないの?!

「じゃあ、よかったら連絡先だけでも！交換してもらえませんか！」

「いや、あの……」

「電話番号だけでいいんです。またご連絡しますので……」

まずい！

こうしてはいられない。

将人さんが連絡先を交換してしまう前に!!

ぜ、全然ムーブ決まってるけど、助けなきゃ!!

私は、全速力で将人さんのところへ駆け寄った。

もうなんでもいい!や、やらなくては!

「あ、あのおおお!!」

「……?」

私の声が予想以上に大きかったからか、スーツの女性2人がこちらを見た。

あ、圧がすごいこの人達。

私のことナメクジかなにかだと思ってません??

け、けどおいら負けないよ。

私は勇気を奮い立たせた。

「お、おうおう随分威勢がいいじゃあねえか。そこにおわすお方をどなたと心得る」

「……?..誰ですか?」

や、ヤバイ。もう導入もめちやくちや。

時代物の官能小説なんか読むんじゃないかった。

颯爽って言葉本当に知ってる? 辞書引こつか、

王子様を守る騎士様になるつもりだったはずがどうしてこんな……。

あーもう!ものすつごい怪しまれてる!なんとかしナイト!騎士だけにね! (激ウマギャグ)

「あく拙者伊賀のくノ一として生を受けて早17年。この技は大事の際に使うと心に決めておりましたが……致し方ありますまい。と
うっ!!」

「は???キモ……ってあっ!ちよつと!!」

終わったわ。

何言ってるんだ私。

とにかく私は終始きよんとしていた将人さんの手をとって走り出す。

もうなんでもええわ!!逃げたら勝ちやろ!!!

「はあ……！はあ……！」

そうでした。私体力クソザコナメクジでした。

もう家に着く前にバテました。

でも、追っつけてきてはないみたい。

なんとか撒けたようだ……。

「将人、様……大丈夫、ですか……」

あくもう最悪だ。

プランが台無し。

もつとカツコ良く助けて、惚れてもらうはずだったのに……。

それになんか思い出すとめちやくちやキモかったし。

ドン引かれてる……よなあ……どうやってごまかそう。

清楚がしている所業じゃなかった……。

「……ふふ……あははははは!!!」

「将人、さん？」

振り返ったら将人さんが、目に涙を浮かべながら笑っている。

私が呆気にとられていると、ひとしきり笑い終えた将人さんが涙を拭いながらこう言ったのだ。

「ありがとう……ありがとう汐里ちゃん！それに……汐里ちゃんってあんな風に話すことできるんだね！」

「あ……いや、あの、忘れていただけですと……ほんと、緊張してし

まっていただけですの……」

お、終わった……バツチり聞かれていた……いや当たり前だけど。最悪だ……せつかく清楚お嬢様を完璧に演じ切っていたのに……
(本人調べ)

「ほんと、ごめん。笑うとこじやないよね。助けてくれてありがとう。助かったよ。それに、遅れちゃってごめんね。けっこうしつこくてさ……振り切れなくて」

「え、ええ。そうですね。なかなかしつこそうでしたね……」
「でも、なんだろう」

「……？」

……あ、そういえば、手、握ったまま……。

「汐里ちゃんのあーゆー所、もつと見てみたいかも」

「……え？」

「だってさ、汐里ちゃん、いつもなんかこう……俺と壁作ってるみたいだったから。さつき、確かにテンパってたようには見えただけ……なんか楽しそうだったよ？だから……俺に見せるような顔だけじゃなくて……色んな顔、見てみたいなって」
「……」

手を、強く握ってしまった。

心臓の鼓動が伝わりそうで、ごまかしたかった。

ダメだ。ダメに決まってるよ。

こんな内面見せたら、嫌われるに決まってるから。

なのに。

どこか素で接してみたいと思う私もいる。

物語のヒロインのような娘じゃなく。

素の私という村人Bを好きになって欲しいというワガママな想いが顔を出す。

「……考えて、おきます」

「うん」

繋いでいた手を放した。

心臓がまだバクバクとうるさいのは、きっと全力で走ったせいだけじゃない。

今はまだ、勇気がでないけれど。

この人なら。

受け入れて、くれるのかなあ。

幼馴染系JDは打ち返す

大学という教育施設は、学ぶ側の自主性一つで日々の拘束時間が違う、と私は思う。

やる気が無い人は人に出席を任せて遊びに行ったりしてるし、やる気のある人はたくさん授業に出て単位をとってる。

もちろん、大学によつてはそんなことないんだろうけど。

私はどちらともいえない中間で、それなりに授業をとつて、それなりに休みもとってる。

そんな中で、今日はどちらかといえば休みの日。

3限が終わつて今日はもうとつている授業は無い。

「ん〜っ！疲れた！いやあ来週小テストか〜自信ないわ俺」

「まあまあ、なんとかなるなる！」

「みずほはそんなこと言つていつつもギリギリじゃん……」

「ギリギリだからおーけーなのだよ！」

今日も今日とて3人で授業を受けて。

最近はこの3人で行動することにも慣れてきたように思う。

チラリと、そんなみずほの言葉に笑っている将人の横顔を見た。

慣れてきたからこそ……自分の気持ちを将人にぶつけて、もしダメだった時のことを考えて萎縮する。

けど、いつまでもなあなあにしてると将人は危なっかしいから誰かに取られちゃうかもしれない。

それだけは、それだけは絶対に無理。

「……？恋海、どうかした？」

「んーん！なんでもない！それじゃ、約束してたバッテリーセンター行こうよ！電車で少し行ったところにあるからさー！」

「おー全然いいよ」

今日は元々、将人とバッテリーセンターに行く約束をしている。

私はこうみえてソフト出身だし、バッテリーには自信がある。け

どそう言っても全然将人が信じてくれないので今日証明する！そういう約束なんだ、今日は。

「みずほも行くでしょ？」

横を歩く能天気ツインテガールも運動は得意なタイプ。

最近是将人と打ち解けたみたいだし、きつと来てくれると思ったのだが。

「え？あー……あはは！今日はちよつと先約があつて……2人で楽しんできてよ！」

「あれ？そうなの？」

「うんうん！やっぱ大人気のみずほちゃんは忙しくつてね……ヨヨヨ」

こんな風に言っているけど私からしたら珍しいなつて思つてしまふ。

みずほは付き合い長いし、こつちから誘うと大体尻尾振つて来るイメージなんだけど……。

「みずほ、なんか用事？」

「……っ」

将人もちよつと意外に思つたのか、みずほの顔を覗き込んだ。

「い、いや〜！困つちやうなあ。将人もそんなにこのみずほちゃんが来て欲しいかあ。けど今日はダメなの！ごめんね！じゃあ2人も、また明日〜！」

「あ、ちよつとみずほ！」

マリンキャップを被り直したみずほは、そのまま一目散に走つていつてしまった。

そんな急いでのの？ 駄までは一緒のはずなのに……。

「ちよつと変だったね、みずほ」

「あ……」

変、と言われて、私は気付いた。

みずほが気を遣つてくれたんだ。私と将人が2人でデートできるように……。

「みずほのバカ……別にいいのに……」

「?どした?」

「なんでもない!じゃあ行くっか!」

明日会ったらちやんと行ってやらなきや。

別に私は3人でいる時間も好きだし、バッティングセンターくらいなら3人で行ったってなんの問題もないよって。

大学内、確かに3人で行動することが増えたけれど、私はそれでみずほを疎ましくなんて思わない。

そもそも私が紹介したんだしね。

私は、みずほのことも大好きなんだから。

大学の最寄り駅から電車で10分ほど。

私と将人は、バッティングセンターのある駅までやってきた。

駅の改札を出れば、目の前にあるビルの屋上が、ネットで囲まれている。

バットでボールを打った時の特徴的な金属音も、ちらほら聞こえてきていた。

「久しぶりにバッティングできるのワクワクしてきたわ」

「ふふ、将人子供みたい」

「こういうのは童心に返るのが一番だろ!」

るるるんでエレベーターに向かう将人を追いかける。

将人の子供の頃か……どんな子供だったんだろう。もう既にカッコ良かったのかなあ。

エレベーターに乗って、屋上へ。

券売機に1000円を入れれば、打席4回分のチケットが出てきた。

「どっちが先打つ?」

「いいよ将人先で、さっきっからもう目が輝いてるもん」

「あはは、バレた？」

本当に子どもみたいだった。そんなところも、可愛いくて、愛しい。将人は足早に打席に向かっていく……って。

「将人そこ130kmだよ？流石に最初からは……」

「大丈夫大丈夫！俺結構打てるから！」

「ほんとかなあ……」

このお店で2番目に速い球速の打席だ。

男子でこれを打つのはけっこう難しいと思うけど……。

「あ、ごめんこれ持ってもらっついていい？」

「あ、うん」

将人が打席に入る前に、自分のリュックと、腕時計、それにネットレスを渡してきた。

……え、なんか彼女っぽくない？彼氏の荷物持っけてあげる感じ、めっちゃうちゃ彼女っぽいよね?!

もう彼女でいいよね（自己完結）

幸せだ……。

「よーしー行くぞー！」

右打席に入った将人が、腕まくりをして打席に立った。

ネット越しに、それを見守る。

モニターが点いて、ピッチャーが振りかぶる。

映像に合わせて、ボールが射出された。

「よっー！」

将人がシャープなスイングで振ったバットが、ボールを捉える。響く高い金属音。

打球は綺麗にセンター方向へと飛んで行った。

「えっすー！本当にすごいじゃん将人！」

「だろー！だから言ったじゃん！よっとー！」

次のボールも捉えた。今度は右方向。

内側からバットを出しているから、強い打球が右方向に飛んでいく。

え、上手い……まずい！これじゃ私の方が上手いというのを証明できなくなっちゃう！

そんなことは置いておいて、後ろから見る将人のバッティング姿はそれはもうカッコ良かった。

思わず、会話を忘れて見惚れてしまうほどに。

あ、そうだ。動画撮っておこう。

帰ってから見たいし。

スマホを取り出して、カメラを起動。

ビデオで将人の姿を録画する。

「よっとー！」

「え、すごいすごい！ほとんど捉えてるじゃん！」

「これくらい余裕よっ！」

心臓がドキドキする。

この会話もばっちりスマホに録画されているわけで。

こんなの、SNSに上げてしまったら……もうそれは彼氏では？

外堀から埋めてしまえばいいのでは？我ながら名案だと思う。

結局、将人はほとんどの球を綺麗に打ち返した。

「いや〜楽しかった！久々だったけど結構打ってたわ！」

「いやすごいよびっくり。本当だったんだね」

「だろ〜！」

いつになくテンションの高い将人に、こっちも笑顔になってしま
う。

さて、私もしつかり示さなきゃね。

「じゃ、次私ね！」

「つておいおい、恋海もその打席で打つの？」

「？.そうだけど？」

「流石に速いっしょ？他の打席でもいいんじゃない……」
ほほう。

将人は未だに私のことを舐めてるなあ？

「はい！これ持ってて！」

「お、おう」

今度はさつきまで持っていた将人の荷物と、私の荷物を全部将人に押し付ける。

良いでしょう！見せてあげようじゃないか。

打席に入つて、チケツトを入れる。

迷わず私は、スタートのボタンを押した。

今日はホットパンツ＋スニーカーで来てよかった。

運動するかもと思っていたから動きやすい服装を選んだけど正解だった。

モニターに映ったピッチャーから射出されたボールを……私も鋭く振りぬいた。

よしっ！センター前！

「おお〜！マジか！」

「ねっ！言ったでしょ！」

将人が驚いている。うんうん、この反応が欲しかった！

私は幼い頃に野球に触れる機会があつて、それからなんとなくソフトボールを続けていた。

なんかいつの間にか結構うまくなって、高校もそこそこ頑張った。

運動は、元々好きだったしね。

1球打ち終わったタイミングで、私のソフト魂に火が点いた。

よし！こつからは1球たりとも逃さないぞ〜！

やってくるボールを次々ミートする。

センター前、ライト前、レフト前。左足をあまり高く上げ過ぎずに、体重移動。

遠くに飛ばす力は減るけど、その分ミート力は上がる。

いつの間にか夢中になって私はボールを打ち返していた。

バッテリーセンターが終わって。

私と将人は、バッテリーセンターがあるビルの一階にあったファストフード店で一息ついている。

……んだけど。

(や、やりすぎた……)

私は絶賛後悔中。

あの後、私は熱くなってめっちゃ打った。

けどそれって、将人的にどうなの？って今更になって思ってしまった。

せつかく一緒に来たのに、将人が楽しめなきや……それに将人に少しでも私のこと良いなって思ってもらえなきや意味が無い！

なのに私はムキになってひたすらバッテリーングしてた……。

え、こいつめっちゃ打つやん怖……とか思われてたらどうしよう。

死にたい……。

「お待たせ〜」

私が机に突っ伏していると、将人が注文したものをトレーに乗せて持ってきた。

「いや〜楽しかった〜って、どしたん恋海」

「いや……あはは……」

どーしよやり過ぎたよなあ……一応、一応将人に聞いておこう。不思議そうにジュースを飲んでいる将人に聞いてみる。

「将人的にさ……運動できる子って、どう？」

「どう、とは？」

「えつと〜いや〜タイプの？好きか嫌いかで言うみたいなくら
お、オブラートに包もう。」

なるべくダメージの少ないように……！

「なんだろう、俺昔仲良かった子がよく一緒に運動してたからかもしれないけどさ、割と好きかも。運動できる人」

「……そっか」

昔仲良かった子……。

そっか、そうだよね。将人にも今までがあつて、こんなカッコ良い人が、今までなにも無いわけがないもんね。

せつかく良い答えだったはずなのに、暗くなつてしまふ自分に嫌気が差す。

「恋海はいつからソフトやつてたの？」

「え？小学校高学年くらいからだつたかな？」

「なるほどなくそれから高校までか。そりや上手いわけだ」

ポテトを食べながら、感心したように頷く将人。

よ、喜んでいいのかな……。運動できる子は嫌いじゃないつてことだし、喜んでいいんだよね……？

電車に乗つて、帰路につく。

結局、将人の子供の頃の話とかは深く聞けなかった。

これからいくらでも話す機会はあるし……。また聞くタイミングは必ず来るよね。

「じゃ、俺ここで乗り換えだ」

「あ、うん！お疲れ様！また明日ね！」

電車を降りていく将人に手を振って、お別れ。

正直、今の関係は心地良い。

大学でも一緒に行動できるし、連絡もいつでもしてるし、ほぼ付き合つてみたいな感じでデート行つてくれるし……。まあきつと本人

は付き合ってる気なんて一切ないだろうけどさ。

他の人に渡したくない。それは絶対。

だけどそれと同時に、今の関係が壊れてしまうのもまた怖い。

将人と一緒にいられなくなった……なんてなったら、きつと私は壊れてしまう。

ピロン。

スマホの通知が鳴った。

誰だろう、と思つてスマホを取り出す。そこには、《将人》の表示。なんだろ。荷物なんか返し忘れてたっけ……？

《将人》『今日はありがとう！楽しかった〜！』

《将人》【画像を送信しました】

将人から、画像……？

すぐにタップして、画像を開く。

そこには、私が夢中になつてバツティングをしてる時の、真剣な表情でボールを待つて構えている姿。

その様子が、斜め後ろから、撮られた写真。

《将人》『盗撮しちゃった笑めちやくちやカツコ良かったよ！今日の勝負は負けておいてやる！』

——ああ。どうしてこの人は。

思わず、スマホを胸に抱いた。

電車内の椅子に座りながら、この気持ちを噛み締めるように。

してほしいことを、こんなにもしてくれる。

言つて欲しい言葉を、こんなにもかけてくれる。

「やっぱり好きだ……大好き……！」

小さく呟いた。

電車が揺れる音なんか気にならないくらい、心臓の音がうるさかった。

元気っ娘JDは情報を得る

最近、私は変だ。

「みずほ、この前の授業のプリント持ってる?」

「あ、うん、もってるよ」

「……大丈夫か?なんか浮かない顔してるような……」

「そ、そんなことない!ばっちり元気いっぱいだぜ!」

無理やり、会話を終わらせる。

恋海に紹介されてから、大学では将人と恋海と3人で行動することが多くなった。

現在進行形で行われている授業も、一緒に受けている。

それ自体は、嬉しいしちよつと鼻が高い。

大学内でも男子がいるグループってだけでちよつと羨ましがられるし、それがイケメンときたら尚更。

だけど、私は恋海が将人に抱いている気持ちを知ってる。

恋海は、それをわかってて私に将人を紹介してくれた。それはある種の信頼。

もちろん、私が運命の人と出会ったというのものもあるだろうけど、私なら大丈夫だって思ってくれたことに他ならない。

なのに。

この人と……将人といると自分が変になる。

けいとさんに絡まれたあの事件以来、私の心はずつとふわふわしたまま。

私の心は、こんなに軽いものだったのかな。

運命の人を探したい。その気持ちは変わってない。

だって、あの時本当に救われたから。

そんな人がこの大学にいるかもしれないなんて思ったら、絶対に会ってこの気持ちを伝えたい。

けれどじゃあ、今私が抱いている将人への気持ちは一体何?

男の子なら誰でもいいなんて、絶対に思わない。そのはずなのに。

将人には何故かどうしても惹かれてしまう。

恋海の想い人なのに。絶対に好きになっちゃいけないのに。考えれば考えるほど、胸が痛い。

授業の内容が、ずっと頭に入ってこなかった。

ノートはずっと空白のまま。

どうしたらいいのかわからないまま。

「ん〜っ！疲れた！いやあ来週小テストかく自信ないわ俺」

「まあまあ、なんとかなるなる！」

「みずほはそんなこと言っつてもぎりぎりじゃん……」

「ギリギリだからおーけーなのだよ！」

授業が終わって、帰り道。

こうやって歩く最中は、忘れることができる。

複雑な自分の気持ちも。恋海と将人の関係も。

ただただ楽しい時間を、感じる事ができる。

「それじゃ、約束してたバッティングセンター行こうよ！電車で少し行ったところにあるからさー！」

「おー全然いいよ」

「みずほも行くでしょ？」

けど突然、こういうことがやってくる。

急に、胸が苦しくなった。

恋海は、将人と行きたいんだ。

私がそこにいたら、邪魔になる。だって恋海は将人のことが好きだ

から。

大学でも2人きりの時間を奪っているのに、外でも奪っていたら……私は嫌な奴だ。

頑張れ、私。と心の中で唱えて。

「あー……あはは！今日はちよつと先約があつて……2人で楽しんできてよ！」

「あれ？そうなの？」

「うんうん！やつぱ大人気のみずほちゃんは忙しくつてね……ヨヨヨ」

悪く、ない。

いつも通りを演じられている。これでいいんだ。

最初から、わかつてたことだから。

「みずほ、なんか用事？」

「……っ」

将人に、覗き込まれる。

悪意のない、純粋な瞳。整った、綺麗な顔立ち。

やめて。

やめて、よ。

大きく、息を吸い込む。

「い、いや〜！困っちゃうなあ。将人もそんなにこのみずほちゃんが来て欲しいかあ。けど今日はダメなの！ごめんね！じゃあ2人も、また明日〜！」

「あ、ちよつとみずほ！」

いつの間にか、走り出していた。

予定なんかもちろんない。

けれど、これ以上一緒にいるのは、心臓が耐えられなかった。

帰り道、私は乗り換えの駅で一度改札を出ていた。
定期圏内なので、お金が余計にかかることもない。
行くあてもなく、歩く。

一人で歩いている時は、気持ちを落ち着かせることができる。

「あ……」

そうしている内に、見覚えのあるドラッグストアにたどり着いた。
ここは、私と運命の人が出会った場所。

ふらっと歩いていたらまた会えたりなんか……しないよね。

あの時とは、時間も曜日も違う。

ばったり出会えたりなんかしたら、それこそ奇跡みたいなものだ。
けれど……今はとても運命の人に会いたい気持ちがある。

だって、そっちに気持ちがちやんと傾いたら、3人である時に罪悪
感を感じずに済む。

将人に惹かれつつあるこの気持ちに、踏ん切りをつけることができ
とできる。

「化粧品でも、見よっかな……」

なんとなく、お店に入った。

どうせ暇だし。

すると。

「いつもありがとうございます〜(ぎざいます〜)」

「いえー！こちらこそ〜！」

レジからこちらに向かってくる男性。

その制服に、見覚えがあった。

あの時はコンタクトが無くてわかりにくかったけど。

——運命の人と同じ、制服だ。

どくん、と心臓が跳ねた。
顔を見る……けど、顔は違う。そもそも髪色が派手すぎる。
あそこまで派手な髪色じゃなかったし、身長も運命の人より結構低い。

違う人物であることは明白だけど、同じ制服ということは、同じお店で働いている可能性が高い。

というかほぼそうだろう。

私は、ほとんど無意識で声をかけていた。

「あ、あのー！」

「……う？なにかな？」

ま、まずい。勢いで声かけちゃったけど、めっちゃくちや変な奴じゃん私。

「あ、えーつと、その」

「……う？」

な、なんて聞こう。

そうだ！大学生のバイトがいるかどうか聞いてみればいいんだ！

「あ、あの、そちらのお店に、大学生のバイトさんっていらつしやいますか……う？」

「大学生？……えーつと。あ、うん、いるよ？」
いた！

けど、大学生のバイトなんていない方が珍しいかな……う？

もうちよつと、情報が欲しいな……。

せっかく得たチャンスなんだ。無駄にはできない！

「えつと、な、名前とかって……」

「うーん、流石にお店のことだし、教えてあげられないかなあ、ごめんね」

「そ、そうですね！すみません！」

あ、当たり前だよバカバカ！

まるつきり不審者だこれじゃあ！

「あ、じゃあよかったらこれあげる。気になるなら、是非来てみたら

いいんじゃないかな」

「え……うう、ありがとうございます」

銀髪で可愛い系の整った顔をしている彼が、名刺を渡してくれた。

名刺なんてあるんだ……。

「じゃあね。お待ちしてます、お嬢様」

「……う？」

ひらひらと手を振って、そのお兄さん(?)は去っていった。

タイプな感じではなかったけれど、かなりイケメンだったように思う。

イケメンっていうか可愛いって感じかな？

あんな言葉を言われてもドキツとしたりしなかったのは、やっぱり自分が誰でも良いってなってたわけじゃなかったんだと安心しながら。

名刺を見てみた。そこには煌びやかなグラスと、夜景が描かれていて。

とにかくお店の名前を知ることができたのは大きな進歩だ。

えーと、なにになに。

「ボーイズバー『Festa』……って、ボーイズバー?!」

た、確かに今の人も、運命の人もカッコ良かったけど!

これはあまりにも予想外。名刺には、「ゆーた」と名前が書いてある。

「え、ええ……?!」

お店がわかれば、すぐにでも行こうと思っていた。

けど、ボーイズバーとなると話が変わる。

というか、運命の人はボーイさんだったのか……!

「ど、どうしよう……」

私はその場から数分、動けなかった。

結局、家に帰ってきた。

ベットにごろごろと転がって、スマホをいじる。

お店を調べてみたら、一応18歳以上から入店できるらしく、行けることは行けるらしい。

けれど……使う金額もきつと高いだろうし、ボーイズバーなんてもちろん行ったことがない。

それに。

「ボーイだから優しかったのかな……」

一つの疑問が、鎌首をもたげる。

「お店の接待の延長だったのかな……？
けど……」。

『大丈夫ですか？コンタクトですよ。一緒に探します』

『すみません！ちよつとコンタクト探してますので！』

『はい、気を付けてね』

目を閉じれば、昨日のことのように思い出せる。

あの笑顔が、優しい言葉が、思いやりが、偽りのものだったとは思えない。

ましてや私はお客さんでもなかったのだ。

お店の外で、そこまでするだろうか。

そう考えると、やっぱりあれは、彼の心からの優しさで――。

ピロン。

通知。

スマホにSNSの通知だ。
寝っ転がった体勢のまま、私は既読をつけないようにメッセージを見る。

《恋海》

『みずほ、気遣わなくてよかったのに』
『だけど、ありがとう』

恋海には、やっぱり気付かれた。
でもいいんだ。恋海が楽しかったのなら、それで……。
と思った、その時。
続けざまに、通知。

《恋海》

【動画を送信しました 52秒】
【画像を送信しました】

『みてみて。後ろから将人撮っちゃった。めっちゃカッコ良くない？』

『それに、将人が私の事撮ってくれてたの、ヤバイよね♪』

胸が、急に苦しくなった。

胸の当たりを、強く握りしめる。

なんで？

なんでこんなに辛い？ 苦しいの？

よかったねって。もうそれ彼女じゃんって。

いつもの調子で言いたいよ！

なのになんで。

こんなにも苦しいの……？

ふと、机の上にさつき置いたものが目に入った。

手を伸ばして、手に取ってみる。

名刺。

帰りにもらった、ボーイズバーの名刺。

ベッドの上で仰向けに寝転がりながら、右手を頭上に掲げてしばらくそれを眺める。

……ため息をついて、掲げていた右手を、腕で顔を覆い隠すように落とした。

「……行く……しかない、よ」

この気持ちに踏ん切りをつけるために。

親友を、自分を傷つけないように。

私は、覚悟を決めた。

バスケット部JCは良い笑顔

本格的に夏の暑さが厳しくなってきた日曜日。
蝉の声もだいぶ煩わしく感じられる。

そんな中俺は起きてからこれとやってやることなく家に引きこもっていたのだが。

「あつー……」

流石に暑すぎるやろ！

クーラーは部屋にはあるが、なるべく電気代を節約したいという思いもあって、基本的にはつけていない。

これだけ暑いんだから仕方ないと言い訳をすることはできるが、まだ夏は始まったばかり。こんなんでいちいちつけていたらこの先が思いやられる。

「……外行くか」

外の方が暑いやん。と言われたらそうかもしれないが、気持ちの問題だ。

このまま中で暑さにうなされるくらいなら、外で活動した方がまだマシ。

軽くシャワーで汗を流して、動きやすい服装に着替える。

リュックにバスケットボールとタオル等をつっ込んだ。

「……由佳いるかもしれないしな……」

スマホを確認すれば、今日も朝イチに連絡が来ているのみ。

健全なバスケット部女子な彼女は、今も練習しているかもしれない。

なんて。なんとなく由佳とバスケットをすることが楽しみになってきていることに驚きつつ。

だってあいつどんだん上手くなるんだもん。見ていて楽しい。

そろそろ本当にあの場所を取り返されておかしくない。

本当に女子中学生か???

「うし。行くか」

戸締りをして公園に向かう。

真夏の太陽はやはり猛烈な勢いでコンクリートを焼いていたが、外の空気は幾分気持ち良かった。

流石日曜日の午後といったところか、公園のバスケットには先客がいた。

「ま、そう上手くは……っつて」

感じる強い既視感。

バスケットの中の人物が見えるくらいの距離まで来て気付く。

4人でバスケットをしている女の子達の中の1人を、俺はとても良く知っている。

「由佳じゃん」

黒髪ショートに青のヘアピン。

今日は部活動のジャージではなくいつも一緒にバスケットをやるとき
の恰好だったからというのもあるかもしれないが、すぐに俺は由佳を
見つける事ができた。

まさか……またいじめ？

この前のこともある。

嫌な予感がした俺は、とりあえずバスケットの近くまで寄ってみ
た。

「こつちー！」

「はい！」

「うっていいよ！」

「ナイツシューー！」

あ、大丈夫だ。

4人とも表情が真剣で、この前と違い、バスケットに全力で取り組んで

いることがすぐにわかった。

「疲れた〜！」

「いったん休憩しよっか」

おお……なんか新鮮。由佳がリーダーシップを發揮している。

会話を聞く限り同級生っぽいし、聞いたところによると1年生で唯一試合に出ている由佳がリーダー的存在になるのは自然、なのかもね。

コート脇のベンチに向かう4人。

ん〜、どうしよっかな。せつかく練習に来ている由佳達に水を差すのも悪い。

かといって、せつかくバスケットにきたしちよつとボールを触りたい気持ちもある。

……背を向けてシューティングすれば、ワンチャンバレないんじゃないかね？

ちよつとだけシューティングして帰ろう。よし。それだ。

俺はリュックからボールを出して、バレないようにコートイン。

彼女達に背を向けて、ボールを何度かドリブルした。

軽いアツプ。

足の間を通して、今度は背中側から通して……。

うん、よく手にボールが馴染む。

1度、2度地面にボールをついて、中距離から俺はジャンプシュート。

スパツと気持ちの良い音を立てて、ボールがゴールに吸い込まれる。

うん、この距離なら成功率高くて良い。

よし、あと2，3本打って帰ろ——。

「お兄さん」

シュート体勢に入ろうとしたその時。

後ろから聞き覚えのある声。

なん……だと……。

「な、何故バレた……」

「お兄さんのプレー何回見たと思ってるんですか……それくらい、すぐわかりますよ」

いつの間にか真後ろまで来ていた由佳に、声をかけられてしまう。にこつと笑う彼女の笑みがまぶしい。

「いや〜ごめんごめん。邪魔したら悪いと思つてさ、すぐ帰るから」
「え？帰っちゃうんですか？」

「チームメイトなんだろう？いいじゃん。しっかりと練習してき」
せつかくの同級生達との練習時間を邪魔しても悪い。

ひらひらと由佳に手を振つて、俺はボールを抱えて退散。
ちよつとでもシュート打つてよかつたわ。

「あのー！」

ボールをリュックにしまおうとしゃがみ込んだ俺に、声がかかった。
た。

振り返つてみると、由佳のチームメイトであろう3人の少女達が、そろつて俺のところまで来ていた。

な、なんだなんだ。

「バスケ教えてください!!」
「ええ……」

俺に教える乞うのは由佳としても想定外だったのか、なにか4人で揉めている。

……というか由佳が一方的に怒ってそれを受け流している3人という感じがしないでもないが……。

由佳に悪い事したかなあ。

「あゝ、由佳やっぱり俺帰るよ。申し訳ないし」

「あーち、違います！お兄さんは、か、帰らないで……」

「……う？そう？」

なんか顔が赤い。大丈夫だろうか。

「由佳に教えてるように、私達にもバスケット教えてください！」

「俺が教えられることなら別にいいけど……」

さっきのプレーを見てても、やっぱり由佳はこの中だと相当抜けている。

他の子達は一般的な女子中学生バスケット部って感じだ。

上手い方ではあると思うけど。それくらいなら、俺でも教えられることはある。

「やった!!私すずかっって言いますよろしくお願いしますね！」

「私かほです！」

「みほでくす！」

おお、勢いがすごい……若いな。

もう俺はおっさんなのか……。

手を差し出されたから握りかえすと上下にぶんぶんと振られる。

元気がすごいよ……。

「も~~~~~!!!」

由佳がキレてる。やはり邪魔してしまったか……。

終わった後SNSで個人的に謝ろう……。

中学生だからかなのはわからないが、皆技術の吸収が早かった。

教えたことをすんなり行動に移すし、それをすぐ自分のものにできる。なるほど。こりや確かに中学生は最高だぜと言いたくなる気持ちもわかる。

誰の言葉だったか忘れたけど。しかも小学生だった気がするけど。

「お兄さんお兄さん！」

由佳が俺をお兄さんと呼ぶからか、バスケットの子達も俺をお兄さんと呼ぶようになった。

なんならみほちゃんはお兄ちゃんと呼んできた。由佳がめっちゃキレてた。怖e。

このポニーテールの子は……たしかすずかちゃん、と言ったっけか。

「お兄さんにとって由佳ちゃんってどういう存在なんですか?!」

「ちよつとすずか?!?!」

すごい勢いですずかちゃんをヘッドロックキメる由佳。

いやそれ流石に痛いやろ……。

由佳も誤解されたら嫌だろうから、よし、ここはしっかり言っておいてあげないとな。

由佳の好感度を回復させておこう。

「由佳はそうだな……まだ会ってからそんなに日が経ってるわけじゃないんだけど。もう俺にとっては、妹みたいな存在だよ」

嘘偽りない言葉だ。いつの間にか由佳とバスケットするのが楽しみになっっているし、バスケット以外の話も良くするようになった。俺自身、由佳と話す時間は割と好きだなあと思う。

ちよつと凶々しかったかな……?でも由佳はそれなりに俺に懐いてくれているし、嫌がられることはない、と信じたいが……。

「い、妹……」

あ、ごめんなんか嫌がられてるっぽい。

泣きたい。勘違いでした。

「はいはい私も質問!お兄さんって彼女いるんですか?!」

今度はなんかやたらとギャルっぽいみほちゃんから質問。ませてるなあ〜今時の中学生ってそんなもん？

「いないよ〜。独り身さ」

「ええ〜めっちゃ意外！はいはい！じゃあ私彼女りっこーほしまーす！」

「みほ!!!」

わ〜由佳すごいキレてる〜。さつきはちよつと落ち込んでいたり、怒ったり。由佳の情緒が心配だ。

にしても速攻で彼女立候補しますとか言っちゃうあたり、まだ中学生というのは恋に恋する時期なんだろう。

「「「ありがとうございますーございましたー!」」」

「はい、こちらこそ混ぜてくれてありがとうございます〜」

由佳以外の3人が、ベンチの方へ帰っていく。みほちゃんなんか「3年経ったら告白しにきまーす!」とか言ってた。

ギャルっぽいけど快活な良い子だったし、多分3年経ったら俺の存在なんか忘れてるよ……。

「あの、ありがとうございます。ま、将人兄さん」

「ん?んーん。こちらこそ、邪魔してごめんね」

どういう心境の変化なのか、由佳は俺のことを将人兄さんと呼びだした。全然良いけど、さつき妹扱い嫌がってたのは気のせいだったのか……?」

「良い子達じゃん。大切にしなよ」

「そうですね。よかったら、今度試合とか見に来てください」

「お、是非是非。由佳が試合しているところ見たいしね」
試合って一般の人でも入れるのだろうか。大会とかなら見れるのかな……?」

「あ、あの……」

「ん?」

夕焼けに照らされて、心なしか由佳の頬が紅い。

でもやっぱり、こうして見ると幼いながらも由佳の顔は女性らしい丸みを帯びていて可愛いなと思う。翡翠色の瞳も、透き通っていて綺麗だ。

将来は、きっと美人になるだろう。

少し、間があつて。

「なんでも、ないです」

「……う?そ?そしたら、また今度ね。いつでも練習付き合うからさ」
数秒の間に、由佳がなにを考えていたかはわからない。

何かの言葉を、飲み込んだように見えたけど。

「はい。今度は、2人で、練習したいです」

「ははは、そうだな。由佳に教えるなら、2人きりの方がいいな」
他の子達とは教えてあげるレベルが違う。

そういう意味でも、由佳にとっては2人でやるほうがスキルの上達にはつながるだろう。

「はい!!またお願いします!」

最後に明るく返事を返してくれた由佳の笑顔は、やっぱり可愛かった。

バスケット部JCは本気です

バスケット部の同級生は、良い子が多い。

最近はお兄さんのおかげで多少マシになったけど、以前は酷かった先輩からの嫌がらせを受けてる時も、この子達はずっと味方でいてくれたし……。

皆仲良しで、信頼してます。

だから、私達が3年生になった時とかは、全員で大会とか頑張りたいなってちよつと思ってたんだけど。

「えくくなにあのカッコ良い人!!ちよつと由佳なんであんな人いるのに紹介してくれなかったの?!」

「私毎日ここ来ようかな……」

「由佳ったらあの人一人占めする気だったんでしょ!今までどんなことしてきたの!えっちは!えっちは!えっちしたんでしょ!どこまで?どこまでやったの!このむつつり大臣!」

……私今とっても嫌いになりそうです。

何故こんなことになってしまったんでしょうか。

今日はたまたま部活動が無く、皆暇だったのでバスケットをしようとい

うことになりました。

地域開放されている体育館にしようかという話にもなったのですが、体育館の中は蒸し暑いですし、外でバスケットしたいという話に。

私は幸いお兄さんとバスケットする公園を知っていたのでそこを提案しました。

……お兄さんとの場所だし、ちよつとだけ抵抗はあつたけど……。そんなこんなで公園でバスケットをしていたのですが、私達が少し休憩している隙に、一人の男の人がコートを使ってバスケットをしました。

「えー！みほたちがいない隙に場所とられちゃった〜！」

「……ちよつと待って男の人じゃない。一人って珍しいね」

友達の言葉を聞いてその人を見てみると……。すぐにお兄さんだつてわかりました。

背丈も、雰囲気も、そして……。バスケットのプレーも。

どれか1つでもあれば私はわかるくらいなのに、3つも揃ったらわからないわけがないです。

私の、大好きな人。

「え、由佳どこ行くの？」

「由佳ダメだよ！いくらむつり由佳ちゃんでも通りすがりの人には犯罪だよ！」

……失礼すぎない？

私むつりじゃないから！普通だから！平均だよ平均！！

と、いうことで……。そうしてお兄さんに声をかけたところまでは良かったのですが……。

いつの間にか3人が来ていて、あろうことかお兄さんにバスケットの指

導を願いだしたのです！

そ、それは私の特権なのに……。

「あ、あのお兄さんは私が個人的に指導してもらって……」

「なんの指導してもらってるんですかあ??」

「愛の個人指導……詳しく」

「最近大人っぽくなったなあと思ったたらそっちの意味でしたか……」

「違うってば!!!もー本当に嫌なんだけど!!!お兄さんに失礼なこと言わないでよ?!」

もー最悪。

これじゃお兄さんにどんなこと言うかわかったもんじゃない……。

「あゝ、由佳やつぱり俺帰るよ。申し訳ないし」

「あーち、違います!お兄さんは、か、帰らないで……」

「……う?そう?」

お兄さんに帰って欲しいなんて思っただけ。

けれど、3人にお兄さんに変なこと言われないか不安。

もうわけわかんないよ!!

そうしている間にも、3人はニコニコでお兄さんに自己紹介してる。

だ、大丈夫かなあ……。

あ。みほがお兄さんの手握りしめてる……。

うゝゝなんかもやもやするゝゝお兄さんは私のお兄さんなのに……。

「もゝゝゝ!!!」

こんなことなら公園紹介しなきゃよかったよ?!

意外なことに、いざバスケットを教えてもらう段階に入ったら、皆大人しく指導を受けてた。

やっぱり、バスケットは好きなんだなあ、皆。

それがわかって、ちよつと嬉しかった。お兄さんもレベルに合わせて指導してくれてたし、私にもちちゃんと指導してくれる。

その度に、「由佳には前も言ったけど」って言ってくれるのが、特別な気がして嬉しくなった。

私とお兄さんで過ごした時間は、私にとってかけがえのないもの。お兄さんにとつてもそうなってくれていたら嬉しいな、って思う。

「お兄さんパス！」

「お兄さんすげーいい！」

……それはそれとして、皆もお兄さんって呼ぶのはどうして？その人は私のお兄さんであつて……って私変になりそう。

と、とにかく、皆がお兄さんって呼ぶなら私は呼び方を変えなくちゃ。

将人さん……？でも前お兄さんって呼んでくれるの嬉しいって言つてたし……将人兄さん。よし、これにしよう。

「お兄さんお兄さん！」

休憩中に、さすがが将人兄さんのところへ走り寄る。

……なんか、嫌な予感が。

「お兄さんにとつて由佳ちゃんってどういう存在なんですか?!」

「ちよつとすずか?!?!」

何言つてくれてんの!!!

すぐにすずかの頭ごと確保した。

「痛い痛い……でも由佳も気になるでしょ?」

「ぐ……」

た、確かに気になる。将人兄さんにとつて、私つて……。大事に思つてくれてたら、嬉しいな……。

こ、この前のこともあるし……ひよつとしたら、好きになつてくれてたりとか……。

「由佳はそうだな……まだ会ってからすごい日が経つてるわけじゃ

ないんだけど。もう俺にとっては、妹みたいな存在だよ」
胸に、ちくつと痛みが走った。

「い、妹……」
妹。

確かに、親密度で言えば近いと思う。大切にしてくれてるのも伝わ
る。

けど妹じゃ、ダメなんだ。
だって。

妹って思われてる間は、きつと好きにはなってもらえない。
彼女には、してもらえない。

私は将人兄さんのことが好きなんだ。

だから、好きになつて欲しい。

胸に走った痛みが、じんわりと広がる。

「お兄さんって彼女いるんですか?!」

つてみほ?! だいぶ強烈な質問だよそれ?!

「いないよ。独り身さ」

ほっ……! よ、よかった。

いるよ……つて言われてたら多分泣いてた。嘘じゃない。

普通に泣いて帰つてたと思う。

「ええくめつちや意外! はいはい! じゃあ私彼女りっこーほしま
す!」

「みほ!!!」

もう本当に軽いんだからみほは!

つていうかみほあなた彼氏できたつて言つてなかったっけ?!

練習を終えて。

一つ呼吸を整えた私は、将人兄さんにお礼を言いに来ていた。一人で。

「あの、ありがとうございます。ま、将人兄さん」

「ん？んーん。こちらこそ、邪魔してごめんね……良い子達じゃん。大切にしなよ」

「そうですね。よかったら、今度試合とか見に来てください」

「お、是非是非。由佳が試合しているところ見たいしね」

……嬉しい。

そんなことを言われただけで、私の心は温かくなる。

我ながら、単純だなあ……。

さて。だからこそ、妹という認識を改めたい。

思わず、声が先に出た。

「あ、あの……」

「ん？」

でも、なんて言おう。

いくつもの言葉が浮かんでは、消えていく。

告白する勇気なんてない。

けど、女の子として見てくださいなんて言えない。もうそれはほぼ告白だもん。

妹扱いが、嫌なわけじゃない。

頭撫でてくれたり、褒めてくれたりするのには、嬉しい。

けど私は、もう一歩進んだ関係になりたいんだ。

「……なんでも、ないです」

「……う？そ？そしたら、また今度ね。いつでも練習付き合うからさ」
私の、意気地なし。

心の中で、自分に悪態をついた。

けど、将人兄さんには、笑顔で。

「はい。今度は、2人で、練習したいです」

「ははは、そうだな。由佳に教えるなら、2人きりの方がいいな」

2人きりで――。

その言葉で、ドキつとする。

将人兄さんも、2人が良いって思ってくれたのかな。

……いつか必ず。将人兄さんにもつともつと私を意識させて見せる。

皆と違って私のこの恋は――。

「はい!!またお願いします!」

本気だから。

その日の夜。

私はパジャマに着替えてベッドに寝転がって、一人で考え事をしていました。

思い出すのは、今日の将人兄さんの言葉。

『俺にとっては、妹みたいな存在だよ』

妹、妹か。

「どうしたら、妹を卒業できるんだろう。」

「やっぱり、意識してもらわないとだめだよね」

好きな人に振り向いてもらう方法……ネットとかで調べてみても、正直わからない。年上のパターンが少なく、参考にあまりならなかった。

けれど、とにかく意識させることが大事だと思う。

意識……どうやったら？

抱き着く？いやダメだ。感極まってこの前やっちゃったけど、普通に頭を撫でられて終わり。

妹とのスキンシップで終わってしまう。

手をつなぐ？うん、抱きしめる方が上だよね？

となると、抱きしめるの、上かあ……。

「キス……とか」

急に顔が熱くなる。

枕に顔を思い切りうずめた。

ダメダメダメ！そんなの。

でも、確かに良いかもしれない。そこまですれば、きっと意識してくれる。

頭に浮かぶのは、将人兄さんの綺麗な顔。

あの顔に……唇に……。

「……っ!!」

く、くらくらしてきた。

で、できるのかな。でももしできたなら、それはどんなに素敵なことなんだろう。

初恋の人に捧げるファーストキスは、どれだけ甘美なものなんだろう。

「はあ……」

枕を今度は強く抱きしめた。

将人兄さんに抱き着いたあの感触。

忘れたことはない。鮮明に思い出せる。
それが、もしキスなんてしてしまつたら……。

考えれば考えるほど、くらくらしてくる。
もしかしたらその先も、なんて。

ああ。

……今日はどうやら眠れなさそうです。

ツンデレ系OLは歪む

土曜日の夜の感情って複雑。

明日もお休みだから今日は夜更かしてできるぞーって思ったりもするし、ああ、お休みが1日終わってしまった。って気持ちにもなる。まあなんにせよ、基本的に私は大切な休日だからこそ、自分のために使いたい派の人間なのだけど。

「めぐは最近どうなのよー!」

「ええ〜? 変わんないよ? でもそうだな〜同棲って意外と難しいなあって思うかな〜」

「きやく〜! いいないなあ〜私も彼氏と同棲したいな〜」

「……」

今日は、大学の頃仲が良かったメンバーに誘われて、ちよつとだけ良い居酒屋で夕飯兼飲みみたいな会。

私以外は全員彼氏持ちで……正直肩身が狭い。

あんまり来なくなかったのだけれど、一番仲が良かった、まいから強く誘われて断りにくかった。

もうご飯から飲みに移行して1時間程が経つけれど、会話は彼氏との話になりつつあった。

こうなるってわかってたから来たくなかったのよね……。

「え、実際どうなの? 同棲って……毎日やっちゃうの?」

「やば。流石に下世話すぎ。でも気になる」

元々エグい話が好きだったメンバー。当然こういう系統の話にもなるわけで。

「そういうのって言いにくいものなんじゃないの?」

「何言ってるの! 星良だって気になるでしょ? あんたもこういう話好きだったくせに」

「そーよそーよ! 同棲してる奴には義務があるのよ! リアルな話聞きに来たんだから!」

はあ……。

他人の情事とか聞かされてもなあ……。

一応彼氏の顔は見せてもらった。確かにそこそこカッコ良いとは思う。

まあ、まさの方がカッコ良いけど。

友人達の下世話な話を聞き流して、私は運ばれてきた料理を口に運ぶ。

「星良は？最近どうなの？」

「え？私？」

いつの間にか、私に話が振られていた。

この子達は私が元カレ……元カレと言うのも寒気がするけれど。元カレにされた仕打ちと、別れた話を知っている。

だからあまり、会いたくなかった側面もあるのだけど……。

「最近、割と楽しいわよ」

「えーなに男?！」

「星良男でできたの?!写真見せて!!」

「……あんたらすぐ男って判断するのやめなさいよ……まあ間違っていないんだけど……」

お酒に酔って顔を赤らめた友人達が、食い気味に迫って来る。

色恋沙汰好きすぎでしょもう……。

仕方なく、私はこの前のデートの時に撮ったまさとの写真を見せてあげた。

この前のデートの時に、ご飯を食べ終わって紅茶を飲んでるまさとにスマホを向けたら、笑ってピースしてくれた。可愛すぎ。天使。

「え、かっこいい。なんかゴリゴリのイケメンってより清涼感を感じるイケメンだわ」

「優しそ〜いいなこんな人どこで知り合ったの？」

まさとを褒められて、私も鼻が高い。

そうよね。当然当然。まさとはカッコ良くて優しくて天使なんだから。

お酒も回ってきて気分が良くなった私は、ついしゃべりすぎてしま

う。

「その子ね、バーで働いてるのよ。週一でね。だからその出勤日に会いに行ってるわ」

「え？……」

「……バーって、ボーイズバー的な？」

「？そうよ」

なんか3人が目を合わせている。何？何か変なこと言ったかしら。遠慮がちに、まいがスマホを返してきた。

「あーつと、星良はこの子と付き合ってるの？」

「んーん。まだ付き合ってないわ」

「えつと……星良この子に月いくら使ってるの？」

何？なんか変な空気になってきたわね。

お金なんて、大した問題じゃないと思うのだけど。

「お金？……大した額じゃないわよ。毎月給料の半分くらいじゃない？」

「給料の半分?!」

なによ大きな声出して……。

毎週通ってるから多分そんなもんだと思う。それにこの前はデートで奮発したし、今度プレゼントも買ってあげようかなって思ってる。

まさど、喜んでくれるといいな……。

「星良」

「……何？」

まいがさつきまでの楽しそうな表情はどこへやら、真剣な表情で私の手をとってきた。

他2人も心配そうな表情でこちらを見ている。

「この人は、やめておこう。私が今度彼氏にお願いして合コン開くから、そこに来て」

「……はい？」

合コン？全然興味が無い。

今はまさど以外の男に使うお金は無い。

それになに？やめておこうって。

「星良、厳しいこと言うけどね、金ヅルにされてるんだよ星良は」
「あくその心配ね。大丈夫。まさとはそういう子じゃないわ。週一出勤だし、私しか常連がないの。だから私が払ってあげなきゃダメなのよ」

なるほどなるほど。理解した。

この子達は、まさとが有象無象のボーイと同じであると思っているんだ。

その心配ならいらぬ。まさとは特別。私は大丈夫。

「星良……」

……だからその表情をやめなさいよ。

「星良、やっぱりダメだよ。合コン必ず来て。それで、その人は諦めよう。星良のためにならないよ」

……私の為って、何？

ふつつつと、私の中で怒りが沸いてきた。

「私の為ってなによ？私の為を思うなら、どうして応援してくれないの?!あなたたちに、何がわかるの?!」

「星良……落ち着いて」

「冗談じゃないわよ！私がどんな目に遭ったかわかってるでしょ?! 苦しくて、辛かった時に、助けてくれたのがまさとなの！あの子はそんな子じゃない！どうしてわかってくれないの?!」

お金を使いすぎてないかいつもまさとは心配してくれる。

優しい言葉をかけてくれる。本当はやりたくない仕事のはずなんだ。

だから私がちよつとでも助けになればと思ってお金を払うことの何がいけないの？

「……変な心配はしないで。まさとはそういう子じゃないから。今順調なの。水を、差さないで頂戴」

依然として、まいも、他の2人も、悲しそうな表情でこちらを見ている。

やめてよ。
そんな顔で、見ないでよ……！

きっと日付はもう跨いだだろうか。

飲み道の帰り道、私は街灯の灯る夜道を一人歩きながら今日友人達に言われたことを思い出していた。

『騙されてるよ』

『金ヅルになってるんだよ』

『仕事だからだよ』

——違う。

違う違う違う違う違う違う!!!

まさとはそんな子じゃない。私が誰よりも知ってるんだ。

心優しい子。笑顔が可愛くて、守ってあげたくなる子。

断じてあの子達が言うような、世の中の一般的なボーイじゃない。

守銭奴のように、女心を弄んで金を搾り取るような子じゃない。

そのことは、私が一番良く知ってるんだから。

私は、間違ってる。

スマホを開いて、SNSのアプリをタップした。そこには、先ほど送ったまさとのメッセージ。

《星良》

『友達と飲んで来たわ』

『今度合コン誘われちゃった。あんまり気が進まないんだけど……』

……大丈夫。まさとならきつと止めてくれる。

俺がいるじゃないですかって言ってくれ。

SNSのトーク画面の背景に設定したまさとの写真をうっとり眺めていると、メッセージに既読がついた。

思わず、画面を戻す。

きつと返信が、送られてくるだろうから。

「っ……っ！」

メッセージが、来た。

《将人》

『お疲れ様です！楽しかったですか？』

『おう！いいじゃないですか。良い人、いるかもですよ！』

……どうして？

なんで止めてくれないの……？

良い人なんか、いないよ……。

私にはあなたしかいないんだよ……？

まさとしか、いないんだよ……。

スマホの画面に、水滴がいくつも落ちた。

雨は降ってない。

それは、私の目から零れていた。

金曜日。

金曜日だけは残業しないって決めていたのに、クソ上司のせいで残業させられた。

マジであいつだけは許せないわ……。

そんな事情もあって、私は急ぎ足でお店に向かっている。

この一週間は、もやもやしながら過ごすことになった。

けれど、私の気持ちは変わっていない。私にはまさとしかない。あの店でまさとお金を出せるのも、私しかない。

だから、一つ決めたことがある。

付き合ってから、友人達には報告しよう。

今はまだ、彼氏ではないから心配しているのだ。じゃあ付き合っしまえば問題ない。

その時は彼女達もきつと祝福してくれるはずだ。

だから、私とまさとは次の段階に行かなければならない。

同伴はやったから……次はアフター、とか。

優しいまさとなら、きつと許可を出してくれるはずだ。

気分が高揚する。

まさにと、ちよつと良いところでご飯を食べて。良い雰囲気になって。

ちよつと勇気を出して、家に来ないか誘ってみて。

そして、一夜を明かす時。それはどんなに素敵で……ロマンチックなんだろうか。

そこに辿り着くためにも、今は準備が必要。
まさとの距離をもっと縮めなければいけない。

お店に到着。

結構遅くなってしまった。この時間だと、まさとは受付とかやって
いるのだろうか？

もうまさとに会ってもいいように身だしなみを整えて、お店のドア
を開く。

「いらっしやいませ、お嬢様……あ、いつもありがとうございます」
受付は、まさとではなかった。

けれど、毎週来るようになったからか私の顔は恥ずかしいことに
ボーイの人達に知られてしまっている。

「えーっと……」

「まさとですよね？」

「あ、はい。そうです」

恥ずかしいながらも、ちよつとした優越感もある。

このお店で、まさとを指名するのは私だって決まっているかのよう
な――。

「ごめんなさい、まさと今接客中でして……。他のボーイで良けれ
ばご案内できるんですけど」

——え？

まさとが、接客中？

誰に？

私以外の、誰に？

まさとの事を待つ名目で、私は一旦店の外に出た。

気持ちを整理する時間が必要だし、まさと以外の接客を受けるつもりはない。話してみるのもいいかもと思ったことはあるけれど、何故か罪悪感があった。

まさとが、誰かに接客している。

私の、せいだ。

私に来るのが遅れたから。

やっぱり残業なんかどうにか理由をつけて帰って、すぐに来るべきだったんだ。

他の女がまさとによりつく時間を与えてしまった……！

思わず私は地団駄を踏んだ。

二度と金曜日に残業はしない。仮病でもなんでも使って帰ってやる。

腕時計を見る。

そろそろいいだろうか。

お店に戻ろう。

歩いてお店まで戻る。

よほど延長とかしていなければ、もう終わる頃合いだ。
大丈夫。ただのもの珍しい客だったんだ、きつと。
今日だけ、たまたま。

私の方が、きつとまさとに多くお金を使ってるし、愛情もたくさん
もらってる。

だから、大丈夫。

そう自分に言い聞かせて、お店の前まで行くと――。
丁度まさとが、お客さんを見送っている。

その、視線の先。

見てしまった。その女を。

私には、見覚えがあった。
知っている。

あの女を私は知っている。
髪型は違っても、すぐにわかった。

ドラッグストアで、まさとに優しくしてもらってた、娘……！
黒い感情が胸の奥底で渦巻いた。

見てわかった。前は薄汚い娘だと印象を受けたが、違う。
快活に笑う、ツインテールの少女。

それを見送る、まさともまた笑っている。

ああ。まさとが、笑っている。
どろ、と感情のバケツから何かが溢れ出した。

ダメ。

ダメダメダメダメ!!!

絶対にダメ！

そこは、そこは私の――!!!

「じゃあ、またね、将人」
「うん、また」

また？

私はその場で膝に手をついた。

「う……おえ……」

吐きそうだった。

どう考えたってわかる。

あっちの方が、お似合いだ。

明るくて快活な若い子と、カッコ良いまさと。

2人のやりとりが、眩しく見える。

誰が見たって、私と比べたらお似合いなのは向こうだって答えるだろう。

……でも。

決めたんだ。

手鏡を出して、もう一度身だしなみを整える。

顔色は酷い。けどこれはどうしようもない。

諦めない。どれだけ汚くて醜くても、私はまさとしかないって、決めたんだ。

渡さない。

渡さない渡さない渡さない渡さない。

ふらふらと歩いて、まだあの娘の背中を見送っているまさとの後ろに立つ。

なんて——声をかけよう。

ああ、そうだ。

いきなりあの娘の否定から入ったらだめだ。

まさとにも、事情があるかもしれないから。

それにまさとに悪い印象をもたれてしまうかもしれない。

むしろ、褒めてあげるくらいで行かないと。

だから、そうだな。

これでいきましようか。

「可愛い子ね」

元気っ娘JDは踏み入れる

「お願いっ!!」

ぱんっ、と私は顔の前で手を合わせた。

一瞬閉じた目を、うつすらと開ければ、そこには困り顔の親友が一人。

「流石にそれはみずほの頼みでも無理だつてば……」

「え〜!!なんでよく!!後生でござるよ〜!!」

「ちよつとやめてつても〜」

大学内の休憩スペースにて。今は授業時間ということもあつて大
学内は人がいないのではないかと思うほどに静か。

空きコマで暇な私達はここで暇つぶしをしていて、そこで私は恋海
に例のことを打ち明けた。

運命の人が務めているお店が、おそろくわかつたであろうことを。

「二人で行くの怖いよ恋海〜一緒に来てよ〜」

「嫌だつてば……私じゃなくて他の友達誘いなよ?!」

「こんなこと恋海にしか話せないよ〜」

私の運命の人は、おそらくボーイズバーで働いている、なんて。

接客してるのか、はたまた裏方なのかはわからないけど……制服っ
ぽいの着てたし……。

だから今日そのお店に行こうと思っっているんだけど、やっぱりそう
いうお店は初めてだし怖い。

そこで恋海に頼んでみたんだけど……。

「ついていってあげたい気持ちはあるけど……ほら……なんか、将
人に悪いし……」

「そっかあ……そうだよね……」

うーん、そうすると他の友達を頼るかどうかなんだけど……頼み辛
いなあ。

「つていうかさ……大丈夫なの?その人。ボーイだったから優しく
してくれたとか……そういうんじゃないの……?」

「……」

私は無言で机の上に突っ伏した。

恋海の心配は尤も。私も、そうかもと思わなかったわけじゃないから。

だけど。

私は思い出す。あの時かけてくれた言葉を。笑顔を。

あれが――。

「あれが演技や嘘だったなんて、思えないんだよなあ……」

「……そっか。ごめん。疑っちゃって」

「んーん。恋海の言う通りだと思っもん」

うじうじ悩んでいても仕方ない。

私はもともと考える頭なんてある方じゃないし。

行動に移さないとね！

ガバっと、私は起き上がった。

「私一人でも行くよ！このままうじうじ悩みたくないもん！」

「そっか……ごめんね、みずほ」

「謝らないで！これはもとより、私に与えられた試練なのです……」

会って何を言うべきかも、そもそも会ってその人だってわかるかもわからない。

けれど、行動に移さなきゃ、なにも生まれない！

右手を大きく突き上げた。

「行くぞー！！いざー！戦場へ！！」

その突き上げた右手が、ぱしっと誰かに掴まれる。

おろろ？

「どこに戦いに行くの？みずほ」

後ろを振り向けば、そこには。

「あ、まさとおはよう」

「ん、おはよーんで？みずはどこ行くの？戦場ってなんの話？」
やばばばばば。

思わず素早くもう一度振り向いて恋海に助けを求める。

「な、なんでこっち向くの?!」

ダメだ！乙女状態の恋海では戦力にならない！

一人でなんとかせねば!!

「あ、あ~~~~と、その昔、軍師諸葛亮公明は曹軍100万に対して火計を弄したといわれており、そのころの気候で風は吹かないとされていたにも関わらず諸葛亮は祈祷によつて神風を起こし、これを連環の計で繋ぎ止めて焼き払ったといわれー」

「うんうん。赤壁の戦いだね。なんで急に中国の話？」

「あ~~~~と。わわわわ、我ら三人！生きた時は違えども死せる時は同じときを誓わん！」

「なんで桃園の誓い？俺ら持つてるの盃じゃなくてペットボトルだけど」

苦笑いの恋海と、250mのペットボトルで乾杯！

く~~~~っ！優しい親友に乾杯！

「そんなわけで、私は戦場に向かわねばならないのです！」

「そ、そうなんだ……なんかよくわかんないけど、頑張れ……？」

よ、ヨシ。

なんとか乗り切ったね。ぱーふえくどこみゆにけーしょん。

軽快なSEが私の頭で鳴り響いた。

講義が終わって。

私達は3人で帰路についた。

恋海が乗る電車が違うので最初に別れ、まさくと他愛のない話をしながら電車内を過ごす。

隣同士で座っているけれど、やっぱり運命の人のことに集中するようにならなければならない。幾分将人と話している時も自然に話せているような気がする。

「あれ、そういえば将人っていつも降りる駅から家まで近いの？」

「そーね。近いよ結構。歩いて帰れる距離だし」

「そっかそっか……じゃあ電車が暴風雨で止まった時は泊めてね！」

こんな風にふざけた冗談も言えるくらいには。

「いいよ。そんな時は連絡してくれ」

「……いいんかーい!!いやダメでしょ!断りなよそこは!」

「え、ええ?なんでよ。みずほ帰れなかつたら困るでしょ」

「い、いやそうだけどさあ……もうちょっと、なんか、ないの?男の子だよな?将人」

「?……そうだけど?」

あちゃー、ダメだこりゃ。ダメです恋海さん。

この子の意識改革をしなければなりませんなあ。

「あのね、男の子がそんな簡単に女の人を泊めちやいけません!」

「なんだよ、そんなこと分かってるって。みずほだからいいよって言ったんじゃない。別に誰でも泊めたりはしないよ」

……。

将人はずるい。平気でそういうことを言ってくる。

確かに、もう将人と仲良くなってからしばらく経つけど……。

そんなこと言われたら、ワンチャンあるかな、って思っちゃうよ。
「そ、そーゆーのは恋海に言っただけなくあの子多分飛んでくるよ」
「?なんでそこで恋海の話なん?」
この鈍ちゃんが!

恋海のことと、運命の人のことが無かったら危なかった。
いつか電車止まってないのに泊めてほしくて嘘ついちゃうかもし
れなかったよ。

そんなことを話している内に、電車が駅に着く。

将人と一緒に、私は電車から降りた。

「……あれ?みずほ乗り換えじゃないの?」

「あ、あく!今日はちよつと予定あつてさ、買い物して帰るんだよね
!」

「そうなんだ……?じゃ、俺はこつちだから、またね」

「う、うん!バイバイ!」

……怪しまれなかっただろうか。

改札を出ていく将人を見送って、私は駅の喫茶店に入る。

アイスカフェオレを1つ頼んで、私は席についた。

「ふう……さて、と」

財布から、1枚の名刺を取り出す。

夜景が映る背景に、ワイングラスが1つ。

煌びやかな名刺には、ローマ字の筆記体でお店の名前が書かれてい
て。

『F e s t a』……か。

場所はわかっている。ただ、今は昼過ぎ。

夜頃まで時間を潰す必要があつた。

「か、アイスカフェオレ1杯で粘ったら怒られるかな……」

店員さんと周りの目を気にしつつ、私はひっそりとカフェオレのス
トローに口をつけるのだった。

時刻は、18時半ほどになった。

時計の針が動き、夜に近づくにつれ私の心臓が早鐘を打つ。

ボーイズバーなんてもちろん初めて。ネットで色々と検索して、マナー、ルールとか、やってはいけないことみたいなのを調べた。

指名みたいなシステムがあるらしいけど、どうしよう……まさか「大学生の子つけてください」とか言うわけにもいかないよね……？
とりあえず誰でもいいからついてもらって、その人から聞くのがベター？

でもなんか、ボーイズバーに遊びに行くこと自体に、罪悪感が……。
そこで、ふと思った。

——罪悪感。

いったい私は、誰にこの罪悪感を感じているんだろう。

運命の人？

それとも——。

ぶんぶんと、私はかぶりを振った。

今は、余計なことは考えない。

この気持ちに踏ん切りをつけるために、今日はここに来たのだから。

随分前に飲み終わったカフェオレの容器を返却口に返して、喫茶店を出る。

街はもう暗くなりだしていて、人の往来もさつきに比べてだいぶ増えたように思う。

「この先を曲がったところ……か」

スマホのナビを頼りに、お店へと進む。

角を曲がれば、お店の看板が目に入った。

『F e s t a』……あれだ。

「すーっ……ふうー」

大きく、深呼吸。

これは、私欲のためではなく……ん？でも運命の人に会いたって話だから結局私欲？

まあいいや！

ドアの前には誰もいない。

恐る恐る、私はその扉を開いた。

大丈夫！お、お金もそこそこ降ろしてきたし！今日だけ！今日だけだから！

店内に足を踏み入れる。

煌びやかな外装と同じように、内装もキラキラしているのかと思っただが、さうでもなく、店の中は落ち着いた雰囲気だった。

ただ、やっぱりそれでも夜をイメージしたお店なのか、薄暗い中でほんのりと点いている照明が、大人な空間を演出している。

思わず私が立ち尽くしていると、お店の人がこちらに気付いて近づいてきた。

「いらっしゃいませお嬢……さ……ま」

「え……？」

上品なドレススーツ。深い紺のスタイルに、黒のベスト。

胸には純白のポケットチーフがアクセントとして効いている。

髪は黒の緩いパーマ。

この髪型を、私は最近普段から良く見ている。

「まさ、と……っ？」

私を悩ませる男の子……片里将人が。

カッコ良い服に身を通してそこに立っていた。

将人にボーイズバーに来たことがバレた。
将人がボーイズバーで働いていた。

2つの事実が、ぐるぐると私の頭が回る。
思考がまとまらない。
立ったまんま、何秒経っただろう？

「……っ！」

私は思わず、踵を返した。

なんで？なんでこんなに苦しいの？

将人にボーイズバーに来たことがバレて、その将人は実はボーイズバーで働いている。

どうしてこんなに感情がかき乱されるの？

いつも通り笑って、陽気に、「遊びに来ちゃった！」って、言えばいいだけなのに。「将人こんなところで働いてるの?!」って、言えればいいだけなのに。

誤解されたくなかった。

それと同時に、ここで将人が働いているという事実には傷ついている自分もいて。

もう、わけがわからない。

ぐちゃぐちゃだ。

「待ってーみずほ!!」

帰ろうとした左手を取られる。
振り返りたくない。
今はきつとひどい顔をしているから。

「みずほ、待って……一回……一回話そう?」

煌びやかな店内の一角。

私と将人は丸い机を囲んで2人で座っていた。

「え〜と……将人の恩人の人?がこちらのオーナーをやっつて、恩返しも込みで働いている……つてこと?」

「そう、だね。けどまあ、なんだろう、別に強制はされてないし、俺もいいかなって好奇心だったっていうか……そんな、感じです」

「そ……っか」

将人が用意してくれたオレンジジュースのストローを、軽く1回回した。

氷がカラン、という乾いた音をたてる。

「週1回だけだけどね。ここで働いているから、大学行けてるっていうか……まあ、そんな感じかな」

「そう、なんだ……全然知らなかった」

仲良くなったつもりで、将人のこと全然知らなかった。
そんな事情があったなんて。

でも、何故かちよつと安心していている自分もいて。

「みずほはっ？どうしてっ？」

「えっとね……」

私は、ぽつりぽつりと話し出した。

運命の人が、ここで働いているであろうこと。

その情報が欲しくて、この場所に来たこと。

話している内に、つつい熱が入る。

なんでだろう。

話しながら、やっぱりこの人に誤解されたくないと思っっている自分がいる。

「そっか……でもオールバックで大学生なんて人、うちにはいないと思うケドなあ……」

「そ、そうなんだ……うーん、やっぱり違うのかな」

「わかんないけど、俺は金曜日しか基本いないからさ、他の人なら何か知ってるかもしれない。だから、協力するよ」

「え、ホント？」

「うん、その代わりといっってはなんだけど……」

将人が、きよろきよろと周りを見渡してから、ずい、と身体をこちらに寄せてくる。

いつもと雰囲気違って、思わずドキドキしてしまう。ただでさえカッコ良いのに、カッコ良い衣装まで着られたらドキドキするなっていう方が無理な話。

ちよつと大人な雰囲気の将人に、くらくらししてきた……。

「このこと、恋海には秘密にしてくれない？」

「え……っ？」

「恋海心配性だからさ、俺がこんな仕事してるって知ったらすごい怒りそうじゃん……？恋海怒ると怖いんだよくみずほならわかるでしょっ？」

確かに、恋海は将人関連のことになると視野が狭まる印象はある。

け、けど恋海に秘密にするのはちよつと……というかかなり後ろめたいような……。

「お願い！ちゃんと運命の人探し、手伝うからさ」
「……」

将人の姿を、上から下まで見た。
本当に、カッコ良くて、優しくて……素敵な男の子。

恋海の、想い人。

恋海は私の事を信頼して、紹介してくれたのに。

なのに、私と、将人だけの、秘密……？

瞬間、背筋がゾクリと震えた。

ダメだ。

これは、癖になっちゃいけないタイプの……。

「……いいい、よ」

勝手に、口が動いた。

「ほんと!?良かった……!大学の安寧が保たれた!ありがとうみずほ!」

笑顔で手を握られる。

心臓の鼓動が、止まらない。

ダメなのに。

こんなこと、絶対にダメなのに。

今の将人を見て私すごくドキドキしてる。

自分のものじゃないみたいに動く心臓の鼓動が、うるさかった。

文学少女JKは写真を撮りたい

「そろそろ私と王子様の関係性は、第二段階に進むべきだと思うの」私の声が、良く教室内に響いた。

今は4時間目の授業を終えて、お昼休み。

各々が好き勝手に机を動かして、グループに分かれてお昼ご飯タイムといったところか。

少し前までは私は自分の机で1人弁当を食っていたのだけれど、最近は仲良いメンツが自然と私の周りに集まってくるようになった。

これも、嬉しい変化の一つだなと思う。

……だけど。

「できー。昨日のドラマ見た?」

「あくえんのすけ様を見るためだけに見たわ。相変わらずイケメン過ぎた」

「あのうお~~~~」

こいつら話聞いてねえ!

どうなってるんだ!

「……なに?」

「なにじゃないが??声高に宣言したはずだが??」

耳聞こえないのかな?おまいらだけに耳かきASMR開催してやろうか?

「はあ……また汐里の妄想の話?」

「妄想王子様(笑)」

嘲笑うようにそう言い放ったのは、一番ボーイッシュな短髪の初美。

こやつは将人様のことを未だに信じていない。

敗北者が!!受け入れろ現実を!!

ま、仕方ないか。悔しいんだよね。わかるわかる。

私は初美を慈愛の眼差しで見つめながら、肩をポンポンと叩いて

やった。

「悔しい気持ちはわかるよ？けどさ、受け入れよ？」

「私は汐里がツーショットの写真を撮って来るまで信じないって決めるから」

「ぐっ……」

これは実は前から言われていること。

信じて欲しいなら証拠を持ってこい、と。

でも別にツーショットじゃなくていいよねえ?!

「でもあの汐里がわざわざ服装まで聞いてきてさ、今もまさに清楚(笑)を気取るために髪を下ろして純白のセーターまで着てるわけじゃん？」

「中身不純なことではいっぱいなのにな」

「おいそこ余計だゾ」

どう見ても純白が相応しい清楚純潔やろがい！

「それにイマドキJK(笑)を装ったSNS戦略までやってるわけだし」

「あれマジで草だったわ。流石にキモすぎ」

「お前秋なんて冬眠の準備してるだけだろ」

「シバいたろかマジで」

熊かなにかと勘違いしてませんこと〜???

「だからまあ、いるはいるんじゃない？汐里が言うような完璧超人かどうかはおいておいて」

淡々と語るのは、私達の中でも唯一の彼氏持ち、三秋だ。

サッカー部の男とくつついてる。許せん。

「文化祭とか連れてきて欲しいよねそこまで言うならさ」

「あく確かに」

文化祭……文化祭か。

去年は全く楽しかった覚えがないけれど、確かに友人が少しできたわけだし、楽しめるかもしれない。

でも将人様を呼んだら……。

『汐里の王子様ちっすちっす！こいつ全然清楚じゃないっすよww』

W

『こいつポスターにちゅきちゅきとか言って愛を囁いちやうタイプの文学少女（笑）なんで』

『あ、いっそのこと私の家庭教師になってくれませんか？』

あゝキレそ〜。

ダメだ。こいつらに紹介してろくなことになる気がしない。

それはそれとして、将人様に学校行事に来てもらうのはアリだなとも思う。

将人様と学校を歩く……なんて優越感。

やはりなんとかこいつらにバレずに招待するしかないか……。

「まあ、汐里のチキンハートじゃツーショット写真なんて夢のまた夢か」

「そ、そこまで言うなら写真撮ってきたりますわ！超絶イケメンだから、マジで」

「お、楽しみ〜」

「ここまで言っただからできませんでした、は無しだからな〜」

こ、こいつら……視線はスマホにやったままあからさまに期待してませんかと言いたげなテキストな物言い……わからせてやらないとダメみたいだな……どちらが上なのかということ……！

まあ、将人様と私の心の距離を考えれば、写真を撮るなんてこと造作もない。

ハッキリ言っただけ余裕だ。

来週頭には、こやつらが悔しがる姿が目に見えかぶ。

さっそく今週末決行だ！

なんて思ってる時期が私にもありました。

「汐里ちゃん？どしたの？さっきつかから挙動不審だけど……」

「い、いえいえいえいえいえ！なんでもありませんよ！」

もう時刻は18時前。

本日の将人さんの授業も終わりを迎えようとしている。

ここままで、写真撮れて無し。

それどころか、度々スマートフォンを出しては自分の顔を確認するヤバイ奴になってしまっている。

以前……将人様をスカウトから助けてからというもの、清楚を演じるのが若干辛くなってきてしまった。

何故か……理由はわかつている。

絶対にそんなこと許されないので、素で話してみたいと思う自分がいるから。

でも、ダメだ。この仮面を脱いだら、きつともう将人様は来てくれない。

ただのどこにでもいる女子高生なんぞに、将人様は相応しくない。それに今だって、自分じゃないからこそ、将人様と平気で話してられるんだから。

……でも、じゃあ私は将人様とどうなりたいんだろう。

付き合いたい？そりゃそうだ。付き合えて色々なことかつこ意味深ができたならそんなに素晴らしいことはない。

でも……だとしたらいつまでこの仮面をつけていればいいのだろうか。

仮に付き合えたとして、好きになってもらえたのは私であって私ではない。素を一生隠したまま、付き合っていくことになるのだろうか。

「よし、今日はここまでにしよっか！ だいぶ頑張ったしね！」

「え……あ、でもあと少し残って……」

「ここは宿題にしちゃおう！ 疲れてきた時に無理してやっても仕方ないしね」

やばば……ちよつと手止まつてたのを見て、将人様は私を気遣ってくれたのだろう。あなたと付き合った時のことを妄想して手止まつてましたなんて言えるはずもなく。

本当にどこまでも優しく……気遣いのできる人だ。

だからやつぱり……やつぱりこのチャンスを棒に振りたくない。

そんな風に想いながら私と将人様は勉強道具を片付けて、将人様を家の玄関まで送るべく階段を降りた。

「もうそろそろ期末だねえ。頑張つてよ？」

「も、もちろんです。自信ありますから！」

これは本当。将人様は教え方も上手くて……勉強の内容もすんなり頭に入ってくる。

「じゃあ、俺はこれで帰るから、お疲れ様！」

「……今日もありがとうございます。ではまた……あつ！」
ゆつくりと優雅にお辞儀をしたその瞬間、私は気付く。

まずい！ 写真！

あれだけ友人に大口をたたいてしまったのに、まだ写真を撮っていない！

「……どしたの？」

「あのー……えつと……」

ダイレクトに写真撮ってください！なんて言えない。

仮面は被っていても、私の正体は所詮村人B。大それたことは言えないのだ。

く、くそ……なんて言えばいいんだ。

この前最高のボイスメッセージをもらった時は文面だったからな
んとかかったものの……。

面と向かっては恥ずかしいよ！

スマホを持った手を、ふらふらさせる。

あはは、とか意味わからない言葉しか出てこない。

一体なんて言えば……。

「ねえ、汐里ちゃん」

「ほえ？」

今まさに帰ろうとドアノブに手をかけていた将人様が、こつちに
戻ってくる。

ちよ、ちよつとご尊顔が近うございますことよ……。

「写真、撮らない？」

「え……？」

「いや、俺の保護者みたいな人からさ、教えてるのどんな子なの、つ
て聞かれててさ、もしよかったら一緒に写真撮ってくれないかな」

「……え、ええ是非！大丈夫ですよ！」

「ん……良かった」

え、えええ?!そ、そんな奇跡あります??

よ、よかったあ。なんとかミッシェンクリアできそうだ。この機会
をくれた神に感謝。

将人様がスマホを取り出した。

「じゃあ撮るから、こつち来て」

「はい……つてえ?!」

言われて、将人様のいる方向に近づく。

すると、将人様が私の肩に手を回して、ひよこつと私の顔の横に自
らの顔を出した。

ちちちちちちちちちちかちかちかちかちかちかちか!!

「はい、撮るよ、はい、チーズ」

「あつ……!!」

「はい、ありがと！念のため汐里ちゃんにも送つとくね。じゃ、また来週！」

バタン、と。

扉を閉めて、将人様が出ていく。

「~~~~~っ!!!」

いつもそう。

あの人は、すぐに私がしてほしいことをして、颯爽と帰っていく。まるで、物語の王子様のように。主導権は、いつだってあっちだ。

将人様がいなくなった玄関。

ドキドキと心臓の音がまだ続いていて。

顔の表面も絶対に熱くて。

なんか——悔しくて。

すう、と息を吸い込んだ。

「いつか絶対押し倒してやるからなああああ!!!」

意味の分からない意志表明を、するしかなかった。

【聖女の集い】

《篠宮汐里》

『写真撮ってきちゃった☆』

【画像を送信しました】

『いや〜！ごめんごめん！こんなカッコ良い人家庭教師でめんごめん
っ☆』

『君たちが泣いて謝っても紹介はしてあげないゾ☆』

《三秋》

『うわ、マジじゃん。ってか距離近。エロ』

『絶対やれるやんこの距離』

《初美》

『うわマジかよ……って思ったけど』

『汐里の顔きつしよwwwwww』

《まな》

『wwwwww顔どうした汐里wwwwww』

『デフフって言いそうな顔してんぞwwwwww』

『良くこれ送れたなwwwwww君の顔のとこだけ塗りつぶしていい
？』

《三秋》

『マジじゃんwwwイケメンに目行ってて見てなかったわwww』

『清楚（笑）やなこの顔は。ただのエロガキじゃん』

《初美》

『諦めろ汐里wwwこのイケメンと汐里じゃ流石にキツイwww
w』

《まな》

『ひいwwwwwwお腹痛いwwwwww』

【《篠宮汐里》がグループを退会しました】

幼馴染系JDは気付く

夢の中で、ああ、これは夢だなんて認識できる時がある。

『バイバイ！明日も一緒にキャッチボールしようね!!』

『うん！また明日!!』

幼い頃の記憶。

未だにこうして夢に見る。

『恋海、もうあそこに行くのはやめなさい』

『どうして?とつてもいい子だよ?楽しくて、優しい子なんだよ?』

『…:悪いことは言わないから、やめなさい』

『なんで?!やだ!絶対やだ!!ママのバカ!!』

会うのが楽しみで、毎日のように近所の公園に行っていた。
来る日も、来る日も。

『今日は、何時に来るかな。そろそろ、来る頃だとおもうんだけど
なあ』

けれど、ある日を境に。

『まだ、来ないのかな、風邪かな…:』

『うん、今日はきつとなにがあつたんだね。また来るね』

『……今日も、来ないのかなあ』

彼は、こなくなった。

『雨、降ってきた……』

冷たく降りしきる雨の中。

私の頬を伝って何かが落ちた。

それは雨で、流れ落ちていく。

『……ねえ、まーくんどうして、来なくなっちゃったの……？』

「っ……っ！」

目が、覚めた。

枕元のスマートフォンを手に取りれば、時刻は3時過ぎ。まだ夜中だ。

「夢……か」

ぐしゃぐしゃと、頭を搔く。

何故か最近、よく昔の夢を見る。

本当に、本当に幼かった頃の記憶。

近くの公園で、よくキャッチボールをしていた相手のことを思い出す。

一緒に遊んでいたのは1年ほどで……そして彼は唐突にいなくなつた。

とても、寂しかった。

未練なのかなんなのか、私は結局高校までソフトをやめなかった。

我ながらバカだなあと思う。

そんなことをしていても、彼が戻ってくることなんて、ありはしないのに。

将人に出会ってからは、流石にもう思い出すことも無いと思つていたのに、幼い頃の感情を伴つた記憶というものは、意外にも頭に残るらしい。

「名前も覚えてないけど……元気かな……」

彼が、元気でいてくれればそれでいい。

そんなことを思いながら、私は再び眠りについた。

大学の夏休みは長い。

8月は丸々休みになることが多いし、更には9月も後半まで休みなんて相当な長さだと思う。

私達はそんな長い大学生の夏休みというものに入ろうとしているのだけだ。

「みずほ。夏休みに将人と遊ぶ約束をしたいの」

大学に設置されたカフェ。そのテラス席でアイスカフェラテをストローで可愛らしく飲んでいる親友に私はそう告げた。

なんとその夏休みを目の前にして、まだ将人と遊ぶ約束ができてない！

これは由々しき事態！

「うん、すれば、いいんじゃないかな……？」

「そんな簡単に言わないでよ?!」

なんか最近、みずほの態度がよそよそしい。

あんなに笑顔で元気いっぱいが取り柄のみずほなのに……。なんかあつたの？と聞いても悲しそうな笑みで首を横に振るだけ。

みずほとどの付き合いはそこそこ長いんだけど、こんなのは初めてだ。

「なにをして遊びたいの？」

「なにをして……そうだなあ……」

頬杖をつく。

頼んだキャラメルラテは、もう氷が溶けて薄くなった液体だけが下に固まっている。

「せっかくの夏休みなんだし、海とか行きたくない？」

「海！いいねえ。私も大好きだよ海」

お、ちよつと元気そうにしてくれた。

電車で1時間半くらいかければ海には行くことができるし、悪くないと思う。

それに……。

私はちよつと身体をみずほの方に寄せて、小声でこう言った。

「日帰りじゃなくても……いいよね？」

「え!？」

「いやだって、私達大学生だよ?別に泊まりで遊びに行っても、変じゃないよね?」

我ながら、悪くない案だと思う。

遠出をすることを言い訳に、泊まりで遊びに行く……。

旅館では、夏の夜に年の若い男女が二人……何も起こらないはずもなく……。

「そ、それはよくないと思う!!」

「ええ?!なんでよ!」

私が妄想に耽っていると、みずほから反対の声。

顔を赤くしてるところを見るに、みずほも同じようなことを考えていたのだろう。

「だ、だってまだ付き合っていないんでしょ?つ、付き合っていないのにそういうことから始まるのは、私は、私は良くないと思います!」

「良くいうよ!入学直後はみずほだってヤルことやつちまいますか!みたいなノリだったくせに!」

「そ、それは気が逸っていたといえますかねんといえますか……」
言葉に詰まったみずほが、再びカフェエラテのストローに口をつけた。

でも確かに、いきなり2人で泊まりがけで海に行こうなんて言ったら、流石の将人といえども警戒して断られちゃうかも……?

うーん、そしたら、そうだなあ……。

「じゃあみずほも一緒に行こうよ」

「うえっ?!」

ばっ、とストローから口を放して、みずほが驚いた。心做しツインテールも一緒にはねたような気がする。

相変わらず反応が可愛らしい。

「2人きりでって言ったなら断られそうだし……みずほもいるって言えば将人も安心しそうじゃん?2人も結構打ち解けたみたいだし」

「え、いや……それは……」

我ながら名案かもしれない。それで夜のロマンチックなタイムミングでみずほにはちよつと悪いけど2人きりの時間作ってもらったりとかして……。

「みずほも夢って言ってたじゃん。男の子と一緒に海とか遊びに行くっていうの」

「それは……そうだけど……」

「よし！そうと決まれば早速今日将人に提案してみる！善は急げつて言うしね！」

「え、ちよ、恋海本気？」

「本気も本気よ！みずほもちゃんと水着用意しときなよ？」

「……ま、マジですか……」

みずほとも遊べるし、将人との関係も進められるし、一石二鳥！あとは将人が承諾してくれるかどうかだね！

「つてことで、将人海行こう！」

「いやどういふことなのか全然わからないが??」

早速大学に來た将人を海に誘う。

説明を求めて私の隣にいるみずほに将人が視線をやるけど、みずほも苦笑いしているだけ。

「泊まりで海行こうよ！大学生の夏休みつぽくない？」

「海かあ……確かに楽しそうだけど……泊まり、泊まりかあ……」

うっ。流石に将人でもそこは気になるか……そりやそうだよね。ちよつとだけなんの警戒もなく承諾してくれることを期待したけど、そうはいかないか。

でもこっちにはまだ手が残されている！

「大丈夫！みずほも一緒に来るから！」

「それ大丈夫な理由になつてるかな??」

「あはは……」

申し訳なさそうに笑うみずほ。

断られたら仕方ない、そしたら日帰りとか、他の場所を提案するまで！

私はくじけないぞ〜！

将人はちよつと顎に手をやって考えた後……。

「いいよ。でも部屋は流石に別々にしてよ？」

「やったー！もちろんもちろん！よーし！じゃあ日程決めちやおう！」

よし!!多分私一人だと断られてたっぽいし、ナイスだみずほ！

「みずほも一緒に決めよ！楽しみだね！」

「そ、そうだね……」

今から楽しみで仕方ない。

今年は楽しい夏休みになりそうだなあ！

その日の帰り。

みずほは予定があるとかで足早に帰って行って、久しぶりに将人と二人で駅まで歩いている。

丁度良いし、私は最近みずほの様子が変なことを将人に相談してみようかな。

「最近みずほがよそよそしくて……将人は、何か知らない？」

隣を歩いていた将人は少し上を向いて考えた後。

「え……あーそれは恋海に対してよそよそしい感じってことでいいんだよね？」

「うん、そうなんだよね〜。何か聞いても、なんでもないしか言わないし……」

あの元気はつらつって感じのみずほがよそよそしいと、こつちまでむずむずする。なにか困っていることがあるなら相談に乗ってあげたいんだけど……。

「……ごめん、俺のせいかもしれない」

「え?!なんで?」

「あーいや……これは悪いことしたかも。俺からみずほに謝つとくよ」

私によそよそしいのが将人に理由がある……?き、気になる……。

「ち、ちなみにどんな理由かお聞きしても……?」

「んーちよつと詳しくは言えないんだけど、たまたま俺が秘密にしていることをみずほに知られちゃって、それを誰にも言わないで欲しいって言ったのが重荷になっちゃってるのかも?」

「ええ……」

「考えすぎかもしれないけど、可能性はあるし俺の方から聞いてみるよ」

みずほだけが、将人の秘密を知ってるってこと?

ちよつとだけ、胸に痛みが走った。

私には、言えないことなのだろうか。

急に、心が寂しくなつて。

「そ、それは……私には、言えないの?」

つい、言葉がついて出た。

駅に向かって歩いていたら、足が止まる。

トートバックを握る手に、力が入った。

私が立ち止まったことに気付いた将人が、困ったような笑みを見せた。

「なんて言うんだろ……これを言うとき、嫌われるかもなくって感じだから」

「嫌いになんてならないよ!」

「……恋海?」

「嫌いになんて……幻滅なんて、しないよ……そうやって遠ざけら

れる方が、辛い、よ……」

どんなことを言われたって、将人に対して幻滅なんてしない。

私のこの感情は、そんなに安いものじゃない。

驚いたり、傷つくことはあるかもしれない。

わかんないけど。

けど、それによつて将人を嫌いになるとか、そういうことは絶対ないって、言い切れる。

ぽんぽん、と頭を軽く撫でられた。

「ありがと……恋海。そうだな、じゃあ聞いてくれる？」

「うん……もちろん」

ちよつとだけ、怖くもある。

どうしよう、もし彼女がいるとかだったら……。

あれだけ嫌いになんてならないとか言っておいて、ひどい反応をするわけにはいかない。

私は心の中で覚悟を決めた。

「実はさ……俺バイトしてるって言ったじゃん？」

「うん。家庭教師の」

「いや……もう一個かけもちしてて」

知らなかった。確かに平日もバイトしてるんだなって思ったことはあったけど。

将人は言いにくそうに、言葉を続けた。

「俺さ、ボーイズバーで働いてるんだよね」

ストーン、と、その事実は胸に落ちてきた。

確かに、驚きはある。けど、将人ならできてしまうかもという妙な納得もある。

そんなことをやっていて、変な女の人につきまとわれてないか心配にはなるけれど。

彼女がいるんだとか言われたらどうしようと思っていたのもあって、案外私はその瞬間ショックはそんなに受けなかった。

——けれど、次の瞬間。

そんなことどうでも良くなるくらい。

私の脳裏に衝撃が走った。

頭を巡ったのは、あの元気いっぱいな親友との会話。

『とっても優しかったんだよ?!あんな男の人いるんだって、すっごい嬉しかったの!』

『私の運命の人が働いている場所がわかったの!なんとね、その人はボーイズバーのボーイさんだったんだよ!』

『あれが演技とか嘘だったとは思えないんだよなあ……』

それは、一つの可能性。

将人みたいな人がいるんだな、とあの時は思った。けどそれは、違うのかもしれない。

でも紹介した時は、そんな反応してなかった。

もしかしたら2人は気付いてない？そんなことってあるの？違うと、思いたい。

そんなはずないって、思いたい。

けど、直感はこう言っている。

みずほの運命の人は、将人なんじゃないか？と。

心臓を強く、掴まれたような気がした。

バスケット部JCは試合に出る

日曜日。

朝からお日様の下に出て、小鳥のさえずりを聞くのは、一体いつぶりだろうか。

「ふわぁ……」

寝ぼけまなこをこする。

現在時刻はなんと朝7時。

こんな時間に起きたのは、きっと高校生ぶりだろう。

この世界に来てからはこんな時間に起きたことは無い。

大学に入ってからというものの、俺の生活習慣は乱れに乱れている。

ぐーっと上に伸びをして、大きく息を吐いた。

空気は乾いていて大変気持ちがいい。

公園の新緑が、身体中をめぐっていくような気分になる。

目的地について、俺は荷物を置いた。

なんか見慣れない貼り紙が貼ってあった気がしたけれど、眠すぎて

よく見えなかった。

「準備運動、しとくかなあ……」

軽く屈伸運動をして、その後ジャンプ。

うん。身体の動きは悪くない。

今日ここに来たのはもちろん理由がある。

理由がなかったら俺の身体はこんな時間に起きれるようになっていない。

「将人兄さん！」

元気の良い声がして後ろを振り向けば、もうすっかり見慣れた女の子が、紺のエナメルバックを背負って立っている。

「由佳、おはよう」

「はいーおはようございませすー」

朝から元気。笑顔が輝いている。

今日は由佳と朝練の約束をしていたのだ。

なんでもこのあと大会らしく、その前のウォームアップに付き合っ
てくれないか、とのこと。

正直朝早すぎて起きれないかも……とあまりにも情けない連絡を
したら、朝6時にモーニングゴルフをしてくれた。

なんて気が利くんだー（棒）

由佳のアップに付き合うことに異論はないし、むしろ付き合っ
てあげられるならしてあげたいと思っていただけから、良いんだけどね。

「すみませんーこんな朝早くに来ていただいて……！」

「いいよいいよ。俺もたまには健康のために早起きしないとね
……」

ぺこぺこと頭を下げながら、由佳も荷物を置いて準備運動を始め
た。

大体1時間くらいを予定している。やりすぎてもこの後の大会に
支障が出るし、本当にウォーミングアップ程度だ。

「どう、緊張してる？」

「うーん……あんまり、してないかもです。お兄さんより強いって
ことは無いでしょうから」

な、なんという度胸……。

俺はとんでもない怪物を生み出してしまったのかもしれない……。
心の中で対戦相手校に謝罪した。

「ふっー！」

「おっ、良いフォーム」

由佳から放たれたボールが、スパッとリングに吸い込まれた。
綺麗なシュートフォーム。中学生でここまでの動きをできる子が
一体どれほどいるのか。

「よしっ、良い感じ」

右手を開いたり閉じたりする由佳の表情は、真剣そのもの。

普段の可愛らしい一面とのギャップも、この子の魅力だなあと思う。

公園に設置された時計を見た。

もうすぐ朝の8時になろうとしている。

「由佳！終わろうか。やりすぎても良くないし、これくらいでちょうど良いと思うよ！」

「……！はい！ありがとうございます！」

バスケットで時間を気にしていなかったのか、由佳は時計を見て驚いていた。

本当にバスケバカなんだからもう。

由佳が水筒に入ったスポーツドリンクを飲んでから、ボール等を片付ける。

ちよつと表情が強張っている気がするから、本人は意識していなくてもやっぱり緊張しているのかもしれない。

あ、そうだ。

「由佳、ちよつといい？」

「……？なんででしょうか」

俺は自分の鞆から、目的の物を取り出す。

手に取ったのは、俺が以前使っていた黒のリストバンド。

試合用に購入した物だけど……事情があつてほとんど使えなかった物だ。

「いらなかったら断ってくれていいんだけどさ。これ、もしよかつたら使つて」

「！いい、いいんですか?!」

「もちろん。ほとんど使つてないから新しいよ。あー、でもこれ裏に俺のイニシャル入っちゃってるから、嫌だったら——」

「使います!!そのまま!!使わせて下さい!!」

お、おおうすごい食い気味に来たな。

リストバンドを由佳に手渡すと、すぐに彼女はそれを腕に嵌めた。宝物をもらったくらいレベルで目を輝かせてる。

そ、そんな良いものじゃないんだけど……。

「本番でいきなり使うと違和感あるかもだから、事前練習でつけてみて違和感あつたら外してね。何も問題なければつけてもいいと思う」

「はい……！ありがとうございます！本当に、本当に大切にします……！」

あ、圧がすごい。

全然良いものじゃないんだけどなあ……まあでも、喜んでもらえたなら悪い気はしない。

「今日、頑張ってきましたね！」

弾けるような由佳の笑顔は、やっぱり可愛かった。

由佳がぶんぶんと手を振って大会に向かった後。

「やった……」

実は、由佳の出場する大会がどの学校で行われるかは調べがついていない。

それに、一般人が観戦することが可能であることも。

「見に行くか？」

由佳の試合出てる姿、見てみたいし。

気分は完全に妹の試合を見に行く兄だった。妹いたことないけど。

一旦家に帰って、シャワーを浴びる。

シャワーから出た瞬間に猛烈に眠気に襲われたけど、気合でなんとかもちこたえた。

今寝たら確実に夕方まで寝てしまう。それだけは避けなければ……。

由佳が出る大会の会場の学校は、自転車で行ける距離だった。交通費かからないのはありがたいね。少し休んで遅い朝食をとった後、俺はもう一度外に出る。ちよつとボロめの自転車に跨って、夏の炎天下もものともせず俺は勢いよく漕ぎ出した。

自転車で30分ほど。

目的地にたどりついた俺は、駐輪場に自転車を止めた。普段のボールが地面を叩く音に加えて、バスケの大会特有のブザーの音や、バスケットシューズのキュキュツという音が聞こえてくる。入口でスリッパを借りて、俺は観戦ができるようになって2階へ向かった。

「おお〜結構広いな……」

体育館は思っていたよりも広く、中央で2分して2か所で試合が行われていた。

確か由佳の学校の名前は……。

「お、あっちだな」

時間も丁度良かったらしい。

アップが終わって、今まさに整列しているところだった。

由佳は身長も中学1年生にしては大きいので、整列しているところだけではどの選手かわからないかな……なんて思ったのだが。

それは杞憂だった。

「あいつ……」

髪型よりも、背番号よりも先に。

左手につけた黒のリストバンドが、真っ先に目に飛び込んで来た。ちやんと違和感ないか確認したのだろうか。無理してつけなくても良いのに……と思いつつも、つけてくれていること自体はちよつと嬉しい。

しつかりと観戦できる位置まで来て……由佳の表情が見えた。

いつにも増して、真剣な表情。集中できていそうだね。

せっかく集中してるのに俺に気付いて変に緊張させたら悪いので、おそらく保護者の方とかがいる前方にはいかず、後方の席に座って試合を眺めることにした。

結果から言うと、やっぱり由佳は異常だった。

あの子上手すぎる。開始直後から点数取りまくって手が付けられなくて相手側がダブルチームしいて来たんだけど、由佳はパスワークも良い。

味方も3年生の子達は上手だからフリーでボールもらえればまあ、決める。

以前由佳をいじめてたのは2年生達で、3年生は良い人ばかりなんですって言ってたし、チームワークもよさそうだ。

3年生の方も喜んで由佳にボールを託しているように見える。

どんどんと点差が開いていくのを見ながら、俺は戦慄していた。もしかして……ウチの子強すぎ?!

「あ、あの……」

由佳による蹂躪劇を気分よく見ていたら、前方にいた保護者の方……?から声がかげられた。

気弱そうな男性。

「?・なんででしょうか」

「ウチの中学の応援ですか？」

「あくまあ、そんな感じ、です」

「良かった！それならどうぞ、前で観戦されていきませんか？」

さつきつから保護者の方々がちらちら俺の方を見ていたのはそういうことか。

うーん。確かにここまで点差開けばもうあんま関係ない……のか？

せつかくだしもうちよつと近くでプレーを見たい気もする。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

席を立って、前の方に移動。

ここからだ、試合の様子も良く見える。

「えっ！かつこ良い子！誰の応援ですか？」

「あらカツコ良い！誰かのお兄ちゃん？」

「こんなイケメンのお兄さんがいる子なんていたかしら?!」
なんだなんだすごい絡まれるぞ！

「由佳……前田由佳さんの……兄、みたいなものです」

「え〜！由佳ちゃんお兄さんいたの?!」

「どうりで由佳ちゃんも可愛いのね！」

お母さん方のものすごい食いつき加減に若干辟易しながら、俺は再びコートを見る。

後半に入って点差はもうかなりつきはじめている……けど由佳が手を緩めることはない。

相変わらず由佳にはダブルチーム。

それでも得意のクロスオーバーでディフェンスの間を作り、キレのあるドライブで突破。

ヘルプに来た相手のディフェンスを十分に引きつけてからパス……と思いきやこれがパスフェイク。

見事に引っかけたディフェンスの隙について、由佳のミドルジャンパー。

由佳が軽やかにジャンプした。

そこは、俺も好きな位置。その位置からのミドルの成功率が良く

て、俺はよくそこからシュートを打っていた。

——どこか由佳に自分を重ねてしまう。由佳はもう、俺なんかよりずっと立派なプレイヤーなのに。

綺麗なフォーム。外れるはずがない。俺は打った瞬間に入ること
を確信した。

スパツという気持ちの良い音と共にリングにボールが吸い込まれる瞬間。

驚いた表情の、由佳と目が合った。

ブザーが鳴って、相手チームのタイムアウト。

ただ、いくらここから策を練ったところで、この差と残り時間は絶望的。

由佳のチームの勝ちは、揺るぎないだろう。

……ベンチに帰っていく由佳がすごいキラキラこっち見てる。

ひらひらと手を振っておいたが、やっぱり最初から見える位置に
なくてよかったなと思う。余計なプレッシャーになっちゃったかも
しれないしね。

露骨にリストバンドのほうの手を見せてくる由佳が可愛らしい。
わかったわかった。大丈夫だよ。ちゃんと見てたから。

その後もう1試合を見終わって、俺は帰ることにした。

保護者の方々からめちやくちやダル絡みされたり、休憩中に押し寄せてきた以前由佳と一緒にバスケット教えた勢の元気いっぱいな質問攻めにあったこともあって、非常に疲れた。

女子中学生恐るべし。

2試合目も由佳は大活躍。

今日の試合を2つ勝ったことで、3年生の引退も伸びたらしい。

3年生と一緒に喜ぶ由佳の姿が、眩しかった。

きつとこの後もミーティングやらなにやらで忙しいだろう。

朝から活動して疲れたし、俺は帰って寝ようかな……。

下駄箱にスリッパを返して、俺は外に出て――。

「将人兄さん！」

……と、思ったら。

振り向くと、そこには今日のヒーロー。

「由佳、お疲れ様」

「あ、えつと、あの、来てくださって、ありがとうございます」

「いいのいいの。むしろごめんね黙って来ちゃって」

「いえー嬉しかったです……あの」

由佳が、少し下をむいてもじもじしている。

少し間があつてから、意を決したように由佳が顔を上げた。

「あのーもうあと15分くらいでミーティング終わるので……一緒に帰りませんか……？」

正直、さつきまでは疲れていたので早く帰って寝たい気持ちでいっぱいだったけど。

今日のヒーローにこんな風に頼まれては、断る気には全くならなかった。

その後。

校門付近で待っていると、由佳が走ってきた。

なんか後ろにいた先輩や保護者の方々がなにやら大声で叫んでいて、由佳が顔を真っ赤にしながら突っ込んできたものだから、何事かと思っただけだ。

勢いよく由佳がそのまま俺の背中を押すものだから、仕方なく俺はその場を後にした。

由佳の荷物を俺の自転車のかごに乗せて、夕暮れの道を2人で歩いている。

「もう……どうして言ってくれなかったんですか？」

「いや言ったらなんか由佳にプレッシャーかけそうじゃん？」

「むー……」

むくれた顔も可愛い。バスケットをやっている時とは大違いだ。

きつと相手チームからしたら悪魔に見えただろうに……。

「そうだ、将人兄さん、バスケットしてから帰りませんか？」

「ええ?! 由佳流石に疲れてるんじゃない?」

「軽くです! 軽く!」

確かに、ここからいつもの公園はさほど遠くない。

しかし由佳は2試合こなした後だ。

流石に疲れているところで無理はさせたくないし……それに。

俺は夕暮れが眩しい空を見る。

「もう暗くなっちゃうんじゃない?」

「じゃあ急いでいきましょう!」

そう言うが早いか、由佳は俺が持っていた自転車を指さす。

「私が漕ぎます！お兄さんは後ろに乗ってください！」

「いややるとしたら逆う！」

「え、そうですか？じゃあ乗せてくれますか？」

う……上目遣いでそう頼まれては、なんとも断り辛い。

まあええやろ！今日由佳は頑張ったからね。

「わかったよ！じゃあ行くから乗って！」

「やった……！ありがとうございます！」

由佳が後ろに乗ったのを確認して、自転車を漕ぎ出す。

ぴったりとくっついてくる由佳の体温を背中に感じながら。

吹き抜ける風が、心地良い。

「~~~~♪」

振り向かなくてもわかる。

由佳は大変気分が良いようで、俺の腰に回す手がとても強い。

——まあ、こんなのもたまには悪くないね。

事件は、公園についてから起こった。

俺と由佳は無事公園に到着し、俺は自転車を止めに駐輪場へ。その間に由佳は先にボールを持ってコートへ向かったのだが。

コートの目の前で、由佳が立ち止まっている。

「……………どうしたの？」

振り返った由佳の顔が青ざめていて、俺は思わずぎよつとする。
いったい何が……？

「将人兄さん……これ……」

由佳の声は、半分涙混じりだった。

コートが入り口。

そこには貼り紙があった。そういえば、朝もなにかあったような……。

由佳の後ろから、その貼り紙に書いてある内容を見る。

そこには『バスケットコート取り壊しのお知らせ』と書いてあった。

バスケット部JCは覚悟を決める

《将人》

『良いんだけど、俺朝起きれる気がしないわ……笑』

《ゆか》

『あ、えっと……もしよかったら、私朝電話しましょうか?』

《将人》

『笑 わかった!お願いする!起きれなかったらホントごめん!頑張る!笑』

《ゆか》

『じゃあ明日朝6時頃電話、しますね!おやすみなさい』

《将人》

『はーい!おやすみ』

昨日のSNSのやりとりを見て、私は大きく深呼吸。

今、ちょうど朝の6時。

私はこのくらいの時間に起きる事に慣れているけれど、将人兄さんはそうではないらしく。

普段から連絡とるときも、すっごい夜遅くに来たりお昼まで返ってこなかったりだから、そういうものなんだなあと思っっている。

将人兄さんを無理やり起こすのは罪悪感があるけれど、これは頼まれた事……そう言い聞かせて、私は通話ボタンに手をかけた。

1コール目、出ない。2コール目、出ない。

なんかとても、ドキドキしてきた。

そして、3コール目。

通話が繋がった。

「あ、もしもし、将人兄さんおはようございます」

『……』

もぞもぞと布団が動く音だけがしばらく響く。

「あの……将人兄さん？」

やっぱり、悪かっただろうか。

罪悪感が胸を襲ったその、瞬間。

『……ゆか？』

「ッ……!!」

とんでもない大きさの爆弾が降ってきた。

ちよつとろれつが回っていない、寝起きの声。

心臓が早鐘を打つ。全然そんなことないのに、いけない事してるみたいで。

「お、おはようございます。由佳です」

『んっ……』

……え、えつちすぎる……。

い、色っぽい声出さないで!!!

その後将人兄さんの意識がはつきりするまで通話をして……。そして切った。

「なにこれ……頭変になるよう……」

寝起きの将人兄さんの破壊力は抜群だった。

正直、かなり危なかった。色んな意味で。

私は、大きく深呼吸してから。

とりあえず、布団で1分くらいごろごろと転がり回った。

将人兄さんに朝練をしてもらった後、私はチームメンバーと一緒に大会の会場へと来ていた。

全員でウォーミングアップをして、これから1戦目。

トーナメントだから、負けたらそこで終わり。

緊張……はしてないと思う。負けたら3年生が引退になってしまうので、それは嫌だけど。

相手が将人兄さんより強いってことは無いと思えば、ちよつと気が楽だった。

「由佳、ガンガン回していくからよろしくね！」

「はい！頑張ります！」

声をかけてくれたキャプテンは優しい人。私が急にスタメンになった時も、ずっと優しく声をかけてくれた。

バスケ部って感じのポニーテールで、カッコ良い人。

パイプ椅子から立ち上がって、呼吸を整える。

左手に嵌めた、黒いリストバンドをぐつと握った。

将人兄さんがくれた、リストバンド。

裏を見たら、確かにローマ字の筆記体で『MK』の文字。

……嬉しいな。将人兄さんが一緒に戦ってくれている気がして、心強い。

「それじゃ整列してください！」

審判さんの言葉を受けて、私は先輩達と一緒にコートに立つ。

よし。頑張るぞ……！！

コーチから、好きに暴れて良いと言われていたので、ボールをもらったら私は果敢に攻め込んだ。

ディフェンスも全然怖くないし、このくらいならガンガン点数とれる。

シュートとパスの選択肢を織り交ぜながら、私は得点に絡んでいた。

そんな私に相手側が2人のディフェンスをつけてきたけれど、それも気にならない。

将人兄さん1人の方が何百倍も点を取るのが難しいんだから！

「由佳ナイツシュー！もつと行ってもいいからね！」

「はい!!」

ディフェンスに戻りながらキャプテンと軽くハイタッチ。

やっぱり試合は楽しい！

後半に入っても私の調子は落ちなかった。

今日はとつても、調子が良い。

相手のオフフェンスだけど、全体的にボールをつく手が高い。ドリブルの隙について私はすかさずステイールした。

「ナイス！由佳こっち！」

先輩にパスを回して、私もオフフェンスへ。

相手がディフェンスに戻ったのを確認して、再びパスを受ける。

2人ディフェンスがいるけど、関係ない。

いつものように間を作って抜いて……ヘルプに来た相手をパスフェイクで騙して。

ほぼフリーでジャンプシュート。

よし。決まった――。

と、その瞬間。
リングの、その先に視線が吸い寄せられる。
応援席に座る、一人の男の人。
将人兄さんがいた。

「え、ちよつと応援席にめちやくちやイケメンな人いなかった？」

「え、わかるわかる私も見た！」

「あれ誰？誰かのお兄さんとか？」

「紹介して〜!!」

ど、どうしてこんなことに……。

「無事私達は2試合を行ってどちらも勝利を収めることができた。
それはとても良いこと。」

「だけど、試合が終わって更衣室、そこではもう将人兄さんの話題で
持ち切りだった。」

「なんかお父さんに聞いたんだけど、由佳のお兄さんらしいよ」

「えー！そうなの由佳?!」

「ここには、試合に出ていた人しかいない。つまりは私の同級生の友
達はいないわけで……。」

「1年生の私はとっても肩身が狭い……。」

「あゝえつと……」

「ねえ由佳あのお兄さん紹介してよ！超カッコ良いじゃん！」

「名前は名前は?!」

将人兄さんは兄さんだけどお兄さんじゃなくって……ってなんでこんな混乱しちゃうんだろう。

それに紹介は絶対ダメです！

なんとか更衣室を出て、皆がいる場所へ戻る。

そこには応援に来てくれていた私のお母さんが。

良かった、お母さんがいるなら保護者の人達への誤解も無くなってるはず……!」

「由佳、私あんなにカッコ良い息子いたかしら……」

「もうお母さんまで何言ってるの?!」

「だって、もしいたなら嬉しくって……」

「ダメなの！それはダメ！」

ってこんな事話してる場合じゃない。

将人兄さんと一緒に帰る約束をしたから行かないと……。

解散前最後のミーティング。

試合の反省をキャプテンが話して、次の試合への士気を高める。

明日からはまた部活だからね。

そしてそろそろ解散かな、というそのタイミングで。

キャプテンが真剣な表情でパン、と一つ手を叩いた。

「よし。では今から由佳のお兄さんを紹介してもらおう奴を選抜する」

「ええ?!」

とんでもない事言い出したんだけどキャプテン?!

「きちやくー!はいはい私立候補します〜!」

「私もー!!」

「私もイケメンとイチヤイチャしたいです!!」

次々に立候補していく先輩達。いやいやダメですよ!?

「なんて……冗談です。そんなことはしません」

ホツ……先輩達からブーイングが上がっているけど、私は心底ほつとしていた。

キャプテンは、一つ咳払いをしてから。

「私だけが紹介してもらいます」

え……?

「ゴミキャプテン!」

「このクズ!」

「お前彼氏いんだろ!!」

今度はすごいブーイングがキャプテンに……。

しかしそれをまたものともせず涼しい顔をして、キャプテンが私に視線を向ける。

「由佳、紹介して?」

「そんなペロ、と舌を出されても……。

い、言わなきや。あの人は私のお兄さんじゃないって……。

それに、あの人は……あの人は私の——!

大きく、息を吸い込んだ。

「あの人は私の彼氏になる人なのでダメです!!!」

恥ずかしくなって、私は逃げるように駆け出した。

「結婚式呼べよ由佳〜!」

「由佳ちゃん頑張つてね〜!」

「青春だなあ〜!」

後ろでがやがやと騒いでいる声が、やたらと恥ずかしい。

校門の前に、待っている将人兄さんの姿が見える。

「行きましよう将人兄さん！」

「お、おお……？」

将人兄さんの大きな背中を勢いよく押した。

将人兄さんの自転車の、後ろに乗っている。

広い将人兄さんの背中に抱き着いて、私は至福の時間を過ごしていた。

ワガママ言ってみてよかった。

今日はカッコ良い所見せられたかもしれないし、こうして将人兄さんにくつつけるし、最高の日だ。

思わず、心が躍る。

「好き……です」

風が吹いていて、後ろにいる私の声は聞こえていない。

小さく呟いたこの気持ちは、届かない。

さつき、皆の前で宣言したことを思い出す。

やっぱり、将人兄さんと付き合いたい。

この人を私の彼氏にしたい。

けれど……きつと将人兄さんは、私のことを妹みたいな存在だと

思っている。

それは、今日応援席でもそう言っていたんだろうから明らかだ。悔しい。

意識してほしい。

どうやったたら、意識してくれるだろうか。

抱きしめる手を強めた。

強く、強く抱きしめる。

離したくない。

ずっとこうしていたい。

どうしたら、この気持ちに気付いてくれるの？

将人さん。

将人兄さんが自転車を止めに行く間に、私はコートを確保しに来た。

もう日が暮れかけなこともあってか、人はいない。

よしよしと思いつながら、私はコートに入ろうとして――。

「……う。」

見慣れない貼り紙が、コートの入り口に貼ってあることに気付いた。

内容を、読む。

「え……」

そこには、このコートが『来週から使用できなくなる』ということが書いてあった。

……どうして？

さつきまであんなに幸せだったのに、私の気分は冷や水を浴びせられたかのように冷え切っていた。

ここが、無くなっちゃおう、って。

初めて出会って。

カッコ良くて。

また会いたいと思って会いに行って。

初めて話しかけた。

『あ、あの私と……勝負してください!!』

『ええ?!』

将人兄さんとバスケットするのが楽しくて……。

私は金曜日が楽しみになった。

『きよ、今日こそは勝ちます！そして、この場所を……渡してもらいます！』

『来たなくちびっこ』

雨に打たれて、ドキドキしたこともあった。

『これ、着てて。半袖だからあんまりかもだけど。マシでしょ、多分』

『え……』

助けてもらった。

『——随分、楽しそうな練習するんだね』

『……よく頑張ったね由佳。カッコ良かったよ』

いくつもの思い出が、頭のなかを回る。
いつも、いつもここだった。

将人兄さんと私の全てが、ここにある。

それなのに。

無くなる……？

それってつまり、将人兄さんと、会えなくなる……？

「どうしたの？」

自転車を止めてきた将人兄さんが、いつの間にか後ろまで来ていた。

私は、なんとかこの辛い気持ちを抑えて振り返る。

「……将人兄さん、これ……」

将人兄さんが、同じく貼り紙に目をやった。

「……マジか」

内容を読んだ将人兄さんも、衝撃を受けたみたい。最悪だ。

思い出の詰まったこの場所が無くなって。

来週から、将人兄さんに会えないんじゃない。

「新しい場所、探さなきゃな」

「え……？」

「え？つて。ここが無くなるなら、新しい場所探さなきゃなーつて」
将人兄さんの言葉を理解するのに、数秒かかった。

「そ、そんなあっさり……」

「この場所が無くなるのはめちゃくちゃ悲しい……由佳と出会った場所だし。けどさ」

頭に、感触。

大きな、将人兄さんのてのひら。

「思い出が、無くなるわけじゃないだろ？現にこうして、俺と由佳はこの公園以外でも一緒にいる。思い出は俺たちの中で残っていくし……また新しく、思い出を作れる場所を見つければいいんじゃないかな」

……色々な事実が、私の感情をかき乱す。

将人兄さんと、また会えるんだ、とか。

出会った思い出って言ってくれて嬉しい、とか。

また一緒に探そうとしてくれる、とか。

全部、全部全部全部、私のために言ってくれてるってわかって。

また、嬉しくて。

将人兄さんに抱き着いた。

「うわあ?!…………どうしたよ、由佳」

「将人兄さん、ありがとう……………ごぎいます……………!本当に、私と出会ってくれて……………」

「そんな大げさな……………」

頭を、撫でられる。

大げさなんかじゃない。

私は、この人と出会えてよかった。

やっぱり——大好きなんだ。

少し、気分が落ち着いて……………我に返って、撫でられているという事実に気付く。

これは、多分将人兄さんが私を妹のように思ってくれているからしてくれる事。

ゆっくりと、離れた。

名残惜しいけど。

これは、きつと、必要な一歩。

「由佳……………」

私は、コートに踏み入れる。

夕日がもう本当に傾いていて、眩しい。

きつともうすぐ暗くなるだろう。

コートに入って、将人兄さんに振り返った。

ぼかん、としている将人兄さん。

そんな顔も、とてもカッコ良い。本当に、全部が好き。

だから。

——ねえ、大好きな私の将人さん。

「勝負しましょう。将人兄さん」

私は、覚悟を決めた。

バスケット部J.Cの、想いは

「勝負しましょう。将人兄さん」

夕焼けをバックに、由佳は俺にそう言った。

優しく微笑む彼女の表情が年相応に見えなくて一瞬息を呑む。

いかんいかん、相手は女子中学生なんだ。

女子中学生相手に「綺麗だな」っていう感想は流石にキモすぎる。

俺は邪念を振り払って、由佳と向き合った。

「勝負って……1on1するの？」

「はい」

1対1の勝負。それはいつも由佳とやっていることではあるし

……そして一応、負けたことは無い。

というか流石に女子中学生には負けられない。プライド的にも。

……今日の活躍見ると、ホント近いうちに負けそうだなとは思
うが。

「けれど、一発勝負です。オフセンスとディフェンス1回ずつやっ
て、差がついたら終わり、でどうでしょう」

「……なるほどな」

いつもは5点先取とかで行っている1on1を、一発勝負にしてき
た。

確かにこれなら由佳にも勝ち目はあるだろう。シュートというの
はどれだけ上手いプレイヤーであっても100%入るということは
あり得ない。つまり、試行回数が少なければ少ないほど、成績はブレ
る。

それに……手の内は大体知っているけれど、由佳にもし隠し玉があ
るとして。

それを初見で対応できるかはわからない。

だが、もし仮に点を取られても、こつちの点数が防がれることは想
像しにくい。

なんといつても身長が絶対のこのスポーツで、その利がこちらにあるのだから。

「いいよ。時間もなし、準備できたらやろうか」

「1つ」

コートに入った俺の目の前に、由佳がぴん、と人差し指を立てた。「負けた方は、勝った方のお願いを1つ聞く。と、いうのはどうでしょうか」

……やけに自信満々だな。こりやなにか隠し玉があると思った方が良さそうだな。

「……いいよ。受けて立とう」

お願い、お願いか。勝ったら由佳に何をお願いしよう。

モーニングゴルフ助かったから今度からもしてもらおうかな。朝起きれないんだよね、俺。

由佳からボールを受け取って、俺は軽くアップ。

「試合終わりで疲れてるんだから、無理すんなよ！前みたいにコケてもしらないからな！」

「……！」

由佳が驚いたように固まる。

ん？なんか変なこと言ったか？

「覚えてるん、ですわね」

「え、いやそりゃそれくらい覚えてるよ。そんな前の話だっけ？」

確か一緒にバスケット始めてすぐくらいだから……3ヶ月くらい前か？

「ふふふ……」

「な、なんだよ」

「いや、嬉しいなって思って！」

満面の笑みの由佳。

な、なんだ？この子こんなに大人びた笑いする子だったか……？

幼くて可愛い顔立ちなのに、思わずドキツとしてしまった。

あかんあかん。この子は中学1年生。余裕で犯罪なんだワ。

軽くアップを終え、いよいよ勝負を始める。

そっか。この場所で勝負できるのは、最後かもしれないな。

そう思うと、少し感慨深い。

由佳も、準備ができたようだ。

「じゃあ、始めましょう。先攻後攻はどうしますか？」

「いつも通り、由佳が決めて良いぜ」

「では、先攻で行かせてもらいます」

オフエンスの後先は、由佳がいつも決めている。

大して有利不利は出ないけど、これくらいの決定権は向こうにあって然るべきだろう。

由佳からバウンドでボールを受け取って、俺がその場に何度かボールをついた。

このボールを由佳に返した瞬間。勝負は始まる。

由佳を見れば、目を閉じて少しだけ集中していた。

……そんなに真剣なの？ま、まあいい事だけど……。

これは俺も真剣にやらないと失礼だな。

ボールをバウンドパスで返したと同時に——俺は由佳に対してディフェンスの姿勢をとった。

腰は低く。相手の進路を塞ぐ大きな構え。

体格差もある。相手が普通であれば、まず負けない勝負。

けれどこの子は——。

「——行きます」

普通じゃない。

まずは挨拶代わりのその場シュートフエイク。

これは流石に釣られない。一発勝負でこの距離からのシュートに託すほど由佳は外からの成功率が高いわけじゃない。

いや、女子中学生にしてはあり得ないくらい高いけど。

嬉しいことに、由佳は俺のスタイルに憧れている節がある。

俺のプレースタイルは、もちろん外も打つことはあるけれど、中に切れ込んで相手のディフェンスを攪乱するスタイル。

だからこの場面で選ぶのは当然。

「ふっ——！」

ドライブだ！

切れ味鋭いチェンジオブペースのクロスオーバー。

由佳と同じ中学生であればきつと誰もついてこれやしない。

俺も中学生の時であればとてもじゃないがついていけなかっただろう。

でも、俺はその速さを何度も見てきたから知っている。

由佳の進行方向の正面に回り込んだ。

このまま突っ込んできたらオフエンスファウルになるところまで。

「まだ——」

するとすぐに次の手に出てくる。

ロール。

反対方向に勢いそのまま回る技術。これも、俺と練習している内に完全に自分のものにした技術。

本当に、未恐ろしい。

だけどそれも、俺が教えたものだ。

「知ってるよー！」

これも回り込む。体格差があるから、一步の大きさにももちろん差が出る。

だから、追い付ける。スポーツにおいて体格差が大きすぎる要素になる所以。

「——ですよね」

そして由佳もまた、俺がロールに対応できることを知っていた。ロールを途中でやめ、背中側でドリブルを入れてから少し後方へ下がるステップ。

どう考えても中学1年生の技術じゃない。思わず笑えてくる。

——その瞬間。俺との距離をとった由佳が、片足で跳んだ。

(悪いなーそこなら届くぜ由佳！)

跳んだらもうこの1on1において選択肢は1つだけ。シュートだ。

確かに後方へのステップで俺との距離はできたが、ここからでも届く。身長差があるから。

そう、思った。

しかし俺の伸ばした手は——空を切った。

「うっそだろおい——」

由佳は、片手で、ボールを上空へ放り投げていた。

——オーバーハンドのフローターショット。

プロの世界でも使われる、相手のブロックをかわすためのシュート。

俺でも届かないように、由佳は弾道を変えた。

一度も見たことが無かった。

高い放物線を描いたボールはそのまま——リングに吸い込まれた。

「これで、先制ですね、将人兄さん」

「おいおい嘘だろ……」

してやったりと笑う彼女に、俺は鳥肌が止まらなかった。

由佳の身長は、中学1年生にしてはかなり大きい方だ。

それは、中学3年生と比較しても、だ。

ということはずまり、由佳は別に高いブロックをかわす方法なんて考えなくていいはずなんだ。

なのに、今のシュートはあまりにも打ち慣れている。日頃から、練習している。

それはつまり――。

「将人兄さんに勝つために、練習しました」

「正気かよ……！」

俺が見ていない、部活とかその他の時間で、練習したのか、このシュートを。

そ、そんなに俺からこの場所取り上げたかったの……？

「ほら、将人兄さんのオフセンスですよ」

「お、おう……」

いつになく不敵な笑みの由佳に若干たじろきつつ、俺はスタート位置に戻る。

大丈夫、ここまでは一応想定内だ。

由佳のことだから、オフセンスで何かしらの隠し玉があることはわかっていた。

けれど、ディフェンスはそうはいかない。

オフセンスは水物だが、ディフェンスはそうではない。

俺は本気で点数をとろうと思った時に、由佳にブロックされたりステイルされたことはない。

由佳には悪いが……そうあっさり負けるわけにはいかないからね。

由佳にボールを渡す。

これが返ってきたら、俺のオフセンスがスタートだ。

「ねえ、将人兄さん」

「……ん？」

由佳がボールを何度か地面につきながら、俺の目を見てきた。

まっすぐな、翡翠の瞳。

吸い込まれそうになる、純粋な視線。

「将人兄さん、怪我、してますよね」

由佳から出た発言に、思わずぎよっとした。

「……なんで、そう思うんだ？」

「何度も何度も将人兄さんのプレーを見てきたから、わかります。右ひじか右肩、ですよね」

「……」

「今バスケを——というかスポーツをやってないのって、それが理由なんですか？」

「……どうだかな」

由佳の指摘は、凶星だった。

俺は右ひじを壊している。生活に支障はないし、別に交通事故とかそういう暗い話じゃない。とあるスポーツのやりすぎだった。

「私、まだ将人兄さんのこと、全然知りません。今のこともそうだし、過去とかも」

少しだけ寂しそうに、由佳はそう言った。

そしてパシッと、ボールを両手で持ってから。

「もつと——知りたいです。将人兄さんのこと」

「……!」

それはあまりに純粹で、その上目遣いに、不覚にもドキツとしてしまふ。

ど、どうなってんだ?!俺ロリコンに目覚めちゃったのか?!

「し、勝負が終わったらな!」

今は集中だ!この精神攻撃ももしかして狙ってるのか?

だとしたら由佳はいつのまにかとんでもない悪女になってしまったのかも知れない……。

「はい。これが終わったら……たくさん、たくさん教えてくださいませいね」

ボールが、バウンドパスで渡される。

俺のオフエンスだ。

もう勝ったかのようなその物言い……改めさせてやらないとな!

由佳がぴったりとついてきた。

文句のつけようのない隙のないディフェンス。

シュートフェイクを入れる。

由佳はしつかりついてきた。

そりやそうだ。俺の外の確率も知っていて、もし入ったらせつかくリードした展開が振り出し。

その可能性を排除したいに決まってる。俺がディフェンスしてた時とは、まるで逆。

だから、少しだけの際が生まれる——！

迷わず切れ込んだ、左へのドライブ。

俺は左手でのドリブルスキルにも自信があった。

右が怪我していることがバレたって、なんの問題もない。

だが由佳も少し遅れたものについてくる。

ゴールまでの進路はそう簡単に進ませてくれない。

けど、これだけリングに近付ければ十分だ。

ボールを両手で掴んで、ターンしながらフェイダウェイで決められ

「そこですっ！」

両手でボールを持った瞬間。

由佳が伸ばしてきた右手が、俺の持っていたボールを正確に弾いた。

「将人兄さんは右手を怪我してる。だから、両手でボールを持つ時に、若干シュートフォームに移行するのが遅れてます！」

「うっそだろ……！」

俺の頭の上に、弾かれたボールが浮く。

スローモーションになる世界。

このボールをとらなければ、俺の負けだ。

フェイダウェイを打とうとしていたのもあって、俺の体勢は後ろ体

重。

俺は頭上に浮いたボールを再びとろうとして――。

「ダメです」

それすらも、由佳の右手に弾かれた。

ボールは無情にも後方へ。

……俺の負け、か。

思い切りボールを弾くために、必死になった由佳が俺の上へのしかかるようになってきている。

なす術もなく、俺は後方に仰向けで倒れ込んだ。

由佳が上になって、俺と同時に倒れ込む。

ドタツという音と共に、背中に衝撃。

てん、てん、と。

後方にボールが転がる音だけが響いた。

衝撃に耐えるために閉じていた目を開けると。

目の前に、由佳の顔があった。

それも。

あまりに近すぎる場所に。

唇に、感触。

え——？

理解した時には、もう遅かった。

ゆつくりと、由佳の顔が離れる。

「ッはあ……」

「おま、なに——」

俺が下になって、上には、真っ赤な夕日と。
頬が上気した、由佳の幼くて……それでいて整った、綺麗な、顔。

「——嫌です」

「え——？」

「妹じゃ、嫌です」

「……！」

大きな心臓の音が、聞こえてきた。
これは、由佳の心臓の音？それとも――。

「今は、無理なのわかってます。けど――意識、してください。妹
じゃなくて、一人の女の子として。それが、私のお願いです」

「そ……それは」

「ダメですか？こんなちっちゃい……中学生じゃ、ダメですか？」

いつも見慣れた、可愛い由佳の顔。

なのに、なんでこんなにも、妖艶で、蠱惑的に感じるのか。

俺は思わず、右手で顔を隠した。待つて、今顔赤くてクソダサいか
も――。

「ダメです」

「ちよ――」

由佳がその右手を、強引に解いて地面に強く抑えつけた。力、強^ぎ
ぎ……！

「んっ……！」

もう一度、由佳の顔が目の前に。

もう言い逃れようもない。

強引で、それでいてどこか――希うような、優しいキス。

「……！」

「どう、ですか？これでも、ダメですか？」

由佳の顔は、真っ赤だった。

「大好きなんです。もう抑えきれないんです！……今は、無理でもいいですから……！妹じゃなくて……ちゃんと……ちゃんと女の子として見てください」

そう言い放った由佳の涙混じりの満面の笑みは。

俺の心をかき乱すのに十分すぎる威力を持っていて。

激しく鳴り続ける心臓の音。

火照った身体が、運動によるものなのか、今の状況によるものなのかわからない。

死ぬほど恥ずかしくなって、なんとか顔を見せないように横を向いても、無理やり正面を見させられて。

表情も隠せない。

もう両手は、完全に由佳の両手によって制圧されている。

「ねえ、将人兄さん」

もう由佳の顔しか——見られない。

「——もっとしてもいいですか？」

その時の由佳の興奮しきった表情を見て俺はようやくやく気付いた。

どちらが今“上”にいるのか。

その後数十分——俺は身をもってわからされるのだった。

ツンデレ系OLは誘う

最近、よくボケつとしてしまう。

俺にとって衝撃的な事件から5日……。正直、あんまり大学の授業も、身に入っていない。BGMのように教授の声が右から左に抜けていくだけだ。

脳内をリフレインするのは、あの日のやりとり。

『返事はいいりません。これからずっと……。いつしよにいて私の想いを証明しますから!』

きつと今は年上の俺に幻想を抱いてるだけで、もつと色んな男と会えば変わるかもよ?と聞いた俺を一蹴したのがこのセリフ。

笑顔で帰っていった由佳の顔は……。とてもイキイキしていたように思う。

実際そう思うのだ。中学生なんて多感な時期で、たまたま今回は俺がいただけでこれからいくつもの恋と失敗を経験していくはずなのに。

あんな嬉しそうに言われたら、振り切る事なんてできない。普通に可愛いし。俺も男だし。

あれから由佳からの連絡も結構積極的だ。

由佳の言う通り、今までは妹のような存在だと思っていたから、まさかそんな感情を抱かれていますなんて思いもしなかった。

あの日の由佳の表情が、行動が、脳裏に焼き付いて離れない。

夕日を背に、由佳に上から抑えつけられて……。

「もうまた考え事してる!」

「……ぐ(めん)ぐ(めん)」

隣に座った恋海の声を聞いて俺は我に返った。

「はい、これ冷たいの」

「おお、ありがと。ちょっと待って今細かいのあったかな……」

「いーのいーの!これくらい払わせて」

今日も腰の高い位置からスウェードフリルのついたブラウンのシヨートパンツに、白の清涼感溢れるスクエアネックタイプの半袖を少し余裕を持たせて裾を入れている。スタイルが良い恋海は、脚を長く見せたこういったセットアップが映える。

「自販機のジュース奢ったくらいじゃなんもカッコ良くないヨ？」

「みずほだってこの前買ったじゃん」

「それはスタバね！私の方が格上なのだ！」

恋海の後ろからひよこつと顔を出したのは恋海の親友であるみずほ。

みずほは恋海と同じシヨートパンツでこそあれ、色は黒で上はピンクのシースルーブラウス。袖の部分がレースになっているタイプだ。

みずほの可愛い部分を全面に押し出したファッションは、自分の武器をわかってるのかもななんて思わせる。実際似合ってるし。

「でも将人確かに最近元気ないよね。なんかあったの？」

「いや……なんでもないよ」

可愛く首を傾げたみずほだったが、俺が恋海から渡されたジュースを無言で飲み始めてこの話をする気がないのがわかると諦めてくれた。

まあ、もうこの5日間で何度聞かれたかわかんないしな……。

自分でもかなりショックを受けているのかもしれない。

この世界に来て4ヶ月弱。正直ほとんど変わりないし、俺自身も今まで通り生きていけると思っていたが……やっぱり違う世界なんだと叩きつけられた気分だった。正直油断してた。由佳と仲良くなれて、可愛い妹みたいな奴ができたって思いあがってた。

目の前で話し始めた2人を見る。

この2人とも仲良くなれた自信はあるし、前の世界だったらこのまま何も感じずに暮らしていたと思う。可愛い女子2人と仲良くなれたって浮かれていたまんまだっただろう。

けれど、違うんだ。恋愛感情……をもたれているかどうかまではわからないが、少なくとも2人とも俺に好感情を抱いてくれていると思

う。

だから、変に刺激するようなことをしちゃいけない。

今になって思えば、泊まりの旅だつてめっちゃくちや危ないよな……せめてもう1人男子がいるとか、した方がよかったよな……生憎、仲の良い男子なんてボーイズバー仲間以外にはいないのだが。

「来週楽しみだね!」

「そ、うだな」

思わず返答も詰まってしまう。

来週。もう夏休みは直前に迫っていて、その夏休みの初っ端に俺たちは海に行くことになっている。

今までの俺だったらなにも心配せずのこのこと付いていったと思うが……ようは前の世界なら、タイプの違うイケメンの男2人に女の子が1人についていくわけだろ?俺が女の子の友達だったら心配する「大丈夫なん?」って。ちなみに大丈夫ではない。

だからしっかりと線引きをしよう。今更感はいぶ否めないが……。できることはやろう。

「ねえ、将人聞いてよ。みずほったら水着ちよつと攻めたやつにしようかなとか言つて——」

「あー!ー!!あー!ー!!聞こえませんか!聞いてません!!誰も得しまつせーん!」

ニヤニヤと笑いながら俺にそんなことを伝えてきた恋海に、みずほがタツクルしてる。

なんか、ちよつと微笑ましくて、気持ちか幾分か落ち着いた。

最近はなんか2人の間もたまにギクシヤクしているような気がして、どうしたのだろうと気になっていたから。

解決したのなら、それで良い。

「じゃあ、楽しみにしてるね」

「うう……全然そんなじゃないんです……最悪だ……私貧相なのに……」

まあ、これくらいならいいだろう。

わかっていたことではあるけれど、18年生きてきた性格はそう簡

単に変えられそうにない。これが俺の素なのだから。

ただボディタッチとか、パーソナルエリアとかは考えなきやいけないな……。

今日は金曜日。

バイトをしていれば、いつものように18時半頃に星良さんがやってくる。

「いらっしやいませ、お嬢様。今日も来てくれたんですね」

「ええ。こんばんは、まさと」

半袖の白のブラウスにスーツスカート。黒髪を今日はポニーテールではなくそのまま下ろしているのが、仕事のできる女性って感じがかっこよさが際立っている。

冷静になってみれば、この人との関わり方が一番難しい。

とりあえず、心無し普段の連絡の頻度を減らしてみた。効果があるのかはわからないが……。

一番の問題は、俺自身が星良さんに嫌な気持ちを抱いていないことだと思う。

綺麗な人だし、話してて楽しいし……。

気に入ってくれているというのも普通に嬉しかった。今にして思えば、かなりボディタッチも多いが……男なら、こんなの浮かれてし

まう。

しばらく接客していると、星良さんがおもむろに鞆の中から何かを取り出した。

「実は……今日は渡したいものがあつて来たの」

「え……？」

丁寧に梱包された包みを見て、俺はそれがプレゼントの類であることに気付く。

……まだ全然誕生日とかじゃないのだが？

「ちよ、ちよつと待つてくください星良さん、俺まだ誕生日先ですし……」

「誕生日はこんな物で済ませないわよ……これはほんのお礼。この前デート付き合つてくれたしね」

渡された袋は、そこまで重くも大きくもない……が、俺でも知っているブランドのロゴが刻まれている。

あ、開けるのが怖いんですがそれは……。

「あ、開けてもいいですか？」

「もちろん。もうそれはあなたの物よ」

恐る恐る、開けてみる。袋を開けてみれば、さらに四角い箱。丁寧にその梱包をまた開けると中に入っていたのは、紺のシックなネクタイと、タイピン、カフスが入ったセットだった。

色合いも落ち着いてとても俺好み。

でもやっぱり値段が気になってしまう。

「うわカッコよ……つてだけどやっぱこれ高いですよね……？」

「もう……金額なんて気にしないで。まさくに似合うだろうなつて思つたから買つちやつた」

悪戯成功してみたみたいなお笑みを見せる星良さんが普段とのギャップがあつて、思わずドキツとしてしまう。

まずいな……由佳の件があつてから、異性の表情に過剰に反応して節がある。

「で、でも……本当に、使いすぎないでくださいね……」

「ふふふ……可愛いんだから」

頬杖をついていた星良さんが、目の前のグラスに入ったお酒に口をつけた。

そして少し下を向いて……。

「やつぱり、まさどがそんな有象無象のボーイと同じわけないのよ。間違ってるのはあの子達。まさどは唯一無二で、私だけの……」

「え？」

「……なんでもないわ」

なんか小声で何かを言っていた気がしたが……よく聞き取れなかった。

ぱつと顔を上げた星良さんが、何かに気付いたように俺の身体を凝視する。

「そういえば、最近ちよつと筋肉ついたんじゃない？ 最初会った時はあんなにヒョロガリだったのに」

「ええ？ そうですか？ そんなことないと思うけどなあ……」

たしかに由佳とのバスケもあって最近運動する機会は多いが……ってまた由佳とのことを思い出してしまう。

「ほら、この辺の腕とか……」

身体を寄せてきた星良さんが、俺の腕を優しく握る。

その時、由佳の一件を思い出していたからかもしれないが。

——反射的に、俺は少し引いてしまった。

その反応を見て、星良さんが驚いて手を引く。

……少し、気まずい間があつて。

「——どう、したの？」

「あ、いえ……違くて……」

ヤバイ。なんでこんなことになつてるんだ？

先週からやつぱりおかしくなつたみたいだ。……でも、本来これが正しいのかもしれない。

距離感を、ちゃんととらないと——。

と、思ったその瞬間。

いつの間にか、真隣まで詰めてきた星良さんの腕が、俺の逆側の腰に回される。

そのままぐっと、星良さんの方向に引き寄せられた。

「なんで、避けるの？まさ」と

女性特有の柔らかい香りが、強く香った。

「いや……えっと、そういうんじゃないんです、けど……」

もう星良さんもだいぶお酒が回っているのだろう。

顔が、かなり赤かった。目鼻立ちが整った星良さんの顔が近くて、身体が固まってしまう。

「わかった。他の女になにかされたんでしょ」

「……！」

「なるほどね。この前接客してた可愛い子？なにされたの？怒らな
いから、教えて？」

「いや、ちが……」

右手を握られる。星良さんの左手は相変わらず俺の腰をしつかりと絡めとっていて、身動きが取れない。

「ねえ、まさ」と……」

「は、はい……っ！」

星良さんの細くて長い指が、俺の指の間に入りこんで来る。

一本一本。じつくりと。

やがて完全に、いわゆる恋人結びが完成した。

握られたその手は、言葉にしなくても雄弁に、「もう離さない」と、

言っているような気がして。

「プレゼント気に入ってくれたのよね？」

「は、はい……」

「じゃあさ……」

耳元に、顔を寄せてくる聖良さん。

だ、だめだ。ダメなのに。

思い切り聖良さんをどけることが、俺にはできなかつた。

……ああ、そうか。

俺は、由佳の件があつてこれからは距離感とか、ボディタッチとか気をつけなきゃなつて思っていたけれど。

それはもうあまりにも遅すぎて。

妖艶な笑みを浮かべた聖良さんが、耳元で囁く。

「……アフター、行きましょう？」

必死にもがいたつてもう遅い。

もう既に俺は、ずぶずぶと深い沼に首元まで浸かっていたのだ。

ツンデレ系OLは、笑う

御伽噺のような純愛に、憧れていた。

思えば、幼い頃から私は恋愛というものに対して理想が高かった。自分ならば、運命の人がどこかで出会ってくれる、どこかで現れてくれるとなんとなく思っていたから。

理想的な異性に、理想的な私が愛される。

素敵な人の隣で、素敵な私が笑っている。

なんて幸せな未来なのだろうか。

だからこそ、そうなるための自分磨きを私は欠かさなかった。

スクールカーストは常に上位のグループにいたし、勉強、運動、そしてコミュニケーション能力において苦手だと思ったことは一度もない。我ながら、上手くやってきた方だと思う。

別に誰かに褒められたかったわけでも、調子に乗っていたわけでもない。

私にとってこれらの努力は当然だったただけだ。

いつ好きになる人ができてもいいように。

好きな人に見せて恥ずかしくない自分でいれるように。

だからこそ、こんな世の中であるのにも関わらず異性に対する理想が高くなってしまったらしい。

自分から告白しようと思ったことが無い。それはそうだ。自分の理想に応えてくれる男がいなかったのだから。

それでもいつか、現れてくれると信じて私は努力を続けた。

いつの間にか高校生活が終わった。……でもまだ大丈夫。大学に入れば、きつと出会えるはず。

大学生活が始まった。周りに、徐々に彼氏ができ始めた。けれど、自分の理想に当てはまる男の人は現れない。

焦った。少し理想を高く持ち過ぎたと思った。

だから——焦って大学生活の最後に、散々な思いをさせられた。思い出すのも反吐がでる、最悪の出来事。

そして今。

ようやく運命の人と思える異性に会えて。

「アフター、行きましょう?」

このどす黒く濁った感情をぶつける女は、あの頃憧れた理想的な私になれているのだろうか?

あの時憧れた私のように——笑えているのだろうか?

「……えつと……」

まさどが、俯いて言葉を濁す。

その仕草、一挙一動がいじらしい。

もう、我慢できなかつた。以前、店の前で見せていたあの女の子とのやりとり。

私との時間の中で見た事がないような表情をしていたまさどを見て。

——形容し難いどす黒い感情が、私という容器に収まりきらなくなつてどろどろと溢れだした。

もう、一刻の猶予もない。

そもそもがこんな良い男を世の女達が放っておくわけもなかった。だから今日、決着をつける。

私という存在をまさとの中にはつきりと刻み込むんだ。絶対に忘れられないように。

まさとは押しに弱いことはわかっている。

もう一押しで、ころんとこの子は私の元に転がり込んでくる。

まさとを組み伏せる自分を妄想して——どうしようもなく身体が火照った。

黒い感情が、早くその身体を寄越せと言っている。

待ち切れずに、まさとの方向へ伸びている。

「ごめん、なさい」

……？

理解するのに、数秒を要した。

何故今ここで、謝罪の言葉が？

「ちよつと、それは、できないです、ほら、俺飲めませんし……」

ああ、なんだ。

そんなことか。そんなことなら全く問題がない。

「いいのよ。飲めなくても。そんなこと気にしたことなんてないわ。私はまさとと一緒にいられるだけで——」

「あの一！」

まさとによつて、私が腰に回していた手を解かれる。

繋いでいた右手もふりほどかれ、膝の上に手を戻された。

まさだが、私との間に人1人が入れるくらいの空間を空けて下がる。

え？

「ごめんなさい、ちょっと、今日の星良さん怖い、です」

——それは、明確な拒絶だった。

まさとは私に目を合わせない。

その様子は、私に対して怯えているようにも見えて——。

心が、急速に冷えていくのが分かった。

頭の上から、バケツに入った冷水を被せられたかのような、そんな気分。

「——ごめんなさい。ちょっと酔っぱらってたみたい。お手洗い行ってくるわね」

一瞬、声が出なかった。

足早に、お手洗いに向かう。

店内の喧騒も、BGMも、最早聞こえない。

お手洗いについて、扉をしっかりと閉めてから。

先ほどまでこの身を焦がしていた熱が瞬間的に消え去り、代わりに沸いてきたものを。

「うおえ……ッ……！」

思い切り吐き出した。

ぐるぐると、感情が胃の中を巡る。

なんで？

なんでそんなことをいうの？

どうして私と距離をとるの？

『ごめんなさい』

まさとの瞳を思い出す。

あれは拒絶していた。

私という存在そのものを。

「かは……ツケホ……うえ……」

吐き気が止まらなかった。

愛する人に拒絶されたという事実。

愛してもらうつもりだった自分に。

そしてなにより。

あの瞬間、愛する人を一瞬だけ憎いと思った愚劣で浅ましい自分自身に。

冷え切った身体と心は、いつそ笑えてしまうほどに自分自身を客観視させてくれる。

「ははは……ゴミクズ以下ね」

醜い。あまりにも醜い。

友人達の言葉は当たっていた。

店員だから、まさとは優しくしてくれてたんだ。そんな当たり前で仮初の優しさに浮かれて。

愛してもらえると思いあがった。

なんて滑稽なんだろうか。自分に吐き気がする。

何度だつて思ったはずだ。自分にまさとは似つかわしくないと。

それなのに、縋つて、みつともなくしがみついて。

そして今日。女の浅ましい部分をまさとのまえで曝け出した。

救いようがないだろ。この女は。

私は、一つの結論に至った。

もうやめよう。

こんな下品で浅ましい女は、まさとと関わる価値が無い。

私がかつとの同級生だったら、どんな手を使ってでもこの女を排除するだろう。

それくらい有害で、汚らわしい。

だから、もう終わりにしよう。

そもそもが夢みたくない話だったのだ。この数か月は。

なかったことにしよう。

まさとは優しいから、これからもここに来れば相手にしてくれると思う。

けれど、それでは浅ましい私はまた思いあがる。

だから、さよなら。

それがいい。まさとの、ためにも。

忘れよう。諦めよう。

もう、まさとは一切――

『いらっしやいませお嬢様、また来てくれたんですね』

『星良さんが優しい人なの、俺は知ってるんですから』

『いつもみたいに、星良さんの話聞くのは……結構好きなんです』

ぼろぼろと、大粒の何かが頬を伝って落ちた。

「嫌だ……嫌だよ……まさと……まさと……まさと……！」

どす黒い感情は、全て吐き出した後で。

瞳から零れるこの感情は、せめて少しでも綺麗なものになっているんだらうか。

まさとに謝罪して、お金だけ払って店を出た。

戸惑ったまさとが私を呼び止めたけど、関係ない。

もう二度と、会うことはないだろう。

泣き腫らしてしまったから、今の私はとても汚い顔だった。

まあ、今の私の状況にはお似合いか。

あてもなく、街を歩けば、駅の反対側にある公園にいつの間にかたどりついていて。

真つ暗な公園の道を、ただ街灯だけが照らしている。

「……結局、あの頃に戻っただけね」

この数か月が夢だっただけで。

これからはまた色のない生活が始まるだけ。

——ああ、みきさんになんて言おうか。

同級生達にも、あなたたちが合つてたわつて言わなきゃいけないのか。

なにもかもがバカらしい。

自分が少しでも幸せになれるかもしれないと思ったことが。

愛されるかもしれないと思ったことが。

愛されないさ。こんな女は。

醜く嫉妬して、ただの客のくせに思いあがる。

愛される理由がない。

虚ろな目で、スマートフォンの写真フォルダを見た。

懐かしい、学生時代の、写真達。

いつか素敵な人が現れると信じて、努力していた日々を思い出す。

思わず、笑ってしまった。

「バカじゃないの」

これが笑わずにいられるか。

これが末路だ。みつともなく御伽噺に憧れていた女の。

画面を戻して、SNSを開く。

その連絡先のトップに、ピン止めされている名前。

《将人》

……持っていても、仕方がない。

ブロックしよう。そうすれば、まさともう害は及ばない。

タップして、ブロックすることが出来る画面まで来る。

画面には、「この連絡先をブロックしますか？」というシステムメッセージ。

うん。これが最適解なんだ。

まさとが幸せになってくれれば、それで。

——なのに。

なのになんで手が震える？

「はは……」

心のどこかで、諦められていない。

どこまでも愚かで、浅ましい女。

その時。

画面に水滴が落ちた。

上を向けば、真っ暗で淀んだ夜空から落ちてきている。

雨だ。

そう気づいた時にはもう、雨音が耳に入るほどに大きくなる。

連続した雨音が、連なっていく。

そういえば傘、持っていないや。

今歩いているのは、屋根もろくにない公園内の橋の途中。

横を見れば、池にも容赦なく雨が降り注いでいる。

でも、ちょうど良いかもしれない。

どうせ、生きてる価値なんてないんだ。

今ならこの大きくて、そこそこ深いこの池に飛び込んだって誰も気付きやしない。

死ぬか。いつそのこと。

そう思うだけ思って、その勇気さえないことに笑えて来る。

ただの構ってちゃんだ。これでは。

雨足が強くなる。

スーツも髪ももう、ぐしよぐしよだ。対して気にはならないが。

ポケットに突っ込んだスマートフォンが、振動していることに気付いた。

…誰だろうか。みきさん辺りかもしれない。

お店に私がないことを不信がったとしたらあり得る。

別に電話に出る気にもなれなかった。

着信音がただただ鬱陶しい。

「星良さんー！」

この場にあり得ない声がして、思わず振り返った。

息が、一瞬詰まる。

「ま……さ、とっ…」

私と同じように、雨に打たれてびしょ濡れのまさとが、すぐそこに立っ

この状況でせっかくの可愛いパーマが、台無しだとか思ってしまうあたり、私も大概頭がおかしいけれど。

まさとがゆっくりと近づいて来る。

理解が、追いつかない。

追い付いていないはずなのに、先に大粒の涙が私の瞳から零れて。視界が歪んだ。

「ごめんなさい、星良さん」

「なん、で………」

「酷い事、したから。謝り、たくて」

まさとの、優しさと。

信じられない今の状況が重なって。

——一気に感情が、爆発した。

「違う！違う、違うのまさと！酷いのは私で！醜くて、謝らなきやいけないのは私なの！」

私欲に溺れてストーカー紛いのことをして。
この身に溢れた情欲を、今日思い切りまさとに向けた。
愛されたいなどと、思いあがった。

「もう関わらないからー！こんな女が近くにいたらだめだから!!!」

決めたんだ。

それがまさとにとっての幸せだから。

だから。

「だから私に——優しく、しないでッ……!!」

私の慟哭が、雨音に反射して公園に響いた。

少し、間があって。

「星良さんって、ツンデレですよね」

ようやく投げかけられた言葉は、本当に理解ができなかった。

「なに、いって……」

「わかってます。これが、よくないことかもしれないって。本当は、こんなことしちやいけないってなんとなく最近わかったんです」

「なら——！」

「でも、無理なんですよ」

ゆつくりと、まさとがその顔を上げて。

正面から、私の顔を見る。

いつもと変わらない、柔和で、優しい笑み。

「俺、星良さんのこと嫌いになれそうにないんです」

——ああ。

そうだった。

私はこの笑みに、救われたんだ。

雨と涙でぐちゃぐちゃになった顔を、見られたくなくて。
思い切り、まさとに抱き着いた。

「バカ……ばかばかばか!!!大馬鹿よあんた!!!」

「……はい。俺、ばかなんです」

「本当にバカだよ……こんな女なんか放っておけばいいだけじゃない……」

雨が、私の心を洗い流す。

どす黒く、醜い感情が、雨と涙で流れていく。

ぎゅっと、まさとの背中を強く抱きしめた。

「また、お店行っているの……?」

「はい、待っています」

「また、デートしてくれるの?」

「この前食べたパスタ、美味しかったですもんね」

「また……嫉妬しちゃうかもよ?」

「ほどほどで、お願いします」

びしょ濡れの髪を、まさとが撫でてくれる。

不思議な感覚だった。

嬉しくて、幸せで。

今までの自分の人生が、初めて報われた気がして。

ちよつとだけ、顔を離して、愛しい人の顔を見た。

素直な気持ちは言えそうにない。

というか、やっぱり私にまだその資格はない。

薄汚れてしまった私には、まさとは眩しすぎるから。

……けど。少しずつ歩み寄ってもいいのだろうか。

またあの時のように、素敵な人の隣に立てる努力をしてもいいのだろうか。

それなら。もう一度頑張ってみようかな。

……だから、今は。本当の気持ちは言わないままで。ちよつとだけ、見栄を張って。

「バカ。将人のことなんて全然好きじゃないんだから」

私はとても久しぶりに。

心の底から笑えた気がした。

ツンデレ系OLは決意する

状況だけ見れば、きっと私が心の底から望んでいたシチュエーションを獲得したはずで。

当初の予定では、今頃私はこれから起こる初めての経験にはしたなく妄想を膨らませ、その身を情欲の炎で燃やしていたはずなのだけだ。

「ここから先は!!絶対入っちゃダメですからね!!絶対です!!ここから先に足を踏み入れた瞬間に外出てもらいますし2度と口聞きませんから!!」

「そこまで言うフツー?!わかったわよいかないわよ!!」

必死にバスタオルで部屋内にラインを引こうとする将人と、笑顔で軽口を叩きあうこの状況が、今はたまらなく楽しくて。

どうしてこんな状況になったのか。

話はあの公園でびしょ濡れになった所まで遡る。

時刻は22時過ぎ。

未だに止みそうもない雨に、呑気に打たれているわけにもいかなかった。私と将人は公園内の屋根がある場所にまで避難しに来ていた。

「くしゅん……!」

「大丈夫ですか……?すみません、俺の上着も、だいぶ水吸っちゃってます……」

「いいのよ。将人だつて寒いでしょ?」

「俺は全然平気なんすけど……あ、ちよつとお店から電話だ。ごめ

んなさい」

お店から電話がかかってくるという事は、将人は出勤中なのにも関わらず飛び出してきてくれたのだろう。

それだけで、私の心にじんわりと熱が広がる。

半袖のブラウスはびしょ濡れで、靴の中も気持ち悪い。

我ながらバカなことしてたなあと思う。けれどどうしてか。心だけは温かい。

誰のおかげかなんて……考えるまでもなかった。

「すみません！急に飛び出して……え？帰ってこなくて大丈夫？え、でも服とか……いや、めっちゃ濡れています。あ、はい、クリーニング出します……」

さつきまであんなにカッコ良かった将人が、電話に対応しながらおどおどしているのを見て、可愛いと思ってしまう。

私のせいなのだから、こんなこと思ってたなら将人に失礼なんだけどね。

「はい、お疲れ様です。また、来週の金曜日に……はい。申し訳ありませんでした。失礼します……ふう」

「ごめんね将人、私のせいで」

「いえ！俺が望んでやったことなんで……星良さんはなにも悪くないですよ」

望んでやったこと、か……。ほんと、この子の優しさには、何度救われたかわからない。

「星良さん、大丈夫ですか？帰れます……？」

「ええ、まあ、ちよつと電車には乗れないでしょうから、タクシー使って帰るわ」

「……前遅くなった時ここからタクシーで帰るとあり得ないくらい金額かかるって言ってましたよね……」

「まあ、そうだけれど。仕方ないでしょ？」

確かにここからタクシーで帰るとなると、数万円は覚悟しないといけない距離。

だからといってこのびしょびしょの状態で電車に乗るのも……憚

られるしね。

ふと隣にいる将人を見ると、頭に手をやって何かを考えている。

「……流石にヤバイか……？ いやでもこのまま帰すのも酷いだろ……大丈夫、俺が気を付ければ……」

「……う・どうしたの？」
なにやら小声でぶつぶつと呟いているけれど……。

「あー、あの、星良さん？」

「なに？」

こほん、と一つ咳払いをして改まる将人。

「……俺の家こつからすぐなんですけど……とりあえず来ます？」

「え……」

それは奇しくも、私が今日夢見ていた展開で。

「こ、このまま帰すわけにもいかないですし……シャワーとかありますんで……」

「え、けど……いいの？」

「いい、ですよ。でも！ 雨を凌ぐためですからね！ それ以外の用途は一切！ ありませんから！ お風呂と着替えだけ！ だけですからね！！」
必死にまくしたてる将人に気圧されながら、それでもやつぱり可愛いな、と思うのだった。

「ここが、俺の家です。すいません、ボロくて」

「……そんなことないわ」

公園から歩いて15分ほど。

私は将人に家を紹介される。……まあ、紹介されるまでもなく、知っていたのだけれどね。

後ろめたい事实に、若干心に影が差す。

けれど、私はかぶりを振った。もう、道を誤らない。将人の隣に立てるような女になるんだから。

将人が鍵を取り出して、扉を開ける。

「どうぞ」

「ええ。お邪魔するわね……」

電気がついた。外装は確かに少し歴史を感じる傷や汚れが目立っていたが、内装は至って綺麗。

「靴下とか、脱いじやいますか。びしょ濡れだし」

「え、ええ。そうね……」

玄関から、居間の景色まで見える。

とても片付いていて、清潔感のある部屋だった。なんとも、将人らしい。

将人が先に入ってタオルを持ってきてくれた。

「とりあえずこれでちよつと拭いてから……先にお風呂入っちゃってください。数分で入れるようになるはずなんで」

「え、でも私が先なんて申し訳ないわよ」

「いいんですよ。俺はテキトーに飲み物とか用意しとくんぞ」

申し訳なきを感じつつも、私は将人の言葉に従うしかなかった。

「ふう……」

私は、将人の家の湯船の中にいた。

なんだろう。不思議な感じ。ふわふわと浮ついた気分ではあるのだけれど、落ち着いているような気もする。

まさかこんな形で、将人の家に入れてもらえることになるとは思わなかった。

嬉しいけれど、それだけ将人の信頼を裏切っちゃいけないという想いの方が強い。

「絶対変なことしちゃダメね……」

お店での一件を思い出す。

怯えた将人の表情。明確な拒絶の意。

もしもう一度あんな目をされてしまったら、私は今度こそ生きていけなくなる。

十分湯船に浸かってから、私はお風呂を出た。

将人が待っているんだもの。なるべく早くしないとね。

脱衣所に出ると……そこには、半袖のTシャツとハーフパンツがたんであった。

……これを、着て良いということだろうか。

急激に、心拍数が上がる。

「お、おおおおお落ち着くのよ。ダメダメ。冷静になりなさい私。これは将人の厚意なんだから。ここで欲情したら全て終わり……!」

興奮するなという方が無理な気もするが、ここは鋼の意志で我慢する私。偉い。

心を無にして、私はそれらの着替えに袖を通した。

そのまま、なんとか将人のいる居間に戻ろうとドアノブに手をかけて。

そこで、思い出す。

——私今、すっぴんなんだった、と。

身体が固まった。思わずメイク全部落としちゃったけど、こんなブスなすっぴんを将人の前に晒して幻滅されないだろうか？

「星良さん、上がりました？」

「え、ええ！上がったわ、上がったんだけど……」

「？服のサイズ合わなかったですか？ちよっと大きいのは我慢していただけるか……」

「そ、それも大丈夫！大丈夫なんだけどね……!？」

ヤバイ、どうしよう。

覚悟を決めるしか、ないのか……!

私は半ばあきらめて、脱衣所の扉を開けた。

「おっ、よかった大丈夫そうですね……って、なんで顔隠してるんです？」

「……私今すっぴんだから。見られたくないの……」

「ええ……いいですけど……ずっとそのままにする気ですか？話しくいいますよね？」

「うっ……」

どうしようか悩んでいると、私の顔を覆っていた両手は、将人によつて優しくはがされた。

「……なんだ、やっぱり思った通り綺麗じゃないですか」

「……ッ！」

「確かにいつものメイクで着飾った星良さんも綺麗ですけど、そうじゃないところも……ってあーっとなんでもないです忘れてくださいーい！」

しまった、いつもの癖で……！とか言いながら将人が着替えをもつて脱衣所に入っていく。

……もう。本当にズルいんだから。いつも将人は欲しい言葉をかけてくれる。

『いつもと変わらない』と言われたら、それはそれで寂しいものなのだ。

居間には、温かい緑茶の湯呑みが2つと、冷たい麦茶のボトルが置いてあった。

将人が用意してくれたのだろう。

「そこまでしてくれなくていいのに……」

座布団の上に腰を下ろす。

ぐるりと、周りを見渡した。

ほとんどの所が整理整頓されているのに、キッチンががちゃがちゃとしている所が生活感があっつい。

もつと散らかっててもいいくらいだ。そのくらいの弱みは見せて欲しい。

麦茶を嚙下して、ひとつ息を吐く。

冷静に今の状況を整理してみると、あまりの現実感の無さに笑ってしまう。

友達に言っても誰も信じてくれなさそうだ。

というか、そういえば。

「私、男の子の家来るの初めてだ……」

学生の頃から数えても、一度もない。

そう意識すると、少し心拍数が上がる。それに、この今着ている服も、本当は将人ので。

少しだけ、袖の部分を香ってみた。

瞬間、脳に甘い刺激が走る。

「……麻薬ね、これは……」

一瞬脳が溶けるかと思った。

これは良くない。将人の香りには女を発情させる副作用でもあるんじゃないだろうか。

まあ私レベルになればもう脳が慣れて耐性ができているから、平気なんだけどね。

……ふう、そろそろ太ももが痛いし抓るのはこのくらいにしておきましょう。

「ふうく出ました。あ、星良さん麦茶で良かったですか？」

——あ、私死んだわ。

「星良さん?!星良さんなんでぶっ倒れるんすか?!」

お風呂上り将人SSRは、破壊力抜群だった、とだけ心のメモ帳に記して置いた。

話は、冒頭に巻き戻る。

「きよ、今日は特別です!この時間に帰すのも悪いですし……泊まっっていつていいですけど!!絶対にここから出ないでくださいね!!」
私が湯上がり将人を見て気絶して結局時刻が0時を過ぎてしまい、将人の家に泊めてもらえることになった。いや全然狙ってたとかじゃないからね!?

……いったい誰に弁明しているのだろう。

実際、あの出来事がなければこれは願ってもない展開。私はおそらく、嬉々として将人に襲い掛かったのだろう。

けれど、今は違う。

「なんにもしないって言ってるでしょ!だから添い寝してよ!」

「絶対に嫌です!!星良さんあんた僕が寝ている隙になんかしようと

してますね!!」

「いいじゃない! ケチ! 先つちよだけ貸しなさいよ!!」

「なんか星良さんキャラ変わってませんかあ?」

私から襲うのは、ダメだけど、将人が求めてくれたらセーフ!!

——まあ、冗談だけだね。

今はこれくらいのもやり取りができる方が気持ち良い。

反応も初心で可愛いしね。

「あ、そうだ将人。今度私のマグカップと歯ブラシ置いておいてもいい?」

「なんで当然のように住もうとしてるんですか!! 絶対ダメですから!」

からかうのも、悪くない。

真っ赤になって反論してる将人が、笑っていてくれるから。

「はーっ、はーっ……! 布団きましたから、そこから一歩でも出たら警察呼びますからね……」

「来る前に全て終わらせましょう。大丈夫、私早い方だから」

「星良さん壊れちゃったよお!!」

心の底から、笑えている。

将人がこんなに笑顔なもの、もしかしたら初めて見たかもしれない。

ふと、目が覚めた。

もつと寝付けないかと思っていたのだけれど、色々あったこともあ

り疲れていたのか、自分でも驚くほどすぐに寝ることができたみたい。

そもそも手出す気がなかったのも大きいかしらね。

入念にバスタオルと長い棒のようなものでしきりをつくった先に、将人のあどけない寝顔。

あれだけ警戒していても、あんなに可愛い顔で寝ちゃうんだから可愛い奴。

窓から、月明かりが差し込んでいる。

あれだけ降っていた雨も、いつの間にか止んだよう。

夏の夜の静寂の中、すやすやと寝息を立てている将人の顔が月明かりに照らされて一枚の絵画のように見える。

思わず、笑みが零れた。

「——大好きよ。将人」

今はまだ、ちゃんとあなたに伝えることはできないけれど。

いつか隣に立てるくらい素敵な人になるからね。

「じゃあ、帰るわね」
返事はない。

将人は疲れていたようで、ぐっすりと眠っていた。
もう始発は動き出している。

あんまり遅くまでいても悪いし、私は早めに出ることに決めていた。

手を出さなかったことを褒めて欲しい。

私は我慢ができる女なんだ。

——将人には誓って手を出してないが、家にちよつとした悪戯を仕込んでおいたのは、内緒。

気付いた時に慌てる姿を想像して、笑ってしまう。

将人の家を出た。

先に帰る旨は、SNSで連絡をいれておく。

「そういえば」

一つ、思い出したことが合って、そのままスマホを操作する。

「もう、いらないわね」

アプリのメモ帳。

そこに書いてあったものを、私はなんのためらいもなく消した。

これはもう、必要ないものね。

完全に消去してから、スマホを鞆の中に放り込んだ。

歩き出しながら空を見れば、昨日の雨が嘘のように晴れ渡っている。
大きく、伸びる。

この天気のように、私の心も晴れ渡っている。そんな感じ。

曲がり角の前まで来て、将人の家のある方向に振り返った。

「またね、将人」

——今日からまた始めよう。

——最愛の人の隣に胸を張って立てる、女になれるように。

幼馴染系JDは背負われる

真夏の太陽が、砂浜を焼いている。

初夏とは思えないほど気温は上がり上がりになっていた。

俺たちが来たのは、夏の風物詩でもある、真っ青な海。

「海だ〜!!!」

「おーいーいきなり入るなよ！準備運動しないと危ないぞ！」

夏休みに入って。

恋海とみずほと俺の3人は、予定通り一番近くの海水浴場まで来ていた。

一度海辺の旅館に荷物を預けてから、海へ。

海を一度見た時からテンションが上がりまくっていたみずほは、砂浜まで来るなり海に突貫していった。

あいつ大丈夫か本当に……。

「あはは、みずほは元気だねえ」

「いいんだぞ？みずほと一緒について行って。俺はどうせ砂浜にいるだけだしな」

「えー、つまんないよ。将人も一緒に泳ごう？」

少し俺より前に出て無邪気に笑う恋海。

前にみずほと話していた時は攻めた水着がどうのこうのと言っていたが……。

恋海の水着は上下セパレートではあるものの、下はショートパンツタイプに、上は白のリボンデザインの肩があるタイプだ。

露出は控えめで、可愛らしさ重視の水着。実際恋海はこういうタイプの方が似合っていると思う。

スタイルがいいからビキニタイプも似合いそうではあるが。

「……どう、かな？」

俺が水着を少し見ていたのを気付いたのか、恋海が恥じらいながらその場で軽く回って見せる。

「……可愛いよ。なんつーか、恋海の良さが出てる感じがする」
「えへへ……ありがと」

……素直な感想を言うのも考え物なのかもしれない。

恋海が嬉しそうにしてくれるのは良いが、最近のこともあって俺は複雑な心境だった。

「(うらそー)！いやいややしてないで海に入りなさい！」

「い、いやいやなんかしてないよ!!」

いつの間にか戻ってきていたみずほが、ピピー、と笛を吹くようなジェスチャーでニカツと笑う。

みずほの水着はこちらもセパレートタイプのオフショルダー型。色彩は青を基調にしている清涼感がある。胸周りの露出こそ少ないものの、肩とお腹は素肌が見えているし、下はフリルこそついているがビキニタイプだ。確かに若干攻めているかもしれない。けれどたしかに、みずほの可愛い部分を強調するにはとてもいい水着なようにも見える。

「みずほ泳ぐの苦手って言ってなかったか……?」

「まあね!でもここそんな深くないし大丈夫なのだ!」

これまでの付き合いで分かったことだが、みずほは無理して元気を装う時がある。

辛い時は辛いつて言って良いと思うのだが……。

そして今日ここまでは、どちらかと言うと装っている傾向が強い。

電車内で無理して俺と恋海を2人にしたがるし、何故か輪から外れようとする。

3人で来てるんだから、気にしないでいいのにね。

「俺はとりあえず空いてるところにパラソル刺しておくから、2人は海行つてきな?」

「あ、私も手伝うよ」

「手伝ってもらおうようなことないぞ……?」

「いいからいいから!将人が1人でうろろう歩いてると危ないの!」

海水浴場は、そこそこの賑わいを見せている。

夏休み期間とはいえ平日なことで、比較的穴場である海水浴場だから人数は少ないが、周りに人がいないわけじゃない。

男が1人で歩くな、と言われるのも受け入れなきゃいけないんだろうな……。

「……じゃ、じゃあ私先にいつてるね！海は待つてくれないのだ！」

「あ、おいみずほ！」

たたたつとみずほがまた海へと駆け出す。

危なっかしいなあいつは……大丈夫か？

「私達も、パラソル立てたら行こう？」

「そだな。あいつ一人にさせとくのも危ないし」

俺は恋海に返事しつつ、みずほの行く先を視線で追いかけた。

どこにいるかはちゃんと把握しとかないとな……。

「この辺で良いんじゃない？海も近いし！」

「よし。ここに立てるか」

海に近すぎても、潮の満ち引きによっては波が来てしまうことがある。

ほどほどに海に近いけど、波は来ないくらいのところにパラソルを刺して、荷物を置いた。

と、そのタイミングで。

「あばっ！」

よくわからない奇声を上げながら、遠くにいたみずほがこけた。

「言わんこっちゃないあいつは……！」

「え、将人?！」

視界の端でみずほをちゃんと追っついておいてよかった。

俺は走ってみずほのいるところまで行き、迷わず海へダイブ。

泳ぎはそんなに自信がある方ではないが、これくらいの距離なら問題ない。

すぐにみずほのところまでたどり着き、その細い身体を抱き上げた。

「だから言つたろ！ちゃんと準備運動しろって」

「あ……えっと……ごめん」

一応ぎりぎり頭が出る水深だったけれど、海をバカにしちやいけない。

気付いたら深いところまで来てしまっていた、なんてのはあまりにもよくある話だ。

「大丈夫か……？足つったか？」

「いや、本当にバランス崩しただけ……」

いつになくしおらしいみずほを、そのまま砂浜へ救出。

恋海も俺の後を追って砂浜まで来ていた。

「みずほ大丈夫?!」

「あ、あーと、だ、大丈夫！ちよつとバランス崩しただけ」

海に入る予定はなかったのに、ぼつちり入っちゃまった……あとはパラソルの下で大人しくしよう……。

俺は視界を遮る鬱陶しい前髪をかき上げて、ビーチサンダルを履き直した。

「え……」

「?どうしたみずほ」

後ろを振り向けば、その場で固まったみずほの姿。目が丸くなっている。

恋海も不思議そうな顔だ。

「……んーん！なんでもない！将人ありがとう！」

「……ちゃんと準備運動するんだぞ」

なにかを振り切るように首を横に振ったみずほが、今度は恋海と一緒に準備運動を始めた。

俺はパラソルの下に戻ってきて、腰を下ろす。

仲良く恋海とみずほが話しながら準備運動をしている姿が、ここから良く見えた。

どちらも負けず劣らず可愛い2人だ。

前の世界なら、あんな2人がいたらナンパされること間違いなしだろう。

「前の世界、か……」

最近では、考えさせられることが多い。

由佳のこと、そしてこの前の、星良さんのこと。

前の世界基準で考えたら俺は普通のことをしているだけなのだが、こちらではそうではないらしい。

かといって、今から仲良い子達にわざと冷たく当たるのは、俺には無理だ。

星良さんの時にわかった。あの人の泣きそうな顔を見て……俺は耐えられなかった。

「どうすりゃいいんだ……」

考え事をしている内に、瞼が重くなってくる。

波の音が耳心地良いし、俺は睡魔に身をゆだねることにした。

「……と……まさごと！」

「ん……っ？」

起きてすぐ目に入ってきたのは、みずほの顔。

ちよつとびっくりしたが、それ以上にみずほの表情が焦っていることに気付き、身体を起こした。

「将人！恋海が熱中症っぽいの！」

「ええ?!」

一瞬で意識が覚醒した俺は、周りを見渡して……隣で体育座りをしている恋海に気付く。

「あはは……ごめん、ちよつとダルくて……」

「無理しないでいい。水分はとってる？」

「うん、おかしいな……ちゃんとポカリ飲んでただけ……」

顔が赤く、呼吸も荒い。

本人曰く、頭痛とめまいがしたようだ。

「みずほ、ちよつとここ見ておいてくれ。俺は恋海連れて先に旅館の部屋に寝かせるから」

「う、うんわかった！」

「恋海、ちよつと我慢してくれよ……」

「えっ……」

俺は恋海の前にしゃがみこむと、恋海の両手を俺の肩にひっかけさせる。

そのまま立ち上がって、恋海を背中に背負った。

「しっかりつかまってるよ。少し辛抱してくれ」

「……うん」

ぎゅつと、俺の身体に回された腕が強くしまる。

……こういうことも多分良くないんだろうが、今は緊急時だから……と、言い訳する自分にも少し嫌気が差した。

振り返ると、みずほのいつもの笑顔に影が差しているように見えて、それも少し気になった。

恋海を部屋に寝かせた後。

もう日が暮れそうなほどに傾いている中、俺とみずほは2人で海辺を歩いていった。

「恋海にも困ったものですな。あの子、高校の時はソフトやってたから暑さには慣れてると思っただけだね」

「ブランクがあれば、そんなのすぐ無くなるさ。今日は特に日差しが強かったからな」

恋海を運んだ後の時間は、みずほと一緒に海水浴に興じていた。

恋海自身から頼まれたのだ。みずほと遊んであげて欲しいと。

まあ確かにみずほを一人にしておくわけにもいかないから俺としては賛成だったんだけど。

「にしても将人はカッコ良いね！あんなぱつと恋海背負っちゃうんだから！」

「いやあれが一番恋海に負担ないだろ……」

「そうは言うけどさ！やっぱりあれ？バーで働いてると女の子に優しくできるのかな？」

「それはあんま関係ないんじゃないかな」

本人もそんな風には思っていないのだろう。からかうように耳打ちしてきたみずほは、ひひひ、と可愛く笑っていた。

「ねえ、将人」

「ん？」

また少し前を歩き出したみずほが、こちらを見ずに呟く。

「私が恋海の立場だったらさ……私も背負ってくれた？」

なんて答えたらしいのかわからなくて、一瞬俺は言葉に詰まる。

けれど、みずほの背中が、少し寂しそうで。

「……そりやそうだろ。その……友達だしな」

「……えへへ。ありがとう」

くるつと振り向くみずほ。

……なんかこう、水着なのもあってみずほの可愛さが2割増しくらいに見える。

みずほがもう一度前を向いて、ぐつと上に伸びをした。

「運命の人が将人みたいに優しい人ならいいなあ〜！」

「ウチの人達俺が関わった人はみんな優しいから、大丈夫だと思うけど」

あそここの人達の人の良さは異常だ。

見た目で最初嫌厭してしまった自分が恥ずかしい。

まあ、接客の時猫なで声になるのはやっぱ嫌だけど。

そうして2人で話しているうちに、日も沈んであたりが暗くなってきたので、荷物を置いていたパラソルの元に戻ってきた。

周りを見れば、皆帰路についているか、荷物をまとめているかな様子。

視界が悪くなってきた後の海は危ないからな。

「夕飯どうしよっか」

「恋海の体調次第だな……なんか美味しい物部屋に買って行って食べるくらいでいいんじゃないか？」

「そだね」

旅館は素泊まりなので、夕飯はついてない。

本来なら近くのところに食べに行こうという話になっていたのだが、恋海があれじゃ仕方ないだろう。

ふと、みずほが自分の鞆から何かを取り出しているのに気付いた。

それは、1枚の布。

それを広げて、みずほがぼーっと眺めていた。

——あれ？

「それ俺のハンカチじゃん」

「——えっ？」

こちらを見たみずほの表情が、固まった。

元気っ娘JDは運命を知る

私の十数年の人生で、こんなに一つの物事に悩むことは無かった。将人がボーイズバーで働いているという事実を知ってから、私は恋海と顔を合わせる度に変な汗が出るようになってしまった。……親友を裏切っているという事実が、私の背中に冷たい何かを突き立てているような、そんな感覚。

それくらい秘密、なんでもないじゃないかと思うかもしれないが、相手は恋海の想い人なのだ。

きつと真に恋海の親友なら、教えてあげるべきだと思う。

だけど……私は言わなかった。理由なんてハッキリわかってる。

私もまた、将人に惹かれてしまっているから。

彼の優しさに触れて、どうしようもなく心を動かされてしまっているから。

今は恋海への申し訳なきと、運命の人という存在があつてなんとかバランスを保っているけど……正直、かなり心はしんどい。

今日は将人と恋海の3人で海に来ているけれど、どんな気持ちで2人といればいいのか、わからなくなってる。

なるべく、将人と恋海を2人にしてあげようと思つて行動するんだけど、その度に心が締め付けられる。

私を好きになって欲しいって、思っちゃってる。

……こんな状態で、もし2人が付き合うことになりましたって言われて、私は笑って祝福できるんだろうか。

「おぼっ?！」

そんな精神状態で海なんかに入るから。

私はバランスを崩して海中に身を投げ出してしまふ。大丈夫、足は

つくはずと、懸命に足を伸ばしても、地面に一向につく気配がない。意外と深いところまで来てしまっていて体勢が立て直せなくて。

ああ、なにしているんだろ私。

そう思ったその瞬間。

浮遊感。

足と背中を固定されて、私は海面に顔を出すことができた。

「だから言つたらーちゃん準備運動しろって」

……ああ、どうしてこうなってしまうんだろう。

「あ……えつと……ごめん」

身体が熱い。

背中と足に回された手。将人の心配そうな顔。

どれもが、私の感情をぐちゃぐちゃにする要素になる。

好きになっちゃいけない人。

そう、わかっているのに。

ゆつくりと、砂浜に優しく降ろされて。

ちらり、と将人の方を見れば。

将人が髪をかきあげていた。

前髪をかき上げた髪型も、よく似合う――。

「え……」

そのシルエットに、見覚えがあった。

いつだろう。思い出せない。

でも、すごく大事なことのような――。

「どうしたみずほ」

「……んーん、なんでもない！将人ありがと！」

お礼も言えないようじゃ、ダメダメだ。

心に残った違和感を、私は無理やり追い出した。

恋海と2人で、ビーチボールを使って遊んでいる途中。

私が海の方へ飛んで行ったボールを回収して戻ってくると、恋海がうずくまっていた。

「恋海?! どうしたの?」

「ごめん……ちよつとめまいが……」

顔が赤い。熱中症だろうか。

私はすぐに恋海に肩を貸して、将人のいるパラソルの元へ。

日陰に恋海を下ろして、寝ている将人に声をかけた。

起こすのは忍びないけれど、緊急事態だし、仕方ない。

跳び起きた将人が、恋海を心配する。

そしてすぐに……恋海を背負った。

「みずほ、ちよつとここ見ておいてくれ。俺は恋海連れて先に旅館の部屋に寝かせるから」

「う、うんわかった!」

将人が、遠ざかっていく。

ズキン、と。心が痛んだ。

背負われた恋海が一瞬、嬉しそうだったこと。

そうだ。私はあくまでおまけで。

あの2人の恋を成就させてあげるために来たんだった。

そんな立場も忘れて、なにをはしゃいでいたんだろうか。
心が痛む。

私は友達の分際で、一体何を期待しているんだろう。

恋海を寝かせて戻ってきた将人に、私はびっくりした。てつきり、恋海の看病をするものだと思っていたから。

「大丈夫なの？恋海は。いいんだよ私もすぐ戻るから」

「いや、いいんだ。恋海も今は落ち着いているし、むしろ恋海からお願いされたんだ。みずほと遊んできてって」

「……！」

恋海は……私のことも気遣ってくれている。

なのに……なのに私は。

恋海を、裏切ってしまったのではないか？

夕暮れの海辺を、2人で歩く。

私は、砂浜の少し上にある防波堤を、両手を広げてバランスをとりながら歩いていた。

「にしても将人はカッコ良いね！あんなぱつと恋海背負っちゃうんだから！」

「いやあれが一番恋海に負担ないだろ……」

「そうは言うけどさ！やっぱあれ？バーで働いてると女の子に優しくできるのな？」

「それはあんま関係ないんじゃないかな」

わかってる。

あれが将人っていう男の子が持つてる、本来の優しさであること。そしてそれが……恋海という女の子に向けられたものであること。

安定した足場の方へぴよんと跳んで。

私は将人に問いかける。

「ねえ、将人」

「ん？」

「私が恋海の立場だったらさ……私も背負ってくれた？」

……これを聞いて、なんて答えて欲しいんだろう。
わかってる。優しい将人はきつと背負ってくれるのだろうという
ことは。

そんな事実確認よりも、私は将人の意識を私に向けたかった。
私の事を……少しでも考えて欲しかった。

「……そりやそうだろ。その……友達だしな」

「……えへへ。ありがとう」

友達、という言葉に反応したことは、おくびにも出さない。
友達、か。そうだよね。

将人にとって私は友達でしかなくて……当然なんだよね。

なのにどうしてこんなに——心が痛むんだろう。

パラソルの元に戻ってきた。

夕日はもう水平線の向こうに消えようとしている。

あの日が沈んでしまったら、私と将人の時間は終わる。

得られたのは、将人が私の事を友達としてしか見ていないという事
実だけ。

笑っちゃうよね。

鞆からタオルを取り出そうとして……丁寧に畳んだ、運命の人から
もらったハンカチが目に入った。

なんとなく、それを取り出して広げてみる。

『あ、このハンカチは別に返さなくていいから。じゃー！』

あの時の胸の高鳴りは、きつと嘘じゃない。
今でも鮮明に思い出せる。

……あの人の顔は、一向に思い出せないと言うのに。

私が、ボーっとそのハンカチを眺めていた時。

運命というものは、いつだって突然やってくるんだ。

「それ俺のハンカチじゃん」

「——え？」

至って普通の口調で。
なんの脈絡もなく。

「最近見ないなと思ってたんだよね！俺のハンカチローテーションの一角なんだけど、どこにやっちゃったか覚えてなくなってるさ」
「……」

——嘘、だ。

「嘘だよな?」

「え? いや嘘じゃないと思うけど……うん。これやっぱそんなあるデザインじゃないし……」

え、待ってよ。ダメだよ。

理解したくないのに、私の脳は1つの結論を導き出す。

それは、ダメだ。

だって、じゃあ、あれが、あれが。

『大丈夫ですか? コンタクトですよ。一緒に探します』

あれが、将人で。

将人が、運命の人で。

『ブスじゃねえ。可愛いだろみずほちゃんは』

あの時も。

『無理しなくていい。辛い時は、辛いつて言っていていい。俺は……まだみずほちゃんと会ってほんの数時間しか、一緒にいないけどさ、みずほちゃんが明るく振舞おうとしてるのはわかっているから。でも、辛い時まで無理する必要ないよ。あんなこと言われて、傷つかない人な』

んて、いないんだから』

あの時もあの時も——!!

『待って！みずほ!!……みずほ、一回待って、一回話そう?』

今日だって——

『だから言ったらろ！ちゃんと準備運動しろって』

——全部。

片里^{運命の}将人^人で。

「……ッ!!」

私は、駆け出していた。

「みずほ?!」

意味わかんない。

意味わかんない意味わかんない意味わかんない意味わかんないよ

!!!!

運命の人は、将人で、最初から、あの時から将人で。

わかりたくない。わかりたくないのにわかる。

今にして思えば、全部。全部納得がいく。

優しくしてくれたのも、将人という人を知れば知るほど理解でき
る。

昼間髪型に見覚えがあつたのも、きつとあの時のもので。

バーに運命の人はいたんだ。最初から。

あの時足を踏み入れた瞬間に、会つてたんだ。

「みずほ!!ちよつと待つてつて——うわあ?!

「え……!?!」

振り返つた私が見たのは、追いかけてきた将人が防波堤の上から砂
浜に落つこちる姿だった。

「とりあえず、外傷はありますが重症ではありません。このまま寝かせておいてあげれば、明日には回復するでしょう」

「よ、よかった〜……」
旅館の寝室で。

意識が無かった将人の姿に慌てに慌てた私は恋海に連絡して、旅館の方々の協力もあつて将人を寝室へ運ぶことに成功。旅館の担当医？の方が診てくださって、とりあえず私は落ち着いている。

将人も、今は寝ているだけのようだ。

「では、これで失礼します」

「あ、ありがとうございます……」

お医者さんが出て行って。

私と恋海だけがその場に残される。

「なにがあつたの？みずほ」

「……」

何も、答えられない。

恋海に、なんて説明していいかわからない。

運命の人が、将人だったなんて……言えない。

「……今日は、休もうか。色々あつたし。明日また、話聞くとよ」
「……うん」

今は恋海の優しさに、甘えるしかなかった。

夜。

私は結局将人の寝室で彼に大事がないかを、ずっと見ていた。ぐっすりと、寝ている将人。優しくして……素敵な、運命の人。

胸が、高鳴るのがわかる。

——もう、こうなってしまったたら止まれない。

わずかに均衡を保っていた私の心は、一瞬で崩壊した。この気持ちを、止める枷は外れてしまった。

だって、そうだよ。

恋海に紹介される前から、私は将人に会っていて。

だから、これは悪くない。

私は、悪くないんだ。

ぐるぐると、私の心の中で感情が暴れ出す。

もう我慢なんてする必要ない。譲るなんて、もつてのほかだ。

すう、すう、と将人の胸が呼吸に合わせて上下する。

それがどうしてか、色っほい。

暴れ出した感情は、私にとって初めてで。

こんなにも抑えがきかないなんて、知らなくて。

魔が差してしまう。

将人のその顔。その身体に触れたくて。

頭を、撫でてみた。
頬を、撫でてみた。

どうしようもない高揚感。甘い痺れるような感覚。
今は、何したって、良いのではないか？

我慢に我慢を重ねたんだ。今日くらいは、私が良い思いをしたって
誰も——怒らない。咎めない。

運命の神様は、この瞬間を私にくれたんだ。

整った将人の顔を、もう一度眺める。

キス……は、意識があるときにしたい。

初めては、やっぱり素敵なものにしたいから。

ふと次に、首元に目が行く。

今日落ちた時だろうか。首元に赤い傷が残っている。

せつかくの将人の綺麗な身体に、傷が。

ぞく、と背中に何か走った。

それは、私の中に生まれた甘い欲望。

この傷を、『戸ノ崎みずほ』という存在で上書きしたいという願望。

止まれなかった。

ぞく、ぞくと心臓が強く鳴っている。

この綺麗な首元に、この人の運命の人は私であるという証明をした
い。

深く。強く。刻み込みたい。

私という存在を。
誰にも、渡さないように。

近づく。首元に。

口を、あてがおおうとする。

どく、どく。

もう、すぐそこに将人の首がある。

ここに、私の、戸ノ崎みずほの跡を。

今なら、誰も——。

「なら——つひるの？」

——びしり。

何かに亀裂が入った音がした。

2人のJDは話し合う

私とみずほは、高校の時から仲良しだった。

私がソフトをやっていて、みずほはダンス部。

部活こそ違ったけれど、休み時間とか、オフの日とかは一緒に過ごすことが多かった。

1年生のクラスが一緒で、比較的誰とでも仲良くなるみずほは、私ともすぐ仲良くなって。

皆に対して仲良いんだろうなと思っていたんだけど、気付けば私の所属するグループはみずほのいるグループになっていた。

いっつもみずほは中心にいて、明るくて。

その笑顔と、無邪気さに何度元気をもらったかわからない。

大学も同じところを受けると聞いた時は内心嬉しかった。

またみずほと一緒？って嫌な顔して見せたら、なーんで嫌そうなんだよっ！ってみずほが笑って。

みずほと一緒なら、大学生活も友達面では安心だななんて思ったくらい。

まあ何が言いたいかって、私はそれくらいみずほのことが好きだし、みずほもきつと、私のことをそれなりには気に入ってくれてるはずだっていう自負があった。

——それなのに。

「なに——してるの？」

胸の内から沸き上がる激情は、いったいなんだろう。

私達2人の部屋に戻ってきて、私とみずほは向かい合って座っていた。
た。

旅館の客室。窓際の、海が見える場所。

机を挟んで正面に座るみずほは……既に泣いていた。

「ごめん……ごめんね、恋海……」

「……謝られても……」

空気は、正に地獄だった。

寝ている将人の容態が心配で向かった先。
みずほもいることは知っていたから、将人の調子はどう？なんて聞こうと思って部屋に入ると。

将人の顔付近に自分の顔を近づけているみずほを見てしまった。
怒りも、悲しみも、すぐには出てこなくて。

私は頭が真っ白になってしまった。
でも、冷静に状況は理解できていて。
止めなきやいけないということだけはわかった。

「恋海が好きだって知ってたのに……私……私っ……」
「……」

大粒の涙を、みずほが手で拭っている。
いつもの天真爛漫な彼女は、どこにもいなかった。
……大きく、深呼吸をする。

私も、この状況をまだ受け止めきれない。

するとみずほが、おもむろに顔を上げた。
その目は、赤く腫れていて――。

「ねえ、私の運命の人、将人だったんだよ？ 将人が私の運命の人だつて……知っちゃったの……」
どきん、と心臓が跳ねた。

跳ねたけれど何故か――そこまで驚きはしなかった。

「あの時私を助けてくれたのは、将人だったんだよ!? 全部全部、将人が助けてくれた……無理だよ、そんなの！ 辛いよ……！ なんて将人なの?! なんて……恋海の好きな人なの?!」
「……」

私はみずほの顔を……正面から見れなかった。

私もどうしていいかわからなかった。

さつき、みずほが将人に何かしようとしていた時、確かに私の中に怒りの感情もあった。けれど、それ以上に感じたのは、悲しみと、そして……みずほに対する申し訳なき。

正直に言えば、私は半分気付いていた。みずほの探す運命の相手が、将人なんじゃないかって。

将人がボーイズバーで働いているという話を聞いた時。

みずほから聞いた状況を考えれば、将人なら十分に助けかねない、いやむしろ、助けるだろうと思ったこと。

でもその時會ってるのに、再会してわからないはずもないか……？
って思ったから。

あくまで可能性として考えてただけだけど、少しだけ想像はしてた。

だけど、私はそれをみずほに言わなかった。……言えなかった。怖かったのだ。それがもし正解で、運命の人は将人だったら？

みずほの運命の人が将人であるという事実を、受け止めたくなかった。

そして先延ばしにしたから……こんなことになってしまったんだ。正面を見る。

また突っ伏してしまったみずほの背中が、小刻みに震えている。親友が、泣いている。

「運命の人ってわかる前から、ちょっとずつ惹かれてる自覚があつて……頑張つて遠ざけようとしたんだよ……恋海のことと、運命の人が私にはいるからつて、なんとか保つてきたけど……それすらなくなつちやつて……我慢、できなくなつて……」

「紹介、しなきゃよかったかな」

「っ！ち、ちが……」

なんでこんなこと言つてしまうんだろう。

運命の人つてわかる前から、つて言葉に反応してしまった。

でも、それも私が悪い。将人つていう男の子がどんな人なのかわかつていたのに、自分の欲のために近付けてしまった。

それで、みずほに辛い思いをさせてしまった。

また、ため息がこぼれた。

ふと、外を見る。

さざ波の音が、心地良い。……少しだけ、落ち着いていた。

「ねえ、みずほ。将人のこと、好きなの？」

「……」

みずほは、無言で頷く。

きつと、譲れないのだろう。

もうその位置まで来てしまっているのだ。みずほの中で将人という存在が。

「譲ってって言っても、多分、無理なんだよね」

「……」

「いいよ。わかるもん。私もだから」

どうやら、覚悟を決めなければいけないらしい。

私は、一つ息を吐いてから……席を立った。

海の向こう。ぼんやりと水面に、月が映っていて幻想的な眺めだ。

そんな風景を見て心をもう一度落ち着けてから……私はみずほに振り返る。

これからするのは私にとって、一世一代の提案。

それは。

「じゃあさ、みずほ……私達で、将人の彼女になろうよ」

「……え？」

これは、少しだけ考えていたこと。

独り占めできなくなるのは嫌だけど……みずほなら、私は良い。

「最近、男の人が複数の人と付き合うようになってるのは知ってるよね」

「う、うん」

「近い将来一夫多妻制になるって言われてるしさ……私とみずほで、将人をもらっちゃおうよ」

「……！」

みずほが驚いたように目を見開いている。

「みずほは、嫌？」

「い、嫌じゃ、ないけど……恋海は、いいの？」

「そりや本当は一人で付き合いたかったけど……みずほなら、いいよ」

それに、あんな聖人みたいな将人を、私一人で攻略してずっとこつちを見てもらうというのは厳しい気がしてた。

ボーイズバーで働いてる、なんて聞いた日には尚更。

将人の優しきでストーカーみたいなのがまだ生まれていないことが奇跡だと思う。

「もちろん、将人にこんなこと聞いてないからさ……告白でもするときに、一緒に言おうよ。私とみずほ2人でなら、流石の将人でもいけると思うんだよね」

「恋海……うう……うわーっ恋海ーっ!!」

「ちよつと大声で泣かないでよ!でもあれだからね!将人が恋海一人で言ったら諦めてもらうからね!!」

「ひぐっ……いいよお……怖かったよおーっごめんね恋海……！」

涙でぐしゃぐしゃになったみずほが、私に抱き着いて来る。

みずほが心に抱えた葛藤は、私以上だっただろう。

ほんぽんと、背中を叩いてあげる。

「私も、ごめんねみずほ。ちよつと思ってたんだ。みずほの運命の人が、将人なんじゃないかって。でも、怖くて言えなかった。私も……同罪なんだよ」

「うう……違うよお……悪いのは私なんだよお……ぐすっ……本当に、本当にごめんね……！」

私も知らず、頬に涙が流れていた。

みずほを嫌いになりたくなかったから。とにかく一旦話を落ち着けることができ、心が緩んだのかもしれない。

みずほが落ち着くまで、そして私自身も落ち着くため。私はみずほを優しく抱き締め続けていた。

「ね、ねえ恋海本当にやるの?」

「うん。やっちゃおやっちゃお」

それから。

私達は改めて将人の部屋に来ていた。

私達はあんなに色々なことがあって騒いでいたのに、将人はぐっすりと眠っている。

それがなんだか悔しくて。でも可愛くて。愛おしくて。

将人が寝ている両側に、私とみずほが座る。

私が、優しく将人の頭を撫でた。

「もう……将人がカツコ良すぎるから、みずほまで惚れちゃったじゃん」

声は、小さく。将人は寝息を立てているだけで、起きる気配は全く

無い。

「だから、これは罰だよ、将人。私達2人とも……面倒見てくれなきや、ダメなんだから」

私はそう呟くと、将人の首元に顔を近づけた。

みずほがやろうとしていたことを聞いて、私もしたくなった。だから、2人でやろうとみずほに提案したのだ。

みずほは最初恥ずかしがっていたけど……了承してくれた。いいよね。私達2人で、将人の身体に刻み込もう。

首の左側に、唇をあてがう。

将人の香りが、脳内を駆け巡った。

歓喜に身体が震えている。

この人を、自分のモノにしたいと身体中が叫んでいる。強く。もつと強く。

どんなに長くても、足りない。まだ、足りない。

「……っはあ……！」

ゆっくりと、離れた。

首元には、くつきりと跡が残っている。

この人は、私のものであるという証拠。気持ち、昂った。

「みずほも」

「う、うん……」

みずほが、逆側に同じく跡をつける。

私と同じように、長く、そして深いマーキング。

みずほの頬が紅潮しているのが、私からもわかった。

そして、離れる。

将人の首元には、2つの“跡”。

2人で、将人の顔に両側から近づいて、とても小さい声音で。

「将人。大好きだよ」

「将人……好き。大好きに……なっちゃったんだ」

みずほと私が顔を合わせてにやりと笑う。

絶対に渡さない。

このカッコ良くていじらしい、私達の男の子は。

私とみずほが——もらうんだ。

文学少女JKはバレる

「やっぱりゴムって用意しておいた方が良いと思う？」
全員が一斉にゴミを見るような目線で私の事を見た。
なんだなんだその目は。

夏休みが始まって、夏期講習という意味の分からない理不尽な講習が、私達女子高生を縛っている。
今はその夏期講習の授業を終え、いつものメンバーでランチタイム。
流石に午後に授業を用意するほど学校側も鬼ではないので、昼を食わずに帰る生徒が過半数だ。

だから今は私達の周りに生徒はほとんどいない。
さて、話を本題に戻そう。

「やっぱりこういうのって女側が用意しとくべきって言うじゃん？
私はそれを男に買わせる描写でゾクゾクするタイプのオタクなんだけど、流石に王子様にそんなことさせられないしさ？やっぱ用意しとくのが礼儀だよねって話」

「やっぱり？いざそういう状況になった時にありませんってなったらだめじゃん？」

「じゃあできないわとか言われたら悲しいじゃん？
飲むヨーグルトをちゅーちゅーストローで吸っていたまなが、呆れながらその容器を机に置いた。

「……暑さで頭イカれた？」
「いやまっつてまな、これがコイツの通常運転だから」
「それも失礼だろオイ」

全員私に対する敬意がたりないんじゃないのかな??
対面に座った初美もサンドイッチを咀嚼し終えて諦めたようにため息をつく。

「まあ家庭教師がイケメンってことはまあ認めるしかないか」

「ただのイケメンじゃない、超絶イケメンだから」

「あく蟬と同じくらい黙って欲しい」

「いや蟬の方が風情感じられるからまだマシだね」

「みーんみんなみんな!!!」

危ない危ない、キレすぎて逆に蟬になってしまった。

一斉に耳を塞いでいたメンバーが、ゆっくりとその手を耳から離す。

「だいたいさ、家に毎回来てくれてこんな距離近いのに手出せないお前がヘタレだわ」

「あのねえ。三秋の彼氏つー関係と違ってこっちは家庭教師なワケ。そんな簡単に手出せないでしょうが」

けっ、彼氏持ちは余裕そうでいいよな全く……。

「それで？唯一の彼氏持ちであるところの三秋様に置かれましたはゴムの方はご準備されてるの？」

「言い方キモ過ぎ」

「昼飯中に出す話題なのかそもそもそれ……」

ええい黙れ黙れ！返答次第によってはもしかしたら私も今日帰りに購入しなきゃいけないくなるだろ!!

もう私と将人様はその段階なんだよ！（自分調べ）

私は真剣な眼差しで三秋を見る。

三秋も呆れたようにもう一度ため息をついてから。

「まあ、家にはあるね」

そう言った。

「つくう〜!!!」

「いやどういう反応なのそれ」

そっかあくやっぱあるのかあ……正しい淑女はそれくらいね、準備しないと、ね？

ほら、万が一があるからサ……。

「そつかあ……やっぱ買うかあ……」

「絶対にねえから買わなくていいよ」

「わかんないでしょ?! いつ間違いがあってもおかしくないんだよ?!」

「そう思ってるのは汐里だけや」

相変わらず、こやつらは私と将人様の距離感を理解していないらしい。

もう好感度はかなり上がってるはず。告白したら80%くらい成功するくらいの好感度だろう（自分調べ）。

「私が処女卒業したら全員バカにしてやるからな……」

「この前汐里がグループ退会して帰ってくるまでの間で、全員で汐里がその家庭教師と付き合うことができるかどうか賭けたんだけど」「は??なにしてくれてんの?!!」

以前、私が将人様とのツーショットを撮った際にあまりにこやつらが失礼だったので一度私はグループを退会した。

まあすぐ戻ったけど。

あの短い時間でそんなことしてたの? 許せないんだが?

だけど私は寛容な女。

なにせ今だけは清楚で器も大きくて可憐なヒロインなのだから。

「それで? 誰が私が付き合うことに賭けたの? 美味しいご飯、食べさせてあげるよ……」

私が優雅に言い放つ。

この余裕。立ち振る舞い。まさにメインヒロイン。

すると初美がつまらなさそうにスマホから一度顔を上げて。

「誰も付き合う方に賭けなかったから成立しなかった」

「お前ら全員覚えてろよ」

今日は土曜日。

家に帰ると、お母さんが将人様に出す用の紅茶を準備していた。

「ただいま〜」

「あら、お帰りなさい。将人君が来る日なんだから、早くシャワー入りなさい」

「言われなくてもわかってるよ〜」

将人様が来る日は、お母さんも浮かれている。

全く、いい歳なんだから恥ずかしい事しないでよね……。

私は手早くシャワーを浴びて、私服に着替える。

最近は暑くなってきたから、なるべく涼しい服を着たいけれど、清楚キヤラを演じる上であまり肌の露出が多いのはどうかなど思い、薄い生地タイプのロングスカートとかで我慢してる。

リビングに出て一息つけば、もうそろそろ将人様が来る時間だ。

私は自分の部屋に戻って支度をする。

課題はやった。期末の結果もSNSでは伝えたけれど、実際に見てもらおうと思って返って来た答案と全体の結果の記された紙も用意してある。

あとは……。

「これを毎回忘れそうになる。バレたら終わりだからしつかりやら

ない」と

本棚。ここに私のオタクグッズ全般全てを隠してある。

見つかったら終わりの、パンドラの箱。いやパンドラの本棚。意味違うか。まあなんでもいいや。

だからその前に突っ張り棒を使って厚手のカーテンをしてあげる。毎回やるのは面倒だけど、まあこれくらいの労力ならなんてことない。

ピンポーン、と来客を知らせるインターホンが鳴った。

未だにどきつとする。この瞬間は。

一回深呼吸。

今日も完璧に演じなければ。将人様とこれからも一緒にいるために。

今日は期末の復習。

間違えた問題を中心に、将人様が問題を作ってくれていた。相変わらずの完璧っぷり。好き。

「いやでもだいぶ成績上がったね！俺としても嬉しいよ」
「将人さんの教え方が上手だからです。ありがとうございます」
うくん完璧。最近私の清楚キャラも板についてきたように思う。
まさに将人様の隣に立つ女に相応しい……。

「あれ、でもここは間違ってるね、ちよつと見直してみようか」
「……っ」

でもこの、テキストを覗き込まれる時の距離感には慣れない。
というか慣れることあるんか？なんかいい香りするし……シヤン
プーだけでこんな良い香りがするんだらうか？

フェロモンとか出てない？出てるよねきつと。

一瞬で脳内がピンク色に染まる。

「——だから、って……聞いてる？」

「も、もちろん聞いてます！」

本当に危ない。意識を刈り取られそうになるよこれは……。

でも以前は一緒に写真を撮ってくれたりとか、後ろから覆いかぶさ
るようにして教えてくれたこともあったけど……それは無くなった。

将人様の中でどんな変化があったのかはわからないけれど……そ
れだけは少し寂しくも感じる。

……ちよつとマテ茶。

とすれば、あれだけのスキンシップをしてくれる段階で手を出せば
よかったのではないか？

あの時期だったら、ちよつとこちらから偶然、間違つて触つてし
まったとしても、お咎め無しだったのでは……？

もし仮にそうだとしたら、めちやくちや勿体ないことをしていたこ
とになる。

この男らしくていやらしい身体の至る所をぺたぺた触って……そ
の、背中、とか。お尻くらいなら……。

『ちよ……ダメだよ、俺たちは家庭教師と生徒なんだから』

『そんなこと言つて……実は誘つてるんでしよう？将人さん』

『そんなつもりじゃ……あつ……（以下自主規制）』

でゆふふ。おうふ失敬。拙者オタクではござらんので……。

そんな桃色の妄想をしていたからだろうか。

私は将人様の言葉も、行動にも意識が行っていなかった。

ハッキリ言ってしまったえば、油断していたのだ。

「汐里ちゃん？聞いてる??？」

「ええ?!——あつ!」

不思議そうに覗き込まれた瞬間。

私は驚いてバランスを崩してしまう。

ただでさえ椅子半分くらいに座っていたのもあつて、私の身体は将人さんの逆方向へ倒れそうになってしまった。

(ヤバ……!)

とつさに机にしがみつこうとしてももう遅い。

このままじゃ、倒れ——。

「危ない!」

将人さんが、身体を支えてくれようとする。

どこまでもカツコ良い人。

それでも将人さんから手を借りるまでの一瞬の時間、私の身体は体重の預ける先を失って落下する。

左手が、行き場を失って——。

ガシャン！と音が響いた。

「いてて……汐里ちゃん、大丈夫？」

目を開ける。

身体はなんともない。将人さんの左手が、私の背中を支えてくれているから。

椅子も倒れてない。

すんでのところで将人さんが倒れるのを防いでくれたのだろう。

じゃあ、今の音は？

左手に、感触。

何かを握っている。これは――。

「え〜っと何がどうなってたんだ……って」

一瞬で血の気が引いた。

私が握っていたのは、突っ張り棒。

それによつて、落ちるカーテン。

それは、篠宮汐里私を守る、防壁。

遮る物が無くなった本棚と、将人さんが向かい合っている。

(あ、終わった)

この瞬間、私は将人様と一緒にいる権利を失った。

文学少女JKは目覚める

私が被っていた清楚の仮面は、あまりにも簡単に剥がれ落ちた。

「えっと……これどうなってたんだっけ」

見なかったことにしてくれているのか、本当に見ていないのかはわからないが、将人さんが本棚を守っていたカーテンを直そうとしてくれている。

いや……見なかったなんてありえない。私が見たのだ。ぼつちりと本棚の方へ目を向けている将人さんの姿を。

それが恥ずかしいものであったからこそ。

見るに堪えないものであったからこそ。

将人さんは優しいから。何事もなかったかのようにしてくれているんだ。

……なんて情けないんだろう。なんて私は恥ずかしい人間なんだろう。

そう思った瞬間に、心が酷く苦しくなつて。

羞恥心と一緒に、将人さんに見せたくないものまで込み上げてきたから。

「……ッー！」

「汐里ちゃん!？」

私は駆け出していた。

部屋を出て、一目散に階段を降りる。

「汐里?どうしたの?!」

居間から出てきたお母さんの声も聞かないで、たまらず私は玄関から飛び出してしまふ。

そのまま走る。走る。

この感情が冷めるまで。

視界の奥で、夕陽が沈もうとしている。ああ、もうそんな時間だったっけ、なんて思いながら。

あの夕日が沈んだら、私が将人さんの隣にいられる時間も終わるのかな、なんて。

途中で、涙が溢れてきた。

こんな汚い女の涙を、将人さんに見せるわけにはいかないから、仕方ないよね。

ああ、なにもかも、もうおしまい。

物語のヒロインになれるかもしれないと思ったけれど、やっぱり村人Bにこの世界は厳しくて。

ちよつと良いものを買って、ちよつと良い化粧をしたからって、そう簡単にヒロインにはなれないってわかって。

現実に打ちのめされる。

やっぱり現実なんて、ろくなもんじやない。

近くの川原まで走ってきて、疲れて芝生の上に腰を下ろそうとして……。

「ぐえっ」

勢い余って芝の斜面を転がり落ちた。

「……ったあ……はは……なにやってんだ私」

せつかく用意した好きな服は芝まみれ。膝はどこかで擦りむいたのか血が出ていて。

セットした髪ももちろんそれどころじゃなくて。

よかった。周りに人がいなくて。

転がり落ちたままの体勢、乱れた呼吸。今の自分にはとてもお似合いだと思う。

「バカだねえ……元々こんなクソオタクには身に余る人だったって

だけじゃん？」

わかってる。自分がどれだけ背伸びをしたって届かない人であることは。

わかってるはずなのに。

将人さんが本棚を見た時、あれだけ心が苦しんだのはきつと。

やっぱりどこか隣に立てるかもしれないと思っていたからであつて。

ちよつと優しくしてもらつて。

ちよつと写真を撮ってもらつたからつて。

勘違いして。

処女丸出しじゃん。私。

あー、本当に、ダサい。

そんな、タイミングでも。

ヒーローは、構わずやつてくるんだ。

「汐里ちゃん！」

……ああ、やっぱりヒーローはヒーローなんだな。

もっと他にやることがあるはずなのに、私はそんなことを考えた。

心配そうにこちらに走り寄つて来る将人さんの姿は、やっぱり素敵でカッコ良くて。

私には、あまりにも眩しすぎる。

「大丈夫?! って膝擦りむいてるじゃん! えくつとハンカチハンカチ……」

ぱたぱたと手で私の服についた芝を払って、膝にできた傷をハンカチで止血してくれる将人さん。

本当は、止めた方が良さんだろう。ヒロインとして振舞うなら、かけるべき言葉も、行動もあるけど。

私にもう、その権利はないから。

「どうして」

「え?」

「どうして優しくしてくれるんですか?」

私は初めて私のま篠宮汐里ま将人さんにぶつかった。

「みましたよね? 本棚。私、超オタクなんですよ。いやー流石に引きますよね『私に3人の弟ができました』とかね。再婚して連れ子の男の子3人が弟になるんですよ? どんな話だっと思えますよね。あ、いやでもこれが意外と皆良いキャラしてましてね、一番お兄ちゃんの子が下の子がいるからって普段は毅然と振舞ってるんですけど、2人きりになると甘えてくるんですよねこれが可愛くてですねってこんなこと聞いてないですよねあはは」

もう、どうにでもなれと思った。

今後一緒にいながら、「この子は本当はオタクなんだ……」って思われるくらいなら、もういつそ曝け出した方が都合がいい。

「気持ち悪い」と引かれて、家庭教師を辞めてもらった方がまだマシ。

だから、私は全力でアクセルを踏んだ。

それでもやっぱり、心から恋焦がれた人に引かれるのは辛いかもし

れない。

今は早口で喋って地面を見つめていたから将人さんの表情は見られていない。直視するのが怖い。

恐る恐る、将人さんの方を見る。

「え、なにそれ面白い」

「……うえ？」

変な、声が出た。

「え、いや面白いなって。そんな感じになるのかこの世界だと……それでそれで？他の2人はどんなキャラなの？」

「あ、え〜つとそれはですね」

拒絶でも、引いてるわけでもない。かといって、気を遣っている様子ですらない。

シンプルに、興味を持って聞いてくれている顔だ。

私は昔からオタクをやっているから、相手の表情や言葉遣いで、本当に興味を持っているかどうかをある程度察することができる。

このスキルがあるおかげで、私は女友達ともそこそこ仲良くなれたのだから。

そしてそのスキルは今、目の前にいる将人さんは『純粋に興味を持って聞いている』という答えを出している。

え？そんなことある？

放心状態のまま、私は言葉を紡ぐ。

こんな時ですら、好きな作品の説明はすらすらと出てくるのだから本当に笑ってしまうけど。

それから、しばらく話して。

「はははーそんな感じなんだマジで面白いね！今度来るときまでに読んでくるね」

「えっ?! あ、いやマジですか? マジのマジ? あ、それなら貸しますよ本……」

「あ、ホント?! ありがとうー!」
どうしてこんなことになっているのだろうか。

困惑が隠せない。

私が大絶賛困惑中に、将人さんが立って、一つ伸びをした。

「じゃあそろそろ帰ろうか!」

「あ、えっと、ちょっとマテ茶。じゃなかった、待ってもらっていいです?」

きよとんと、こちらを向くカツコ良い男の人。

顔を見るたびに、これが現実なのかどうかわからなくなる。

わからない。

この人が、本当にわからない。

「あの、私、オタクだったんですよ。けっこう重度の」

「え? うん」

「いや、うんじゃなくてですね……ほら、キモいとか! あるじゃないですか! そういうの!」

「ええ……」

なんでこつちが何言ってるのみたいな顔されなきゃいけないんですかねえ?!

こつちがどんな思いで……!」

「なんだろう。汐里ちゃんがオタクなのはわかったし、それについて汐里ちゃんがコンプレックスに感じてることもなんとなくわかったよ」

「いやそりや全オタクはコンプレックスに感じてますよ……!」
「うーん、もしかしたら俺の反応はおかしくて、間違ってるのかもしれない。けどさ」

私の髪にまだ残っていた芝を、将人さんが優しくとつてくれる。
心臓が、ドクンと大きく鳴った。

やっぱり、この人は――。

「篠宮汐里ちゃんの素敵などこもう他にたくさん知ってるのに、それだけで嫌いになったり、引いたりするわけないじゃん」

――平気でこんなことを言ってくるんだ。

もう、この人になら、私の全てを知られたって良い。
そんな風に、思ってしまう。

勢いよく、立ち上がった。

「……っ！ああもう！もう知りませんからね！もう私猫被りませんからね!!責任取ってくださいよ!!ありのままの私で、引かないでくださいよ!!!」

「はははっ！良かった、元気出てくれて。前から思ってたんだ。汐里ちゃんと素でもっと話したいなって」

「いつくだけでも話してあげますよ!!知らなきやよかったっていうくらいのエグいゲームの話いくらでもしてやりますからね!!将人さんの綺麗な顔が羞恥に歪むのを想像するだけで滾りますよええ!!」

「えー？綺麗な顔だなんて嬉しいなあ。ありがとうね」
「耳の構造どうなってるんだおんどれは!!!」

楽しい……楽しい！

もう、取り繕わなくていいんだ。

私は私のままで、将人さんと一緒にいられる。
それだけで嬉しくて。

心が晴れ渡っていくような気がして。

「痛っ!!」

膝の傷のことを、すっかり忘れていた。

「あ、膝まだ流石に痛むよね……」

「あ、平気ですこんなつばつけときゃ治るんで、へへ……」

「その三下ムーブは一体なんなの……」

私の感情はさながらジェットコースターだった。

もう自分で何言っているのか、よくわかってない。

出てきた言葉を脳を介さず話している気すらしてくる。

少しだけ考え事をしていた将人さんが、「ん〜……まあ仕方ないよね」と呟いたかと思うと。

私の前までやってきて、背を向けてしゃがみこんだ。

え？

「はい、乗って。ちよつと、汗臭いかもだけど」

「え？いや全然フローラルですけど？世の中の柔軟剤が泣いて謝るレベルですけど……？」

「それはそれで怖いよ……」

こ、これは……おんぶプレイ?!

いきなりハードすぎるぜ……じゅるり。

ただし本当に信頼してくれていることも伝わってくるので、変なことではない。

恐る恐る、私は将人さんの背中に乗った。

手を、首元に回す。

そしてゆつくりと……浮遊感。

将人さんの大きな背中。

わずかに香る、将人さんの香り。

感じる、体温。

全てがどうしようもなく、愛おしい。

恥ずかしいけど、嬉しくて。

どうしよう、興奮してたらキモいし、ごまかさないと。

「宇宙世紀10年の歴史が今——」

「……俺ガンダムだったっけ？ほんで短いな歴史」

——こんなくだらないノリに付き合ってくれるこの人は、本当に最高の人で。

軽く、後ろを振り向く。

遠くに見えていた夕陽はもう、既に沈んでいた。

綺麗に終わったら、今日は素敵な1日でした。やったね、で終われたのだけど。

私の場合は、そうもいかないらしい。

「それで三秋って奴がですねー」

「そりゃひどいね！」

「ほんとですよ本当にゴミクスで——」

背負ってもらっている帰り道。

それはとても幸せな時間で。

だからこそ。

それは本当にふとした瞬間、という奴だった。

街灯も灯り始めたこの時間帯。

背負われた私は、将人さんの背中を堪能するべく、色んな箇所を穴が開くほど見ていた時。

(え?)

それは、首元にあつた。

赤い、橢円形の跡。

いくら処女とはいえ、私でもわかる。これはキスマークだ。

「——っ?!」

「……う・どうかした? 汐里ちゃん」

声にならない声が出た。

私が息を呑んだのがわかったのか、将人さんが顔だけちらりとこちらを向く。

あどけない顔。

端正で整った……極めて純粋なその表情。

けれどその身体には、確かに刻み込まれている。

誰かにつけられた、「跡」が。

将人さんはカッコ良い。性格も完璧。

周りに女の1人や2人いてもおかしくない。そう思っただけ
れど。

こうして形として見てしまうと——。

興奮する。

え？なんで？

普通絶望とか、嫉妬とか、そっち方面の感情が沸いておかしくないの。

私はひどく、興奮していた。

だって、私じゃない誰かが、将人さんを組み敷いて。

この純粹で美しい青年をぐちゃぐちゃにして、跡までつけたのだとしたら。

その情事を思い浮かべるだけで、私の身体はこんなにも――。

「あっ……」

「？汐里ちゃん、どうしたん？」

「ずみません……鼻血が……」

「ええ?!ちよつと待って、ティッシュ出すから……」

ああ、なんて業が深い。

でも、もつと見せて欲しい。
可能性を。

女の劣情を一気に受け止める将人さんの姿を、見たい。

もとより、こんな素敵な人を独り占めできるなんて思っていないから。

だから、分けて欲しい。

ポケットからティッシュを取り出そうとわたわたしている将人さんの首元に、しっかりと掴まった。

こんな、女の汚い感情からもつとも遠い場所にいるはずの人が、受け止めている。

現在進行形で、きつと。

その証が、これ。

凝視する。つけられた「跡」の部分を。

ああ、身体がどうしようもないほどに熱い。

このためならみつともなく土下座だってできる。

そうするだけで、できるなら。やらせてほしい。
いつか私も。

このカツコ良くて、物語のヒーローみたいな将人さんを。

ぐちやぐちやにしてあげたい。

番外編 それぞれの日常

く望月星良とディナーく

「——っっていうことがあつてですね……」

「あらそうだったのね。残念。まあでも軽い運動くらいできるなら、今度はどこかで運動とかしてみたいわね」

今日は星良さんと同伴の日。

前回と同じように今日は駅ビルの最上階にあるレストランで夕飯を食べてから、お店に向かう手筈になっていた。

前回連れて行ってもらったお店もめちやくちや美味しかったけれど、今回のこのお店もとても美味しい。

……美味しいしか言えないの、マジでガキ舌ですみませんって感じや……。

前に嫌いな食べ物はほとんどありませんって言ったからか、前回のイタリアンとは違って、今日は和食。

海鮮系の食べ物に舌鼓を打った後、今はお茶を飲みながら星良さんと雑談中だ。

「……あ、ごめんなさい、ちよつとお手洗い行つてきていいですか？」

「ええ、もちろん。もうこんな時間だし、将人がお手洗いから帰ってきたら、お店に向かいましょうか」

「はい！了解です！」

柔らかな笑みを浮かべる星良さん。

星良さんは本当に雰囲気落ち着いたなあと思う。

良い意味で、割り切つてくれた感じなのかもしれない。

たまにエグい下ネタで笑わせに来るのはやめてほしいけど……。

お手洗いを済ませて、手を洗う。

ハンカチを取り出し、手を拭いた後、鏡の前でみだしなみチェック。

おん、問題ないね。

ゆつくりと席の方に戻ろうとすると。

「あれ?」

「はい、行くわよ将人。これバッグ」

「あ、ありがとうございます」

入り口付近にあるお手洗いの前で待っていた星良さんが、俺のクラッチバッグを持って立っていた。

それを俺が受け取ると、星良さんがお店の外へ向かって歩いていく。

え、あのーお客様お会計が……。

「星良さん、お会計は……?」

「?もう済ませたわよ」

「ええ?!悪いですよいくらでした……?」

「はあ……あのねえ、将人」

星良さんが振り返って右手の人差し指を俺の目の前に立てた。

「いい?私という時は、将人に1銭たりとも払わせるつもりはないの。なんならお財布持ってこなくてもいいわよ?」

「いやでもそれは……」

「でももなにもないの。私は将人にお金を払わせない。そう決めたの。だから、ね?」

そう言われてしまったのは、俺も引き下がるしかない。

これも文化の違いと受け入れるしかないのかなあ……。

俺はクラッチバッグから取り出した財布をすごくすごく鞆の中にもどした。

「でもね」

「?」

星良さんが、俺の手を取った。

さらさらとした肌の感触に、思わずドキリとしてしまう。

「そうやって『払ってもらおうのが当たり前』って少しも思っていない将人の姿勢が……私はとつても好きよ」

「……ありがとうございます」

「あら、照れてる。可愛い」

……最近の星良さんに、俺はどうにも押され気味だ。

く五十嵐恋海と戸ノ崎みずほの大学生活く

大学の授業は、基本恋海とみずほのどちらかと同じ授業を取っていることがほとんど。

だからあまり、他の同級生とコミュニケーションをとる機会というのは無かったのだが。

「将人くんって普段なにしてるのく?」

「将人くん彼女いる?!」

「ウチのサークル来ない?」

たまに1人になっているとこういう質問攻めを受けたりする。

どうしよう。グループ活動ってなつても基本どちらかがいてくれたからあまり困らなかつたけど……。

まあでもこれくらい1人で対応できなきゃダメよな。

俺は覚悟を決めてこの子達と話すことに決めた。

「バイトしかしてないよく彼女もないしね。サークルはちよつと

バイトの方が忙しいから無理かも……」

同級生の女子3人は、俺が話している間も目がキラキラと光っている。

正直なんか……怖い。

「彼女いないんだ！めっちゃモテそうなのにね〜！彼女作る気無いの？」

「サークルなんだったら全然いつでも休んでもらっていいからさ！合宿とか楽しいよ！」

おお。ボディタッチ激しすぎないか？距離近いよ〜。そこまでがつついてくると怖いよやっぱり。

しかもサークル誘う最初の提案が合宿って。怖すぎるっぴ。

ちよつと対応をどうしようか悩んでいると。

3人の後ろから走って来る、見知った顔。

「将人あたーっくー！」

「ぐえっ」

みずほが小走りでこっちへ向かってきたかと思うと、俺の腰に飛びついてきた。

「お待たせ〜！ってあれ？なんか話してた？ごめんね？」

「あ、いやえつと……戸ノ崎さんと将人くんって……」

いきなりのみずほの登場に驚いた様子の子3人。

「いやーバレちゃいましたか！バレちゃったなら仕方ねえ！そう、

私と将人は盃を交わした仲……」

「盃……っ？」

俺の腰にくっついたまま、みずほがしたり顔で説明を始める。

いやペットボトルで乾杯しただけでしょそれ……。

「変なこと言わないの。ごめんね、みずほが急に」

「恋海〜！遅いよ〜！」

いつから聞いていたのか、恋海も後ろからやってくる。

そのまま俺の隣……みずほがくっついていない側に立った。

「申し訳ないんだけど、将人はバイトで忙しくてさ。サークルに入る気ないんだって。私も誘ったんだけどね〜」

「は、はあ……」

「ま、そういうわけだからさ。諦めて？じゃあね」

そう言い放った恋海は、俺の腕を取って、歩き出す。

同級生の女の子3人は、終始きよんとしていた。

ずんずんと歩いていく恋海に引きずられながら、俺はちらつと後ろを振り返る。

結構強めに言っちゃってたけど、大丈夫だろうか。

「い、いいの？」

「いいのいいの、別に名前だけ知っているような仲だし。あの子達、極論ちよつとカッコ良い男なら誰でもいいんだよ」

「あの子達結構強引なんだよね〜！テニスサークルって言いながらテニス全くしてないって有名だよ！」

「そ、そうなんだ……」

みずほも指でバツテンを作っている。

関わっちゃいけないということなんだろうか。

「みずほなんで私がいっつも嫌われ役なのよ……」

「ごめんごめんいや〜どうにも強く言うのは私にはできなくてですね……」

「もー私がいけないときどうするの？」

「そりゃあ将人を連れて緊急脱出！しますよ！」

呆れ顔の恋海と、にへへと笑うみずほ。

なんだかんだでこの2人には、助けられてばかりだ。

一つ気になることがあるとすれば……。

この2人が握る俺の両手に込められた力が、以前より少し強くなつた気がするの、気のせいなんだろうか。

く篠宮汐里と読書感想く

汐里ちゃんに借りた本を、一週間かけて読んでから返した。

「いや〜面白かったよ。なんか不思議な気分だったわ」

「いやこれを貸して感想を聞いてる私が一番不思議で複雑な気分なんです。それは……」

汐里ちゃんは、あれからだいぶ雰囲気が変わった。

というか、これが本来の汐里ちゃんだろう。服装の感じもいかにもお嬢様っぽかったものから、いい意味で気取らない、可愛らしいもの変わった。

「それで、誰が一番好きですか？やっぱ末っ子のかずくんですよね？」

「あ〜……それでいうと次男のりかくんが俺は面白くて好きだったかなあ」

「それは病院行った方がいいですね」

「辛辣すぎない?!」

感情の抜け落ちた顔でそう告げる汐里ちゃんは、ある意味表情豊かになった。

「いやないでしょ。せめて長男の英くんでしょ。次男で……ないわあ……」

これだからニワカは……と肩をすくめる汐里ちゃん。ちよつと憎らしいくらいの今の温度感が、俺にはちょうど良かった。

これくらいの空気感で話してくれるの、汐里ちゃんだけなんだよね。

「じゃあ次はなんか他の読みますか？」

「お、なんかおススメある？」

「そうですねえ……」

汐里ちゃんが本棚を見る。

かつて突っ張り棒とカーテンで守られていた本棚は、今はあけっぴ

ろげになっいて。

横にもう用無しになったカーテンが畳んで置かれている。

「これとかどうですか？」

汐里ちゃんが、1冊の本を取り出した。

「どれどれ……」

俺が受け取った本の表紙を見る。「お願い先生く学校じゃ教えてくれないこと、教えてください」『禁断の家庭教師のお兄さんとの恋。18歳以下閲覧禁止……』

……うん。

「俺これどういう気持ちで読めばいいの？」

「是非自分に当てはめてもろて」

「絶対嫌だわ」

く前田由佳とバスケットコート探しく

由佳と一緒にバスケットをしていたコートが取り壊されてしまうということを知ってから。

俺と由佳は新しい練習場所を見つけるべく、探索に出ている。

と言っても、あてもなく探したって見つかるものではないので、事前にインターネットで調べてから、下見に行く感じ。

「うーん、ここはかなり人気っぽいですね……」

「そうだな……休日とはいえ待ちが何組もいるみたいだしね……」
それでもなかなか簡単には見つからない。ネットで最初に出てくるような人気スポットは、いつもバスケットができるとは限らない。

程よい穴場があれば一番良いのだが……そんなに都合よくは見つからなかった。

「一応この近くにもう一カ所あるみたいだから、歩いていってみようか?」

「はいっ!」

由佳を連れて、再び歩き出す。

俺はスマートフォンを取り出して、次の場所への道を調べていた。

「えーっと……ここを真つすぐ行って……」

大通りの歩道を、由佳と2人で歩く。
すると。

「はっ……!」

「……?」

何かに気付いた由佳が、素早く俺の隣から逆側の隣へと回り込んだ。
だ。

「……どうしたの?」

「いえ!なんでもないです!」

不思議に思ったが、由佳が笑顔で楽しそうなので何も言わないでおく。

「ここを左だね」

「へえーこっちの方は、あんまり行ったことないです」

「俺もあんまり無いなあ」

信号を渡って、再び歩道を歩く。
すると再び。

「はっ!」

またもや何かに気付いた由佳が、回り込んで俺の逆側の隣にぴった

りとくつついた。

……えーつと？

「スクリーンアウト的な……？」

「ち、違いますー！」

バスケの練習でもしてるのかと思ったが、どうやら違うようで。

ではなんのために……？

「テレビで見ました。良い女は、男の人を車道側に立たせないそうです！お、お兄さんを車道側に立たせるのは、危ないので！」

……ちよつとぎこちない話し方。

けれど、こちらを気遣ってくれているのは、十二分に伝わってくる。

恐る恐る、由佳が俺の顔を覗き込んできた。

「ど、どうですか……？」

「ふふふ……ありがとね」

そう言うと、花が咲いたようにぱあつと由佳が笑顔になった。

俺はやっぱりこの子の笑顔には、敵わないなあと思うのだった。

バスケット部JCはお盛ん

夏といえば。

そう聞かれて出る答えは、割と人によって違うと思う。

例えば海や川といった場所だったり、例えばスイカやアイスなどの食べ物であったり。

確かになにかと魅力的な事柄が多いこの季節だが、俺は中でも「夏祭り」が好きだった。

親もおらず、祭りなんて知らなかった俺が、たまたま近所でやった祭りに連れて行ってもらった時。

暗いはずの時間なのに屋台や提灯の明かりで辺り一帯が照らされていて。

誰もが笑って、楽しそうに「祭り」という空気に酔っているような、そんな空間を目の当たりにして。

子供ながらにとても胸が躍ったのを覚えている。

以来、男のくせに浴衣まで用意して当時仲の良かった何人かでお祭りに行くなんてことがそこそこあった。

さて、なんでそんなことを思い出していたのかというところ。

その俺の好きな「夏祭り」に由佳から誘われたからだ。

『今度大きい夏の夏祭りがあるんですけど……』

そう言ってきた由佳の誘いを断れるほど、俺は大人じゃなくて。

ちなみにその後別で汐里ちゃんから「祭り行かないっすか!」って同じ夏祭りに誘われたんだけど先客いるって言ったら泣いていた。泣いてたのになんか喜んでた。こわえ。

待ち合わせ場所である駅前では俺はぼけっとスマホをいじりながら、由佳を待つ。

先ほど連絡があったことだし、そろそろ来るんじゃないかな。

少し、胸に手を当ててみた。

「……なんで緊張してんだ……」

我ながら、呆れてしまう。

相手はまだ中学一年生。自分はすでに大学生という年齢であることから考えても、世間一般で考えれば余裕で犯罪。

きっとこんなことが恋海やみずほに知られたら、俺はロリコンの誹りを受けることはまず間違いないだろう。

俺だって、ちよつと前まで全然意識なんてしてなかった。

俺にとって由佳は、可愛い妹みたいなもので。思い出すのは、しよつちゆう勝負をしかけてきては、俺に負けて悔しそうに練習に励む由佳の姿。

そんな彼女を俺はバスケプレイヤーとしてとてもカッコ良いと思ってたし、同時に微笑ましく思っていた。

きつともつと上手になって、俺なんかよりもすごいプレイヤーになるんだろうなあとか。

本当に、その程度だったのだ。

それが、あの日。

全てがひっくり返った。

『妹じゃ、嫌です』

そう言った彼女は、今にも泣きそうな顔をしていて。

俺はなされるがままになるしかなかった。

そして――。

『……もつとしてもいいですか?』

「……ッー!」

思い出すだけで、顔が熱くなる。

ダメだダメだ! あんなのいけません! 不純です!!

……ってなんで俺が女みたいになってるんだ……いや、でも正しいのか？ある意味……。

ぱたぱたと手で顔を扇ぐ。

まったく……どうしたもんかね。

想いは嬉しい。そりやそうだろう。純粋な好意で、しかも自分が好意的な印象を持っている相手からで、嬉しくないわけがない。

だけど……年齢の壁というものがやっぱりある。

由佳はもつと多くの人とこれから会うはずで、俺とのこの時間なんて、小さい時の思い出くらいでちようど良いはずなんだ。

「ねえねえ、そこのお兄さん」

「……んあ？」

そんなことを考えていると、いかにもギャルっぽい女の子2人組に声をかけられた。

すごいな。今時のギャルは浴衣も着こなすのか。

「暇だったら、ウチらと遊ばない？お金出すよ」

「ってかもしかしてナンパ待ちだったりする？」

ぎゃ、逆ナン！

あ、いやこれはむしろ正ナンパなのか？この世界だと。

「あ、えっと……ごめん。俺待ち合わせてる人いるから」

「え、男の子？だったらその人も一緒に遊ぼうよ」

……意外としぶといな。前の世界で女の子達はこんな感じのナンパを受けていたのか。

大変やな。(他人事感)

いい加減諦めて欲しいので、俺もちよつと強めに断ろうかなと思っただその瞬間。

「あの一！」

それは、一際大きい声だった。
ビク、と一瞬固まった女の子2人組が、後ろを振り返る。

そこには、青色が鮮やかな浴衣を身にまとった、由佳の姿。

「その人は私のこ……こ……に、兄さんなので、離れてもらっていいですか」

「あ、えつと妹ちゃん？」

「あ、妹待ってたんだお兄さんやだ妹想い〜」

こ……からやたら間が長かった気がするが、大丈夫だろうか。

「あ、じゃあ妹ちゃんさ、お兄さんの連絡先だけ教えてくんない？また今度でいいからさ〜」

「うんうん、今日はお兄さんとデートなんだもんね？悪かったからさ、お姉さんたちは出直すから〜」

あ、完全に本当の妹だと思われてるわ。

素早く俺の前に回り込んだ由佳が、今度はプルプル震えている。

「えつと……由佳？」

俺が小声で由佳に声をかけると、意を決したように由佳は顔を上げて大きく息を吸い込んだ。

「やっぱり兄さんは私の恋人なので諦めて帰ってください!!!」

「やっぱりってなに?!」

結局、ナンパしてきたギャルたちは諦めて帰ってくれた。
なんか最後由佳に頑張ったとか言って由佳が赤くなってたが一体何を頑張らせたんだろうか。

今は2人で祭り会場への道を歩いている。

「えつと……すみません、急に大きな声出して……」

「んーん。むしろ助かったよ。どうやって帰ってもらうか悩んでたからさ」

横を歩く由佳を見る。

淡い青を基調にして、控えめにあしらった花柄がしおらしい。えんじ色の帯も良い差し色となって全体を映えさせている。

いつもヘアピンをしている由佳だが、今日は簪。大人びた印象をもたせるのに十分な役割を果たしている。

「えつと……どう、ですかね」

そんな俺の視線に気づいたのか、由佳がちよっと両手を伸ばして全体の姿を見せてくれた。

うん……。これは破壊力抜群だ。

「めっちゃ似合ってる。いつもより大人びた印象で、綺麗だよ」

「あ、ありがとうございます……」

な、なんでこんな気恥ずかしいんだ!!

いや、理由なんてわかりきっているのだけど。

「将人さんも……その、カツコ良いです。浴衣、すごく似合ってます」

「……へへ、ありがとうね」

へへってなんだへへって。キモすぎだろ。

横にびったりとくっついている由佳は、顔が赤い。きつと俺も若干赤いのだと思う。かおあついし。

けど……けどさあく！中学生だよ?!しかも1年生!こんな可愛い

のは犯罪だろと思うけどさ、実際に付き合うとかそういうのは流石に……ヤバイだろ!!ちよつと前まで小学生だった子なんだよ?!

「あ、あの……将人さん」

「ん?どした?」

気付けば、お祭りの会場である神社の入り口まで来ていた。

屋台と提灯の明かりで神社の方向は眩しいほどに光っている。

周りには家族連れやらカップルやら子供たちやらで溢れているし、いよいよお祭りつて感じだ。

そんな中で、由佳が上目遣いに見つめてくる。

「……手、繋いでもいいですか?」

「……そう、だね。繋ごうか」

こんなの断れる人類いるなら呼んでみて欲しい。
俺がぶん殴る。

「うわ凄い!たくさん取れました!」

「意外と俺こういうのも得意なんだよね」

それからしばらく、俺と由佳は祭りを楽しんだ。

屋台の食べ物を食べたり、射的を試してみたり。

今はスーパーボールを掬っている。

遊び自体がそこまで面白いのかつていわれると微妙だけど、この空気の中でやる特別感が、俺は好きだった。

最初こそ気恥ずかしかったけど、由佳と祭りを回るのが楽しくて、恥ずかしさも忘れていたように思う。

由佳が笑っているのを見たら、なんか今あんまり考えすぎるよりも、この瞬間を一緒に楽しんだ方が良くかなと思ってしまった。

問題の先延ばしに過ぎないのは、わかっているけどさ。

「えっと、お兄さんたちすまないんだけど、持っていけるのは10個までだね……」

「あ、そうなんですネ」

「かわりといっちゃなんだが、この中から景品持ってっていいからそう言っ指さされた先は、射的の外れ景品が並んでいる。

なんかこれといって欲しいものが見当たらない。

「……絶妙なラインナップだな……」

「あ、じゃあ私選んでもいいですか？」

「お、なんか欲しいのがある？」

「はい。あのお面をください」

由佳が選んだのは、可愛い狐のお面。

上機嫌な由佳と共に、スーパーボール掬いの屋台を後にした。

「由佳狐好きなの？」

「そうではありませんが……はい。将人さん」

「え、俺がつけんの?!」

笑顔で狐のお面を渡してくる由佳。

その笑顔に負けて、仕方なく俺は狐のお面をつけた。

ってこれ……。

「由佳これ前が見えない!」

「大丈夫です! 私が手握ってるので!」

「そういう問題?!」

そんなこんなでわちやわちやしていると、神社のあちこちに設置されたスピーカーから、アナウンスの音が響いてきた。

『間もなく、お祭りのラストを飾る打ち上げ花火を行います』

お、もうそんな時間か。

「由佳、どっか移動して花火見ようか」

「そうですね」

とはいえこのままではやっぱり前が見えない。

狐のお面を外そう。

と、思ったのだが。

「……ちよつと待って由佳。このお面外れないんだけど」

「え?!」

驚きつつも、笑っている由佳。

いや俺も驚いてるよ?! なんか結構しつかり頭にフィットしちゃつて外れないんだけど!

「私が外します。将人さんしゃがんでもらえますか?」

「おお、悪い……」

大通りでは邪魔になるので横道に反れて、俺がしゃがみこめば、由佳が俺の頭の後ろに手を回して、がっちり頭をホールドしていた紐を解いてくれようとする。

……正面からやつてもらっているからか、由佳との距離が近くて視界にはなにも映っていないはずなのに、少し緊張してしまう。

あの時と、ちよつと似ているからか。

しばらくして、お面が外れる。

俺は由佳に感謝を伝えようとして――。

また、目の前に由佳の顔があった。

覚えのある光景。

覚えのある——感触。

「……っ」

ゆつくりと、離れる。

思わず俺は、後ろ向きに雑木林へと倒れ込んでしまった。

「ちよ、由佳お前……」

「ふふふ……油断は禁物ですよ将人さん……って」

由佳が俺の顔を悪戯っぽい顔で覗き込んで来る……と思いきや、由佳の動きがピタリと止まる。

視線は、俺の身体に注がれていた。

え？

全然気付かなかったが、浴衣が地面から生えた小さめな木の枝にひっかかって、左肩がはだけている。

中には当然何も着ていない。

俺は、それがどれだけヤバイことなのか全然わかっていなかった。

まずい、と思つた時にはもう遅い。

目が完全にヤバイことになっている由佳が、俺に思い切りのしかかつてきた。

そのまま、雑木林の奥の方にずるずると引つ張られていく。

祭りを楽しんでいる人たちは神社の境内の方で行われる花火に向かっていて、俺たちのいる脇道の雑木林なんかには誰も意識は割いてない。

喧噪が遠く、ここには、俺と由佳だけ。

少なくとも俺はそう思っていた。

「ちよ、由佳……！ダメだつて……！」

「将人さんが悪いんですよ。こんなえつちな姿を見せて私を挑発するから……！」

身体の隅から隅まで。

由佳の華奢な手と、口で蹂躪される。

もう何度口づけされたかもわからない。

花火の音が遠くに聞こえる。

俺の視界に映るのは、顔を赤らめて発情しきつた由佳の顔と、夏の

夜空だけだった。

文学少女JKは覗き見る

世間は夏休みと呼ばれる時期に入った。

高校生という身分にある私もその例に漏れず、現在進行形で夏休みを謳歌させてもらっている。

今日は友人である三秋と一緒にファストフード店でランチ中。

このクソ暑い中「部活終わったから来いよ」とかいう死ぬほど自分勝手な理由で呼び出された私は然るべき手段を持って訴えても誰も文句言わないと思う。

事件は、そんな時に起こった。

パタリ、と私が落としたスマホが倒れる音が響く。

そ、そんなはずは……と私が絶望の表情で落としたスマホを、対面に座っていた三秋が拾い上げる。

そして奴は容赦なく私のスマホの画面を開いた。

「断られてて草ア!!そりや女の1人や2人いるだろ！」

「ええ……いるでしょうねそれは……」

「なに知ってて聞いたの?ウケる。あいつらに共有しとこ」

面白がって私のスマホと悲嘆に暮れる私を撮影する三秋。相も変わらずド畜生だなコイツ。

『汐里、家庭教師のお兄さんを夏祭りに誘うも撃沈で草www
w』と……」

「お前らに人の心とかないんか?」

ケラケラと笑う三秋にスマホを返されて、SNSの画面を開く。

今しがた三秋が共有した写真に、さっそくコメントが届いていた。

まな『当然の結果で草』

初美『むしろ何故通ると思ったのか』

ああ、こいつらに人の心なんか無かったわ。
ちよつとでも期待した私がバカだったわ。

……まあでも正直、この結果は割と納得でもある。

あれから、私と将人さんの関係は変わった。

私はもう清楚を無理して装う必要がなくなり、ほぼ素の状態で話している。

たまにかなり遠慮なく話してしまっている自覚があるのだが、何故だか将人さんはそれが嬉しいみたいで。

それでもってそれが嬉しい私はそれを続けて……というループ。

私は楽しいから良いんだけど……将人さんは本当にそれでいいんだらうか。

そしてなにより……あの“跡”の事。

将人さんの近くには、女がいる。間違いなく。

彼女はいないと言っていたから……いわゆる身体だけの関係というやつなんだらうか。

ゴクリ、と生唾を飲み込んだ。

あのお、拙者も入れていただけなくてござるかねえ……！

羨ましすぎるんだが??セフレ?大いに結構。肉欲に勝る物無し。

まずは清く正しいお付き合いからなんていう精神は5才の時に消し飛んだわ。

私もその先発ローテーション（意味深）の中に入れてもらえませんかねえ……。

「おい、まなから連絡きてんぞ?」

「え?」

ボケつとそんなことを考えながらバニラシェイクのストローを啜えていると三秋にデコピンされた。

スマホを開く。

まな『んじや汐里私と祭り行かん？私もアプリで知り合った男にフられて暇なんだよね』

初美『お前も懲りないなあ……あ、私も暇だから行くわ。ワンチャン男釣れるかもしれんしな』

「あ、ちなみに私は彼氏と行くから。すまんな」

「あ、聞いてないっス」

対面のリア充は無視。リア充に構って良かった試しがないって古事記にもそう書いてある。

で、問題の夏祭りの誘いに関してだが。

なーにが悲しくて女3人で祭りなんぞ行かなくちやならんのだ。お断りじやお断り。

汐里『無理でえゝす！そんな傷のなめ合いするくらいなら家でゲムします！』

まな『じゃあ18時〇〇駅集合でよろ。ナンパすつから浴衣な』

初美『ういゝ』

……もしかして私だけこいつらと使ってる言語違ったりする？

夏祭り当日。

「っしやー男漁るべ」

「そんな上手く行くかね……」

結局……来てしまった。2人が浴衣なのに私が浴衣じゃないのも変だなと思って浴衣まで着て……。

「いつまで落ち込んでんだ汐里。早く行くぞ」

「え……マジでナンパするの？」

「あつたりまえじゃん！なんのためにここまで来たと思ってるのよ……」

そう言っただけで元気よく歩き出すまな。

まなは私達の中で一番今時の女子らしい。ほんと陽キャ女子って感じ。何故私なんかと仲良くなれたのか甚だ不思議でならない。

「ま、私もあんま乗り気じゃないんだけどね……」

そう言っただけで続くのは初美。こつちもこつちでベリシヨでボーイッシュな健康女子。見るからにスクールカースト高そう。

ハイスペックに囲まれるこつちの身にもなつて欲しい。

はっ……こいつら最初から私を当て馬にするつもりで……なんてゴミクズな奴らなんだ……やっぱ友達やめるか……。

とか全然思っただけでいいことを考えつつ私も2人に続いた。

「全然捕まんね〜!!!」

「そらそーでしようよ」

お祭りが始まってから1時間ほど。

結局私達はろくに男の人に巡り会えていなかった。

そもそも人数が少ないのもそうだし、だいたいの男はやはり女性つきで来ている。

男性のみで来ていることが、極端に少ない。

「お前らもうちよい気合入れて探せよ〜」

「え〜そんなこと言われても〜つてかお腹すいた〜」

会場に設置されているベンチに、初美が腰掛ける。

言われてみれば、私達はまだなにも食べていないし屋台にそもそも行っていない。

「たしかしたかし。なんか食べない?」

「しゃーないか。諦めて普通になんか食べるか」

まなも流星にこの人数も増えてきた状況では厳しいと思っただらしい。

もう皆お祭り楽しんでる段階だしね〜……。

「よし、そうと決まればどっか行こうよ。焼きそば? たこ焼き?」

「どっちも!」

「デブじゃん」

「黙れ」

憎まれ口を叩きながら、私達は屋台の方向へと向かっていく。

「焼きそばうめえ〜」

「普段やきそばなんて食べようと思わないのになんで祭りの時の焼きそばって美味しいんだろうね」

私も自分で買ってきた焼きそばを口に運ぶ。

うん。美味しい。紅しようがあるのと味が締まって良いよねえ……。

「たこ焼きも開けようぜ〜」

たこ焼きが入っているプラスチックの容器を、初美が開ける。

途端にソースの香りが、ふわっと辺りに広がった。

う〜ん、夏祭りって感じ。

夏の夜ならではの暑いのに涼しいような気温も。

いつもなら煩いだけの虫の合唱も。

この時だけは何故か心地良い。

珍しく私がそんな感傷に浸っていた、そんな時だった。

「おいおい中学生っぽい子ですら年上の男連れてんぞ。今の子は進んでんなあ……」

「流石に兄妹じゃない？ いやまあだとしてもあんなお兄ちゃん欲しいわあ……」

たこ焼きを頬張る2人の視線の先。

私もそんな前世で徳を積みまくったとしか思えないような子の姿を見ようと、そちらに目をやった瞬間。

「……ッー」

私は、息を呑んだ。

将人さんだった。見間違えるはずもない。

ああ……浴衣姿もよく似合っている。流石の王子様力と言うべきか……。

そして問題はそこではない。

一緒に並んで歩いている女の子……。どう見ても、高校生以上には見えない。

中学2、3年といったところだろう。

妹？いや、違う。将人さんは兄弟はいないと言っていた。ではいったい……？

仲良く並んで歩く2人が、人混みに紛れて見えなくなる。自然に、私の足が動いていた。

「ちよ、汐里?!どこ行くの?!」

「ごめん後で連絡する!!」

私は走り出す。浴衣が足にまとわりついて煩わしい。

確かめなければならない。

あの子が、将人さんに「跡」をつけた犯人なのか。

確率は低いと思う。流石に年齢が低すぎる。

さしずめ、面倒を見てる親戚の子とか、そんなんじゃないだろうか。

それでも、可能性はある。

もし、もし万が一あの子がそうなんだとしたら。

私にも、チャンスがあるということじゃないだろうか？

幸い、2人の姿はすぐに見つけることができた。

身長差もある2人は結構目立っていたし、そもそも将人さんの雰囲気
私を私が逃すはずがない。

「いた……」

楽しそうに話している。

少女……そうだな、今はロリっ子と名付けるか。ロリっ子が狐のお
面を将人さんに渡している。

不思議と……私の胸の内に嫉妬のような感情は湧いてこなかった。
それは、それこそ兄妹のようにしかみえないからなのか、それとも
もつと別のものに由来するのかわからない。

『間もなく、お祭りのラストを飾る打ち上げ花火を行います』

お祭りの会場に設置されたスピーカーから、アナウンスが響いた。
もう、そんな時間か。

周りの人間は皆、花火が見やすい境内の方へと移動している。
まずい。人混みに紛れていたからバレていなかったが、周りに人が
いなくなったら別だ。

将人さんに気付かれてしまうかもしれない。

私はとつさに、裏道の雑木林の中へと身を隠した。

よし。ここからでも、2人の姿はしっかりと確認することができ
る。

なにやら、将人さんがかかんでいる。

お面を、外しているのかな……？随分と、距離が近いような――。

そして、次の瞬間。

ロリっ子が、将人さんにキスをした。

「っ……っ！」

思わず、木の影に身を隠して口を両手で抑えた。声が出てしまいうだったから。

嘘、でしょ？っ、付き合ってるの？あのロリっ子と……え、でも恋人はいないって……。

おそろおそろ、もう一度2人の方を見る。

その時見た光景は、もっと刺激的なものだった。

将人さんを抱きかかえたロリっ子が、将人さんを雑木林の中へと運んだかと思えば。

思い切りその浴衣を脱がせたのだ。

「っ……っ」

私は思わずしゃがみ込んだ。

もう彼らとの距離は近い。少しでも物音をたてれば、バレてしまうかもしれない。

その場に座りこんで、首だけを動かして様子を伺う。

「ちよ、由佳……！ダメだって……！」

「将人さんが悪いんですよ。こんなえつちな姿を見せて私を挑発するから……!」

……心臓が破裂しそうだった。

私のすぐ後ろで、あの愛しの将人さんが襲われている。

もし私が清く、正しいヒロインなら。きつとやるべき行動は出て行って止めることなのだろう。

なにしてるんですかって。

そんなことしちやいけませんって。

それなのに。

どうして私はこんなにも興奮しているんだろう。

「はーっ……!はーっ……!」

息が荒くなる。

あの将人さんが、私よりも幼い少女に良いように蹂躪されているという事実にも、どうしようもないほどに興奮する。

私よりも幼い少女が、私なんかよりも遥か上を行っていることに絶望する。

それは相反する感情のはずなのに。

この2つの感情が歪に重なり合って気持ち良い。

もっと声を聞かせてほしい。息遣いを聞かせて欲しい。
もっと……乱れてほしい。

下腹部を撫でた。

私のそこは、信じられないほどの熱を帯びていて。

「ああ。私と言う生き物は。

本当に度し難い生き物だ。

顔が熱い。身体が熱い。

なのに、何故か涙が止まらない。

有り余る熱を冷ますために。

2人の嬌声を聞きながら。

私は自分の身体へと手を伸ばした。

ツンデレ系OLは密かにアピール

夏休みであっても、金曜日はバイトを入れていた。

あのお店に来るような人達に夏休みなんてないし、一応曜日固定で入っているから、夏休みなのでいませんっていうのはなあという気持ちと、シンプルにお金を稼がねばという使命感から俺は今日も出勤している。

いつものようにメインは受付。テンションの高いお姉さま方をご案内し、担当のボーイに任せる。

最初は少し抵抗があつたものの、来る人は皆笑顔で帰っていくし、話すこと自体は嫌いじゃないこともあつて、案外悪くないもんだなと思ったり。

……ボーイとしてのトークスキルみたいなものは、上手くなる気がしないけど。

ふと、時計を見る。

時刻は20時になるかならないかという所。

「そろそろか……」

一旦俺は裏での作業をやめて、受付へと戻る。

大体は来店のお知らせがあつてから受付に行けばいいのだが……俺は一人のお客さんがこの時間に来ることを分かっていた。

そうして受付に戻って5分も経たないうちに。

入口の扉が開いた。

「やほ。将人」

「……いらつしやいませ、星良さん」

俺にとって唯一の常連客である、望月星良さんがやってきた。

「だから余計なお世話だったの!! 私は将人にお金使って十分満足なのよ!!」

「星良さんどうどう」

星良さんを案内してから2時間ほど。初見のお客様であれば一度や二度ボーイを交代するところだが、星良さんに限ってそれはない。そして店の人間も誰も声をかけてこない。星良さんが断ることを分かっているからだ。

星良さんはお酒がだいぶ回ったようで、さつきから大学時代の友人達への愚痴がすごいことに。

こうなつた星良さんはなかなか止まってくれない。

「まあまあ、ご友人の方々は本当に心配なんじゃないですか?」

「いやあいつら自分が幸せだからって私を憐れんでニヤニヤしてんのよ……!」

「卑屈すぎでは……?」

空になつたグラスにお酒を入れながら、星良さんの愚痴を聞き続ける。

星良さんはあの件以来、丸くなつたといふかなんというか……。

前まではちよつと怖いって思うことがあつたけど、最近はそれが無くなつた気がする。

逆にエグイ下ネタとかセクハラ紛いのことは増えたけど。

きつとこつちが星良さんの素なんだろう。

グラスにお酒が注がれて、氷が溶けてカランと気持ちの良い音をたてた。

「別にいいわよ。どうせ将人以上の男なんて現れっこないし、そんな男のために奔走するくらいなら将人にお金使うわ私は」

「と、とてもコメントしづらいですね僕の立場からすると……」

「いいのよ。ふりでもなんでも良いから将人が喜んでくれてそうだったら私嬉しいしね」

「ふりじゃないですよ?!」

ぐいっとグラスに入ったお酒を呷って、ふうと一つ息を吐いた星良さん。

表情から影が抜けたからかわからないけれど、こうして横から見る星良さんは魅力的に見えた。

スーツ姿も似合っているし、切れ長の目は少しだけつりあがっているけれど、まつ毛が綺麗に上を向いて整っているからか、ぱっちりとした印象を受ける。濃すぎない程度の化粧に見えるけれど、相当に気を遣っているんだろうなということが目元だけでわかった。

「将人は？実際のトコ何人女いるのよ？」

「うえっ?!」

ちよっと星良さんの顔に見惚れていたら、やべえ発言。

「うえっ? いやないわよ可愛いわね。いるでしょ5、6人くらいは」

「いやいやいやー！ いません……よ、そんなに！」

いない、と言い切ろうとしたところで、脳裏に飛び込んできたのは花火をバツクにして妖艶な笑みを浮かべた由佳の顔。

あそこまでのことをされて、想いを直接告げられて、けれど相手は中学生で。

あの子に関しては、一体どんな関係と言えばいいのかわからなくて、言葉に詰まってしまおう。

そんな俺の態度に星良さんがわかりやすいため息をついた。

「はあく……別にいいわよ。今更将人に女がないなんて思わないし。話に聞くくらいだったならなんともないわよ。遠慮せず吐きなさい」

「い、一応聞いておきますけど、話聞くくらいだったらってことは……?」

「実際に目の前でイチャイチャされたら手が出るかもしれないわね」

「怖すぎなんですか?!」

これでも成長した方よと1ミリも悪びれない星良さん。

急に目から光が消えるのやめてほしいんですが?!

いや気に入ってくれてるのは嬉しいけどさ……!!

「ほら、この前店の入り口にいたお友達は？あれも完全に恋する女の顔してたけど」

「みずほのことです……？い、いやいや違いますよ同級生ですけどあの子は別に俺の事好きとかじゃないですよ」

「はあ……」

「ダメだコイツみたいない目で見ないでもらっていいですか?!」

心底呆れたと言わんばかりに星良さんが再びグラスに手を伸ばした。

一口煽って、机にグラスをことり、と置いてから。

「あのね、無理よ。女として生まれてきて、将人に会って話して、惚れないのは無理。惚れなかったとしても絶対心のどっかで性的な目で見てるんだから」

「とんでもないセクハラ発言ですよそれ?!」

「あのねえ、そもそも女子大生なんて大概「あくこの人持ち帰れないかな」持ち帰ってホテルで寝てるタイピングで写真撮ってSNSに上げて周りにマウントとりたいな」としか思っていないんだから」「めちやくちや聞きたくなかったですそれ」

「なんだそれ。……でもこの世界だとそれが標準……なのか？」

「元の世界の男は確かに、下心丸出しの男多かったけど……」

それに女性特有のSNSマウントみたいな精神が加わるのか……冷静に地獄だな。

「それで。どうなのよ。もう実際やる事やってるんじゃないの?」

「エグいライン踏み越えてきますね今日は?!お酒そろそろやめときますか?!」

「あ、でも待ってやる事やってたら私の精神がぶっ壊れそうだからそれは聞くのやめとくわ」

「やってないですよ!!!」

「あらそう、その反応は本当にそうみたいね。よしよし……」

「何がよしよしなんですか!」

最近の星良さんと話していると主導権をもっていかれっぱなしだ。けれどそれが意外と悪くなくて、俺も完全に毒されてるなと思う。

「けどま、さつき微妙に言い淀んでたし、思い当たることはあるんじゃないの?」

「……バレてたのが意外ですよ……」

「バカね。私が将人のことどれだけ見てきたと思ってるのよ」

「微妙に怖い言い回しですなそれ」

「……まあ、正直由佳に関しては明確に迷っている。」

正直中学生の時の恋愛って憧れの延長でしかない……? って最初は思ってたし。

由佳は可愛いし、人もできてるからこれからたくさん男と色々な出会いを経験するわけで。

俺としては「そういうえば昔バスケットしてくれたお兄さん今どうしてるかな」くらいの思い出し方してくればそれだけで嬉しかったんだけど。

もうその程度では収まりようがない思い出の残し方しちゃってるしなあ……。

「なに? 煮え切らない顔してるわよ?」

「いや……そのですね、すごい想いを伝えてくる子はいるんですけど、如何せん若すぎるといふか……」

「? 高校生とか?」

「いや中学生っすね……」

「……私も若い頃に将人に出会いたかったわ」

星良さんの学生時代……それはそれで気になるけど。

「それで? 何を迷ってるわけ?」

「いや、やっぱきつとこれから色んな恋愛をするでしょうし、なんか俺なんかあの子の可能性を閉ざしちゃうのもなあって」

由佳はこれから人気者になるだろう。この世界であっても、由佳は言い寄られることが少なくなさそう。

「はあ~~~~」

「ええ~~~~」

めちやくちやくソデカため息つかれたんだが?

「将人やっぱあんたバカでしょ」

「ええ……」

一通り呆れたりアクションが終わった後、星良さんは人差し指を俺の前に立てた。

「いい？将人はね……自分の魅力を理解してなさすぎ」

「……そんなこと」

「いやそうよ。前々からおかしいと思ってたの。あなたの男としての魅力と、自己評価が全く結びついてない。それが良いところでもあるんだけど、その自覚の無さは罪になる」

「……」

「だいたいね、将人は無防備すぎよ。犯してくださいって言うてるようなもの。女なんて皆獣なのよ？」

「最近は……意識するようにしてる、つもりなんですけどね……」
特に由佳の一件があつてから、できるだけ気を付けているつもりではいる。

それでも昔からの性格というのはなかなか変わってはくれないが……。

「へえ。じゃあ一回目閉じて」

「へ？いいすけど……」

今の話と目を閉じることになんの関係があるのか全く分からないが、とりあえず目を閉じた。

ふわっと、柑橘系の香水の香りがした。

頬に、感触。

「え……？」

「ほら、やっぱり無防備じゃない」

いつのまにかとても近い位置にいる星良さんの顔に、思わずドキっ
としてしまう。

「唇にしなかっただけ私の理性を褒めて欲しいくらいね」

「いや、ちよ、これは、不意打ちというか……」

「いい？将人」

一度しつかりとソファに座り直して。

頬こそ酔いが回ってるのか赤いけれど、真剣な眼差しで星良さんが
真正面から俺を見る。

「自分の魅力を自覚しなさい。将人の性格は、とても私は好ましい
と思っているけれど。それで傷つくのは、相手だけじゃなく将人も傷
つくことになるかもしれないわよ」

「……そう、ですよね」

「正直私は将人に寄り着く女なんてどうなっても良いと思っ
ているけど。将人が傷つくのは見てられないの」

「ちよ、言い方……」

「事実なもの」

なんてことないといったすまし顔で、星良さんが鞆を持って席を立
つ。

時計を見れば確かにもう良い時間だった。

会計を済ませて、星良さんが店を出る。俺も見送りのためにそれに続いて店を出た。

「んー！やっぱ将人に会える金曜日は最高ね」

「楽しんでいただけただけなら、良かったです」

大きく伸びをする星良さん。

長い艶やかな髪が夜の街の風にさらさらと揺られた。

「……ねえ将人」

「……？なんです？」

振り向いた星良さんは、酔っているはずなのに。

にやつと笑みを浮かべるその表情は少し蠱惑的で。

俺に取ってはとても魅力的に見えた。

「私別にキープでも良いよ？」

「キープってそんな……」

「言ったでしょ？」

少し、星良さんが俺との距離を詰める。

手を、とられる。

さっきの香水の香りがして、心臓が少しだけ跳ねた。

「自分の魅力に、自信を持って。少なくとも私は……将人に初めて

会ったあの日から、あなたしか見えてない」

「っ……」

「ふふっ……照れちゃって。可愛い」

前髪を、さらつと撫でられた。

抵抗できない自分が恥ずかしいのに、する気も不思議と起きなかった。

少し名残惜しそうにした後、星良さんは一旦目を閉じた。かと思えば、握っていた手をパツと離して。

「ま、今日はこんなとこにしといてあげるわ。もしちよつとも良いなって思ったらアフターよろしく！」

「ま、またそんなこと言って!!」

ひらひらと手を振って、星良さんが帰っていく。
とても良い笑顔が、街頭と街の光に照らされてとても綺麗で。

やがて後ろ姿が人混みに紛れて、見えなくなった。

「はあ……」

結局ペースを握られっぱなしだった。

心なしか、まだ心臓の鼓動が早い。

空を見上げる。

見上げた空は既に真っ暗で、都会でも見える一等星が夜空に輝いていた。

元気っ娘JDは自己嫌悪する

私はアウトレットとかショッピングモールでする買い物が好き。

それは単純にオシャレが好きということもあるけれど、買うことはしないけれどこれとか好きだなくとかこのアクセあの子に似合いそうだなうとか考えるのが好きで。

だからよく、休日のお出かけにショッピングを選ぶし、もし、もし私に彼氏とかできたら、一緒に服とか見れたらすごい楽しいだろうなあって思ってたんだけど。

「みずほこれ似合いそうじゃない？普段着てる感じのトップスに合うと思うんだけど」

「え、えくそうかなく……？」

実際にこうして、好きな人と買い物に行くのは、だいぶハードルが高いよ!!

真剣な表情で服を選ぶ将人を横目で見ながら、少しだけ天を仰ぐ。どうしてこんなことになったんだっけ……。

大学生の夏休みはとつても長い。

どれくらい長いかというとだいたい8月丸々が休みで、9月も中旬から下旬にかけてまでお休み。

それを最初聞いた時は休みながーい！うれしーい！なんて思ってたけど。

8月中にあったあの3人で行った海水浴から1ヶ月ほど。

未だに私の感情はぐちゃぐちゃで、とてもお休みを満喫できる気分じゃなかった。

「はあ……」

9月の夜中。もう暑さもだいぶ引いてきて、秋っぽい気候にだんだんとなってきた。

私は自室のベッドに横になりながら、スマホとにらめっこを続けていた。

『じゃあさ、みずほ……私達で、将人の彼女になろうよ』

「あ〜!!もうよくわかんないよ……」

ごろん、とベッドの上で転がって、私は大の字に手を広げた。

あの日交わした約束。

それは一見だいたいぶおかしな提案に思えて、その実インターネットで検索してみれば、意外ともう一般的なようで。

そういうものなんだ、と一旦は私も飲み込んだんだけど。

「将人が許してくれるかどうかは別問題なわけです……」

普段はツインテールにしているセミロングの髪を指でくるくると意味もなく巻いてみた。

私達でいくら盛り上がったところで、将人が許可してくれるかどうかはわからない。

正直、私も将人は高嶺の花だと思っているし、1人で勝負を挑むのは元々だいたい気が重かった。

だから恋海と一緒になら確かにワンチャンあるかも?!とあの時は思っただけども。

将人から「そういうのはちよつと……」と言われてしまったらそれでおしまい。

しかもそんなことになったらきつともう将人は私達とは一緒にいてくれないだろうし……。

将人は良い人だから、どっちかを選ぶとかも難しそうだし……。

「はあ……」

ため息ばかりが出る。

そんな時だった。

ピロン、とスマホの通知が鳴って。

さつきベツトに放り投げたままだったスマホを手取る。

「え……」

通知の名前に驚いて、私は寝ていた体勢から起き上がって、姿勢を

正して座り直した。

SNSを開いて、既読がつかないように少しだけ長押ししてメッセージを読む。

《片里将人》

『みずほ今週どっか暇?』

『秋服が全然無くて服買いに行きたいんだけど』

「……っ!」

身体が少し熱くなるのがわかる。

ちよっとお出かけに誘われただけでこんなにも嬉しくて、ああやっぱり将人のことが好きなんだなって自覚する。

「え、ちよっと、どうしよう。最近会ってなかったし……」

今から会うわけでもないのに、自然に髪を手で梳いていた自分が滑稽で笑ってしまう。

どうしようめちやくちやテンパってる!!

「そ、そうだこういう時はSOSしよう!」

同じSNSの画面から、《恋海》の名前を探して通話ボタンを押した。

コール音のメロディが鳴って少し。

『もしもし?』

「あ、もしもしごめんね夜遅くに!」

『んくん大丈夫くどしたの?』

「あ、あのですね……」

私は言葉を選びつつ、将人にデートに誘われたことを説明した。あんまりるんで話すのは、恋海にも悪いし……。

『う、羨ましすぎる……え、なんで私じゃないの将人?!』

「あ、あはは……恋海と前出かけてたし、気遣ってくれたんじゃないかな……?」

海水浴に行つて以来、私は将人に会ってなかったけど、恋海は何回

か会っているらしい。

恋海の積極性はホント見習いたい……。

『えーでもよかったじゃん！アウトレットとか行ってきちやええば？』

「あーありかも！前恋海と行ったところあつたよね」

『海浜公園の近くのやつね、そうそう！……服買うなら車で行く感じ？』

「あ……それ全然考えてなかった」

『どうせなら車で行けば？いいなードライブデート』

私は大学受験が終わったタイミングで免許を友達と一緒に取ったので、運転ができる。

車はまあ……レンタカーとかでもいいし……。だけど……。

「で、でもドライブデートってレベル高くないですか……？」

『何言ってるの！むしろみずほが言ってたんじゃない！「良い男を捕まえるには免許は必須だZE☆」って！』

「うえーん！あの頃はホントバカだったんですう〜！」

色んな意味であの頃の私は無敵だったなあ……。女子高生ツヨイ……。

将人とのデートに想いを馳せていると、恋海が思わぬことを言ってきた。

『それにほら……車で行けば……帰りワンチャンあるかも、だし……』

「……わ、わわわワンチャンってなんのことですか??？」

『カマトトぶらないでよ……』

「なんのことがワカラナイナー」

さ、流石にそんな展開にはならない……よね？

と、いうわけでこんなことになっています。
いじょう回想終わり！

「……う？どしたのみずほ」

「えっ?! いやなんでもないヨ?!」
危ない危ない。そんな回想に浸ってる場合じゃなかった。
気を取り直して、隣で真剣に服を選んでいる将人を見る。
やっぱりカツコ良い。

『私達で将人の彼女になろうよ』

「っ……………」

ダメダメ。今はそんなことを考えちゃ。

せつかく将人が誘ってくれたんだから、今日はこのデートを楽しま
なきゃ！

真剣に服を選んでる将人に、私は気になっていたことを聞いてみ
た。

「ね、ねえ、将人はなんで私を誘ってくれたの？」

「え？いやなんでって……」

この時私は忘れてた。将人という男の子が、どういう人だったのか
を。

「俺の知り合いの中で一番ファッションセンスが良いのがみずほ
だったから？」

「っ……………い、いや〜いやはやそれは嬉しい評価！そんなこと思っ

たのかこのこの〜」

「あ、ちよ、一旦服掛けさせて！」

恥ずかしくて、思わず表情が見られないように肘でつついてやった。

なんでこんなに、欲しい言葉をかけてくれるんだろう。

ファッションセンスが良い。もちろんその言葉自体も嬉しいけれど、なによりもそれは普段から私のことを見ていることに他ならなくて。

「ほら、これどう？みずほにはこういうの似合うと思うんだよね」

将人がそう言ってみせてきたのは、えんじ色で少し丈の短いキュロットスカート。

細くて黒いベルトが、カジュアルな中でも大人っぽさを主張していた。

正直に申し上げて、好きだった。

なによりも、将人が選んできたということもあるけれど。

「え、めっちゃ良い！これ買う！」

即決！善は急げじゃ〜！

「ちよいちよいちよい！流石に試着していきなよ?!」

「あ、そうだった」

サイズ的には問題なさそうだけど……一応確認のため。

すると近くを通った店員さんを将人が呼び止めてくれた。

「あ、すみません、試着室ってどこですか？」

「えっ……あ、ああ、こちらです！」

一瞬面食らった店員さんが、私達を試着室に案内してくれる。

まあ確かにこんなところにも男の人がいるの珍しいもんね。

しかもこんなイケメン！

ちよつとだけ鼻が高くなってしまう。

「こちらになります」

「ありがとうございます。あ、じゃあみずほ荷物持っておくよ」

「ありがとう〜！ではしばし待たれよ！」

こういう気遣いも将人らしくて、嬉しくなっちゃう。

将人に荷物を預けて、私は試着室に入った。
さて、将人を待たせてるわけだし、早めに試着を――

「あの、彼氏さん、ですか？」
はたり、と、手が止まる。

おそろくさっきの店員さんが、将人に声をかけたらしい。
まあまあ将人はカッコ良いからね。少しくらいなら許してあげよう。

「あ、いえー！友達です」

ズキリ、と胸が痛む。

ーわかってる。

私と将人は、あくまで、友達。
なのになんでこんなに、胸が痛むんだろう。

「え、そうなんですわ！すみません、私てつきり……」

「いえいえ。大丈夫ですよ」

「え、じゃあお兄さんは彼女さんとかは……」

「えっと、いないですけど……」

……ちよ、ちよ、ちよ？なんか雲行き怪しくない？

「えー！そんなにカッコ良いのに……あ、あの良かったら連絡先とか」
おいこらあー！！人が試着してる際にナンパなぞさせるか！！

「将人ーーー!!!?」

「うわあ！びっくりしたなに?!」

「これめっちゃ良い感じー!!!」

「じゃあとりあえず見せてくれないかなあ?！」

必殺の早着替えを炸裂させて、私はカーテンを開ける。

「おー! やっぱ似合うよー!」

「へへーん。でしよでしよ? よっしこれに決めたー。店員さん、お会計してもらっていいですか?」

「あ、はい……」

将人にバレないように、私は笑顔（意味深）で店員さんにレジを促した。

帰り道。

シヨツピングモールを後にした私達は、車で帰路を辿っていた。

「いやーたくさん買ったよー! 将人ありがとうね!」

「いやいやこちらこそ運転までしてくれてありがとうだよ」

運転も久しぶりだったけど、将人が横にいるっていうだけで退屈とか苦痛は一切感じなかった。

話してるだけでも楽しいって、やっぱり最高すぎるよー。

『あ、いえー! 友達です』

ハンドルを握る手に、少しだけ力が入った。

だからこそ、思い出してしまう。

私は、将人の彼女じゃない。

『2km先、右方向です』

「次右だつてさー、そろそろ右車線入っていた方が……みずほ？」

「あ、ああーうん、そうだ、ね」

この大通りを右に曲がったら、もうすぐお別れ。

この夢の時間も、終わってしまう。

右車線に入らなきゃいけないのに、嫌だと心が叫んでる。

このままどこかに行ってしまう。

将人と二人で、二人だけで、どこか知らない場所まで行ってみたい。

将人と……二人で愛を誓いたい。

暗い気持ちが胸の中でじんわりと広がるのがわかる。

あの夜に感じた、どうしてもこの人を独り占めしたいという、どうしようもない、欲求。

ここをそのまま真つすぐ行つた先に、休める場所が、ある。

「ね、ねえ……将人、えつと……」

「いやー楽しかったなあーやっぱりみずほ誘つて正解だった！新しいカッコ良い服買えたしー途中店員さんに絡まれた時も、助けてくれたしね？」

外の喧騒が、少し間が空いた車内に横たわつた。

「……あ、あはは！バレた？私の目の黒い内は、将人には手を出させんぞー！なんちやつて！」

……静かに、私は右のウインカーを出した。

手を出させないぞ、なんて嘘をついて。

もうとつくに踏み越えちゃいけないラインなんて越えているのに。やっぱり私は、どうしようもなく最低だ。

文学少女JKはリークする

【聖女の集い】

まな『明日から文化祭2日目だけど誰か男呼んでないの?』

初美『三秋が彼氏呼ぶって言ってなかった?彼氏男連れてきてくれないの?』

三秋『あー男友達連れてって良い?って聞かれたわ』

まな『ま?!?!? 激アツやんけ!!』

三秋『でも断った』

【まな】が【三秋】を退会させました】

汐里『あまりにも早い退会芸。私でなきゃ見逃しちゃうね』

【初美】が【三秋】を招待しました】

【三秋】が参加しました】

三秋『沸点ガキかよ』

まな『いやなんで断ってん?バカなの?』

三秋『いやお前ら絶対特攻するじゃん。それが嫌だった』

初美『つかあ心外だわあこちとらめちやくちや淑女だってーのに』

まな『慎重やかにエスコートしたのになあ?』

三秋『絶対嘘だろ……』

初美『あれ?汐里のどこの王子様は?』

汐里『あー……えつとー……来る、と思います』

まな『マジ?! ついに実物と会えるのかあ!』

三秋『おー。それはシンプルに楽しみ』

初美『なんでそんな齒切れ悪いん?』

まな『男は!連れてこないのか!あ、いや王子様本人でも全然ウエルカムなんだけど』

汐里『男は連れてきません……』

まな『男は“は”……?』

初美『あつ……(察し)』

三秋『wwwwwwwwww』

汐里『なんかうちの卒業生の友達と行くわ！って言われて……女らしいっす』

まな『シンプル地獄で草』

文化祭。

去年も一応経験してるけど、去年の段階では仲良い友達もいなかったし、呼ぶような人もいなかったから一日中店番して終わってた。けれど、今年は違う。

「はよっす。お、寝取られ汐里んじゃん」

「おはよう。朝から言葉の刃キレッキレだね危ないから少し仕舞おうか？」

憎まれ口を叩きながら教室に入ってきたのは、ボーイツシュ選手権ナンバーワン（自社調べ）の初美だ。

まだ初美とも他のメンバーとも付き合い自体は長いわけではないけど、波長が合うのかとても仲が良い。って勝手に私が思ってるだけかもだけど……そんなことは無いと信じたい。

「寝取られ展開もイケるとか汐里の性癖もなかなか業が深いね」

「ま、まだ寝取られたと決まったわけじゃないし」

「声震えてるけど」

まあでも正直、否定はできないなと思ってしまう。

夏のあのお祭りの日のことを思い出す。

あの時の自分の浅ましさを考えれば、私の性癖は業が深いし変態なんだろう。

今日将人さんが連れてくると言った女の人も、きつとそういう関係。

でも別に良いかなって思ってる私が怖い。

おもえば私の中の将人さん像はどんどんと変わっていった。

最初は超絶イケメンお兄さん。途中から、中身まで完璧超人なんだってなって……。最近では、その、女性関係が……。

でも、正直それ自体は私にとって悪い事じゃない。そりゃ最初は私だって将人さんの一番になりたい、彼女になりたいって思ってたけど、冷静に考えてあんな超絶完璧イケメンが私一人の手に負えるわけがない。

将人さんが女性関係にだらしなれば、ワンチャン私にもおこぼれがあるかもしれないし……。

「あ、おはよく寝取られ」

「私の名前は寝取られじゃないわ」

もれなく全員私のことなんだと思ってるんだこいつら。

つてかそもそも彼氏じゃないんだから寝取られじゃないだろ。

「2年B組お化け屋敷やってまーす！」

「喫茶店やってまーす！」

「たこ焼き焼きたてですよー！」

学校という施設がこれだけ喧騒に包まれると、流石に非日常感がある。

去年は正直このやかましさが好きになれなかったけど、今年はそんなに気分が悪くない。

それはきつと自分の気持ちの問題で。

「汐里いいよ看板代わる。そろそろ王子様来るだろ？」

「あ、もうそんな時間か……」

教室の前で突っ立っていただけだったけど、意外にも時間が経っていらしい。

にしてもなあ……。

私は憂鬱な気持ちをこらえて、生徒用のトイレでみだしなみを整えた。

正直気分は複雑だった。

もちろん将人さんが文化祭に来てくれるのは嬉しいし、テンションも上がる。

けれど、けれどだ。

女の人を連れてくるって言われて私はいったいどんな顔でその人に自己紹介をすればいいんですかねえ……。

これがよくあるラブコメディなら、きつとその人と私がバチバチになつて、将人さんの取り合いをするのかもしれない。

でも私はそんなことする気になれなかった。

鏡を見る。そこに映る、いつもの私。

外見こそ取り繕ったままだが、将人さんはこの内に秘めた篠宮汐里という人間を知ってくれている。

将人さんは好きだ。

けど、将人さんのハイスペックを知っているからこそ、私1人が独占しているような存在じゃないのも理解している。

今日おそらく連れてくる女の人だって、きつと将人さんを狙ってるはず。そりやそうだ。将人さんの近くにいて、好きにならないなんて女として欠陥があると思えない（過激派）。

そしてきつと、私なんかよりもずっと可愛くて、女性らしい人なんだろう。

それを目の当たりにした時、私は一体どんな感情を抱くんだろうか。

嫉妬？自己嫌悪？

それとも……あの夏祭りの日感じたような、歪で、それでいて高揚

感のある――

ブー、とスマホが小さく振動した。

ポケットから取り出してみれば、『片里将人』の文字。

学校に着いた旨の連絡を確認して、私は一つ息を吐いた。

「まあ……なるようになるか……」

「さーて、皆で汐里が目の前で寝取られる所見に行こー」

「いやー楽しみだなあ。友達が脳破壊されるの直で見れるなんて」

「お前らホントにド畜生だな？」

廊下に立って将人さんが来るのを待っていると、教室からわらわら
と友人達が顔を覗かせる。

ああ、なんかとても嫌になってきた。

「あ、いたいた！汐里ちゃんだ」

その声は、唐突に聞こえてきた。

廊下の向こうから歩いてくる姿は、将人さんのモデルみたいな体型
と顔も相まって、ドラマのワンシーンみたいに見えなくもない。

問題は、その後ろに女の人が歩いてることなだけど……。

将人さんは深めの青と白のいわゆるエプロンチエツクの長袖シヤ
ツに、黒のスキニー。肩掛けのポシェットすらも、将人さんのカツコ
よさを引き立たせているように見える。

「汐里ちゃん誘ってくれてありがとうね！えっと、こっちが友達の
恋海！ここの卒業生だつてよ」

「はいはい！五十嵐恋海ですー！流石に数か月じゃあんまりなつか
しさないねー！」

将人さんの後ろからひよこつと顔を覗かせたのは、ショートボブの
可愛い女性。

あ、こーれダメです。何一つとして勝っている要素がありません。

短めのキュロットスカートにオフショルダーのブラウス。もう陽キヤですつていうオーラがバチバチに光り輝いている。

ポン、と両隣から肩に手が置かれた。

「汐里。無理だ。諦めろ。相手が強すぎる」

「ああ。勝負にすらなっちゃいけない。塵だよ塵。君は」

「あんたら本当に黙っててくれませんかねえ!？」

隣みの目で見えてくるゴミ友人達の手を払いのける。

んなことは最初から分かってたよオ!

「……?とりあえず汐里ちゃんのクラスから回ろうと思ってたんだ

けど、今平気?」

「あ、大丈夫ですよ。今店内ガラガラなんで……」

なんかすごい惨めな気持ちになって来たな……?」

とりあえず将人さんとその友達の五十嵐さんを連れて、教室へ。

うちのクラスの出し物は喫茶店。なんの物珍しさもない、普通の喫

茶店だ。

将人さんを連れて教室に入ると、教室がにわかには色めき立つ。

「えっ……誰あのイケメン」

「篠宮さんの彼氏?」

「いや流石にそれはないでしょ……」

おい誰だ今どさくさに紛れて私の悪口言った奴。

私もその通りだと思います。

「あれ、恋海先輩じゃないですか!」

「ありゃ!久しぶり!元氣してる?」

丁度2人を席まで案内したタイミングで、五十嵐さんの方にクラスメイトが声をかけた。確かあの子はソフト部の……。

「え、恋海先輩の彼氏さんですか……?!え、めっちゃカッコイイ」

「ほんとだめっちゃイケメン来てる!」

教室にいたクラスメイトの女子達が群がってくる。

おいお前らやめろ!群がるな!気持ちはわかるけど!

「はいはい気持ちはわかるけど将人が困るからあんまりジロジロ見
ちやダメだよ！」

「そうだぞー恋海先輩は怒ると怖いんだから皆怒らせないでね」

「それは違うでしょ！」

私のいないところで話が進んで盛り上がっていく……嫁力高い
なーこの人。

こりやお似合いだわ間違いない。

と、そんなタイミングで席に着いた将人さんが、私の腕をちよ
ちよいとつつつく。

「ごめんね、せっかく誘ってくれたのに全然時間作れなくて」

「え……ああ、いえ。むしろ来てくださってありがとうございます」

この気遣い。この性格の良さは本当に将人さん唯一無二だなあと
思わず感心してしまう。

「……もつと素で良いのに」

「……っーさ、流石に学校ですし……」

あーもうほんと、こういうところだ。

せっかく半分諦めてるのに、こういうところが私の心をかき乱す。

「汐里、ありや無理だ。完全にあの先輩お前の王子様に入れ込んで
るし、スペックで勝てやしないよ」

「んなこと言われなくてもわかかってるわ」

未だクラスメイト達から大人気の2人を席において、私は仲間がい
るところへと戻る。

「いやでもわかるなあ。あれは惚れるわ。そこそこのイケメンで、
性格もよきそうだし。私も彼氏いなかったら危なかったわ」

「マウント乙」

彼氏持ちの三秋にマウント取られた。調子に乗りやがってよお
……！

でも実際あれだけのカツコ良さで今まで彼女がいらないというのだから世の中わからない。

あんなの彼女10人いますって言われたってまあおかしくないわなあって思うのに。

「え、将人本当にいいの?」

「全然良いよ、面白そうだし!」

「本当ですか?!ありがとうございます!!」

ん……?なんか話が盛り上がってる。

なんだろう?

今しがた将人さんと話していたクラスメイトが笑顔でこっちにやってきた。

「ねえ篠宮さん!あのカツコ良い人に執事服着てもらってちよつとだけ呼び込みやつてもらおうと思うんだけどどうかな?!」

「……はい?」

ツツコミどころしか無いが????

「こちら2年C組で喫茶店やってますー!」

「え、なんか執事服のイケメンいるんだけど」

「ちよつと見て行かない?」

あれよあれよという間に話が進み、演劇部の子が持ってきた執事服に身を包んだ将人さんが何故かウチの教室の前に立っていた。

そしてお客さんが増えた。なんだこれ。

とりあえず後で写真撮ろ……。

「将人ったら本当になんでも受けちゃうんだから……」

「あはは……そうですね」

そして私の隣には将人さんの連れてきた友達、五十嵐さん。

正直胃が痛いです、ハイ。

その五十嵐さんが、ねえ、と一つ呼吸を置いて私に話しかけてくる。

「汐里ちゃんはさ、将人のこと好きなの？」

「……えーっと……」

はい、来ました。牽制球です。

牽制球のボールがランナーの私に直撃してる気がするけど大丈夫
そ？

なんて答えれば正解なんですかねえ……。

はい、そうですね。言ったら私この瞬間に刺されたりしない？

「ごめんごめん、言いにくいよね。でも、将人の近くにいたら、好き
になっちゃうよね。ほんと、良い人過ぎるしさ」

「……まあ、なんといいいますか、その、はい、そうですね……」

隠すのも無理があるかなと思ひ、とりあえず賛同しておく。

じゃ、消えて？って言われない？平気？

「だよねえ……将人が女子高生の家庭教師やってるって聞いた時か
らそうなんじゃないかとは思ってたよ」

ため息をつきながらも、意外と平穏な反応……いやだけど油断する
な。

ここはこつちもちゃんと意志表明しておかないと……。

「あ、でもあれですよ。本当私程度の人間が将人さんを独り占めで
きるなんて思っただけです。でもほんの少し、ほんの少しでいいか
らおすそ分けしてもらえたらなーなんて……」

……逆にキモイか、これ。

まあでもこれが私の本心だから。

そもそもあんな神みたいな人を独り占めするって方が罰当たりそ
うじゃない？どう？

そんな私の聞く人が聞けばドン引きのお気持ち表明を聞いた五十
嵐さんは、少しきよとん、とした後。

「……そっか。そうだよ。皆、思うことは一緒か……」

と、眩いた。

五十嵐さんも思うところがあるのだろうか。

笑顔で接客する将人さんを見ながら、どこか物憂げな表情をしていた。

「ま、まあ、将人さんの周りにいる人みんな狙ってる説ありますからね。流石にこの前中学生くらいの子といちやいちやしてた時はびっくりしましたけど」

あの子もきつと将人さんが大好きでたまらないのだろう。思春期真っ盛りだろうし。

でも流石にあそこまではやりすぎですよ。混ぜて欲しい（切実）。なんて思っていると、こちらを向いて目を丸くする五十嵐さん。

「……えっ？」

「えっ？」

……あれ、私また何かやっちゃいました？

バスケット部JCは発見する

《ゆか》

『将人さんひとつお願いがあるんですけど……』

『今度期末テストがあります、その勉強があまり進んでいなくてですね』

『将人さん家庭教師やっていらつしやるといふことですし、勉強を教えていただくことはできないでしょうか』

《将人》

『俺で良ければ力になるよ!』

『日曜とかなら空いてるかなー』

《ゆか》

『ありがとうございます! すつごく助かります!』

『日曜日承知しました! 楽しみにしていますね』

《将人》

『場所どうしよつか。由佳の学校の方まで行っても良いけど』

《ゆか》

『いえ! 流石にこちらまでご足労いただくわけにはいきませんで、私の方が出向かせていただきます!』

《将人》

『でもこつちあんまり図書館とか公民館とかあんまり無いんだよね』

(汗)

《ゆか》

『えっと、私あんまり他の雑音とか入ると集中できないタイプです……』

《将人》

『そうなんだ、気持ちちよつとわかるなー』

『でもそしたら場所どうしよつか』

《ゆか》

【メッセージを削除しました】

【メッセージを削除しました】

『将人さんが良ければなんですけど、将人さんのご自宅とかで勉強させていただくことってできたりしますでしょうか？』

《将人》

『あ、そういうことね、なるほどなるほど……』

『うん、じゃあそうしよっか。駅まで来てくれれば迎えに行くね』

《ゆか》

『ありがとうございます！では14時頃に駅に向かわせていただきますー！』

《将人》

『……でも由佳、あの、この前みたいなのは、ダメだからね』

《ゆか》

『なんのことですか？』

《将人》

『とにかく……勉強ね！勉強頑張ろうね！』

《ゆか》

『もちろんです。ご指導のほどよろしく願います』

日曜日の昼下がりに。

由佳との待ち合わせ時間の少し前に、俺は駅前の喫茶店で時間を潰していた。

カフェオレの入ったグラスを一口。

いつまで経っても苦いのが得意になれないので、今日も甘味を大量にぶち込んだ。

そんな甘さマックスのカフェオレを飲みながら、最近の由佳とのこ

とを思い返してみる。

『妹じゃ、嫌なんです』

『油断は禁物ですよ……う？』

夕暮れのバスケットコートであったことと、この前の夏祭り。

吹っ切れたように見える由佳からのアプローチが、最近激しい。

正直に言っただけで由佳は年齢にそぐわない魅力があるし、可愛いし、嫌かと言われれば決して嫌ではない。

けれど、けれどだ。

やはり相手は中学生。冷静に考えなくても余裕でアウトな案件。最近はやっぱり意識はしてしまうが、理性がそれを咎める。

由佳から今日の提案を受けた時、てっきり図書館かなにかでやるものだと思っていたので、俺の家を提案された時は驚いた。

それと同時に……また前回のようになりかねないんじゃないかないかとも。

いや、いやね？流石に由佳がそういうふうには全く思っていないのに、俺が過剰に反応してたら可哀想よ？

けどあれはもう確信犯だろ！

最近わかったことだが、由佳はどうやらおませさんらしく、だいぶそつちに興味があるらしい。

……まあ貞操逆転していることを考えれば、健全な中学生女子なのか……？

しかしこのままあなたで流されるのは非常に良くない。

ここは年上として余裕の態度を示さなければいけないわけだ。

大丈夫大丈夫。前回もその前も不意を突かれただけだからね。警戒さえしてればなんてことはない。

……でも由佳めちゃくちゃ力強いんだよな……鍛えてるのは知ってるけど女子中学生の力ではないだろうと考えても……。

ピロン、とスマートフォンに通知が入る。

ちらりと目をやれば、どうやら由佳が最寄り駅に着きそうのとのこと。

「まあ、今日は流石に大丈夫、だと信じたい」
聞く人が聞けば全く信用ならないその言葉は、グラスの中の氷がカラン、と溶けた音にすら負けて消えた。

「将人さんー!」

改札の前でスマホに目を落としていると、何度も聞いた元気な声が聞こえてきた。

視線を少し上げれば、目に飛び込んでくるのは艶やかな黒髪。
ワンポイントであしらった群青色のヘアピンが太陽に反射して眩しく輝いていた。

「ん、由佳お疲れ様」

「はい!全然疲れてませんけど!」

にかつと笑う由佳は、いつもと変わらず大変可愛らしい。
スカイブルーの短めな半袖から真っ白でしなやかな腕が伸びている。

と、由佳が持っているトートバッグが目に入った。

勉強道具が入っているのだろう。

「バッグ重くない?持とうか?」

「いえいえ!これくらい平気ですよ!」

手を差し出すと、由佳はトートバッグを持っていた左手を引いて……代わりに反対側の手で差し出した手を握った。

「行きましょう!」

「……そうだね」

ほんとたくましいといふかなんといふか……。
色んな意味で、この子には敵いそうにない。

勉強会はつつがなく進行していた。

部屋に入る時こそ緊張していたみたいだけど、勉強を始めたならそれもすぐにほぐれたようで。

今は真面目に机に向かい、参考書とにらめっこしている。

「漢字はもう暗記みたいなものだからね。あんまり褒められた方法じゃないかもだけど、短期記憶に放り込んでやうのが一番効率的かなって思うよ」

「むむむむむ……そうですね……」

由佳の成績は、学年内で平均ぐらいらしい。

これだけ運動が得意で、成績も平均なら十分では？と思わないでもないけど、由佳本人は上を目指したいらしく。

難しい顔をして考え込む由佳。

時計を見れば勉強開始からそれなりに時間が経っているし、勉強机に置いてあったグラスが空になっているのもあって、由佳に提案。

「ちよつと休憩にしようか？麦茶もいれてくるからちよつと待ってね」

「はいーありがとうございます」

俺の言葉を聞くや否や、由佳はぱつと顔を上げて……自然とその翡翠色の澄んだ瞳と目が合う。

その吸い込まれるような瞳に、あの顔が一番近かった時を思い出して俺は思わず目を逸らす。

ぐーっと伸びびをしている由佳を背に、俺はキッチンに向かう。

しかし危険すぎるこの子。最近、由佳の女の子らしさに磨きがかかっているような気がする。

初めて会った時は良くも悪くもスポーツっ子って感じで、元気があって本当に妹だったら良いなくらいにしか思っていなかったけれ

ど、最近はなんというかこう……可愛い要素が強い。

良く見せてくれる笑顔は快活さを感じる今までのものから、最近はかわいらしさが目立つ柔和な笑みに。

服装も元気なスポーツスタイルから、路線こそ変わらないものの、フリルのついたものや可愛さをアピールできるものによって変わってきた。

そしてやはり……距離感が近い。

一度俺を押し倒してからというものの、その距離感に慣れてきたのか、ボディタッチが増えてきた。

行きで手を繋がれたこともそうだが、どんどん物怖じしなくなってきたような気がする。

このままではまずい。こともあろうに女子中学生に手玉にとられているというのはプライド的に問題がある。

冷蔵庫に入っている麦茶をグラスに注ぎながら、俺は今日こそはいよいよにはやられないという覚悟を決めていた。

「はい、麦茶どうぞ」

「ありがとうございますー！」

部屋に戻ると、由佳は勉強机に座ったままだった。

てつきり由佳のことだから部屋を物色でもさされているかと思っただが、流石にそんなことはなかったよう。

勉強机から少し離れたところにあるソファの前に、麦茶の入ったグラスを置く。

由佳もこちらへトコトコと歩いてきて、ソファに腰掛けた。

……隣に座った俺とだいぶ空間を空けて。

ん？なにこの距離感。最近近いとは思っていたが、今は逆にだいぶ遠くて困惑する。

麦茶にちびちびと口をつけながら、こちらを見てくる由佳。

その視線も、何か伺うようなそんな視線だ。

「えっと……どう？ちよつとは力になれてるかな？」

「え……あ、はい！とても！とても助かります！」

「そう、それならよかった……」

グラスを置く音が、狭い部屋に良く響いた。

……なんというか、ぎこちない会話になってしまっている。まだ知り合って間もない頃はこういうこともあったけど、仲良くなつてからは珍しい、かな？

まあでも由佳と俺の間には今まで築いた関係値が少なからずある。だからこういう時は少し踏み込んでも大丈夫なはずだ。

「大丈夫？なんかぎこちないけど、緊張してるの？」

「えっ……いや、そ、そんなことないんですけど……」

そんなことはないと言いつつも、距離を詰めてくることは特にな
い。

最近是一緒にいる時はびったりくつついてくるのがデフォルト
だっただけに、違和感が凄い。

……もしかして、なんか由佳の気に障るようなことを俺がしてし
まったのだろうか？

それならば謝らなければ。

「ごめん、思い当たる節はないんだけど、由佳に嫌なことしちやつ
たかな？言ってくれたら今後そういうことがないように——」

「いえー全然そういうのじゃないです！そういうのじゃ、ないんで
す。将人さんは、何も悪くなくて……」

慌てて俺の言葉を制した由佳が、けれど力なく肩を落とす。

「あ、あの……最近ちよつと……近すぎたかなって反省してまして」
「あー……なるほど？」

由佳のその言葉は意外と腑に落ちた。

最近由佳と会う時は距離が近く、より積極的にアピールしてくるよ
うになっていて。

新しくバスケをする場所が定まっていなくてもあり、以前に比べ
てそういう時間が長くなっていたような気もする。

「えっと、私はその、将人さんのこと好き、ですけど。なんかこう、
下心とか、身体目当てとか思われてたら、嫌だなんて……」

「な、なるほどね……」

女の子が懸念するようなことではないと思うのは、きつとこの世界

では間違っているのだろう。

事実、今日俺の家で勉強会をすることになった時も、少なからず由佳がそういう展開を狙っているのでは？と疑ったわけだし。

とはいえ由佳が純粋な気持ちで俺に好意を持ってくれているのはわかってるし、それは杞憂だ。

しかしそれを、どう伝えるべきか……。

少し、自分なりに考えた後。

とりあえず、俺は落ち込んでいるような由佳に近づいて、頭を撫でた。

「なんだろう、俺は由佳が俺を慕ってくれてる理由くらいは、わかってるつもりだから。見た目とか、下心で俺との関係を望んでるわけじゃないのは、わかってるから」

黙って俺の言葉を受け入れてくれている由佳に、俺は続ける。

「だから、まあ、今まで通りで良いよ。えっと、なんだろう。俺はまだ由佳を恋愛対象として見れてるわけじゃないけど、由佳個人のごく好きだし。だから、距離を置かれるのは、寂しい、かも？」

「ほんと、ですか？」

どこか期待を込めた眼差しを向けてくる由佳。

恥ずかしくて、また少し視線を外してしまう。

この上目遣いに、俺はとても弱い。

「行き過ぎたのはダメだからね?!適度に、健全にね!」

「ふふふ……わかりました!適度に、ですね!」

よかった。由佳の表情がいつも通りの元気なものに戻ってくれた。

その事実には、ほっと胸をなでおろす。

「変だと思っただよだね。いつもの由佳ならさつき麦茶入れにいつてる間にてつきり俺の部屋物色してると思ったよ」

「そそそそんなことしませんよ。い、いいんですか?!そんなこと言うんだったらやっちゃいますよ?!」

「なんにも面白いもの出てこないけど……」

喜び勇んで部屋の棚を見て回る由佳。

勉強机の棚を見て、その後……全く使っていない小さな棚へ。

——その棚を開けた瞬間。

それまでぴよぴよこと可愛らしく動いていた由佳の後ろ姿が、固まった。

どうしたんだろうか？あの棚は最初から用意されていたけれど最初に確認して以降全く使ってないので何も入っていないはずだが……。

「由佳ー？どうしたの？その棚何にも入ってないと思うんだけど……」

「……なんだ、将人さんも、そうだったんですね……」

「え？」

ゆらりと立ち上がった由佳が、こちらを振り向く。

その表情は何故だか紅潮しており、なんか……息が荒い。

何かを手に持ったまま、ゆっくりと由佳が近づいてくる。

「なんだ……そうなら先に言ってくれば良かったんですよ？将人さん……」

「え？なになに、どうしたの由佳」

右手に何かを持ったままソファーまで来た由佳が、両手で俺の肩を掴む。あの、あのあの？相変わらず力強いですね由佳サン？

「私はいつでも歓迎だったんですよ？でも将人さんはいじらしいから、きつと言葉にできなかつたんですよね。わかります。でもそんな将人さんも好きです」

「え、ちよ、なになにに本当にわからないんだけど——」

慌てて由佳を止めようとしたその時。

由佳の右手に握られているものに気が付く。

正方形の、小さな包み。

使ったことは無いけれど。

知識として知っている。あれは、避妊具である、と。

頭が混乱する。

こちらの世界でもちろん買ったことなどないし、もらった記憶もない。

誰かの悪戯？けれど、友達の少ない俺は、部屋に誰かを招いたこと

なんか――。

――思い出した。あるとすれば、良く知るスーツ姿のお姉さんが、一度だけ。

あんの人はなんてものを――！

「待て待て由佳誤解だから！とりあえず一旦話を……って力つつよ!?」

ソファに無理やり押し倒された俺は、上からのしかかってくる由佳を跳ね返すことができない。

「今すぐ恋愛対象として強制的に見れるようにしてあげますからね……初めてなので不慣れな点もあるかもなんですけど、許してくださいね……」

嬉々として服を脱がせようとしてくる由佳の説得に、この後1時間ほどかかったとかかかってないとか。

ツンデレ系OLは乾杯する

「ナンバーワン？」

「そーだよ！今ゆうせーとゆうすけがいい感じに争ってるんだよね」

とある月末の、金曜日。

いつも通りバイト先であるボーイズバー「Festa」に来てロツカールームで着替えていると、先輩達からそんな話題を振られた。

ボーイの給料は、時給の他に自分がどれだけ売り上げたかによって変動する。

お客さんの払う料金には、実はボーイの飲み物代は入っていない。そこをお客さんに出してもらおうことで、ボーイズバーの経営は回っている。

高いお酒を買ってもらい、お店の売り上げに貢献する。それがボーイの役割であり……だからこそ、お酒が飲めない俺は、売上に貢献するという意味合いで言えば、役に立たないのだ。

そして、月間で一番売り上げをたたえたボーイが、この店のナンバーワンになる。

ナンバーワンになったから給料がいくら上がる、というわけではないのだが、誰がいくら売り上げたのかは裏に貼ってあるし、常連のお客さんなんかは知っている。

一種の業界用語のようなものらしい。

「別にいいよナンバーワンなんか」

「そんなこと言っちゃよつとは意識してるっしょ〜？」

遅れてやってきたゆうせーさんが、苦笑いでそう言った。

ゆうせーさんは、そこまで完全な美形というわけでもないのだが、話し上手で人気が高く、ナンバーワン候補の筆頭だ。

「まさともお酒が飲めるようになったら目指してみなよ！」

「いやあ僕は無理ですよ」

仮にお酒が飲める年齢になったところで、俺はゆうせーさんみたい

な対応ができるとは思えない。

話もそんなに面白いわけじゃないし……。もしもつと稼ごうと思つたら、そういうのも勉強しなきゃいけないのかなあ。

現状はありがたいことにバーと家庭教師で事足りているけど、これからもそれが続くとは限らないし……。

「じゃあミーティング始めるよ〜」

「は〜い」

そんなことを考えていたら、開店時間になったようだ。

先輩達は売り上げを気にしているようだけど、俺は特に気にせず、自分の仕事に集中しよう。

「星良さんこんばんは。また来てくれたんですね」

「ええ………っていか行くつて連絡したじゃない」

今日もまた、星良さんがお店に来てくれた。と、いか星良さんは俺と会ってから金曜日に来なかったことは一度もない。

にこりと笑う姿は、まさに大人の女性の余裕がある。やっぱり笑つてる星良さんは素敵だな！

星良さんが着ていたスーツの上着を預かり、席に案内する。グラスに数個氷を放り込めば、カランと良い音をたてて収まった。

席について星良さんといつも通り世間話をする。数分。星良さんが周りをきよろきよると見渡してから、

「今日は随分賑やかなのね」

と聞いて来た。

確かにさつきから店内ではやれドリンク頂いたただのシャンパン頂いたただの声が時たま聞こえてくる。

「あ〜………多分月末だからですね」

「なにか関係あるの?」

「月で売り上げを管理しているので、今月の売り上げをちよつとも上げたいんじゃないですかね?」

毎月、この時期になると特に皆数字を気にしている気がする。

まあ、俺には全く関係ないのだが……。

「ふうくん、皆偉いのね。私会社のためにくなんて思ってた仕事したこと無いけれど……」

「あ、でもそれは同じじゃないですかね？どちらかというど皆、自分の給料を上げたくて頑張っているというか……あとナンバーワンになりたい人もいるのかも？」

「ナンバーワン？」

星良さんがナンバーワンという単語に反応して目を合わせてくる。

「なんか月の売上が一番高かった人が、ナンバーワンになる、みたいな感じですかね？」

「なるほどね……将人は、どうなの？」

「え？僕ですか？僕は全く関係ないですよ。むしろ1番下です。そもそも週1回ですしね」

流石に当然のことだった。週1回でお酒も飲めず、対応するのも星良さんがほとんどなのだから、何人ものお客さんを相手にしてる人達にはかなうはずもない。

ボーイの先輩達も、俺の事情を理解してくれてるし、売上の話も気を遣ってか、してくることはない。皆良い人達だね。

「1番下？」

ぴくり、と星良さんが動きを止めた。

何か引つかかったのか、星良さんが俯いている。

売上の話だろうか？

「週1回って僕だけですし、そもそもお酒飲めないし当然かと……？」

「……許されないわ」

「え？」

絞り出したような低い声音。星良さんから発せられる謎の威圧感に、俺は思わずのけぞった。

「将人が1番下なんて、許されないの。いいでしょう。これは私への挑戦状ってことね……」

「いや、多分違うと思いますよ……」

絶対に違う方向に向かって全力で走り出しそうなんだけど！

おもむろに財布を取り出した星良さんを、慌てて制止する。

「そもそも僕お酒飲めないのでから！どんなに高いお酒買ってもらったところで僕飲めないのでから！」

「いいのよ……これは将来への投資……飲めるようになった頃に開けて飲んで頂戴」

「ボトルシャンパンをいつまで寝かせる気ですか！」

アルコール類は保存状態さえちゃんとしてれば長持ちするとは聞いたことがあるけれど……そういう問題ではない。

「だって悔しいじゃない！私の将人がお店で一番下だなんて！」

「今さらつと『私の』って言いましたよね聞き逃さないですよ！」

「このお店だけではそういう顔させてよ！」

「切実すぎる」

お酒が入って赤みがかった顔でまくしたてる星良さん。

「どうやらこれだけは譲れないようで。」

平気で高いお酒を頼もうとする星良さんの手を、とりあえず下げさせてから。

「わかりましたわかりました！僕がお店の方に確認してきますから！」

「容赦なく高いやつにしてね。私しかお金払う人いないんだから！この人ダメだ目が完全にキマってしまっている。」

一旦確認のために裏に戻ると、丁度タバコを持って裏口の方に行こうとしていた藍香さんを見つけた。

「藍香さんすみません、常連の人が高いお酒を入れようとしてくれるんですけど……」

「あら。よかったじゃない。確かそこに一覧表があるから一番高いのでも——」

「いやいやいや、でも僕まだ飲めないのでし！」

「いいじゃない。テキストに今度飲みますよとか言っておけば」

「そ、そうなんですけど……」

ダメだ。藍香さんも経営者。そりやお店にお金を入れてくれるなら高い方が良いに決まってるか……いやでもなあ……。

と悩んでいると、藍香さんがふふふ、と笑った。

「ま、将人ならそう言うと思っただよ。冗談ってやつ。はい、これ」
そう言っただ渡されたのは、1枚のラミネートされたメニュー表。
その一番上には、『ノンアルコールカクテル』と記されていて。

「……！ありがとうございます！」

「ま、ほどほどにね。くれぐれも距離詰めすぎないように。あなたが遊んであげてる」のを忘れないで」

「はい！」

そのメニュー表を持って、星良さんの席へと戻る。

これなら良心的価格だし、俺も飲めるし！星良さんも納得してくれるだろう。

「ほんとに分かっているのかしら……」

紙タバコをくわえながら呟いた藍香さんの声は聞き取れなかったけれど、呆れたような、それでいて優しさを感じる声音だった。

「星良さん、この中で選んでいただければ僕も飲めます！」

席で待っていた星良さんにメニューを渡す。

よしよし。これなら星良さんのお金を使いたいという願望も達成でき、そして俺も罪悪感を感じることはない。完璧じゃないか。

隣で真剣な表情でメニュー表を眺める星良さんを、笑顔で見守っていると。

「……これ、ボトルはないのよね？」

「えっ……ですね、無いと思います。シャンパンとかではないので」

「……安い」

「えっ？」

耳を疑う単語が出てきた気がするんですが、聞き間違いとかかな……。

「安すぎるわ……」

うん、聞き間違いなわけないよね。

「いやいやいや！星良さんこれ十分高いですから！金銭感覚バグっちゃってますって！」

メニュー表にならぶカクテルは、どれもそこそこなお値段。大学生の俺からしたらなかなか手が出ない金額だ。

「これじゃ将人がナンバーワンになれない……」

「星良さん、それは流石に無理なので諦めてください……」

ナンバーワン争いをしてる人達はそもそも沢山出勤してるし、接客の量もバカにならない。

並ぼうというのが土台無理な話なのだ。

「わかったわ。とりあえず、一番高い奴にしとく」

「……何がとりあえずなのか全然わからないんですが……」

指定されたのは、お店で一番高いカクテル。

俺からしたら相当な値段だ。

ふとメニューから視線を上げた、大きな紫紺の瞳と目が合った。

「ナンバーワンは諦めるわ。仕方ないものね。けれどやつぱり将人が一番下は嫌なの」

「き、気持ち嬉しいですけど……！」

やってることはどうしようもない大人のはずなのに、真剣な表情で見てるものだから反応に困る。

最近の星良さんは直球で攻めてくるようになったから、どうも調子が狂ってしまう。

「とりあえず、この高い奴よろしくね。将人、一緒に飲むわよ！」

「全部は飲めないですよ……?!」

とりあえず指定されたカクテルを頼んで、持ってきてもらう。

「ほら、乾杯しましょう？」

「そ、そうですね、乾杯……」

カチン、とグラス同士が心地よい音をたてた。

グラスに口をつけて傾ければ、柑橘系の酸味が、喉を通り抜ける。

美味しいから飲めるけど、罪悪感もあった。

半分くらい飲んで、一度グラスをテーブルに置く。

その動作を見ている星良さんは、とつても笑顔で、上機嫌だった。

「はー！楽しかった！将人がお酒が飲めるようになったら一緒に飲むのも楽しみね！」

「その時はお手柔らかにお願いしますよ……」

上着を羽織った星良さんの腕を取りながら、お会計へ。

もう途中から怖くて会計はいくらになったかは見ていない。大丈夫なんかこれ……。

レジにいたボーイの先輩に、伝票を手渡す星良さん。

そのまま会計かと思いきや、星良さんは凄いことを口にした。

「すみません、これで将人の売上って少しは増えましたか？」

「え？あー！そんなこと気にしてもらえるなんて、まさとお前良いお客さんついてよかったなあ？」

「そ、そうですねあはは……」

レジを叩きながら、軽快に笑う先輩。

星良さんはなんか良いお客さんって言われて照れてるし、なんだこれ……。

お会計済みのレシートを先輩が、

「まさとの売上、お嬢様のおかげで増えましたよ！まあ、まだひよっこなんで、もっと新規のお嬢様とか増やさないとですけどねー！」

と言って手渡した。

『新規のお嬢様』あたりで、ぴく、と照れていた星良さんの動きが止まる。

まずい、なんか凄く嫌な予感が……。

「じゃあやつぱり一番高いボトルシャンパン入れておいてください。カードで払います」

「星良さん！本日はありがとうございます！またのご来店をお待ちしております!!」

俺は大慌てで、キマった目でクレジットカードを出す星良さんを見

理やり店の外へと押し返すのだった。

番外編 敏腕経営者は繰り返さない

それはまだ、私がとあるバーのスカウトだった頃。

「はい！3番テーブルさんからシャンパン頂きましたありがとうございます！
ございます！」

「「ありがとうございます！」」

騒がしい店内。私は複数人のボーイをスカウトして、そのボーイ達が優秀なこともあってそこそこ稼ぐことができていた。

店長である妙齢の女性が、奥で笑顔を振りまいている私がスカウトしたボーイを一瞥してから私に向き直る。

「やっぱりすごいわね、あの子。相当優秀よ」

「でしよう？私の目に狂いはないの」

「今まで貴方が連れてきた子も十分稼いでたけど……今回は格別、
ね」

確かに、あの子はかなり特殊だった。

普通、いかにボーイであったとしても、極端にパーソナルスペースが近い客や、高慢な客などを前にすると嫌な顔をしたり、極端なボーイだとわざと嫌われるような態度をとるものなのだが、彼にはそれがない。

ここに来るような女は大半が男との交流を楽しみにきており、多かれ少なかれ下心のようなものが見え透いている。だからこそ、表面では取り繕って、裏では平気で悪口を言う。

それが普通のボーイだ。

であるし、私は別にそれで良いと思っっている。

アイドルと同じだ。彼らはお金と引き換えに彼女らに夢を見せているにすぎないのだから。

だけど、彼は違った。

裏表なく客と接し、笑い、楽しむ。

そんな夢物語のような事ができるからこそ、彼はウチのバーでナンバーワンに君臨しているのだ。

「大切に扱って頂戴。そうすればあの子も、貴方もしばらくは安泰よ」

「分かっています」

彼の売上が、私の給料にそのまま響いて来る。

そういうものだ、スカウトというものは。

紙タバコを灰皿に乱雑に捨てて奥を見れば、彼は依然として客に笑顔を振りまいていた。

「あ、お疲れ様です！」

「……お疲れ様優ゆう」

バックヤードでスマホを弄っていた私に声をかけてきたのは、件の優秀なボーイ、優だった。

もう勤務時のカジュアルスーツから私服に着替え、帰り支度を済ませている。

「もうすっかり一流のボーイね」

「いやいやいや！全然そんなことないですよー！」

明るすぎない茶髪。奇抜過ぎない小ぶりなピアス。

身長がそこまで高くないことも相まって、彼は女性客から可愛がられるような接客で人気だった。

「でも、確かに僕向いてるかもとは思いますが！」

「お、随分言うようになったじゃない」

「へへ……お客さんが笑顔になってくれるの普通に嬉しいんですよ」

ね」

照れたように後頭部を搔く優。

彼のこれは天性のものだ。初めて会った時から感じていたが、女性に対する忌避があまりにも無さ過ぎる。

「……それで良く女に言い寄られないわね」

「そこはちゃんと一線引いてますので！ちゃんと僕が一線引いてるとね、皆何故か喜ぶんですよ」

それはもうアイドルとして認定されているからでは……。

自分のモノにならないならせめて、誰のモノにもなつてほしくないと思うのは、女の性か。

もちろん顔面偏差値も高い彼だからこそ、為せるわざなのかもしれない。

「はあ、まあいいわ。なんか食べて帰る？ラーメンくらいだったら奢るわよ」

「やったーラーメン行きましょうラーメン！」

もう深夜ということもあって、この時間に空いている飲食店など居酒屋かラーメン屋くらいのものだ。

スキップ混じりでついてきた優を連れて、私は近くのラーメン屋へと歩を進めるのだった。

事件は、とある冬の日に起きた。

「「「かんぱーいー」」」

その日は、私もお世話になっているバーの年末忘年会。そこそこ大きい居酒屋の一室を貸し切って、私達はお酒を楽しんでいた。

「優あんたすごいじゃない！4ヶ月連続ナンバーワンよ！」

「あはは、たまたまですよ本当に」

「こんな可愛い顔して〜！何人の女を墮としたんだお前は！」

時間が経つにつれて、席を移動する人も増えてくる。

そんな中、優がスタッフ1人1人に挨拶をしながら、お酒を注いでいる。顔が良いあの子にお酌されるのは、女として気分が悪いはずもない。

私はそんな優の様子を眺めながら、ハイボールを胃に流し込んだ。優秀なあの子が他のスタッフから褒められるのは、私としても悪くない。

……悪くないはずなのに、何故だか心がさきさくれ立つ。

あの子は私が連れてきて、鼻が高いはずなのに。ベタベタと優に触る連中に嫌気が差した。

「先輩？ちよつと酷い顔してますよ？」

「……っ、そうね。ちよつとタバコでも吸つてくるわ」

隣に座っていた後輩に心配されて、自分がこの場に相応しくない表情をしていたことを自覚する。

とりあえずタバコの一本でも吸って、落ち着けることにしよう。

席を立て、私は喫煙ルームに向かった。

昨今の喫煙者は生きづらくてしょうがない。

喫茶店で吸えないのは当たり前。最近では居酒屋やパチンコ屋、雀荘など昔は吸えて当たり前であったところでも吸えないのだから。

スタッフでも喫煙者は減った。

最近ではタバコを吸う時はいつも一人な気がする。

喫煙ルームに入って、ポケットから紙タバコとライターを取り出して。ゆっくりとタバコに火を点けた。

肺に悪い空気を思う存分吸い込んでから、ゆっくりと煙を吐いた。
……落ち着く。ささくれ立っていた気分はさざ波のように引いて
いった。

「あ、いたー！」

そんな時。

喫煙ルームの外から声。

ガラスと遠慮なくその扉を開けたのは、最近だと毎日のように顔を
合わせる男の子。

「そんなにタバコばかり吸っていると早死にしますよー！」

「……まあ、それも悪くないわね」

「いやいやダメですよ生きてくださいよー！」

「……っていうか主役がこんなところ来てる場合じゃないでしょ優」
今日の主役と言っても過言ではない、優だった。

さつきまでタバコの煙を嫌そうに手で払っていた彼は、急ににこつ
と笑うと。

「お礼を言いに来ました！」

と言い放った。

私は少し、考えてから。

「……お礼を言われるようなことしたっけ？」

「いやいやいや！したでしょう。というかスカウトしてくれなかつ
たらここにいませんし」

「まあ、それはそうだけど」

しかし優を見ていると、なんでこんな所にいるんだろうと思つてし
まう。

彼の人間性なら、いくらでも欲しい会社はあるだろう。

それこそ、受付とかにいるだけでも。

しかしどうにも、彼は普通の会社が肌に合わなかったようで。
たまたま行く当てもなく夜の繁華街を彼が歩いていたところを、私
が声をかけたという次第だ。

「だから、ありがとうございます。お陰様で、結構楽しいです」
裏表がない。ちよつと私生活がだらしないだけの、良い男。

そんな彼の屈託のない笑みを見て……。

私の中で、良くない感情が湧きあがったのが分かった。

「じゃあ優悪いけど先輩をよろしくね！」

「は、はい！わかりました」

その後。

私は序盤からお酒をだいぶ飲んだせいもあって、久しぶりに歩くのが困難なほどに酔っぱらってしまっていた。

わざわざ私の介抱を願い出た優に肩を借りながら、お店の外に出る。

私の家は、ここからそう遠くはない。

駅から歩いて数分のアパートに住んでいてよかった。

「もーどんだけ飲んだんですか。とりあえず家まで送りますから」

「ごめん……」

文句を言いながらも、私に肩を貸してくれる優。

その肌の温かさを感じて、私の内側に強烈な優越感が走った。

いつも、たくさんのお客さんから貢がれている優。

その優は今、私のために肩を貸して、私を思いやって家まで送ろうとしてくれている。

優にとって私は、特別な存在なんだ。

でも、でもまだ足りない。

今後優がお客さんと接していて、もっと強烈な優越感を感じるためには。

私の心が、仄かに暗い感情で満たされていくのが分かった。

ほどなくして、私の家に着いた。

「はい、つきましたよーちゃんと水飲んで寝てくださいね！」

「ありがと……優あんた、どうやって帰るの？」

「タクシーで帰りますよ。最近では呼べばすぐ来てくれるんですよ！」

玄関先で、誇らしげな優。

今さっきまで私を支えてくれていた優の手を、私は軽く引つ張った。

「お茶くらい出すから上がっていきなさいよ」

「え……いや、いいですよ。僕そんな酔ってないですし……」

「いいから」

遠慮する優を半ば強制的に部屋に導き入れ、ソファに座らせた。

逸る気持ちを抑えて、私はグラスに冷たい麦茶を注ぐ。

酔ってはいたが、自意識は保っていた。このチャンスは、逃してやらない。

「はい」

「あ、ありがとごうございます……でももう帰ります。やっぱり酔っちゃってるみたいですし」

一向にダツフルコートを脱ごうとしない優に、少しイラついた。

もう、私の部屋の中だというのに。

グラスを置いて、お互いの身体がくっつくほどの近さで、隣に座る。

驚いたように目を見開く優。

それがまた、私の嗜虐心を刺激する。

「ええ。酔ってるかもね。ちよっとした間違いが起きてしまうくらいには」

「ちよ……ほんとに、帰ります。酔ってるから、だと思っので」

私が頬にかけた手を、優が振り払う。

ああ、もう、鬱陶しい。

私は無理やり。

優の唇を奪った。

ドン、と身体に衝撃。

私の身体は、優の両手で思い切り突き放されていた。

火照っていた身体が、急激に冷めていく。

目の前の優は、心から失望したような目で。

「……信じてたのに」

一度も私と視線を合わせることなく、部屋から出ていく優を、私はただ眺めることしかできなかつた。

ピピピピ、という無機質な電子音で、目が覚める。

ベッドの隣に置いてあった音の発生源である目覚まし時計の頭を、軽く小突いた。

「……夢、か」

意識が覚醒して、気付く。

今まで見ていたのが、夢だったということに。

昔の、出来事だった。

あれ以来、よくこの事は夢に出てくる。

あの事件の後、優はバーを辞めた。

いきさつは周りに話したし、当時の店長にもこっぴどく叱られた。

優に私を送るように言った後輩には謝られたし、同僚には「優の方

が悪い」という声もあった。

女の部屋に入ったなら、それくらい覚悟しろよ、と。

まあ、それも分かる。けれどきつと、優はそういう男ではなかったのだ。

間違っても、こんな裏社会にいていいような存在じゃなかった。それだけのこと。

時代の流れに合わせて、紙タバコから電子タバコに変えた。

出かける支度を済ませた後、私は一服して気持ちを落ち着ける。

昼の青空と自分の吐き出した煙が、酷くミスマッチだった。

「……今は、どうしてるかしらね」

あれから、数年が経った。

優が今何をしているのか、全く知らない。

私は、近くのアパートを目的地に、家を出た。

あれから、色々なことがあった。

数年のキャリアを経て、自分の店も持った。

ただ、あの事があって以来、私は一つ決めたことがある。

自分の店かどうかに関わらず、ボーイには、もう絶対に手を出さないこと。

別に、ボーイに恋愛禁止とかはしない。勝手にすれば良いと思う。

実際にそうして幸せを掴み取って辞めていったボーイも沢山いる。

けれどもう、自分であんな間違いを起こさないために。

覚悟のついでに、形式上の結婚も済ませた。

彼らにはそれぞれ、こんな薄暗い社会で生きなければならぬ理由がある。

そんな子達の、居場所になってあげたい。

今は、それだけが私の願い。

目的地に着いて、足を止めた。

2度、ドアをノック。

ここには、最近可愛がっている子が住んでいる。
……個人的にはそろそろ、もう少し気を許してくれても良いと思う
のだけれど。

なんて思うのも、あまり良くないのかもしれない。

時刻は10時過ぎ。夜社会に生きる私達には、まだ朝の時間。
だから挨拶は、そう。

「おはよう！将人〜！朝よ〜！」

しばらくして、がちやり、と扉が開く。

まだ寝ぐせの目立つ黒髪。寝起きでも可愛らしい笑みは、彼によく
似ていた。

「おはようございます、藍香さん……」

「ん、おはよ」

私に特権があるならそう、この寝起き姿を見れることくらいが、丁
度良い。

バスケット部JCは教える

秋風が少し肌寒い季節。

それでも、運動をすればすぐに身体はあつたかくなるから不思議。……そして運動をしていなくても、あつたかいと感ずることが実はできちやったりします。

「お、あそこが多分目的地かな？」

「多分、そうですね！」

私は隣で歩いている将人さんの手を掴んで、早足で目的の場所に向かっていく。

「ちよいちよい！由佳そんな急がなくても！」

「いえいえ！急がないと場所取られちゃうかもしれないし！」

「その時は高確率で既にとられてるよって相変わらず力強いな?!」後ろから響いて来る将人さんの声を聞きながら、ふふふって笑う。

将人さんといれば、寒さなんてへっちゃらなんだから！

「あちや、もう既に使われちゃってるね」

「そうですね……休日ですし」

だむだむだむ、とバスケットボールが地面に弾む音が響く。

今日は、将人さんと新しくバスケットができる場所探しの日。マップとにらめっこして見つけた、あまり人がいなさそうな公園だったんだけど、休日だしやっぱり先客はいるよね。

小学生らしき女の子達2人がバスケットゴールを使用中。

「とりあえず、あそこのベンチ行こうか」

将人さんが指さす先に、屋根付きのベンチが。

とりあえず私達はそこに荷物を置いて。小学生の子達がバスケットをするのを眺めながら、私と将人さんもベンチに腰を下ろしました。

「ここなら穴場かなって思ったけど地元の小学生くらいはいるよね

え」

「でもでも、もしかしたら、平日の午後とかは空いてるかもしれないし……」

未だに、私と将人さんの新しいバスケットコート探しは難航中。

近くに体育館とかもあるにはあるけど、やっぱりどこも混んでるし、体育館だと私の知っている人もいたりしてちよつと恥ずかしいし……。

冬に入ったら外でバスケットをするのはちよつと難しくなるし、なるべく早く新しい場所を見つけたんだけど……。

「そうだねえ、とりあえずここも候補ってことで、一応コート空くかもしれないし、身体動かすところか？」

「ですねー」

将人さんに言われて、私もベンチから立ち上がる。

寒い時期はいきなり動き出すと危ないし、入念に準備運動しなくちゃね。

しばらく将人さんとウォーミングアップを続けていると、小学生達が帰るのか休憩なのかはわからないけど、コートから離れて行ったので。

準備運動も十分にできていた将人さんと私は、ボールを持ってコートへ。

「よーしじゃあシューティングしよっか」

「はいー」

一旦コート探しのことは頭から外して、私達はバスケットをすることに。

そろそろ冬の大会も控えてるし、しつかり練習練習！

ボールが地面に弾む音と、シューズが地面をこすれる独特な音。この音が、私は好きだった。

これを聞いていると、自然と気持ちが引きしまる。

……なんだけど、やっぱりたまたまに見てしまう。

「……よつと」

軽やかにドリブル、そしてシュート。

ああ、やっぱり将人さんはカッコ良い。そしてそんなカッコ良い将人さんと一緒にバスケができているというこの事実が、何よりも嬉しい。

気合いを入れ直して、私も自分のプレーに集中。

ドリブルで少しゴールに近づいて、後ろ側に飛びながらのジャンプシュット。

けれど私が放ったボールは、ガンッ、という音をたててリングに阻まれた。

この前は上手くいったけど、やっぱりこれは難しいな……。

外れたボールを拾って、よし、もう一回……。

「あの一！」

「え？」

後ろからかかった声に、驚いて振り向く。

そこには、さっきまでこのコートを使っていた小学生2人が、バスケットボールを両手に抱えて立っていた。

なんだろう、と2人からの言葉を待っていると。

「バスケットボール教えてくださいー！」

ぺこり、と律儀に頭を下げてくる2人組。な、なるほど、そういう感じね……。

そりや確かに将人さんのプレーを見たら教えてもらいたくもなるか……私も最初はそうだったし。

「え、つと……そしたら教えてくれるかどうか、聞いて来るね」

「？」

少しくらいならいいかな、と将人さんに許可をもらいにいこうとして……2人が何故か首を傾げていることに気付く。

あれ、なんか私変なこと言ったかな……？

「お姉さんにバスケットボール教えて欲しいです！」

「え、ええ？」

あ、私?!

「良いんじゃない？」

「……！将人さん」

いつのまにやら将人さんも後ろにいて、笑顔でこちらの様子を見守っていた。

「由佳のプレー見て、こうなってみたいって思ったんでしょ？それなら、由佳が教えてあげればいいよ」

「で、でも……将人さんの方が……」

「俺のことは気にしなくていいから！」

将人さんにそう言われたら、断ることもできない。

うーん、同級生の皆に教えることはたまにあっただけど、年下に教える機会なんてなかったし……。

「……イケメンだ」

「まあ、カッコいいね」

「イケメンに教えてもらおうか？」

「あ、はい、じゃあ私が教えてあげるからね!!」

なにやら良くない作戦会議を始めた小学生達を見て、私は迷いなく彼女達の一時的コーチを受け持つことを決めたのだった。

小学3年生らしい彼女達のバスケットは、技術的にはまだまだなのは当たり前なんだけど。

さっきの作戦会議からは考えられないほど意欲的でびっくり。

カチューシャをつけた女の子は、運動神経が良いのだろう。教えたことをすぐに実行していたし。

ポニーテールの子はシュートフォームがこの年齢なのになんか綺麗で驚いた。

気付けば私も、この子達につられるように真剣にバスケットを教えている。

時間が経つのは、あっという間だった。

「まず基本はドリブルだから、やっぱりそこはたくさん練習して、ボールを見なくてもドリブルできるようにするのが良いと思う」

「はいー!!」

……またこのコートに来るかは分からないけど、もし次来た時にこの子達がいたら、またバスケットを見てみたいな。

私はそんなことを思いながら、リストバンドで額の汗を拭いた。

「皆終わったらちゃんとしてストレッチしてから帰るんだよ」

ずっとコート横で私達を見守ってくれていた将人さんが、タオルを持ってこっちに。

ああ、良いなあ、将人さんがマネージャーだったら私練習ももっと楽しくなると思う……あ、でも部活の人達皆に知られちゃうのは嫌だな……。

「はいーい！」

将人さんの言葉に従い、2人はストレッチを始めた。

「将人さん、ごめんなさい、待たせちゃって」

「いやいやー！良いんだよ。俺もボールは使ってたし、由佳の良い所も見れたし」

「もー……」

いつもの笑顔でそんな風に言われたら、嬉しくないはずがない。ずるいなあ、将人さんは。

「お兄さんー！」

「ん？どうしたの？」

「ストレッチ難しいので、うしろから押してくださいーい」

「良いよー」

……いや2人いるんだから、お互いで押し合えば良くない……？と思った時には、もう遅かった。

「私もお兄さんの後ろから押してあげるねー！」

「こらこら、危ないよストレッチの最中は」

ポニーテールの女の子の背中を、将人さんが押した瞬間、カチューシャをつけた女の子が、将人さんの後ろに覆いかぶさるように乗った。

「私もお兄さんの背中押したい！」

「ええ？俺別にストレッチまだしなくても……」

「良いからーやるのー！」

かと思えば2人がかりで、将人さんのストレッチを手伝うという名目で前と後ろから挟んで。

……そんな2人の表情が、バスケットをやっていた時のソレとは程遠く。
べたべたと将人さんの身体を堪能する、完全に下心丸出しの女の顔だったのだ。

「そんなにストレッチしたいなら、お姉さんが一緒にやってあげるね!!!」

「うわっお姉ちゃんが怒った〜!」

「逃げろ〜!」

もー!結局こうなるんだから!!

「ごめんなさい、今日は……」

「全然!楽しかったよ、ありがとうね」

結局、小学生の2人が帰った後、30分ほど練習をして、私達もコートを後にした。

もう暗くなるのが早くなってきちゃったなあ。

そろそろ新しい場所探しは諦めて、近くの体育館でやるしかないのかな。

「初めて由佳が年下の子を相手にしてるの見て、微笑ましかったよ」
「そう、ですかね……?まったく、あの子達バスケットやってる時はあんなにまじめだったのに……」

将人さんがカッコ良いのはわかるけど、そんなべたべたして良いわけないんだから……教育に良くないです!

「なんかお姉さんって感じだったね」

「お姉さん、ですか……」

秋風が街路樹を揺らして——私は自分の身体を軽く抱きしめた。
流星に夜は、ちよつと冷え込む。

もうしばらく歩けば、もう私の家の近く。最近はこのままで送ってもらって解散となるのが恒例。

今日もきつとその例に漏れず、ここで解散だと思う。

「お、もう着いたね。じゃあまた、バスケットは探しに行こうね」

「……あの」

「？」

私が呼び止めたことで、将人さんは立ち止まってくれた。

そんな将人さんの右手を、掴んで握る。

初めて会った頃は、身体に触れるのすらできないくらい緊張してたけど、今は違う。

……だけど、初めて会った頃から、この胸の高鳴りは、ずっと変わってない。

不思議そうな顔をしているお兄さんの瞳を、正面から見た。

「私が『お姉さん』になったら、将人さんの彼女にしてくださいね」

「……！」

この気持ちは、ずっと変わらない。

いつか。将人さんと並んでいても兄妹ではなく、彼女と見てもらえるくらい、大きくなったら。

私が将人さんの、彼女になりたい。

「……で、では！今日はありがとうございました！」

勢いよく将人さんに手を振って。私は駆け出した。

最後までカツコ良く、はできないけど！

気持ちを伝えるのは大事なことだよね！

いつの間にやら寒さすら感じなくなって、燃えるように熱い身体を自覚しながら、私は家へと全力疾走で向かうのでした。

幼馴染系JDは思い出す

『また明日ね!』

『うん、また明日』

幼い頃の、口約束。

無責任で、だけど、きっと明日も必ず会えると、無邪気にそう信じて。

楽しかった。

たった1年程度の思い出でしかないけれど、それは確かに、楽しかった記憶として残っている。

グローブも使わずにボールを投げ合っていた時に、通りかかった人からもらった、おさがりのグローブ。

決して新品ではなかったし、ボロボロだったけど。

それは今でも、私の大切な宝物だ。

本当に、突然だった。

元々連絡先を持ってたわけでもなく、いつもの場所に現れない彼を、私は待ち続けた。

次の日も次の日も……。

だけど、ついぞ彼は現れなかった。

私は泣いた。目一杯泣いた。

——彼のが好きだったんだと気付いたのは、それからしばらく経った後だった。

びびびび、という目覚ましの音で、意識が覚醒する。

……まただ、またこの夢。

高校に入ってから全然見なかったのに、最近やたらこの夢を見る

気がする。

ぼーっとする頭を無理やり起こして、顔を洗う。

いつまでも昔のことを思い出していたって、仕方ないのだから。

タオルで顔を拭いて、そして充電器を差したままのスマートフォンを手に取る。

通知を見れば、将人から連絡が入っていた。

《将人》『おはよう駅に15時には着くようにするね』

《将人》『なんか18時くらいから雨らしいから早めに移動しようか』

今日は、将人とデートの予定。更に明日はみずほと3人でテーマパークに行こうって話になってる。

ようするに、この2日間は勝負の2日間なのだ。

……なんだけど、私の今の気持ちは、とても表現が難しいもので。将人のことは好き。控えめに言って大好き。

そして、最初に私に生まれた感情は、誰にも渡したくない、独占欲だった。

けれど、将人のことをどんどん知っていく度……将人の周りにいる女性は、皆が将人のことを好きなんじゃないかと思うようになってきた。

……誰よりも、私が一番将人のことが好き。それを譲るつもりは全然ない。

だけれど、あの将人のことだ。今誰かがこの気持ちを伝えて、そして付き合つてと言った時に、誰かの手をとることがあるのだろうか。

それならばむしろ、いっそ。

全員で、囲んでしまったほうが良いのではないか。

なんて、非常識なことを考えてしまう。

自分がどれだけふざけた考えをしているかは、自覚しているつもり。

それでも、どんな方法であったとしても、将人を欲しいと願ってしまふ自分があるのも、また事実。

それが、自分1人のものにならなかつたとしても、だ。

将人に、返信を打つ。

今日の夜は、明日のテーマパークに備えて、買い物に行く予定。そしてその前に少し時間があるから、今日はみずほはバイトでないということもあって、以前将人とバツティングセンターに行った時から話していた、いつかキャッチボールでもしたいね、という約束をやってしまったというものだった。

玄関付近に置いてある、自分のソフト道具を見に行く。

現役時代に使っていた自分のグローブを手にとって……その奥に、大切に保管してある、ボロボロのグローブが目に入った。

軽く、それも手に取る。

「……今どうしてるんだろ」

昔一緒にキャッチボールをしていた男の子と、お揃いでもらったグローブ。

未練がましい私は、ずっとそれを取っておいていた。

「元気なら、それで良いんだけど」

夢にまで出てくるのだ。それはきつと楽しい記憶なのだろう。

今では、何を話したのかすら、あまり覚えていないけれど。

それから、ずっとソフトを学生のうちはやっていたのだから、我ながら笑ってしまうほど単純だ。

多分、あれが私の初恋なのだ。

幼い頃の恋愛なんて、ノーカンってみずほは言ってたけれど。

それでも私にとっては、大切な記憶。

まだ十分使える状態だが、如何せん古いものだ。最近のものとは比較にならないくらい使いにくいので、そつと、そのグローブを奥にしまおう。

御守りみたいなものだ。私はこれを、捨てることなんかできなかつた。

「さて、と。準備しなきゃね」

運動する予定がある、とはいえ、大好きな彼の目の前だ。

準備しすぎなんてことはない。服装にメイク、やることはたくさんある。

私は気分を切り替えて、クローゼットの前に立つのだった。

待ち合わせの駅についた。

改札を通って少し回りを見渡せば、将人の姿を見つけることができた。

黒のロングコートに、グレーのニットセーター。冬になっても……いや冬だからこそ。将人のスタイルの良さと、ファッションセンスの良さが改めて再認識できる。

相変わらず暴力的なカツコ良さだ。

「将人おまたせ！」

「お、おはよ恋海。全然待ってないから平気よ」

周りにいた女性が、羨ましそうにこちらを見ている。

羨ましかろう！私、今からこの人とデートします！

「じゃ、いこっか！」

「ん。ってか冷静に考えてもう冬なのにキャッチボールするの面白いね」

「ま、まあまあ！まだそんなに寒くないから！」

確かにキャッチボールしたいね、って話をした時はまだ暑かったからだけど、もうだいぶ寒くなっちゃったからなあ……。

駅から公園までは歩いて15分ほど。

15分なんて、将人と話していれば一瞬だ。

「不安なのは天気だよね。なんか、これから雨降るっぽいし」

「そうだね……もし降りそうになったら早めに駅に戻ろう！折り畳み傘も持ってきたから！」

「あ、俺も一応持ってきたよ。そうしよっか」

ぐ、将人も折りたたみ傘を持ってきてしまったか……あわよくば相合傘チャンスだと思ったのに……。

ひとつ目論見が失敗したことは悲しく思いながらも、まあそもそも

雨に降られない方が良いに決まっているのでそこは諦める。

「俺グローブ持ってたんだけど、だいぶ古い奴だったや」

「あ、そうだったんだ、使えそう？」

「多分使える……と思うんだけど、お手柔らかに」

「大丈夫だよ！私も古いグローブ持ってるけど、案外使えるもんだよ」

今ではあの古いグローブは使っていないけれど、昔は普通に使ってたし。

親から新しいグローブ買ってもらうまでは、ずっと。

「そういえば、恋海はポジションどこだったの？」

「あ、どこだと思う？」

「うーん、そうだなあ……」

公園に着くまで、他愛もない話で盛り上がる。

隣を歩いているのが将人だと、気分も勝手に上がっていくね！

「ついた〜！」

「お、やっぱ全然人いないね」

やはり天気があまり良くないからだろうか。公園にあまり人はいなかった。

いやそもそも、もうこの時期に外で遊ぼうなんて考えるのは、小学生とかそういう子達が多いからかな……。

ベンチに荷物を置きつつ、軽く肩を回して準備運動。

ボール投げるの久しぶりだな〜！大丈夫かな。

ボールは、将人は持っていないとのことだったので、私がソフト用のボールでよければと持参。

「ヤバイできるか心配になつてきた」

「大丈夫だよ！そんな強く投げないし！」

「お手柔らかに……」

ちよつと弱気になつてる将人も可愛いな、なんて思いながら。

軽く準備運動を終えて、私達は距離を取る。そんな激しい運動をす

るわけでもなし、お互いコートも着たままだ。

「じゃあ行くよ〜ほい〜」

「つとと……」

軽く投げたボールだったけど、将人が取り切れずに地面に落ちてしまった。

「ごめんやっぱこのグローブだとソフトのボールとるの難しいなあ」

「そうなの？ちよつと見せて？」

確かに、将人のグローブはかなり小さそう、と思つて近づいてみる。ひよこりと、将人の手を覗き込んでみた。

「——え？」

思わず、声が出た。

そのグローブは、見たことがあつたから。

見たことがある、なんてレベルじゃない。

さつき見たのだ。私の、家に大切に保管してあるグローブ。

それと、全く同じデザイン。

古くて、ボロボロで。

重いハンマーで殴られたくらいのも、衝撃だった。

理解が、追いつかない。

「……ちよ、ちよつと待つて将人」

「え？」

「これ、どこで、買ったの？」

「いや、買ったというか、たしか……もらったような」

私の脳が、一つの結論に辿り着く。

人生で感じたことも無いような衝撃が、私の身体を貫いた。

こんなことが、あるんだ。

思い出したわけでもないのに、その言葉は。呼称は、口をついてでた。

「まーくん、なの？」

「え……？」

記憶が、少しずつ甦る。

あやふやだった輪郭が、徐に形作られていく。

『明日もキャッチボールしようね！』

『また明日ね！』

言われた言葉を、覚えている。

交わした約束を、覚えている。

会えなくなっただ後も、ずっと会いたかった。

もういちど彼と話したいと、ずっと思っていた。

はっ、と、思い出す。

将人と、初めて会った時の事。

ベンチで、パソコンとにらめっこしていた彼。

今思えば、あの時。自然と足が向かったのは。

ずっと、会いたかった人に、会えたからなのかもしれない。

点と点が、線になって繋がる。

そして繋がってしまえば……湧いて来るのは、言葉にはできないくらいいの、喜びだけだった。

つけていたグローブも外して、私は将人に抱き着いた。

抱き着いてからようやく、自分の目から涙が流れていることに気付いた。

「そうなんだ……将人が、将人がまーくんだったんだ……！ずっと、ずっと会いたかった！どこに行ってたの？なんで急にいなくなっちゃったの?!」

「ちよ、ちよっと待って恋海」

将人に、両肩を掴まれる。

最高の気分だった。私がずっと好きだった人は、やっぱり再会してからも好きになれる、唯一無二の人だったんだって気付いて。

これはやっぱり、運命の出会いだったんだって、心から思えて。

将人と、目が合う。

ああ、やっぱり大好きだ。

将人に、目の前から見つめられて、それで――

「多分、人違い、だと思う……」

「え……?」

急激に、身体の温度が下がった。

な、なにを、言ってるの？

「そ、そんなはず、ないよね？だってこれ、一緒にもらった、グロー

ブだよね？小さい頃、あの公園で、一年くらい、ずっと一緒にキャッチボールを、して」

「……ぶごめん」

ごめん？ごめんって、どうして？

「嘘、だよね？え、私全然なくなっちゃったこととか、怒ってないよ？また会えて、嬉しいって気持ちだけで。名前も！今までずっと忘れちゃってたんだけど、まーくんって呼んでたの、思い出して、それで」

自分でも、早口で捲し立てているのは分かっている。

でも、それを聞いている将人の表情が、ずっと、申し訳なさそうな、辛い顔で。

「……ぶごめん」

——意味が、わからなかった。

今はつきりと思いついたから言える。絶対に、あの日、あの場所で一緒にキャッチボールをしていたのは、この将人なのだ。

グローブも、かなり古いデザインで、今では絶対に売っていないものだとわかるし、あの日一緒にもらったということからも、絶対そうなのに。

なのに。

なんで、否定するの？

「ね、ねえ、謝られても、わかんないよ。だって、私、昔まーくんに会ったの、本当に楽しかったんだよ？もう会えないかもって思っても、諦めきれなくて、それで、ソフト部にまで入って、続けて」

自分でも、支離滅裂なことを言っているかもという自覚はあった。けれど、止められなかった。

受け入れられなかった。

ずっと苦しそうな表情で、俯く将人の気持ちは、わからなくて。怖かったから。

「誰にも言っちゃいけないことなの？な、なら内緒にするよ！秘密にするから、ねえ、だからさ……そうだよ、って言ってるよ……」

「……」
「それだけで、良いんだよ、うんって、また会えたねって、それだけで……」

いつの間にか、両肩を掴んでいたのは私の方になっていた。その華奢な身体を揺すっても、彼の表情は晴れないまま。

力なく、腕を下ろした。

……頭に、冷たい何かが降って来た。

「——どうして、嘘を吐くの？」

「……嘘じゃ、ないんだよ」

「嘘!!」

自分でも、びっくりするくらい大きな声が出た。

「違うはずない!!だって、まーくんって呼んで、同じグローブを二つ、もらって!」

「……」

「大学でも、初めて見つけた時に、自然と声をかけてた!今思えば、あの時からきつと、心のどこかで気付いてたんだよ……!こんなに嬉しいことなのに、どうして……ッ」

あなたは、そんなに悲しい顔をするの？

言葉が出なくて、唇を噛んだ。

雨が、強く降って来た。

頬から流れる涙は、嬉し涙からいつの間にか、変わっていた。

表情の変わらない彼に、背を向ける。

「……私、帰るね」

荷物を持って、私は駆け出した。

一度も振り返らなかつた。

「なんで、どうして……!」

痛みと、悲しみと、困惑と、怒りが混ざって。

私は、ただ雨が降る空を見上げることしかできなかつた。

元気っ娘JDは遊園地デートする

『明日行かないってどういうこと?』

『ごめん……ちよっと、気持ちの整理が、つかなくて』

『いや、ちよっとはわかったよ? 恋海が昔から言ってた、初恋の男の子が、将人だったんでしょ?』

『……うん』

『それめっちゃすごいじゃん! 流石恋海、持ってるものが違うね! まさに運命ってやつだよ! かー嫉妬しちゃうねえ』

『……』

『でも、それを認めてくれなかったんだね。なるほどね……将人もなんか事情があるのかなあ』

『わかんない、よ』

『……でもさ、仮にそれが将人の中で違ってたとしても、恋海にとつての将人は何も変わらなくなる? 好きだって気持ちは、ずっとあるわけでしょ?』

『そう、だけど……』

『シヨックなのはさ、分かるよ。私じゃ想像つかないくらい、シヨックだったんだよね』

『……とりあえず、明日は二人で行ってきて、いいから』

『……本当に? 本当にいいの?』

『……うん』

『私は恋海のこと大好きだし、将人のこと好きになっちゃった時も……恋海が優しかったから、今があつて、すごく感謝してる』

『一緒に将人落としちゃうおうぜの話も、恋海とならきつとできると思ったし、幼馴染なんて最強カードじゃん! 絶対勝ったようなもんじゃん!』

『——なのに、恋海は諦めちゃうの?』

『……ッ諦めない! 諦めたくなんか、ないよ……!』

『……うん、そうだよ。恋海なら、きっとそう言ってくれると思うた』

『……私、明日将人に告白するね』

『……え?』

『え、も何も!言つてたじゃん、将人の周りに先を越される前に、私達も頑張ろうーって。その絶好のチャンスじゃない?明日なんてさ』

『いや、だけど……』

『だけでもなにもない!だから、恋海も、きちんと、想いを伝えて。』

私明日、答えはもらわないから』

『みずほ……』

『明日、来なくて本当に良いの?』

『……』

『今まで、私たくさん告白してきたけど——今回は、本気だよ』

『……うん、わかってる』

『だから、来てね。待ってるから』

『じゃないと、将人君のハートは、私が頂いちやうぞ!なんちて!』

『みずほ……』

って、言ったのに。

待ち合わせの駅で、私はスマートフォン画面を見ながらため息を

ついた。

《恋海》『ごめん、私無しで楽しんできて。私のことは、気にしないで、いいから』

「気にしないなんて、無理だっけわかってるのかなあ……」

今はおそらく気落ちしているだろう親友の姿を想う。

昨日、突然夕方に恋海から連絡があった。

今日のデートは、参加できない、と。

事情を聞いてみると、確かにそれはショックな出来事で……私からも少し、将人に話を聞けたらな、なんて思う。

そして私は私で、ずっとこのデートを楽しみにしていたからこそ、残念ではある。

できればこのデートで将人のハートを射止め、私達のものにしてしまおうと思っていたから。

それは、一か月ほど前の話。

「ってことは、やっぱり、将人の周りにはもっと女の子がいるってことだよな」

「そうなりますなあ……まあ、ボーイズバーで働いてるくらいですし……」

大学からの帰り道にある喫茶店で、私の恋海はカフェオレに口をつけながら情報の共有をしていた。

将人が私の運命の人というのがバレてしまった以上、バーで働いているというのも言うしかないわけで。

恋海にその事を話したら、どうやら恋海も、少し前に本人から聞いていたらしい。

「どうして将人先に言ってくれなかったの？」

「いや、そりゃあんまりボーイズバーで働いてます、って言いたくなくなかったんじゃない？だって、止めるでしょ、恋海」

「それはまあ、確かに」

つまらなさそうに頬を膨らませて、恋海がカフェオレの入ったグラスをつつく。

「とにかく、私達で先に将人を確保する必要があるよねって話だよ
ね」

「そうそう！この前家庭教師やってるっていう女子高生と話したんだけど、やっぱり将人のこと好きって言ってたし」

「まゝそりやそうか。あの将人だもんねえ」

今時珍しい、外見も中身も完璧超人。

私達の周りの友達はそのなイケメンか？って言うてくるけど、皆目がきつと壊れちゃったんだね。

「……私はなんか、将人のことを好きな人達で、将人囲んじゃえば、なんて思ったりするんだけど……」

「ええっ!?だ、大胆なことを言うね恋海……」

「だって、あんな優良物件今時、独り占めなんて多分無理だし……そりや、できれば私とみずほで独占したいけど、私達より魅力的な人がいたら、将人にふられるの、無理だなんて」

「将人にふられたら無理という気持ちには、納得ですけども……」

確かに、世の中では一夫多妻制を支持する声が大きくなってきているし、そういうのも、無しではないんだろう。

……でも。

「でもやっぱり、そうだとしても、その中で一番は私達でありたいなって、思っちゃうな……」

「それは、そうだよね……」

仮に一夫多妻制になって、将人が他の人とも付き合いたい、みたいな事になったとして……それでも、最初は、一番は、私達でありたい。

「それに！今誰かと付き合うってなって、その人とだけ付き合いますって言われたら私達終わりなんだよ?!」

「うぐ……」

「早急に将人氏を確保する必要があると思うであります！」

「そう、だね」

ビシッと敬礼しながら恋海に提案。

昔から、思ったらすぐ行動だったけど、今回は気持ちが本気すぎて躊躇っていた。

だけでもう、猶予はきつと、長くない。

なら、私の持ち前の猪突猛進っぷりでいってやれ!と思うわけで。

「よし、じゃあ、やろう! 私達で、とっておきのデートプラン、そして告白プランを!」

「あいあいさー!」

なんてことがあつて、今回のテーマパークデートが決まったわけなんだけど。

その直前で、このアクシデント。

それでも、私の気持ちに揺らぎは一切ない。

「恋海、私、本気だからね」

告白する。

今まで私は、何度も何度も告白自体はしてきた。

けれど、そのほとんどは、私が恋に恋してただけなんだったって、分かる。

そして止めることのできないこの気持ちは、絶対にぶつけなきゃダメだって心が叫んでる。

このままにしておくと、恋海を出し抜くような形になってしまうと、思っていたから。

だから、今日この2人いる場所で、決めようと思っていたのだが。

「私、1人でも、やっちゃうからね」

覚悟を決めて、深呼吸。

大丈夫、今日はコーデも気合入れまくってきたのだ。

冬だから生足こそできないけど、黒のタイツに、黒レザーのショーツパンツ。上は白のニットに、ネックレスをして、上から紺のダウンコート。

これは私の、いわゆる、勝負服、という奴だね！

「みずほ！」

「おおく！将人っち！おはよう」

なんて思っていると、将人がやってきた。

うくん、笑顔で歩いてくるイケメンは最高だね！

しかし、笑顔も束の間、すぐに将人は申し訳なさそうな表情になって。

「ごめんね、急に恋海来れなくなっちゃって……俺のせいだし、別の日に延期でも良いかなって思ったんだけど……」

「仕方ないよ！もうチケット買ったしね！……それとも、将人氏はみずほ1人では不満ですか……？」

「いやいやいや！そんなことないけど！」

「ならよかった！」

2人で、テーマパークへと向かう。

少なからず、将人も精神的に辛そうだったから、冗談も忘れずに。せつかくのデートなんだ、楽しんでくれないとね！

歩きがてら、事情は聞ける範囲で聞いてみた。

深くは話せないけど、やっぱり、自分自身は、昔恋海が会った人じゃない、とのこと。

うーん、私には判別できっこないから、難しいねえ。

「あー！将人あれ、つけようよ！おそろっち！」

「お、やろつか、たまにはこういうのもね」

テーマパークの入り口にあったショップには、キャラクターを模したカチューシャが売ってあった。

これを彼氏とお揃いにするの、夢だったんだよねー！

お揃いのものを買って、つけてみる。

私は、ツインテールにしていた髪ゴムを外して、髪をおろしてから……カチューシャをつけた。

その様子を見ていた将人が少しきよとん、としていたのを見て……少し、嬉しくなる。

「もしかして、髪をおろしたみずほちゃんに見惚れちゃったかな？」

「あ、ああ、ごめん。見慣れなかったから、かな」

「にしし……将人もばっちり似合ってるよ？」

「いやみずほの方が絶対似合ってるって！」

少しは、覚えててくれたのかな、なんて。

……もちろん、恋海のことは気がかり。

でも、やっぱり私は今日この想いを伝えると決めたから。

将人に好きになってもらうために、全力で遊ぶんだ！

「これ乗ろうよ将人！めっちゃ回るやつ！」

「めちやくちや怖くない?!平気なの?!」

「よゆーよゆー！行くぞ〜！」

「待って待って！」

絶叫マシンで、将人が意外とビビりなことを知って。

「これめっちゃ食べたかったんだよね〜！あ、写真撮ろ〜！」

「みずほは写真好きだよね〜」

「そりゃあね！大切な思い出を、形として残すのが好き！」

沢山写真も撮って。

私はこれでもかかってくらいテーマパークを楽しんでいた。全力で楽しんでいたこともあって。

気付けば、すぐに日は傾き始めていた。
最近では暗くなるのも、だいぶ早くなってきたな、って思う。

私と将人は、とあるアトラクションを降りて、お互いお手洗いというところで一時解散。

入ったお手洗いに設置されている洗面の前で、私は自分の顔色を確認する。

「よ、酔ったかも……」

最近新しくできた乗り物に乗って見たら、結構視覚的にぐるぐる回るやつで、私はちよつと酔ってしまった。

まずい。こんなことで、将人に気を遣わせるわけには……!!

ぱしぱし、と両頬を叩いて、気合入れ直し。

しつかりしないと。今日は大事な日なんだから。

お手洗いから出ると、すぐ近くのベンチに将人は座っていた。

「将人お待ちせ〜! き、次行こ〜」

「あ、ごめんみずほ、ちよつと休憩しても良い?」

「……う? 良いよ〜私も少し休みたかったから助かる!」

偽らざる本音なので、私も将人の向かいの席に腰掛けた。

「あ、さつきそこで水買ってきたんだけど、飲む?」

差し出された水のペットボトルを見て、私は全てを理解してしまっ

た。

知り合ってから期間で、将人のことを良く知ることができたからこそ、この行動の意味が分からないはずもなく。

「……将人つちには、敵わないなあ……」

「ははは……ちよつと、辛そうだったからね」

どうやら、乗り物を降りてからここまでの段階で、気付かれてしまっていたらしい。

ほんと、将人のこういうところが……どうしようもなく好きだった。

手渡されたペットボトルの水を、一口飲んでから。
私は、将人に正面から向き合った。

「……ねえ、将人っち」

「ん？」

さあ、私も、覚悟を決めよう。

「今日最後に、あれ、乗ろうね」

私が指さした先。

そこには、このテーマパークで一番大きい——観覧車があった。

元氣っ娘JDの気持ちは、嘘じゃない

恋というものに憧れていた。

ドラマや映画で見る『恋愛』は、とても素敵なもので。

私もこんな恋がしてみたいって、強くそう思った。

……だけど。

『好きですー付き合ってくださいー!』

まだ中学生や、高校生だった頃。

頭を下げて、この気持ちを口にするたび。

本当に私は今、あの日憧れた恋愛ができているのかな、って実は疑問だった。

好き?……うーん、好き、だと思う。

きつと、付き合ったら好きになれるかも。

なんて。

そんな風に思いながら、嘘の感情を並べてた。

……今思えば、とんだ迷惑だったよね。

フラれて、当然だったと思う。軽薄で、下心だけの、空虚な言葉だったから。

でもね。

だからこそ……だからこそ私は、今自信を持って言えるんだ。

ねえ、将人。

私のこの気持ちは、私から溢れ出て止まらない、この感情だけは――



家に帰ってきた俺が一番にしたことは、シャワーを浴びることだった。

雨でびしょびしょになった身体を、シャワーで洗い流す。

頭からシャワーを浴びながら、俺は今日あったことを思い出していた。

『誰にも言っちゃいけないことなの？な、なら内緒にするよ！秘密にするから、ねえ、だからさ……そうだよ、って言つてよ……』

『……』

『それだけで、良いんだよ、うんって、また会えたねって、それだけで……』

『……』

恋海と会ったことがある、というのは、多分紛れもない事実。

確かに俺は、昔良くキャッチボールをしていた女の子がいた。

児童養護施設にいた俺に何の躊躇いもなく話しかけてくれて、仲良くしてくれて。

公園で一緒にキャッチボールをするのが日課になった。

当時は同年代の友達があんまりいなくて。そういう意味でも、彼女の存在はありがたくて、嬉しかった。

シャワーを、一度止める。

視界を遮るように、濡れた髪から水が滴っていた。

……だけど。だけどだ。

「それは多分、俺じゃない……」

正確には、今ここにいる片里将人ではない、と言うべきだろうか。俺が転生して、この世界にやって来た自覚があるのが、大学入学前……。

幼い頃に恋海と会っていた記憶はもちろんあるものの、それは前の世界での話で、今生きているこの世界では、間違いなく初対面なのだ。もしかしたら、俺の持っている記憶と、恋海のもものが微妙に違うかもしれない。

そして何より、大切な恋海の思い出を、本当にその時会っていた片里将人ではない俺が奪ってしまつて良いのかという葛藤。

あの状況の中で、その答えをすぐに出すことができなかつた。

『どうして——嘘を吐くの?』

あの時の恋海の表情が、脳裏に焼き付いている。信じられないものを見たような、そんな表情。

苦しくて、見ていられなかつた。

シャワーから出て、ベッドに寝転がる。

しばらく、ぐるぐると考えを巡らせていると、ピロン、とスマホから通知音が出た。

《mizuhō》『とりあえず!私は行くから!』

《mizuhō》『恋海にも、話はしてあるからさ』

《mizuhō》『恋海は来れないかもだけど、将人さえ嫌じゃなかつたら、来て欲しいな』

明日は、恋海とみずほと3人で、テーマパークに行く予定だった。しかし今日あんなことがあつた手前、流石に行きにくいと思ひ、み

ずほにも連絡は入れたんだけど。

そっか、やっぱり恋海は、来ないよね。

本当に、申し訳ない事をしてしまった。

でもこれは、自分なりの答えを出さなければいけないと思う。

そのためにも、時間が欲しいのも事実。

明日会ってどんな顔をすれば良いのかわからないし……。

目覚まし用のアラームだけセットして、スマホを閉じる。

色々なことがあつて、精神的にもどうやら疲れてしまったらしい。

明日もあるし、今日は早く寝よう。

そう考えて、部屋の電気を消す。

……けど、結局恋海の事が頭から離れなくて。

眠りに入ったのは、それからだいぶ経った後だった。



翌日。

昨晩の雨が嘘のような快晴の元、俺とみずほはテーマパーク内を二人で歩いていた。

久しぶりにこんなテーマパークに来たけれど、案外悪くない。

そんなことを考えながら、みずほと一緒に買ったチユロスをひとくち齧った。

隣を歩くみずほは、今日はずっと笑顔。

もちろんいつも笑顔の絶えないとっても良い子なのだが、今日はまた輪をかけて笑顔が眩しい。

きつと、昨日あったことをなるべく気にさせまいとしてくれている

のだと思う。

本当に、みずほは良い子だ。

ふと、そんなみずほが頭につけたカチューシャが目に入る。

テーマパークに書いてすぐ。

このカチューシャをお揃いで買うことになった。

『お揃いだね!』

そう言つて、嬉しそうにカチューシャを着ける時。

みずほはいつもツインテールにしている髪を、下ろしていた。

その下ろした髪型が、妙に既視感があつて……何故か強く印象に残っている。

「……? 将人、どうかした?」

「あ、いやなんでも!」

「さてはみずほちゃんに見惚れちゃったか?」

「あはは、確かにそうかも」

確かに、髪を下ろしているみずほは可愛い。

しかしそれはそれとして、あの時感じた感覚は、一体なんだつたんだろうか……。

「……こ、肯定しちゃダメでしょそれはさあ……」

「え?」

「なんでもないよ! あ! 次アレ! アレ乗ろうよ!」

「お〜! あれ結構新しい奴だよね」

みずほが指差した先にあったのは、最近できたばかりと噂のアトラクション。

俺がそのSF的な外観を眺めている間に、ぐん、と手を引っ張られてつんのめる。

「ほらほら! ぼーっとしてると時間どんどん無くなっちゃうよ!」

「急に引っ張らないで……って力強いな?!」

由佳の時も思ったけど、この世界の女の子力強すぎない?!

慌てて足を動かしながらも、前を走るみずほが眩しいくらいの笑顔

だったから。

まあ、みずほが楽しんでくれてるなら、なんでも良いか、と思ってしまうのだった。

「あれ、乗ろうね」

それからしばらくして。

みずほが少しアトラクションに酔ってしまったようだったから小休止を挟んだのだが。

俺の向かいに座ったみずほが、そう言いながら俺の後ろ側を指さした。

振り返ってみれば、そこにはこのテーマパークで一番大きい観覧車があつて。

「観覧車？いいよ、乗ろうか」

「あ、でも今すぐじゃなくて！もうちよつとしたら……ね？」

「……う？全然良いよ？」

変わらず笑顔のみずほ。けれど、なんだかその笑顔の質が少し変わったような気がして……どきりとしてしまう。

「よし、じゃあ日が暮れるまでのラストスパート、行っちゃおうか！」

「もう体調は平気？」

「うん！ありがと！」

顔色が幾分良くなったみずほと一緒に、席を立つ。

「うおおお最後まで遊び尽くすぞおおお！」

「回復力高すぎない?!」

さつきまで確かに辛そうだったはずなのに、それをみじんも感じさせないパワフルな動きに、俺は苦笑いするしかないのだった。

そこから2つほどアトラクションを乗ったりして。
もう日も沈む時間帯になってきた。

約束した通り、今日最後の乗り物ということで、俺とみずほは観覧車に乗るべく列に並んでいた。

「いやー楽しかったねー！将人も、楽しかった？」

「そうだね！こういう所に来るのは久しぶりだったけど……みずほのおかげで楽しかったよ」

「ひひひ、それならよかった！」

無邪気に笑うみずほが可愛い。

本当に笑顔が似合う子だ。

恋海も小悪魔的な笑みが似合う子だけれど、みずほの笑顔とはちよつと違う。

どちらが良いというわけでもないけれど、それぞれの魅力があつてとつても素敵だと思う。

……恋海は、大丈夫だろうか。

彼女にとつてかなり辛いことを言ってしまったからこそ、どうしても気になってしまう。

「……ねえ、将人」

「ん？」

気付かない内に、上着の袖を、みずほが掴んでいた。

隣を見れば、こちらを見上げる、みずほの姿。

「将人は優しいからさ、きつと今日も時々、恋海の心配してたよね」
「……」

正直、凶星だった。

それはきつと俺が優しいから、とかではないと思うけれど。

優しくかったら、きつとあんな形で恋海を傷つけることにはならなかっただろうし……。

そんな俺の思考を遮るように、ぐい、と袖を引っ張られる。

「ねえ、ひとつだけ、お願いを聞いて欲しいんだ」

上目遣いのみずほの瞳が、今までに見たことがないほどに、真剣だったから。

思わず、息を吞んでしまった。

「この観覧車に乗ってる間だけは……私を、私のことだけを見て欲しい」

どくん、と心臓が跳ねた。

いつも見ているはずのみずほの表情とはかけ離れていて。

とても、魅力的だと思ってしまう自分がいた。

「……ごめん、わかった」

「ん。嬉しい」

いつの間にか、待機列の先頭に、俺たちはいた。

色々なことが頭を巡っていたからか、体感よりも時間は経っていたらしい。

「次のお二方どうぞ」

従業員の人に促されて、俺とみずほが前に出る。

「恋海、ごめんね」

小さな声で、みずほがそう言った。

それはいつたい、なんのための謝罪なのか。

この時の俺は、全くわからなかった。

「わく!!めつちや綺麗!見て見て将人!夜景ハンパない!!」

「ほんとだ……綺麗だね」

観覧車に乗ってすぐ。

いつも通りのテンションでみずほがはしゃいでくれたから、俺は胸をなでおろした。

みずほのお願い通り、この時間は、みずほのことだけを考えて。

今この時間を楽しもう。

そう思った。

「いや〜!この観覧車めつちや絶景って聞いてたから絶対乗りたかったんだ〜!良かった将人と乗れて!」

上機嫌に、足をパタパタとさせるみずほ。

みずほの言う通り、たしかに遠くまで見通せる夜景は、思わず言葉を失ってしまうほどには綺麗で。

しばらく俺とみずほは、その絶景を目に焼き付けていた。

「そっち、行ってもいい?」

「?・うん、いいよ」

お互いが向かい合うようにして座っていたところで、みずほからそう言われる。

こつちからの景色も見たかったのかな？

断る理由もないので、少し席を横にずらして、隣を空ける。
と、その時。

ゴトン！と強めの音がして、ゴンドラが大きく揺れる。

「うわあ?!」

「みずほ?!」

そのタイミングでちょうど立とうとしていたみずほが、バランスを崩して。

「大丈夫?……って」

思わず地面に手をついたみずほに、手を伸ばそうとしたその時。

みずほの頭から、バランスを崩した拍子にだろうか。カチューシャが外れていて。

そこには、地べたに座る、一人の女の子がいた。
変な表現をしているのは分かっている。

けれど、けれど何故だか。

この光景に、何故か強く既視感を覚えた俺が、思わず、言葉を失ってしまう。

「……へへへ……なんだか、あの時と似てるね」

「え?」

その言葉の意味が分からなかったのは、一瞬だけ。
顔を上げたみずほを見て。

——繋がった。

あの時と、景色が重なる。

『あ、このハンカチは別に返さなくていいから。じゃ!』

『あ、あのー!ちよつと待っててください!!』

俺はこの子を、知っている。

目を腫らして、泣いていて。

最後に呼び止めてきた女の子を、知っている。

「……私、ちよつと前に知つちやつたんだ。あの時助けてくれたのは、将人なんだって」

ポシエツトの中から出てきたのは……一枚のハンカチ。

それを渡したことを、覚えている。

「やっと、やっと伝えられる」

絞り出したような声は、震えていて。

「ねえ、将人。……ううん、私の、運命の人」

にこつと、笑ったみずほの瞳からは、涙が溢れていた。

けれど、その涙は、あの時のような悲し気なものではなく。

「助けてくれて、ありがとう。ずっとずっと、伝えたかった。私を救ってくれて、ありがとうって」

ハンカチを手渡されて、思わず受け取る。

その間も、俺は呆けたまま。

「でね、もうひとつ、伝えなきゃいけないことがあるんだ」

両の肩を、正面から優しく押されて、ようやく自分が立っていたことを思い出す。

促されるまま、席に、座り直した。

真正面から、みずほの顔を、見る。

可愛くて、純粹で、まつすぐなみずほの瞳は、きらきらと輝いて見えた。

「好きです。あの時から、ずっと……片里将人君のことが、大好きです」

「……っ！」

真正面から向けられる、純粹で、まっすぐな感情。
ずっと時が止まってしまったかのように、自分の頭は動かない。

「私ね、ずっと、好きって気持ちじゃなかった。今まで、たくさん嘘をついてきたんだ。ほんと、ダメな奴だよね」

「でもね、……今は、自信を持って言えるんだ」

「この気持ちは、この気持ちだけは、嘘じゃない」

みずほの右手が、頬にあてがわれる。

瞬間、唇に、感触。

「……へへへ……」

「みず、ほ……」

ようやく捻りだした言葉は、彼女の名前。
それしか、言葉にならなかった。
それくらい、今はみずほのことしか、考えられなくて。

「将人見て」

言われて、周りを見る。
ちようど、今が1番高い所にいると、そこでようやく気が付いた。
ようは、今がてつぺん。
ちようど、半分来たところ。

急に視界が戻ったと思ったら、みずほに両頬をおさえられていた。

またしても、唇を奪われる。
簡単に、あっけなく。

しつかりと、戸ノ崎みずほという存在を身体に刻み込まれるかのよ
うな、情熱的な、キス。

「……っはあ」

十分に時間を使ってから、ようやく解放される。
その時見たみずほの頬は紅潮していて。

ペロリ、と舌なめずりをする彼女は、妖艶にすら見えた。

「さ、降りるまで……」

みずほが、ガウンを脱ぐ。

「私のことしか考えちゃダメだよ？」

ゆっくりと包み込まれるみずほの感触に――

俺は抗う術など、持っていないことを知るのだった。

元気っ娘JDは走り去る

少しだけ、自分語りを許して欲しい。

俺——片里将人という人間は、幼少期の育ち方が少し変わっている。

幼い頃から、自分の家は児童養護施設だった。

親に捨てられて……施設に拾われたということを経験したのは、物心がついた後。

その事実については、確かにショックだったし、親という存在がない事は寂しさもあったけれど。施設で育ててくれた人は親のように思っていたし、その人も本当の子供のように育ててくれたと思ってるから、気持ち自体は楽だった。

そんな育ての親が口癖のように言っていたのが、「人に優しくしなさい」という言葉。

「親に捨てられる」という、なにひとつ優しくない行為をされた自分が、なんで優しくしなきゃいけないのかな、なんて考えたこともあったけど、ひとつの出会いがその考え方も変えてくれた。

それは、よく近くの公園に来る女の子との出会いだった。

たまたま俺が公園で一人にいる時に、声をかけてくれた子。

「一緒に遊ぼう」と、言ってくれたのが嬉しくて。

半年ほどだろうか。毎日のように、その子と遊んでいた時期があった。

その子は、俺に優しくかった。今になって思うが、彼女はきっと、俺が一般の家庭で育った、普通の子供ではないことに気付いていたはずだった。

それでも、特に気にすることはなく。ずっと優しく、そして仲良くしてくれた。それがとっても嬉しかった。

一緒に遊んでいる時間が、どうしようもないほどに好きだった。

しかし、ある日、いつものようにその子と遊ぶために公園に行こうとした時。

道端で40代くらいの主婦らしき人達が話している内容を聞いてしまったのだ。

『○○さんのところの娘さん、最近施設の子と遊んでるらしいわよ？』

『え〜そうなの？あの子良い子だし、会いたくなくてもきつと断れないのね……』

『かわいいそうに……』

まだ幼かった自分にとって、その内容はショックだった。

彼女のフルネームは知らなくても、そう言われているのがあの子だというのはすぐに分かった。

けれど、もうあの子と遊ぶようになってから月日が経っていたからだろうか。

俺にはどうしても、あの子が同情や憐みで一緒に遊んでくれているとは、とても思えなくて。

俺は静かに、バレないように踵を返した。

自分の感覚が間違っていないければ、あの子は俺の事を良く思ってくれている。だとしても。

俺と遊んでいることが、彼女にとってマイナスになるのなら。

会いに行くべきではない、と思ったから。

その帰り道、目に溢れた何かを拭きながら、俺は決めた。

自分の手の届く範囲には、優しくあろうと。

自分に優しくしてくれた、あの子のように。

誰にでも優しくできる、男であろうと。

俺はきつと、この世界を甘く見ていたのだろう。

ちよつと男女の価値観が変わっている程度で、なにも変わらない。そんなに容姿が整っているわけでもない俺が、多少ナンパとかを受けるようになった程度で、普通に生きていくことに何も問題がないと、そう思っていた。

けれど、そんな認識は大きな間違いで。

「お疲れ様でした〜」

「は〜い！」

狭い密閉空間だったゴンドラからようやくやく降りて。

大きく伸びをするみずほは、満足気な表情。

対する俺は……どつと、疲れが肩に乗ったまま。

身体は熱く火照ったままだし、頭はぐわんぐわんと回っている。

とにかく前に行く小柄な女の子を追いかけながら、なんとか情報を整理してみる。

みずほがあの時、コンタクトを探していた女の子で。

ずつと運命の人を探していたのは、実は俺の事で。

今も尚、みずほが俺のことを好いてくれているという事実を受け止めざるを得なくて。

あまりにも多い情報量に頭が混乱する中、その全てを考えられなくなるくらい、みずほのストレートな愛情表現を受けて。

なにも考えがまとまらないまま、今に至るのだ。

前を歩いていたみずほが、くるりと軽快に振り返る。

「あくすつきりした！景色綺麗だったね、将人！」

「そ、そうだね……」

いやいや景色なんか途中から見えて無いわ！

というツツコミもする元気もなく……笑顔が眩しいみずほが楽しそうで、思わず毒気も抜かれてしまう。

……みずほの気持ちを受けて、俺はどうすれば良いのだろうか。

みずほから伝えられた想いの強さに衝撃を受け過ぎて、思考はまるでまとまらない。

迷路のように出口のわからない思考にハマってしまつて、俯いて歩

いていると、ひよこつと下からみずほが覗き込んで来た。

「では私はちよつとお色直しに行くので、将人は……あそこの下らへんで待ってて！」

「えっ、別に全然ここで待つけど……」

みずほが指さした先は、もう少し歩いた先。

ここにもベンチはあるし、全然待てるけど……。

けれど、みずほはどこか優しさを感じる表情で、首を横に振った。

「ううん、あそこで、お願い。——もう、私の番は終わったから」

「……えっ？」

「いいからいいから！とにかくあそこの下にいてね！じゃ！」

それだけ言い残すと、みずほは駆け足でいなくなってしまう。

途中彼女が小声で言った言葉が聞き取れなくて、聞き返してしまっただけ……。

物憂げな表情が垣間見えた気がした。

ゴンドラの中では、あんなになんとというか……色気が凄かっただけに、温度差が激しい。

その変化に目を白黒させつつ、大人しくみずほが指さした先を見る。

そこには……もうすっかり夜の暗さに包まれてきた園内で、神々しさすら感じる白い光を放っている建物——教会があった。

といっても、もちろん本物の教会ではなく。

物語の中に出てくる教会を模したもの。その周りには、写真撮影をする人や、ロマンチックな雰囲気味わうカップル等がいて。

「別にここで待つても良かったのに……」

なんとなくあそこに一人で行くのが気まずくて、そんなことを思ってしまう。

とはいっても、ここにはベンチこそあれど、目印になるものはない。大人しく、俺はその教会の下まで歩くのだった。



角を曲がつて、将人から私が見えなくなるところまで来て。

私は、すとん、とその場に腰を下ろした。

「ははは……やっちゃった」

今日、将人に想いを伝える。

それは決めていたことだったから、後悔はない。

けど私は、どこまでいっても卑怯だから。将人からの答えを恋海がない状態で聞きたくなくて。

今はただ、良い思いをしたいという下心だけで、将人の唇を奪ってしまった。

心臓が、どくどくと動いているのがわかる。

——人生で初めてのキスだった。

大好きな人に、想いのままにぶつけるキスはあまりにも甘美な味で。

この時間を一生忘れたくないから、刻み込むように念入りに、深くまで将人を味わった。

スマホを開く。

そこには、来てほしかったメッセージ。

「……良かった」

少し安心しながら、私は返信を打つ。

思えばここまで、色々なことがあった。

大親友の好きな人は、とつても素敵な人で。

自分もこんな恋がしたいなと思っていたら、運命の出会いがあった。

それが、まさか親友の好きな人だとは思わなくて。

でも、その事実を知った後も、親友はずっと親友のままできてくれた。

だから、本当は私はこんな良い思いをするはずじゃなかったのに。

私は卑怯だから、最後にとまってこんなことまでしてしまった。だから。

もう後は——舞台から退場するだけ。

親友は、私も一緒に、と言ってくれた。

そのことについては嬉しかったし、そうなれば良いなって本気で思ってた。

好きになってもらおうと今日一日ずっと努力してきたのだから、1ミリも嘘じゃない。

だけど……昨日2人が喧嘩してしまった原因を聞いてみたら……あの2人は幼馴染だったという。

真剣に話を聞きながら、私は思った。

そんなのもう、禁止カードじゃん、って。

2人一緒に愛してもらおうって、きつとそれは、本気で言ってくれたのだと思う。

だけどやっぱり——肝心の彼がそうするかはわからない。

親友は私から見ても魅力的な女の子だ。

その子とだけ、結ばれば良いと思っただって、なんにも不思議じゃない。

ずっと昔から仲が良かった幼馴染なら、尚更。

「……っ。あー、卑怯だなあ、私」

もう私の役目は終わったのなら、このまま帰れば良い。

なのに、心のどこかでやっぱり諦めきれなくて。

もしかしたら、私も一緒に選んでくれるかもしれないと思うから、あの場所が見えるここから、動けないでいる。

蹲って、体育座りのように身体を縮めた。

冬の夜風は冷たいはずなのに、不思議と身体は寒さを訴えてはこなくて。

もう一度、スマートフォンを開く。

そこには、ほんの10分ほど前に送った文章が残っていた。

『王子様は、教会にて待つ』

その画面を開いたまま、私は夜空を見上げる。

そこには、清々しくて、憎らしいほどに綺麗な星空が、広がっていた。

幼馴染JDは告白する

『明日、来なくて本当に良いの?』

「……」

『今まで、私たくさん告白してきたけど——今回は、本気だよ』

「……うん、わかってる」

『だから、来てね。待ってるから』

『じゃないと、将人君のハートは、私が頂いちやうぞ!なんちて!』

「みずほ……」

通話が切断されたことを知らせる効果音が鳴って。

私は、スマートフォンを耳から離れた。

「……みずほは、優しいなあ……」

みずほはずっと、私を励ましながら勇気づけようとしてくれていた。

他の人じゃきつと受け入れられるかわからない言葉でも、みずほからだったから心に響いた。

ふらふらと歩いて、押し入れへ。ゆつくりと扉を開けてから、ひとつの段ボールをそっと取り出す。

段ボールの中を覗けば、しっかりと入っていた。

これは、私の宝物。古ぼけて、使う事が無くなっても、大切に手入れしてきたグローブ。

これと同じものを、将人は持っていた。

これは、もちろん今生産なんかはしてなくて、私達が幼い頃にもらった2人でもらったお揃いのグローブ。

メーカーも、形も、これでしか見たことが無い。

だから、偶然なんかじゃない。

じゃあなんで。

将人は嘘をつくのだろう。

何か、理由があるのだろうか。

……それが、わからない。
ため息をついて、グローブをしまった。
そのままベッドに寝転んで、目を閉じる。
ぐるぐると、色々な考えが巡っては、消えていく。
どうしてあの時、そうだよって、久しぶりだねって、言ってくれな
かったんだろう。
それだけで、私は、私の心はきつと満たされたのに。
これから、どんな顔で将人に会えば良いんだろう。
好きな気持ちは、なにも変わっていない。
だけど今はショックが大きくて。気持ちの整理ができない。

『……私、明日将人に告白するね』

みずほはきつと、本気だ。

前までの、恋に恋していたみずほじゃない。

本当に好きな人を見つけたみずほは、あの日からずっと輝いてい
る。眩しいくらいに。

……将人は、どうするのだろうか。

将人がみずほをふる姿を、あまり想像できない。

OKを出すのだろうか。そうしたら……私の入る隙間は、あるのだ
ろうか。

「ははは……なに、これ」

眠れない。目を閉じてから、何時間経ったのかすら、分からない。
抱きしめた枕は、何故だか冷たかった。

ピロン、と通知音が鳴って、意識が浮上する。

今は、何時だろうか。

結局朝まで眠れなくて。ようやく眠れた時には、もう朝陽が昇っていたような気さえする。

途中で何回か起きたけど、そのまま起きる気には全然ならなくて、現実から逃げるように布団をかぶった。

重たい頭をなんとか動かして、充電器に接続したままのスマートフォンを見る。

「……っー」

その文章を見て、反射的に意識が覚醒したが、ぼっと起き上がって、ベッドの上に座り込む。

《mizuhō》『今から、将人に告白してくる』

心拍数が上がる。

私が今何かできるわけでもないのに、意味もなく身体が緊張しているのが分かる。

続けざまに、みずほから連絡が来た。

《mizuhō》『恋海は、そのままでもいいの?』

「よく、ないよ……っー」

思わず声が出た。

良いわけではない。このまま何もしないで、良いわけないんだ。

必死で、メッセージを打つ。

ぐちゃぐちゃになった感情のままに、想いを吐き出した。

想いを文章にしながら、ようやく私は、今なにをすべきなのかが分かって来た。

これだけみずほに後押ししてもらって、こんな薄暗い部屋の中で、うじうじしてて良いはずない。

《mizuhoh》『うん、そうだよ。恋海は何も間違っていないよ』

《mizuhoh》『だから、来て。今からでも、遅くないから』

《mizuhoh》『来なかったら、恋海きつと後悔すると思うから』
スマホを放り投げて、私は出かける準備をした。

シヨックだったのはそう、傷ついたのでそう。けど、想いは少し
だつて揺らいでない。

勝手に絶望して、逃げてたら絶対後悔する。

いつもの数倍早くメイクを終わらせて、着替えもいつも着ているお
気に入りをつ張りだして。

玄関に置いてある姿見の前に立つて……髪がぼさぼさなことによ
うやく気付く。

でももう、いちいち洗ってドライヤーなんて、してる時間ない！

玄関にかかっているキャップを雑に被って、可愛いパンプスでも、
ブーツでもなく、スニーカーを履いて。

私は駆け足で、家を出た。

テーマパークの最寄り駅に私が着いた時、もう辺りは暗かった。
園内への道は、もう帰る人の方が多いくらい。

「はあ……！はあ……！」

早歩きというには少し無理があるくらい速度で、進んでいく。

2人が、今どこにいるかもわからない。

みずほの告白がどうなったのかも、わからない。

もしかしたら私はもうお払い箱になって、ただ2人の邪魔をするだけになってしまいかもしれない。

昨日の出来事で、将人は私のことを嫌いになってしまっているかもしれない。

私の胸を縛り付けるように嫌な想像が頭を巡る。

拳を、ぎゅつと握った。

……でも、それでも。

この想いだけは、今伝えなきや絶対後悔するから。

入場のためにチケットを取り出そうとしたその時、スマホに通知が。

画面に目を落とせば、それはみずほからで。

一度、足が止まる。

《mizuhoh》『王子様は教会にて待っ』

《mizuhoh》『……なんちて』

「……ありがとう、みずほ」

私は大きく深呼吸をしてから。

急いでその場所へと向かった。

このテーマパークに、教会、なんて言える建物はひとつしかない。急ぎ足で向かった先に……いた。幻想的な光に照らされた、教会の前。震える足を引っ張って、歩き出す。歩みはいつしか、駆け足に変わっていた。

「将人！」

振り向いた将人の姿は、景色と合わさって、一枚の絵画のようにすら見えた。

こんな素敵な人に、きつと今の自分は、なんにも釣り合っていない。急いでやった付け焼刃のメイクは、きつともう既にボロボロで。このヒーローに対して、ヒロインがこれですって私を出されたら、大衆は容赦なく批判するだろう。きつと私だってそうする。

でも、そんなことは関係ない。

自然と、足が動いた。

あの時と、同じように。

『あのー……もしかして履修登録、ですか?』

『え?!……あ、そうなんです。ちよつとワケあつて入学手続きが遅れちゃって……』

初めて会ったと思い込んでいたあの日。

気付けば私は、大学のベンチに座っていた彼に声をかけていた。

あれはきつと、私の本能が、この運命を逃しちやダメだって訴えかけていたんだ。

それは、きつと今も同じ。

「恋海……?!」

驚きに目を見開いた将人の表情。

こうして改めて、目の前に立ってみて。

どうしようもないほど理解する。

ああ、やっぱり。

私は、もう引き返すことができないくらいに、この人のことが――

「好き」

驚くほど素直に、その言葉はついて出た。



「えっ？」

状況が飲み込めなくて、フリーズしてしまう。

思えば最近、こんなことばかりだ。

笑いながら少しだけ泣いているように見える恋海の姿が、あまりにも美しくて。

言葉が、出なかった。

恋海はゆつくりとそのまま俺に近づいて——俺の胸に、ぽすん、と身体を預けた。

「ずっとずっと、好きだったんだ。過去の事とか、大事だけど、そうじゃなくて。今の私の気持ちを伝える事の方が、ずっとずっと大事だと思っただから」

心拍数が、今までにないくらい上がっている。

恋海の言葉に込められた熱は、あまりにも本物で。

それこそ、恋海の思い出の中にいる俺は、俺じゃないって言い訳していた自分が、情けなく感じるくらいに。

恋海が、ゆつくりと身体を離す。

綺麗な朱色の瞳から零れた涙は、宝石のようで。

「——だから、言わせて。伝えさせて。私は、君に会ったあの日からずっと」

息を、呑んだ。

「片里将人君のことが——大好きです」

何秒、いや何分が経っただろうか。

恋海を抱き締めたまま、時間が過ぎていく。嘘のように火照った顔と、バクンバクンとなり続ける心臓だけが、これが現実であることを思い出させてくれた。

もうなにもかも、わからない。

けれど、これだけは伝えなきゃ、ダメだと思ったから。

できる限り優しく、恋海の両肩を掴む。

「……恋海ありがとう。その想いに答える前に……話さなきゃいけないことがある」

「え……」

ここまでしてもらって、覚悟しないのは、ダメだと思ったから。今と、幼少期。それは確かに、別の世界。

だけど、今前の世界がどうなっているか確かめるすべはないし、そもそも同時進行でその世界が進んでいるかだってわからない。

もしかしたらこの世界にいたはずの俺が前の世界にいるかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

そこはもう、俺が理解できる範囲を超えている。

……だけどたったひとつ、俺でもわかることがあるとすれば。自らに残っている、記憶だけ。

あの子と過ごした季節の記憶は、今でもしっかりと残っているから。

「嘘ついて、ごめんね」

「……!」

急になんだか愛おしくなって、恋海の絹糸のような髪を撫でた。

「……可愛くなったね。わからなかった。……久しぶり」

「……っ!」

大きく目を見開いた瞳に、もう一度涙があふれる。

恋海がとん、と胸にもう一度頭を落とした。

「会いたかった……! いなくなっちゃってから、ずっと……! 会い

たかったんだから……!」

「……ぐめん」

もしかしたら、記憶に違いが生まれることがあるかもしれない。

その時は、しっかりと話そう。どこまで、信じてもらえるかはわからないけれど。

それが俺が示せる、精一杯の誠意だと思うから。

「……また、キャッチボールしようね」

「うん……うん……!」

それからしばらく、恋海の頭を撫で続けたのだった。

「はーすつきりした!」

恋海がガバっと顔を上げる。

その表情は、いつもと何ら変わらない。

……気持ちを伝えてもらったし、俺も自分の想いを言葉にしなれば。

「えっと、告白の、ことなんだけど」

「それはちよっと、待って!」

急に恋海が右手で俺を制すると、あわただしく左手でスマートフォンを開いた。

……?

そして、軽快に操作をした後、耳に当てる。

通話……?

呼び出し音が、響いて……ってあれ?後ろからも聞こえるような……。

「ひゃあ?!」

後方の茂みから、声がした。

良く、知っている声。

「まさかそのまま帰ろうなんて思ってたないよね？」

恋海が茂みの方へ声をかける。

「……にやはは……バレちゃいましたか……」

「みずほー」

「やーやー将人さつきぶりですなあ……」

ぼつの悪そうな顔をしながら出てきたのは、さつきまで一緒にいたみずほだった。

えっと……見てたってことかな？

そのままみずほが恋海の隣へ。

「なんで電話なんかかけるの！今超良い感じだったじゃん！誰が見てもハッピーエンドじゃん！」

「そんなわけないでしょ。みずほがないハッピーエンドなんて、無いよ」

「……もう……おバカさんだよそんなの……」

「え、えっと……？」

なにかやりとりをした後、2人はこちらに向き直る。

「ごめんごめん、ってなわけでね……改めて、将人」

恋海とみずほ。もう一緒に過ごすようになってしばらく経つけれど。

改めて2人に並べられると、2人ともが凄く可憐で、美少女なことを再認識させられる。

1歩、距離を詰められた。

恋海は、真剣な表情で、みずほは、少し照れくさそうに笑っていて。

「私達2人と、付き合ってくれませんか？」

「……………」

……やっぱり、この世界で普通に生きようだなんていう俺の考えは、
はどうやら間違っていたらしい。